

福岡外環状道路関係 埋蔵文化財調査報告

—5—

福岡市西区橋本一丁目遺跡第2次調査・橋本遺跡第1次調査

1998

福岡市教育委員会

福岡外環状線道路関係埋蔵文化財調査報告書-5- 第582集
「橋本一丁田遺跡第2次調査」

本書中、下記の誤りがありました。謹んで訂正いたします。

頁	行	誤	正
例言	8.	III-5-4)-(3)	III-5-4)-(4)
3	27	半田田	半多田
5		押図に下記のキャプションが抜けている	
		Fig.3 調査地点周辺図(明治33年)(1/20000)	
28	14	垂直に	直交した
	15	40層	42層
	16	3f	3g
	17	3g	3h
34	38	10層	9層
38	4	1	I
41	Fig.3	SK0900	SK096
42	12	SK090	SK096
43	31	106	107
44	10	194	199
44	27	仕上げで、	仕上げ、
45	5	380	381
45	17	425, 428	425,
46	16	655	654
	23	696	691
81	536	101	010
	600	10層	3層
100	10	12層	13層
	12	13層	15層
103	8	28層	28層(15層)
	28	調製	調整
108	7	12層、13層	1.3層、1.5層
	18	13層は	1.5層は
	18	12層は	1.3層は
	21	12層から	1.3層から
27,32		11層上半	11層
27,32		11層下半	12層
117	32	3期	III期
	38	15層	IV区 15層
120		(3) I区 SD010	(3) I区 SD001
126		第3面のキャプション下の写真の番号「1」が抜けている	
131		磨製石器の写真の番号15、16が入れ替わる	
		233	33
		写真番号20、22が抜けている	

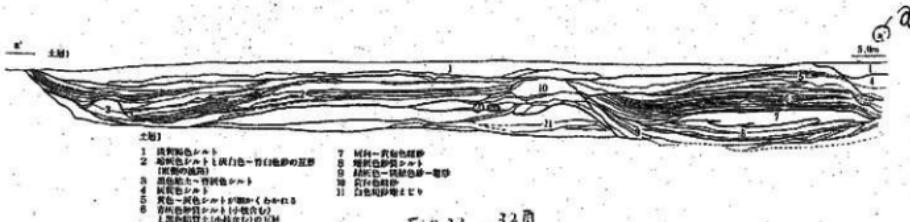


Fig.32 32頁

35

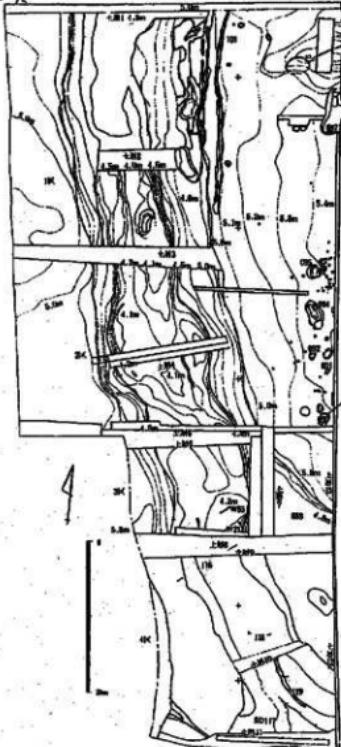


Fig.34 第4章日本語翻訳例題(3/40)

36 奥

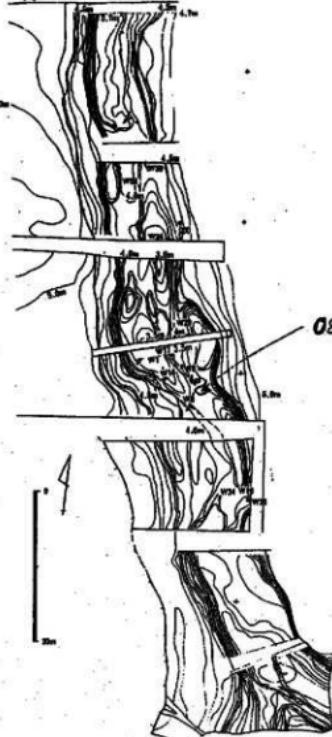


Fig.35 三(ESD001)下部高副图(1/400)

三九

28頁 1593 錄 正
32頁 3m頁

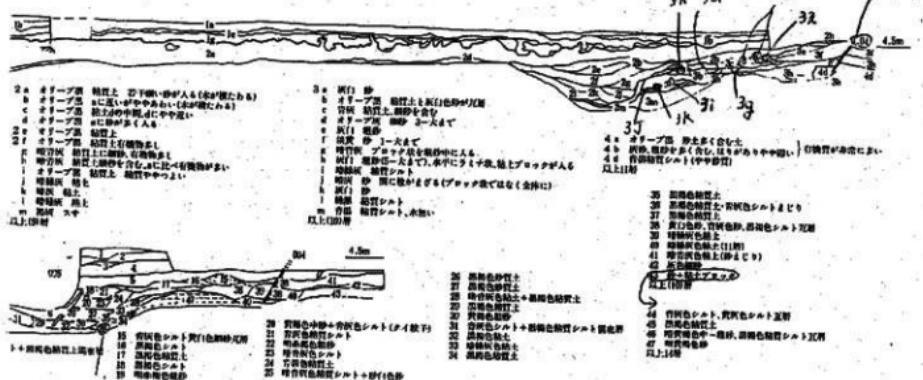


Fig. 26 SD001土壤5、6実測図(1/60) (26頁)

福岡外環状道路関係 埋蔵文化財調査報告

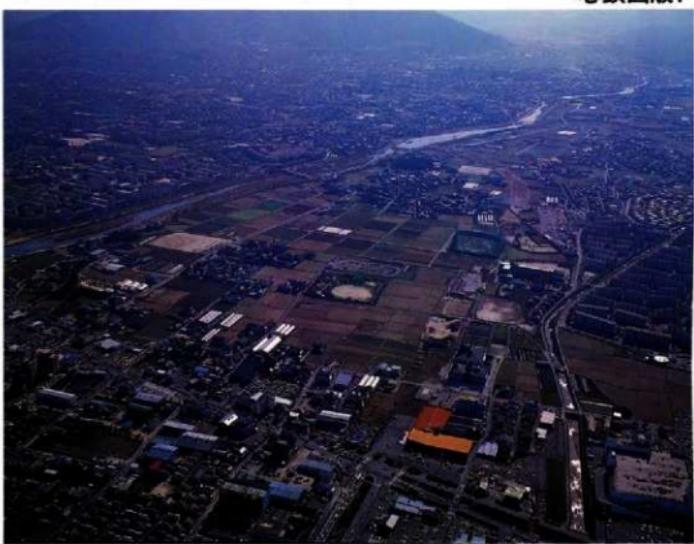
— 5 —

福岡市西区橋本一丁田遺跡第2次調査・橋本遺跡第1次調査

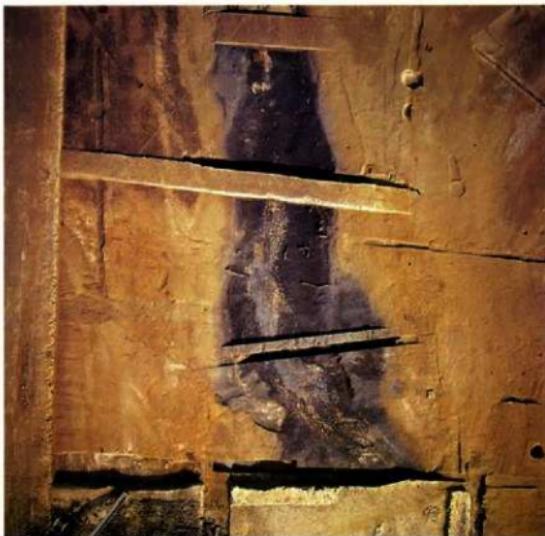


1998
福岡市教育委員会

巻頭図版1



北方上空から



橋本一丁田遺跡第2次調査II区SD001

卷頭図版2



橋本一丁田遺跡 I 区SD001土層1



橋本一丁田遺跡SX004(西から)

序

福岡外環状道路は、福岡市姪浜から粕屋郡粕屋町戸原までの都市計画道路で、延長26.4kmをいいます。本道路は福岡市西南部交通対策の鍵を握る幹線道路で、早急な供用が望まれており、現在、姪浜と野芥間、月隈と志免町間など一部の供用が開始されております。

今回報告する橋本一丁田遺跡・橋本遺跡は、福岡外環状線道路の福重と野芥間に所在し、道路建設工事に先だって発掘調査を実施いたしました。

橋本一丁田遺跡の調査では、縄文時代晚期から中世の水利施設、橋本遺跡では古墳時代の流路が発見され多人な成果を得ることができました。

最後になりましたが、発掘調査に際し、建設省福岡国道工事事務所の関係者および地元の方々をはじめ発掘調査から整理・報告まで多くの皆様のご理解とご協力を得ました。ここに感謝の意を表すとともに、本書が文化財理解の一助となり、広く活用されることを願っております。

平成10年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 町田 英俊

例　　言

1. 本書は、福岡外環状道路の建設省施行区間にあたる福重・野芥間の道路建設に伴う事前調査として、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が1993年6月から1994年3月にかけて発掘調査を実施した橋本一丁田遺跡第2次調査と1995年5月から6月に行った橋本遺跡第1次調査の報告書である。
2. 橋本一丁田遺跡2次調査は池田祐司、中村啓太郎が、橋本遺跡1次調査は杉山富雄が担当した。
3. 本書使用の遺構実測図は、橋本一丁田遺跡は調査担当者、澤下孝信、坂本憲昭、太田寿和、高山義克、永井大志が作成した。橋本遺跡は調査担当者が行った。
4. 本書使用の遺物実測図は、橋本一丁田遺跡は山口謙治、横山邦継、犬丸陽子、大塚拓史、名取さつき、平川敬治、担当者が作成した。橋本遺跡は担当者が作成した。
5. 本書使用の写真は、橋本一丁田遺跡は遺構を担当者が、遺物を平川敬治が撮影した。空中写真は空中写真企画による。橋本遺跡は担当者が撮影した。
6. 本書使用の図面の製図は、橋本一丁田遺跡を山口謙治、屋山洋、大塚紀宣、星野恵美、池田美紀、大庭友子、副田則子、安野良、山口朱美、山崎加代子、担当者が行った。橋本遺跡を担当者が行った。
7. 本書使用の方位は磁北である。
8. 本書の執筆は、III-5-4)-(3)を山口謙治が、IVを杉山が行ない他を池田が行った。編集は、山口、杉山の協力を受け池田が行なった。III-7は古環境研究所によるが、種子同定の根拠の項を省略し、カラー図版を白黒で掲載している。また、本書でふれたプラントオパール分析は東洋学館大学の外山秀一氏より定性分析の結果をいただいたものである。
9. 本書収録の出土遺物および調査の記録類は、福岡市埋蔵文化財センターで一括収蔵・保管し、公開していく。

本文目次

Iはじめ	
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査体制	2
II位置と歴史的環境	
1. 位置	3
2. 立地	3
3. 歴史的環境	3
III橋本一丁田遺跡第2次調査の記録	
1. 概要および層序	7
2. 第1面の調査	9
1) 概要	9
2) I区の遺構と遺物	9
3) II区の遺構と遺物	12
4) IV区の遺構と遺物	15
3. 第2面の調査	16
1) 概要	16
2) II区の遺構と遺物	16
3) IV区の遺構と遺物	21
4. 第3面の調査	22
5. 第4面の調査	23
1) 概要	24
2) I区の遺構	24
3) II区の遺構	34
4) 出土遺物	42
(1) 土器	42
(2) 上製品	46
(3) 石製品	84
(4) 木製品	89
6. 第5面の調査	100
1) 概要	100
2) II区の遺構と遺物	100
3) III区の遺構	101
4) IV区の遺構と遺物	103
7. 自然科学分析	108
1) 種子分析	108
2) 放射性炭素年代測定	111
8. 終わりに	116
IV橋本遺跡1次調査の記録	
1. 調査の経過	135
2. 立地と環境	135
3. 発掘調査の成果	135
4. 出土遺物	136

挿 図 目 次

Fig. 1	福岡外環状道路路線図	1
Fig. 2	早良平野の刻目突堤文期から弥生前期初頭の遺跡（1/60000）	4
Fig. 3	調査地点周辺図（明治23年）（1/20000）	5
Fig. 4	調査地点周辺図（1/8000）	6
Fig. 5	土層模式図	8
Fig. 6	第1面全体図（1/2000）	10
Fig. 7	第1面I-2、3区遺構配置図（1/400）	10
Fig. 8	溝土層図（1/80）	10
Fig. 9	第1面I区、II区出土遺物実測図（1/3）	11
Fig. 10	第1面II区遺構配置図（1/400）	13
Fig. 11	第1面II区土坑、遺物実測図（1/40、1/3）	14
Fig. 12	第3面IV区実測図（1/400）	15
Fig. 13	第1面IV区土坑実測図（1/40）	15
Fig. 14	第2面全体図（1/2000）	16
Fig. 15	第2面II区遺構配置図（1/400）	17
Fig. 16	第2面土坑実測図（1/60、40、30）	18
Fig. 17	SK075、076出土遺物実測図（1/3）	19
Fig. 18	SK080、081出土遺物実測図（1/3）	20
Fig. 19	SK121出土遺物実測図（1/3）	21
Fig. 20	第3面出土遺物実測図（1/3）	22
Fig. 21	第4面全体図（1/2000）	22
Fig. 22	第4面I区遺構配置図（1/400）	23
Fig. 23	I区SD001実測図（1/200）	24
Fig. 24	I区SD001上面実測図（1/200）	25
Fig. 25	I区SD001下面実測図（1/200）	25
Fig. 26	SD001土層5、6実測図（1/60）	26
Fig. 27	矢板列004実測図（1/60）	26
Fig. 28	SD001土層2、3実測図（1/60）	28
Fig. 29	杭列005、SK007実測図（1/60）	29
Fig. 30	杭列034、035、SX008実測図（1/60、30）	30
Fig. 31	SD010実測図（1/200）	31
Fig. 32	SD001土層図（1/60）	32
Fig. 33	SX031、032、033実測図（1/80、1/40）	33
Fig. 34	第4面II区遺構配置図（1/400）	35
Fig. 35	II区SD001下面実測図（1/400）	36
Fig. 36	II区SD001-4区実測図（1/200）	37
Fig. 37	SX089、090、115、116実測図（1/60、30、20）	39
Fig. 38	II区001土層7、13実測図（1/60）	40
Fig. 39	第4面II区土坑実測図（1/40）	41

Fig. 40	SD001-7、8層出土土器実測図1 (1/3)	47
Fig. 41	SD001-7、8層出土土器実測図2 (1/3)	48
Fig. 42	SD001-9層出土土器実測図1 (1/3)	49
Fig. 43	SD001-9層出土土器実測図2 (1/3)	50
Fig. 44	SD001-10層出土土器実測図 (1/3)	51
Fig. 45	SD001-11層出土土器実測図1 (1/3)	52
Fig. 46	SD001-11層出土土器実測図2 (1/3)	53
Fig. 47	SD001-11層出土土器実測図3 (1/3)	54
Fig. 48	SD001-11層出土土器実測図4 (1/3)	55
Fig. 49	SD001-11層出土土器実測図5 (1/3)	56
Fig. 50	SD001-11層出土土器実測図6 (1/3)	57
Fig. 51	SD001-11層出土土器実測図7 (1/3)	58
Fig. 52	SD001-11層出土土器実測図8 (1/3)	59
Fig. 53	088出土土器実測図1 (1/3)	60
Fig. 54	088出土土器実測図2 (1/3)	61
Fig. 55	088出土土器実測図3 (1/3)	62
Fig. 56	088出土土器実測図4 (1/3)	63
Fig. 57	088出土土器実測図5 (1/3)	64
Fig. 58	088出土土器実測図6 (1/3)	65
Fig. 59	088出土土器実測図7 (1/3)	66
Fig. 60	SD010出土土器実測図1 (1/3)	67
Fig. 61	SD010出土土器実測図2 (1/3)	68
Fig. 62	SD010出土土器実測図3 (1/3)	69
Fig. 63	SD010、SX082出土土器実測図 (1/3)	70
Fig. 64	SK087出土土器実測図1 (1/3)	71
Fig. 65	SK087出土土器実測図2 (1/3)	72
Fig. 66	SK087出土土器実測図3 (1/3)	73
Fig. 67	SK092、094、095、102、103、105、106出土土器実測図 (1/3)	74
Fig. 68	出土七製品実測図 (1/2)	74
Fig. 69	出土石器実測図1 (2/3、1/2)	85
Fig. 70	出土石器実測図2 (1/2)	86
Fig. 71	出土石器実測図3 (1/2、1/3)	87
Fig. 72	出土石器実測図4 (1/1)	88
Fig. 73	出土木製品実測図1 (1/4)	90
Fig. 74	出土木製品実測図2 (1/4)	91
Fig. 75	出土木製品実測図3 (1/4)	92
Fig. 76	出土木製品実測図4 (1/4)	93
Fig. 77	出土木製品実測図5 (1/10)	94
Fig. 78	出土木製品実測図6 (1/10)	95
Fig. 79	出土木製品実測図7 (1/10)	96

Fig. 80	出土木製品実測図 8 (1/10)	97
Fig. 81	II区第5面実測図 (1/800)	100
Fig. 82	SK118実測図 (1/40)	100
Fig. 83	第5面Ⅲ、IV区全体図 (1/400)	101
Fig. 84	Ⅲ区北壁～東壁土層実測図 (1/60)	102
Fig. 85	IV区北壁土層実測図 (1/60)	102
Fig. 86	IV区包含層土層実測図 (1/60)	103
Fig. 87	15層出土土器実測図 1 (1/3)	104
Fig. 88	15層出土土器実測図 2 (1/3)	105
Fig. 89	15層出土土器実測図 3 (1/3)	106
Fig. 90	第5面全体図 (1/2000)	116
Fig. 91	調査地域周辺の地形学図	116
Fig. 92	橋本1次調査地点の立地 (1/8000)	135
Fig. 93	出土遺物実測図 (1/3)	135
Fig. 94	橋本遺跡第1次調査、調査区、全体図 (1/300)	136
Fig. 95	調査区西壁上層	137
付図 1	橋本一丁田遺跡2次調査I区土層1、7実測図 (1/60)	
付図 2	橋本一丁田遺跡2次調査I区土層1、9、6、8、10実測図 (1/60)	
付図 3	橋本一丁田遺跡2次調査I区土層3、5、11、12実測図 (1/60)	

図 版 目 次

- 巻頭図版 1 (1) 北方上空から
(2) 橋本一丁田遺跡第2次調査II区SD001
- 巻頭図版 2 (1) 橋本一丁田遺跡SX004(西から)
(2) 橋本一丁田遺跡I区SD001土層1
- P1. 1 (1) II区第4面全景 (2) I区第4面全景
- P1. 2 (1) I-2区第3面、I-1区第4面、II区第1面(北から) (2) I区SD001(南西から)
(3) I区SD010南端(南から) (4) II区第4面全景(北から)
- P1. 3 (1) I-3区全景 (2) I-3区溝(北から) (3) IV区第2面全景(北から)
(4) II区第2面全景(北から) (5) SK076(西から) (6) SK081(北から)
- P1. 4 (1) SX004(北から) (2) SX005(西から) (3) I区土層6、杭列005(南から)
(4) SX032(南から) (5) SX031(北から) (6) SX033(西から)
- P1. 5 (1) I区土層2(西から) (2) I区南縁土層(北西から) (3) II区土層8(北から)
(4) II区SD001-2区11層上面 (5) II区SD001-2区11層上面(南から)
(6) SX089(南東から)
- P1. 6 (1) SX116検出状況(南から) (2) SX116(南西から) (3) SX116前面上層(南西から)
(4) SX115(南から) (5) II区SD001-4区(北から) (6) II区土層9(南から)
- P1. 7 (1) SK078(西から) (2) SX088(北西から) (3) 15層上面稲株状斑点
(4) III区全景(北から) (5) III区溝状くぼみ(北西から) (6) IV区包含層グリット
- P1. 8 出土土器(1)
- P1. 9 出土土器(2)
- P1. 10 出土土器(3)
- P1. 11 出土土器(4)
- P1. 12 出土土器(5)
- P1. 13 出土土製品、石器
- P1. 14 出土木製品(1)
- P1. 15 出土木製品(2)
- P1. 16 出土木製品(3)

表 目 次

Tab. 1	外環状線道路調査区一覧表	2
Tab. 2	I 区001各土層上面レベル	25
Tab. 3	II 区001各土層上面レベル	38
Tab. 4	第4面出土土器観察表	75
Tab. 5	出土土製品観察表	83
Tab. 6	出土石器観察表	84
Tab. 7	出土木製品観察表	99
Tab. 8	第5面出土土器観察表	107
Tab. 9	遺構別器種構成	118

I はじめに

1. 調査に至る経緯

福岡外環状道路は、昭和44年に都市計画決定された都市計画道路、井尻粕屋線・井尻姪浜線で、西区姪浜から柏原郡柏原町戸原間の延長26.4kmの道路である。今回調査の対象となった部分は、建設省施工の福重から月隈間の16.2kmの、一般国道202号福岡外環状道路と呼ばれる区間である。

平成元年から3年に、建設省福岡国道事務所（以下国道事務所とする）より、福岡外環状道路予定期線内の埋蔵文化財の事前調査願いが埋蔵文化財課（以下埋文課とする）に提出された。これを受けて、埋文課は東側からI～IV工区と番号づけられた各工区で、用地買収が終了した部分について随時、試掘調査を実施した。

各工区で試掘調査を実施した結果、I工区では、博多区井相田、立花寺、板付、笠原地区、IV工区では橋本、次郎丸、免、千隈、野芥地区で遺跡を確認した。これらの試掘の結果をうけて、遺跡が確認された地区について、国道事務所と協議を行い、発掘調査が必要となった部分について、調査の費用を建設省が負担するということで、調査を実施することとなった。

調査は平成3年度にI工区の井相田地内でまず行われ、その後、平成4年度から7年度にかけてIV工区の次郎丸遺跡群、次郎丸高石遺跡、免遺跡群、野芥人蔵遺跡、野芥遺跡群、橋本一丁田遺跡、橋本遺跡群の調査が行われた。今回の報告は平成5（1993）年に実施した橋本一丁田遺跡第2次調査と平成7年に実施した橋本遺跡第1次調査の調査記録である。

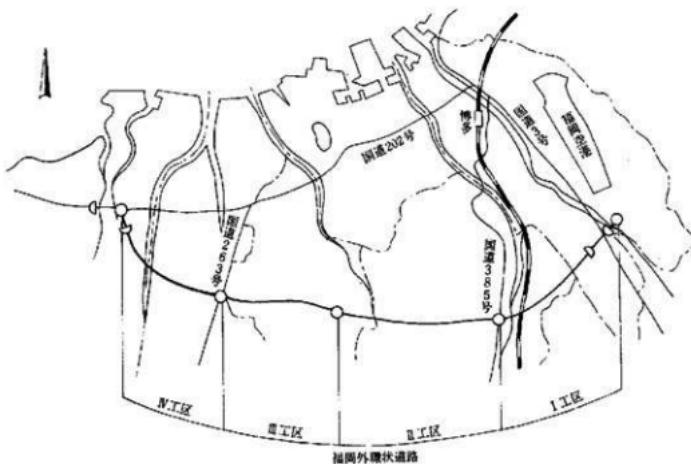


Fig.1 福岡外環状道路路線図

2. 平成5、7年度の調査体制

調査体制としては、充分なる体制を組むことはできませんでしたが、建設省福岡国道事務所や本市外環状道路推進部をはじめとする関係者各位の協力のもとに、本調査、整理、報告からなる発掘調査は順調に進行いたしました。関係者各位に謝意を表します。

調査主体	福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課
教育長	井口雄哉、尾花剛（前） 町田英俊
文化部長	後藤直（前） 平塚克則
埋蔵文化課長	折尾学（前） 荒巻輝勝
平成5年度調査担当	山崎龍雄（主任文化財主事） 池田祐司、中村啓太郎（文化財主事）
平成7年度調査担当	杉山富雄（主任文化財主事）
試掘調査担当	井澤洋一（主任文化財主事） 濑本正志、加藤良彦、吉武学（文化財主事）
事務担当	入江幸男（前） 小森彰
調査・整理調査員	澤下孝信（現下関市考古博物館）、坂本憲昭（現旭志村）
調査・整理協力者	太田寿和、高山義克、永井大志、柴藤裕志、浅野やよい、安部紋美、井田まゆみ、井上祐一郎、鈴木正信（福岡大学歴史研究部）中満智広（福岡教育大学）石橋忠治（別府大学）安倍雅史、松本雄一（東京大学）内野亞香上田保子、中原尚美、前田みゆき 柳田扶美代

調査中下山正一（九州大学）、野井英雄（北九州大学）、山崎純男、山口讓治の諸氏には現地にて貴重なご指導をいただいた。また、調査中・終了後、外山秀一氏（皇学館大学）、田崎博之氏（愛媛大学）には様々なご指摘、指導をいただいた。

Tab.1 外環状線道路調査区一覧表

年 度	調査番号	調査地名	所 在 地	調査期間	調査面積/m ²	調査担当	調査の概要
平成3	9128	井原田D遺跡第1次	博多区井原田地内	910925~920321	5,000	佐藤一郎	古代から中世にかけての水田、2面の墓穴
平成4	9209	次郎丸遺跡第1次	早良区次郎丸二丁目563-570	920519~920829	1,955	山口・高治	弥生時代の墳、古墳時代の大溝
	9233	次郎丸西石造施設第2次	早良区次郎丸一丁目58-59、61-65	920731~921103	1,503	山口・中村啓太郎	古墳時代野墓葬 市報文第467集
	9238	次郎丸西石造施設第3次	早良区次郎丸一丁目地内	920824~930329	7,955	山口・中村啓太郎	古墳時代から奈良時代の自然過路 中世末の集落 今年度報出
	9261	免瀬跡第2次	早良区免瀬一丁目地内	930106~930921	2,543	山口・中村啓太郎	縄文時代前期の包含層、弥生時代の墳、井戸 古墳時代の墳、井頭・櫛
	9303	次郎丸遺跡第2次	早良区次郎丸四丁目地内	930419~930726	1,600	山崎龍雄	古代末から中世にかけての墓葬
平成5	9307	野芥大畠遺跡第1次	早良区野芥二丁目地内	930518~940627	8,752	山崎	縄文時代田河系、古墳時代墓葬、 古代墳と井戸 江戸時代集落
	9327	楠木・丁田遺跡第2次	西区楠木二丁目地内	930901~940331	9,178	柳田・中村啓太郎	古墳時代溝・土坑 縄文時代溝・田河道・土坑
	9454	野芥遺跡第5次	早良区野芥二丁目地内	940420~941215	5,555	山崎	弥生時代溝、古墳時代墓葬、中 世から近世の墳、水田
平成7	9510	楠木遺跡第1次	西区楠木地内	950522~950615	1,050	柳田・中村啓太郎	古墳時代自然過路
平成8	9637	井原田D遺跡第2次	博多区大字立花寺地内	960904~970331	2,657	井沢洋一	古代から中世にかけての水田・堤防
平成9	9742	梅林遺跡第一次	城南区梅林地内	971014~	2,910	井沢洋一	古墳時代から古代の墓葬

II 位置と歴史的環境

1. 位置

玄界灘に面する福岡市には、西から糸島、早良、福岡、粕屋の大小平野が、北の博多湾を囲むように広がる。これらの平野は、山塊、丘陵によって分断され、各々が独自の自然、歴史環境をそなえている。

福岡市の南西部に広がる早良平野は、背振山地の背振山塊とその派生山塊によって囲まれる。東は背振山地に属する油山（標高569.4m）から北に多くの丘陵が発達し、鴻巣山（標高100.5m）を中心とする平尾丘陵を形成し、この丘陵により福岡平野と分離される。西はやはり背振山地から派生する山塊が飯盛山（382.4m）、叶岳を経て長崎山で博多湾に面す。この山塊によって糸島平野と画される。平野の中央には背振山に源を発する室見川が北に向かって貫流し、その開析作用によって形成された沖積扇状平野と三角州平野が広がる。海岸部には愛宕山、皿山、崑沙門山等の独立丘陵が点在し、その前面には砂丘が発達する。内陸側は三角州平野となる。

橋本一丁田遺跡と橋本遺跡は室見川左岸の沖積低地上に位置し、飯盛山山麓から段丘の間隙を流れる十郎川と共に挟まれる。行政区画では福岡市早良区福重及び橋本にあたる。室見川からの距離は約600m、十郎川までは750m、博多湾までは3kmで、国土地理院発行の5万分の1の地形図「福岡」の南から13cm、西から13.1cmの所にある。

2. 立地

橋本一丁田遺跡、橋本遺跡は室見川の左岸の沖積低地上にあり、室見川水系に起源をもつ名柄川流域に位置する。現況は橋本一丁田遺跡が水田、橋本遺跡は遊技場で標高6mを測る。南西の野方付近までは飯盛山山麓に広がる段丘で、調査地点はその先端から約800mほどの所にある。また南東300mの橋本の集落には低位段丘が見られる。

付近の地形については空中写真の判読から説明がなされている。^{注10} それによると橋本から福重、十郎川遺跡付近にかけてはデルタ状の分流によって形成された河成低地と低地面を若干刻む旧水路からなっている(Fig. 91)。この地形分類によると室見川から分流する旧河道が橋本遺跡調査地点を流れ、橋本一丁田遺跡2次調査地点をかすめて1次調査地点に至っており、ほぼ今回の調査結果と一致する。また航空写真では、橋本の集落から橋本一丁田遺跡2次調査地点を通り拾六町へ北西に走る道から平田遺跡の間は条幅の区画が帯状に乱れる。現在、これらの旧河川の部分には名柄川が流れ、調査区の60m西を北流する(Fig. 4)。今の名柄川は河川改修により直線的な流路であるが、Fig. 3に見られるように、かつては調査付近をかすめて蛇行し、改修まではたびたび氾濫を起こしていたという。現在の名柄川が直接旧河川に通じないにしても地形を反映するものであろう。付近で、調査中に聞いた話によると、隣接する壱岐東小学校付近は水田が作れない湿地が広がっていたという。調査を開始して間もない8月終わりには、隣地の水田に水が入っていたとの長雨で調査区が冠水する事がしばしばで、調査区内をフナが泳いでいた。

3. 歴史的環境

近年、周辺の低地においても調査が少しづつではあるが行われ知見も蓄積してきている。ここでは今回の報告に関連する時期について、ごく周辺の調査例について簡単にふれる。

刻目突堤文期から弥生時代初頭の遺跡としては有田遺跡、石丸古川遺跡、拾六町平田遺跡、拾六町



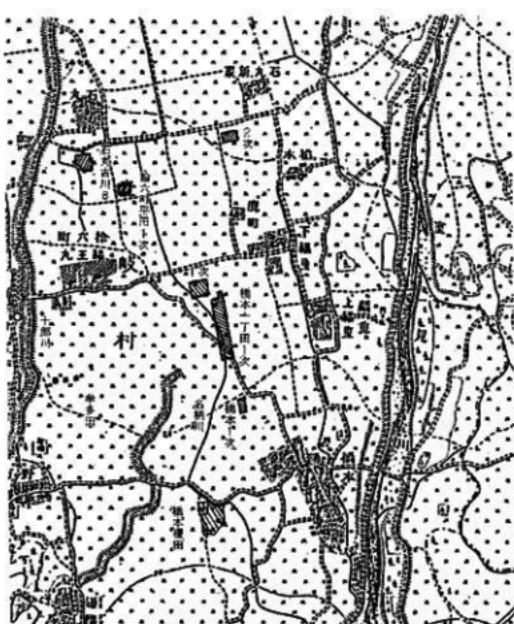
Fig. 2 早良平野の刻目突堤文期から弥生前期初頭の道跡(1/60000)

- | | | |
|------------|------------|----------|
| 1 拾六町ツイジ遺跡 | 7 藤崎遺跡 | 13 野芥遺跡 |
| 2 港納遺跡 | 8 有田遺跡 | 14 田村遺跡 |
| 3 拾六町平田遺跡 | 9 有田七田前遺跡 | 15 四箇遺跡 |
| 4 石丸古川遺跡 | 10 原遺跡 | 16 重留遺跡 |
| 5 橋本一丁田遺跡 | 11 免(第町)遺跡 | 17 東入部遺跡 |
| 6 丰多田遺跡 | 12 次郎九遺跡 | |

ツイジ遺跡、牟多田遺跡等が知られる。有出七田前遺跡では有田丘陵南西の沖積地で多量の刻目突帯文期の遺物が出土している。河道に恒常的な水の供給が途絶え、滞水状態になった時点で遺物が廃棄されたとされ、この点で橋本一丁田遺跡と類似する。有田遺跡は台地上で弥生時代初頭に環壕集落が形成される。時期的には突帯文期に遡る意見もある。石丸古川遺跡は沖積微高地上で刻目突帯文期から弥生時代初頭の遺物が出土している。拾六町平田遺跡では三日月湖状の河川から突帯文土器を含む弥生時代初頭の遺物が多量に出土している。今回の調査地点の北600mに位置し立地的にも近い状況にある。拾六町ツイジ遺跡では弥生時代初頭の土壤から諸手鏡等の木製品が出土している。牟多田遺跡は西に600mにあり遺構は検出されていないが刻目突帯文土器が出土している。この時期は段丘の縁辺のみならず冲積低地に遺跡が広がり、今後水田遺構の検出が期待される。

古墳時代前半の遺跡としては、牟多田遺跡、湯納遺跡、野方中原遺跡等があげられる。湯納遺跡では溝、井堰等が検出され、土器、木製品が多量に出土している。牟多田遺跡では狭い範囲の調査区に数条の溝が検出されている。本調査地点より段丘に近くやや標高も高い。野方中原遺跡は南西1.5キロに位置する拠点的集落である。

歴史時代になると平野部にはN10°Wの方向を有する条里が施行される。成立時期は不明であるが早良郡がおかれ、郡内6郷のうち、当地は額田郷に比定されている。現在残る水田区画は条里をよく残しており、室見川右岸の田村遺跡では12世紀前半に条里に沿う溝が確認されている。



橋本一丁田遺跡、橋本遺跡は前者で1次調査が行われたのみで、遺跡の範囲、内容が明確には知られていない。橋本一丁田遺跡1次調査は2次調査地点の北西に隣接し、調査区の北東半分が河川堆積となり2次調査のSD010につながる。河川左岸では弥生時代から古墳時代の溝を中心とした遺構が検出され、刻目突帯文期の遺物も出土し、2次調査に近い状況にある。また、2次調査Ⅰ区の西側で3次調査が行われ、古墳時代の遺構が検出されている。



Fig. 4 調査地点周辺図(1/8000)

III. 橋本一丁田遺跡第2次調査の記録

1. 概要および層序

(1) 概要と調査経過

本調査地は平成2年、3年に試掘調査を実施し、河川、矢板列、杭列と縄文時代晚期の遺物を確認した。これらの遺構を検出した部分について調査地点を設定し、また未試掘部分も遺構の広がりによっては調査を行う前提で調査を開始した。調査対象地には2本の道路と1本の水路が走り、これを境にIからIV区を設定し、東側隣接地は水田耕作中であり、雨が多い年であったため4mほどの引きをとった。調査は5面について行ったが、調査区によって調査した面数が異なり複雑である。以下調査の経過と面ごとの内容の順で述べる。

調査はI区で試掘調査時に確認された矢板列の面までを重機によって除去する事から始めた。その結果SD001を検出し、その掘削から調査を行った。(第4面) I区の調査中、工事の工程からIII区、IV区の先行調査の要請があり、IV区、III区の順で調査を行った。IV区では重機による表土掘削中、古墳時代の遺物と遺構を検出し、遺構面(第2面)の存在を確認した。また、その約10cm下の茶褐色シルトの上面で稈株状の痕跡を確認し、これを上層(第3面)として調査を行った。さらに下の暗褐色粘土上面で粗砂が薄く混じる浅いくぼみを検出し、下層として調査した(第5面)。そしてこの遺構面となる暗褐色粘土は、縄文時代晚期前半の遺物の包含層であり、遺物の検出、記録を行った。III区は第2、3面で遺構が検出できなかったため第4面のみ調査を行い、流路状のくぼみを確認した。III区終了後I区の調査を再開し、IV区の第3面にあたる層を確認し北側に調査区を広げた(I-2区)。さらにこの調査区では、4条の中世の溝を確認し、条里に関連ある遺構と考えられたため、さらに調査区を広げ(I-3区)現水田表土直下で溝を確認した(第I面)。I-2、3区の東側において試掘を行い、第4、5面での水田等の遺構の検出に努めたが認められず、それ以上に面を下げる事はしなかった。以上の成果を受け、II区では第1面から5面の調査を行い、第3面を除く各面で遺構を検出した。

遺構は第1面では近世の土坑、中世の溝を検出した。その中でも15、6世紀の遺物が出土するSD013は、調査区を貫いて北流し、条里にのっている。第2面では古墳時代の土坑、溝をII、IV区で検出した。第3面では植物根状の痕跡をI-2区、II区IV区で確認した。水田土壤と考え、珪等の検出を試みたが確認できなかった。水田土壤と考えた4層を削除し、弥生前期の土器が出土した。この層は、第4面のSD001を覆って調査区全体に広がる最初の層で、弥生時代と考えられる。第4面では刻目突堤文期の河川SD001、土坑、弥生前期の土坑、河川SD010等を検出した。SD001は西岸を暗褐色粘土(15層)、東岸を砂層(14層)とする。東岸の砂層は南東から北西方向に砂層がラミナ状の堆積を示し、河川堆積と考えられる。第5面で一部調査区東隅に15層に対応すると考えられる暗褐色粘土の岸を確認している。つまりSD001は、より大きな蛇行する河川が埋まっていく最終段階の灘み状の流れと考えられる。SD001には矢板列、杭列が確認され、石庖丁、木製農具が出土し、初期水田の存在が予想されたが明確な水田遺構を確認する事はできなかった。刻目突堤文期の生活遺構は検出できなかったが、SD001の遺物が左岸側による事などから東側に存在すると考えられる。SD010は弥生前期までの遺物が出土したが、第2面でプランを確認できる。1次調査で古墳時代とされたSD00と同一の流れと考えられ、一つの河川がこの範囲内を時期によって流路を変えながら流れたと考えられる。第5面ではIII、IV区で浅い溝状のくぼみを確認し、IV区で縄文晚期前半の包含層等を検出した。他の区でも遺物は出土したがごくわずかである。またII区では植物根状の痕跡を確認している。

(2) 層序

第1面から第4面までは水平堆積に近く各層も広範囲にほぼ均一に広がり、地点によって大きな変化は見られない。今回の調査の主体となった第4面の主たる遺構は、SD001、010といった河川であるため、土層の確認と図化に努めた。図示した土層は区毎に「土層1」のように番号を付けた。SD001の土層は、遺構の土層として層名を付すべきであるが、全体の層序に統けた。層名は各土層観察地点で付けたが、記述の際に断りのない場合はI区の土層1の層名である。以下I区土層1を中心にして記述する。各層のレベルは、SD001を覆う部分で沈んで低くなっている。

1層はしまりのない灰色土と黄褐色土で旧耕作土およびその床土である。現代の水田表土はすでにすき取ってあったためこの層が最上層となる。時期は近世以降と考えられる。調査対象地の全域に広がる。2層は黄灰色シルトの上部と黄褐色シルトの下部に分かれる。2層上面が第1面の遺構検出面である。下部の黄褐色シルト上面が第3面の遺構面となると考えられるがI区では確認していない。II区土層1の2d層がこれに対応し、SD001の東岸付近から西に広がる。3層は灰色粘質シルトで厚さ20cmを測り、SD001よりやや広い範囲に広がる。II区土層1ではこれに対応する3層が調査区東端まで広がるが、南には広がらない。4層は茶褐色のやや粗いシルトで、上面が第3面になる。SD001が完全に埋まった後の層である。I区の全域、II区のSD001の周辺に広がる。5層は厚さ4cmほどの砂層で部分的である。6層は暗灰色粘質シルトでSD001よりやや広く分布する。厚さ10cm弱である。7から12層はSD001の堆積である。10層がない部分があるが調査区全体を通して基本的に同様の堆積を示す。7層と8層は灰色シルトと暗灰色シルトがブロック状に混じり合い、7層が灰色シルトを主体に、8層は暗灰色シルトを主体とする。9層は暗褐色粘質土で木片、種子等の有機物を多く含む。11層も同様であり、澱み状の河川であったと考えられる。10層はこれに挟まれた砂層である。各地点で同様の層位で確認できたが、I区4区、II区1区等で途切れたり、必ずしも同時期の堆積とは限らない。12層は001の床で11層と14層が混じった状態である。13層はSD001左岸に広がる黄茶褐色粘質シルト層である。この層がなく3、4層の下が15層になる部分も多い。本調査地点の各層は鉄分が多いが、特にこの層は鉄分の沈着が著しい。14層はSD001の右岸をなす砂層で前述のとおり旧河川である。15層は13層がのる暗褐色粘土で、SD001の右岸に広がり安定する。以下青灰色粘土、黒褐色粘土、青灰色粗砂混じり粘土と続き、水平堆積を示す。

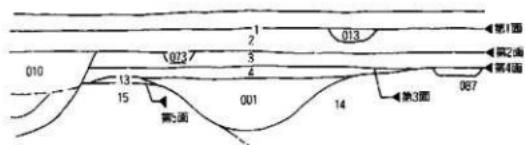


Fig. 5 土層模式図

各土層図で土層名称はこのI区土層1を意識はしたもの必ずしも一致しない。土層説明の後に()内に上層1で対応する土層名をつけた。

調査途中で4、6、7、9、13層についてプランツオパールの定性分析を実施し、4、6、7層にイネを確認し、7、9層に多く、13層にはヨシ層が多いという結果を得ている。

2. 第1面の調査

1) 概要

表土、床土直下の灰褐色土上面で遺構を検出した。前述のとおりI-2区第2面調査時に遺構を確認したため、その時点で未調査であったI-3区、II区で調査を行った。ただしI-2区、IV区においては第2面調査時に残っていた遺構について記録した。また、II-4区については調査期間の都合によりSD013の存在を確認したのみで遺構の掘削は行っていない。

遺構は条理に沿ってI、II区を貫流するSD013を中心に、I-3区で中世の溝7本、II区ではSD013および近世の土坑9基、IV区では土坑3基、溝、杭列を検出した。

2) I区の遺構と遺物

7本の溝を検出した。5本については、調査区北側において複雑に重なりあう。I-2区では第3面での検出になる。北側は表土が厚く、遺構がかなり削られている。

SD011

N-15°-Wに直線的に走る溝で幅約1.5mを測る。南側は調査区外へ続き、SD012に重なるまでの約80mを確認した。SD013に切られる。底はI-2区で標高4.7から4.8m、I-3区で4.6から4.5m、SD012との接合部で4.3mと北に傾斜する。接合部がもっとも深く、それより北では標高4.7mとやや浅くなり現行の水路と重なっていく。底には起伏があり、I-3区南端でとされる。断面形は肩付近はだらかで中央部は深い。覆土は黄灰色シルトで底には粗砂がたまる。SD012との切り合い関係は確認できなかった。遺物はSD012と近い時期であり、同時に存在した可能性がある。ただし土層に切り合いはなく、SD011の方が深く接合後の溝底に近いことから、SD012が流れ込む状態であったと考えられる。遺物は長縁口縁の白磁3、同安窯系青磁皿、黒色上器B類塊、土師器塊、須恵器甕、壺、突帯文土器、土器がいずれも小片で出土している。

SD012

SD011とはほぼ平行に走り、SD013に切られる。底はI-2区で標高4.8から4.7m、I-3区で4.8から4.6mと北に緩やかに傾斜し、SD011より浅い。覆土は黄褐色シルトである。遺物は糸切り底の土師皿、土師器塊、須恵器、青磁、陶器がいずれも小片で出土した。4は龍泉窯系青磁碗である。5は陶器の口縁部で縫と考えられる。外面は灰緑色を呈す。

SD013

N-5°-Wに直線的に走る幅約1.9mの溝である。確認した溝のすべてを切ってI区、II区を貫通し、III、IV区付近では現行の道路の下に位置する。I区ではI-2、3区でプランを確認し、I-1区では南壁の土層断面で確認した。北端ではSD014と交差しさらに北走するが削平が著しくプランを確認できなかった。底の標高は南壁土層で5.0m、I-2区で4.9から4.85m、I-3区では4.85から4.8mでSD014と交差する付近では4.75mとなる。底は断面レンズ状を呈し、起伏は少ない。覆土の上部はオリーブ灰色のシルト、下部は粗砂である。I-2区では溝の縁に沿って径5から7cmほどの灰色土を覆土とする小穴が多く見られた。その一部には杭の先端が残っているものがある。しかし、多くは曲がりくねっており、生痕と考えられる。この小穴は第1面のみ調査したI-3区では検出できなかった。遺物は比較的多く、龍泉9、同安窯系青磁碗、口剥げの白磁碗、天目碗、土師器塊、黒色土器、糸切り底土師皿、須恵器壢り鉢8、獸骨がいずれも小片で出土した。

SD014

N-23°-Wに走る溝でSD013に切られる。覆土は灰色土で底の部分は粗砂である。底の標高は4.8から4.7mで北が低い。直進して現行の水路付近で不明瞭になる。溝の底には有輪類の足跡と考えら

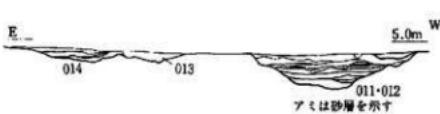


Fig.8 溝上層図(1/80)

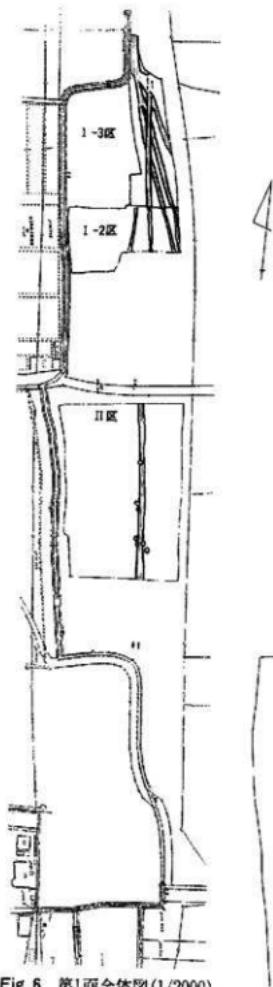


Fig.6 第1面全体図(1/2000)

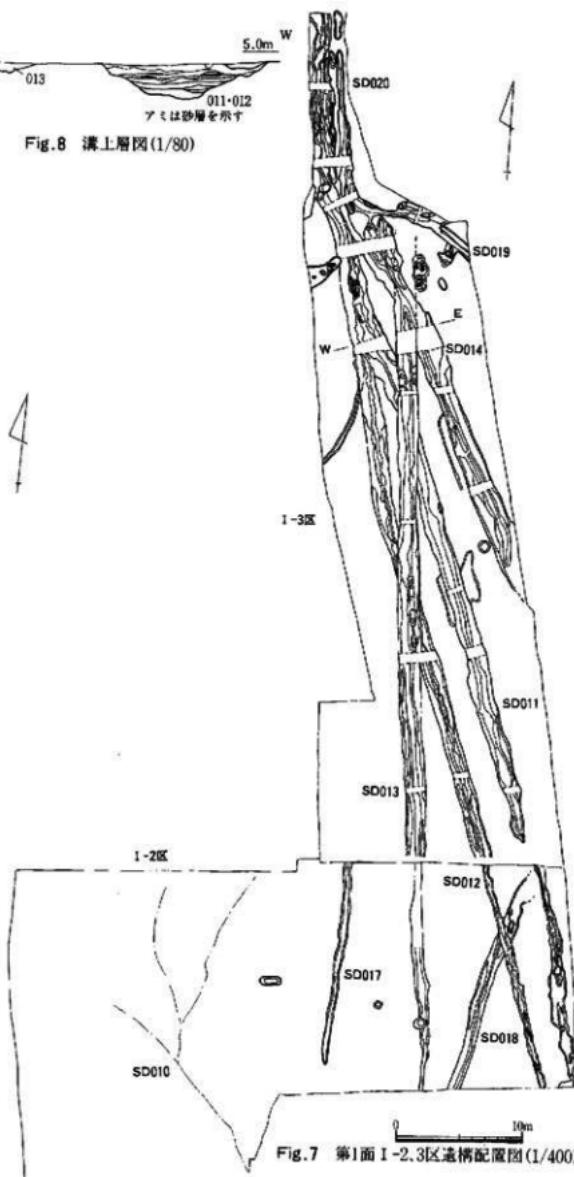


Fig.7 第1面 I-2,3区造構配図(1/400)

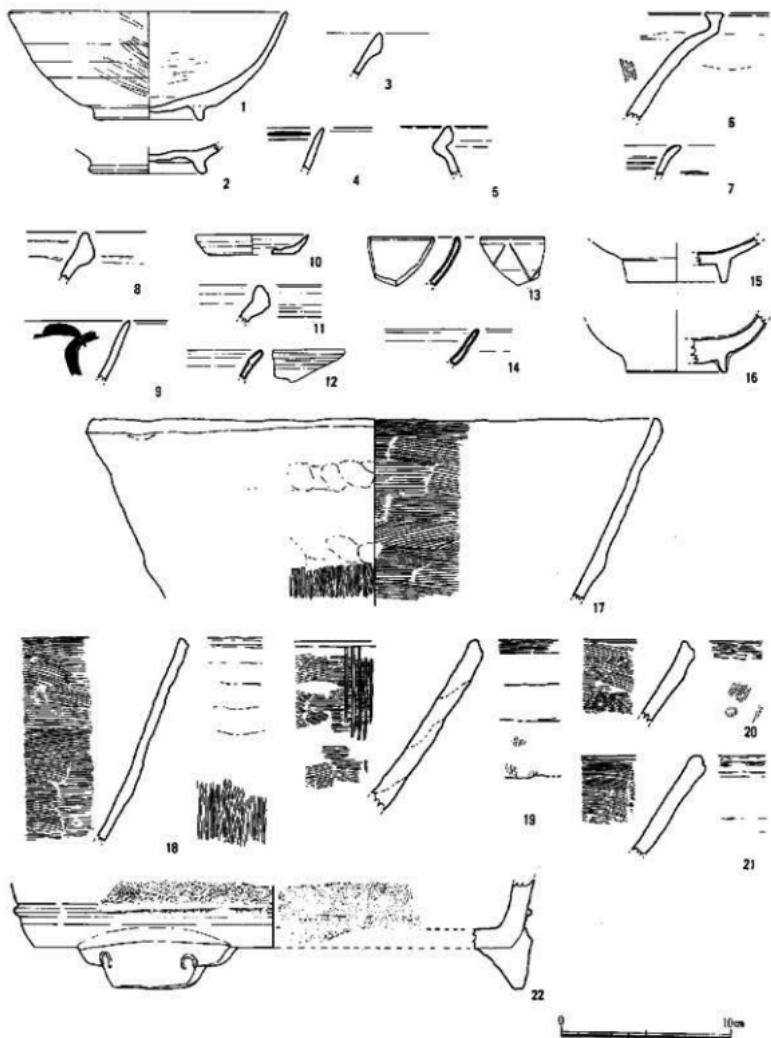


Fig.9 第1面Ⅰ区Ⅱ区出土遺物実測図(1/3)

れる痕跡があり、また鉄分が沈着する。遺物は口縁に刻みを入れ波状文と櫛描文を内面に施す白磁のV-4b類、龍泉窯系青磁I-5b類、黒色土器塊、土師器塊、土師皿、獸骨の小片が出上している。

SD018

N-16°-Eに直線的に走る溝でSD012、011に切られる。淡黄褐色土を覆土とするが明瞭ではなく、掘り方の検出が困難であった。底は標高4.9から4.8mを測る。水が流れた痕跡は特に確認できなかつた。遺物はスクラーバーが1点出土したのみである。

SD019

調査区の北端付近で北西に走る溝である。やや内湾しながらSD014に重なる。切り合いは不明。底の標高4.75から4.65mを測る。遺物は土師器塊、黒色土器塊、瓦器、陶器片が出上した。1は土師器の塊で復元口径16.5cmを測る。外面は回転ナデ調整の後ヘラ研磨を施す。内面も平滑であるが削り状の砂の動きが見られる。2は瓦器塊の底部に糸切りの痕跡が残る。

SD020

SD011、012、014、019が合流し現行の水路と平行する部分では4から5本の溝の床面が確認できるが上記の溝との対応は不明である。覆土が水田表土に近い。遺物に新しいものまで含んでおり別の溝になるとも考えられる。これらをまとめてSD020としておく。その中で東端にある溝はSD019からの続きである可能性が高いが不明である。遺物は8世紀代の須恵器の塊、くらわんか碗、土師皿等が出土している。6は肥前陶器の 描り鉢である。7は李朝青磁で内面に3本の沈線と斑点文、外面に沈線を象嵌する。

3) II区の遺構と遺物

SD013とそれを切り、沿うように分布する土坑を検出した。

(1) 溝

SD013

I区と同様にN-5°-Wに直線的に走る。溝の形状は変わらないがII-2区南端では幅3.6mを測る。床面の標高はII-3区南壁で5.25m、II-2区南壁で5.25m、II区北壁で5.1mである。1区を含める220mで40cmの高低差となる。覆土は灰褐色土で底は粗砂である。遺物は比較的多く出土した。10は糸切り底の土師皿で口径6.8cmを測る。11は須恵質のこね鉢である。12は青磁碗で蓮弁文を施す。14は口剥げの白磁皿である。15は白磁碗の底部で外面は露胎である。16は青磁碗で深い緑色の厚い釉を施し、外底部は露胎で目跡が付く。17、18は十鍋で外面上部はナデ指頭痕が多く、他は刷毛目調整を施し外面に煤が多く付着する。19は上師質の描り鉢で口縁部から摺り目がある。20も19に近い。21は瓦質の鉢である。22は瓦質の火鉢である。

(2) 土坑

SK052

梢円形の土坑で長軸160cm、短軸110cm、深さ70cmを測る。覆土は緑灰色土に黄色ブロックが混じり、下部では黄褐色ブロックになる。壁が立つ。近世磁器、突帯文土器が出土している。

SK054

長方形の土坑でSD013を切る。長軸170cm、短軸110cm、深さ50cmを測る。覆土は緑灰色土に黄色ブロックが混じる。遺物は見られなかった。

SK055

長方形の土坑でSD013を切る。長軸140cm、短軸70cm、深さ45cmを測る。覆土は緑灰色土に黄色ブロックが混じる。壁はややなだらかである。遺物は古墳時代の土師器が出土している。

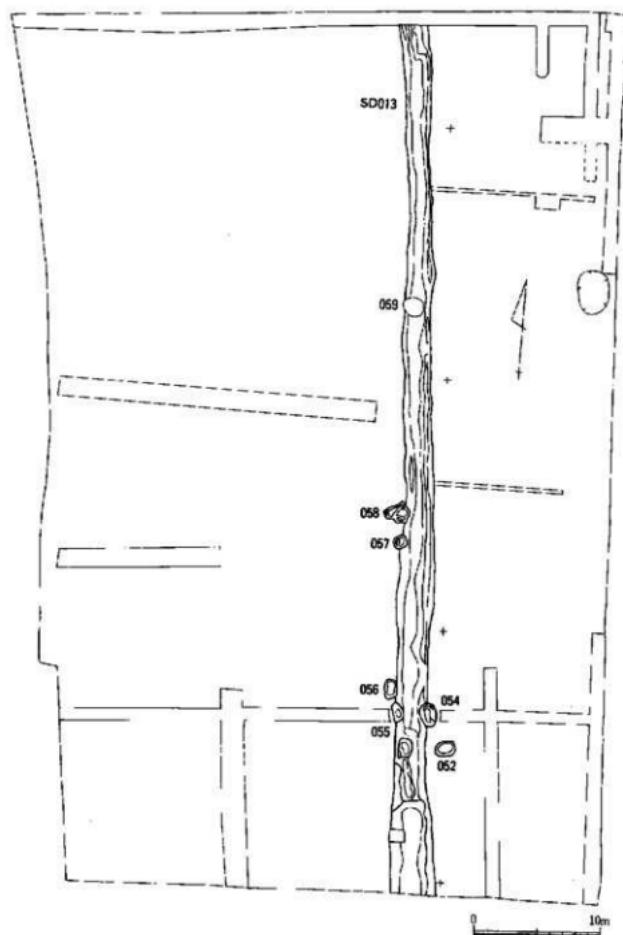


Fig.10 第1面II区造構配置図(1/400)

SK056

長方形の土坑でSD013を切る。長軸140cm、短軸90cm、深さ40cmを測る。覆土は緑灰色土に黄色ブロックが多く混じる。遺物は出土しなかった。

SK057

方形の土坑でSD013を切る。長軸100cm、短軸90cm、深さ50cmを測る。西側中位に段がある。覆土は緑灰色土に黄色ブロックが多く混じる。遺物は出土しなかった。

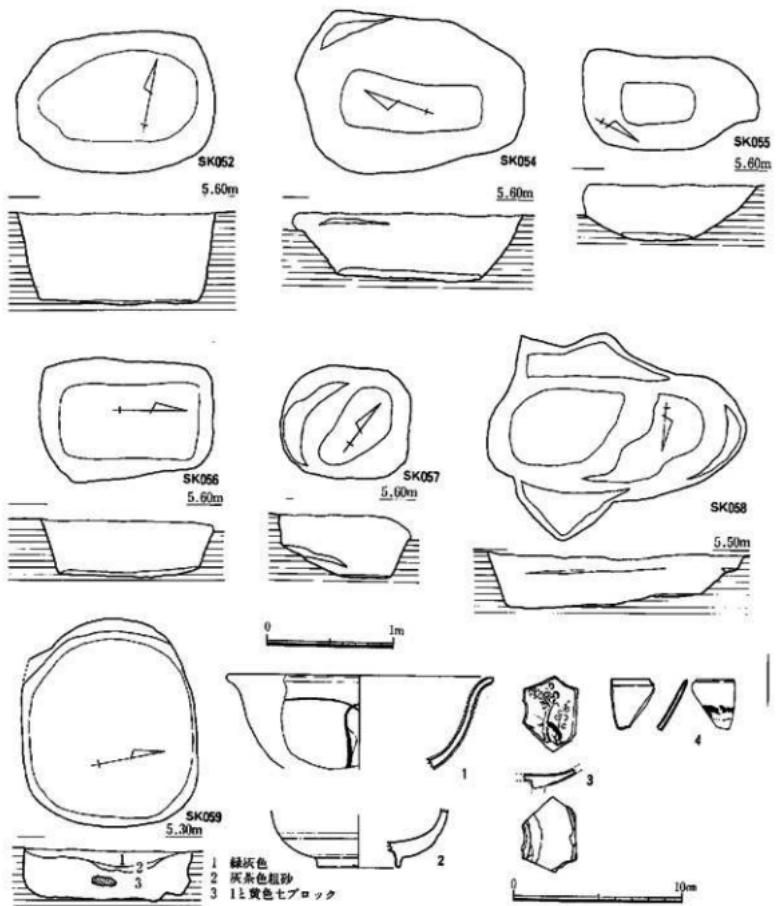


Fig.11 第1面II区土坑、遺物実測図(1/40, 1/3)

SK058

長椭円形の土坑でSD013を切る。長軸210cm、短軸100cm、深さ40cmを測る。西側に段がある。覆土は緑灰色土に黄色ブロックが多く混じる。遺物は近世磁器、土器片が出土した。

SK059

円形の土坑でSD013を切る。長軸160cm、短軸135cm、深さ40cmを測る。壁が直に近い。遺物は近世磁器、中近世磁器が出土した。1は青磁の碗で深い緑色の釉を厚く施す。外面は花弁様に区分する。

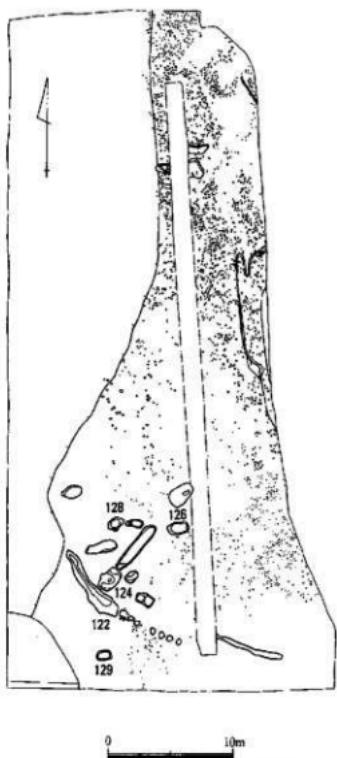


Fig.12 第3面IV区実測図 (1/400)

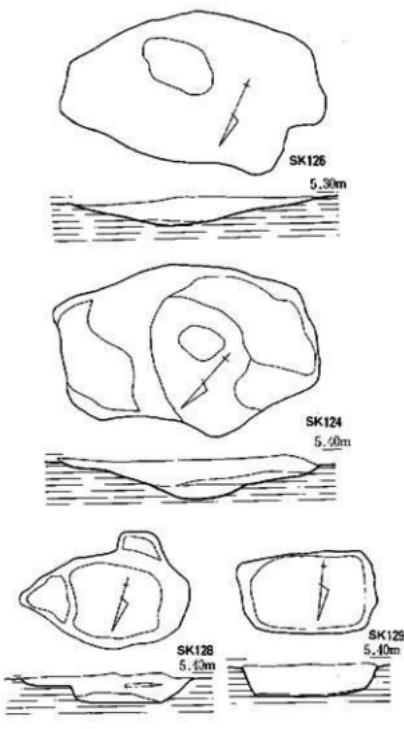


Fig.13 第1面IV区土坑実測図 (1/400)

4) IV区の遺構と遺物

IV区は第3面に相当する面から調査を行っているため、中世の遺構も深いものののみを確認し、土坑と溝を検出した。遺構は調査区の南に集中する。図は第3面の状況であるため西半が河川となるが、中世以降においては少なくとも区内の河川は埋まつた状態にある。

(1) 土坑

SK126

緩やかなすり鉢状の土坑である。長軸200cm、短軸125cm、深さ22cmが残る。灰褐色土上、黄褐色土を覆土とする。

SK124

SK126と同様の上坑で長軸210cm、短軸122cm、深さ32cmと大きさも近い。覆土の上部は暗褐色、灰茶色土、下部は粗砂である。黒色土器B、須恵器の底が出土している。

SK128

東側に段を持つ上坑で長軸135cm、短軸70cm、深さ24cmを測る。灰褐色土を覆土とする。

SK129

隅丸長方形の土坑で、長軸109cm、短軸56cm、深さ26cmを測る。覆土は灰緑色土である。

(2) 溝

SD122

北西へ弧を描きながら走る。西端部をのぞきわずかに床が残る程度である。粗砂を覆土とし、一度に埋まった感がある。土師皿片が出土している。

3. 第2面の調査

1) 概要

黄褐色シルト（2d層）上面で古墳時代の遺構を検出した。この面を第2面としてとらえた。

II区土層Iの2d層はSD001の東岸よりやや東から西側に広がる。これより東のSD077等のII区の遺構群は14層上面で検出した。2d層のレベルは5.2m～5.1mでSD001の上では4.9～5.0mと下がる以外はほぼ水平堆積を示す。この遺構面はIV区調査時にSK121を検出した時点で気づいたためI区においては確認作業を行っていない。また、III区、II-3区では遺構を確認できなかった。遺構はII区において土坑5基、溝6条、IV区において土坑1基を検出した。

2) II区の遺構と遺物

(1) 土坑

SK073

SD072を切る円形の浅い土坑である。古墳時代と考えられる外面刷毛目、内面削り調整の壺片が出土している。

SK074

円形の土坑である。段をつけてレンズ状の底を呈す。やや掘りすぎた感がある。少量の古墳時代の土師器の壺片と刻目直帯文期の土器が出土している。

SK075

II区の東側中央で検出した遺構で方形のプランを持つが、残りが非常に悪く明瞭ではない。住居跡になる可能性もあるがピット、硬化面は検出していない。覆土は茶褐色土である。砂層上で検出した。遺物は全体に広がるが、中央に集中した部分があった。

1は壺で口縁部は強いヨコナデでやや外反する。頸部から口縁部の外面は刷毛目の後にナデ、内面は横方向の研磨の後ナデを施し、暗文風の擦痕を施す。胴部は外面は刷毛目、内面は削りである。2は短頸壺で口縁部はヨコナデ、胴部は外面刷毛の後削り、内面はナデ調整で木口痕が残る。外面に煤が付着する。3は高壺で壺部は粗い研磨、脚部は刷毛目で叩きの痕跡が残る。8mm大の砂粒を多く含み橙色を呈す。4は鉢で外面は刷毛目および削り調整、内面は刷毛目を施す。

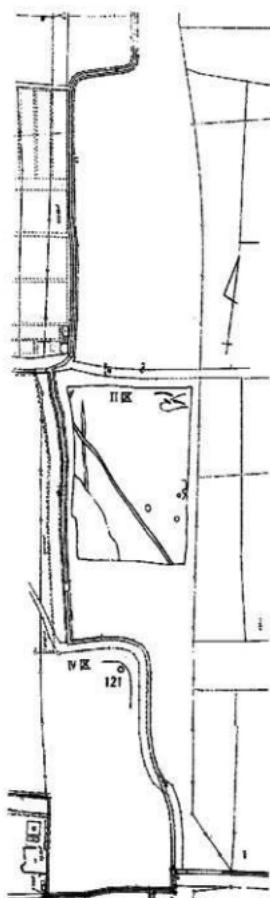


Fig.14 第2面全体図(1/2000)

SK076

SK075の南に位置する。浅い茶褐色土層の広がりで東側が直線的に切れており一つの造構とした。住居跡を意識して検出をしたが土器満まりとも考えられる。2個所の遺物の集中が見られた。

5は壺でなで肩で胸部が広がる。外面刷毛目調整で刷毛目工具による波状沈線を施す。内面は削り。胎土に大粒の砂粒を多く含み、茶色を呈す。6は広口の壺で黄白色を呈す。内外面とも目の粗い刷毛目調整を施し、口縁部外面には強い刷毛目を施す。胴下部には幅広の突帯を1条巡らす。

SK080

平面プラン円形を呈す。底は小さく東側に段を持つ。上部で腹がつぶれた状態で出土した。8、9がほぼ完形、10、11は1/3が残存する。8から11は壺である。やや内湾する口縁部にヨコナデ調整を施

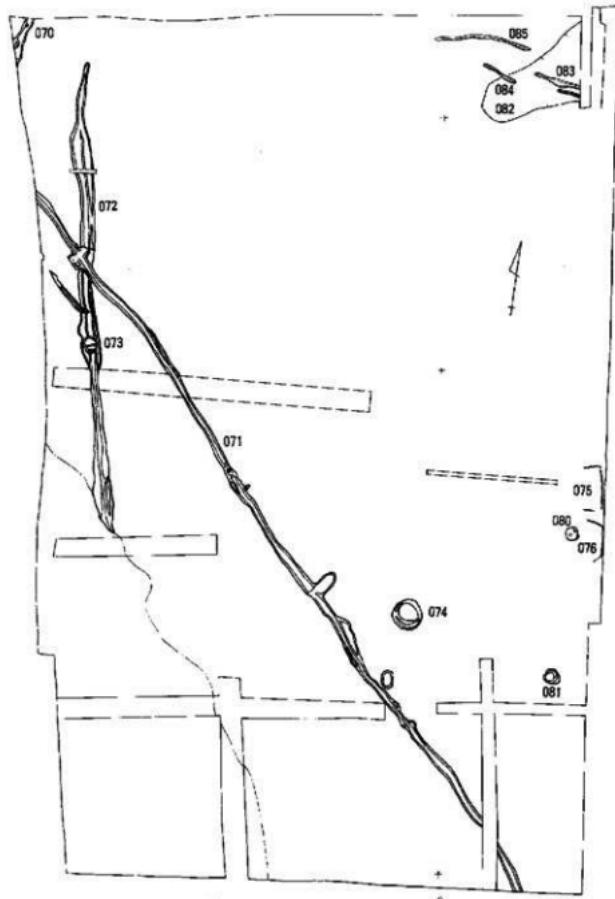


Fig.15 第2而II区造構配築図(1/400)

0 10m

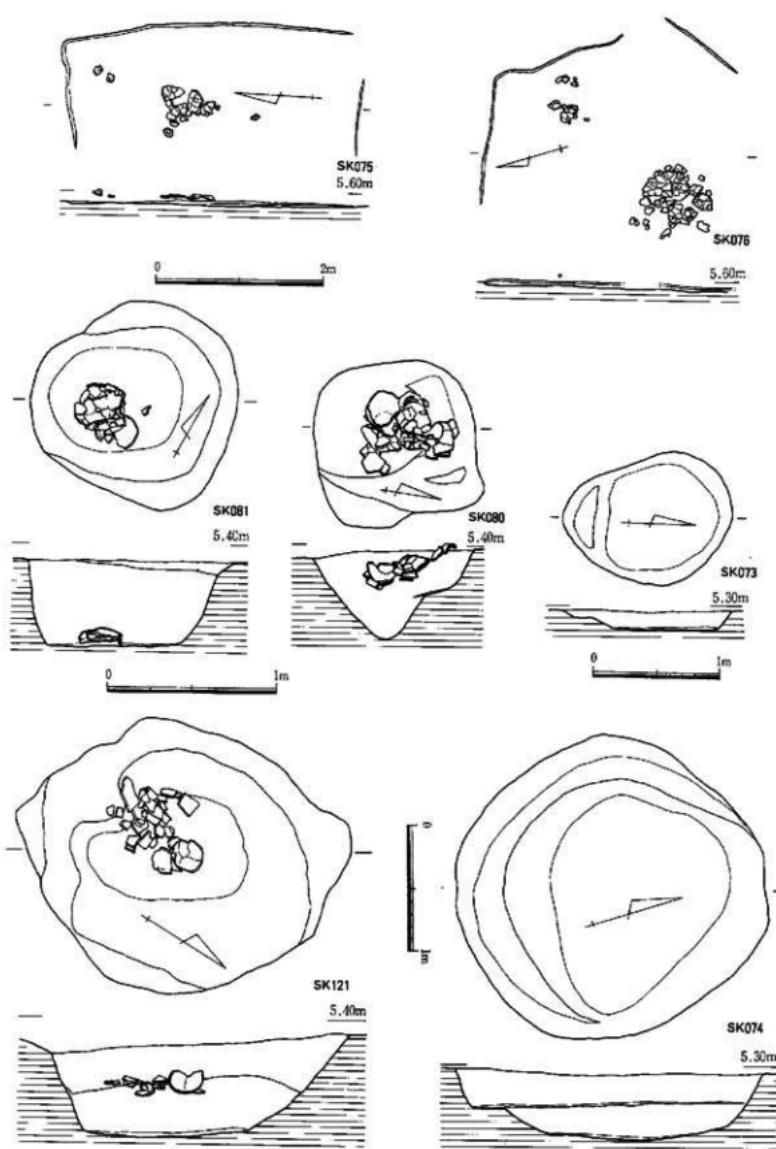


Fig. 16 第2面土坑実測図(1/60, 40, 30)

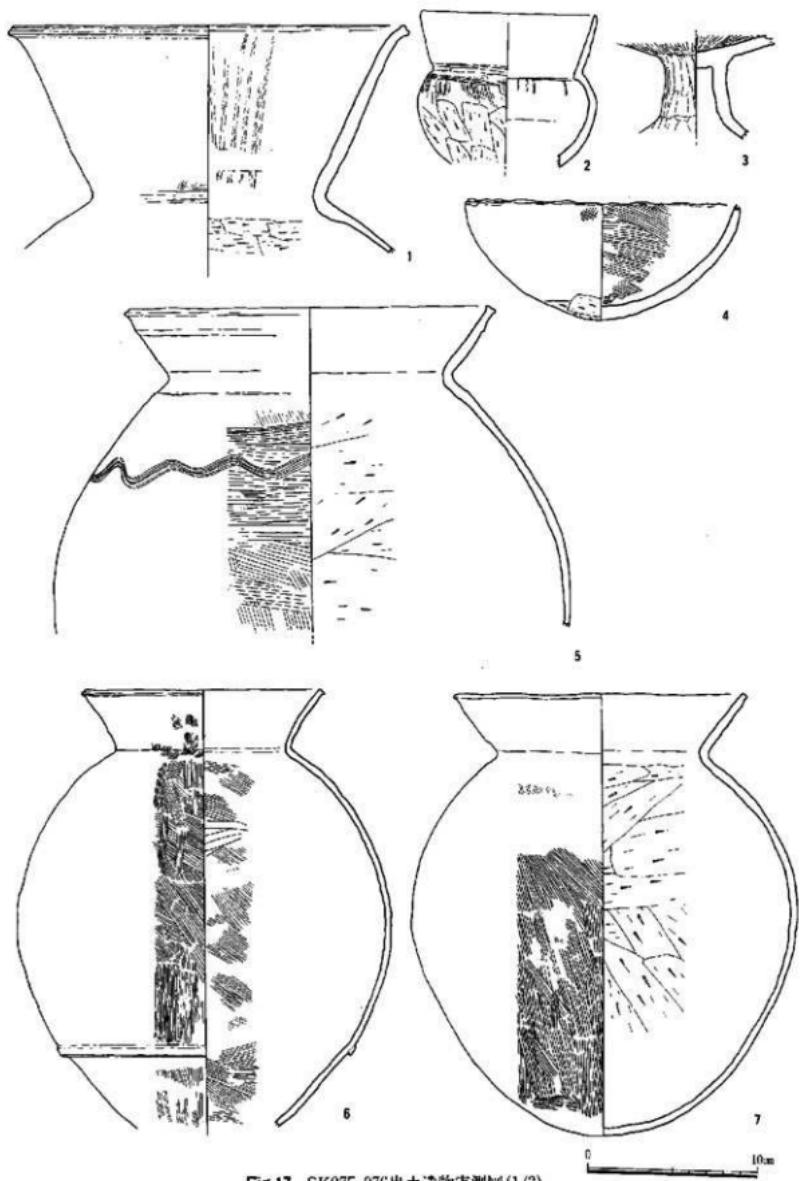


Fig.17 SK075, 076出土遺物実測図(1/3)

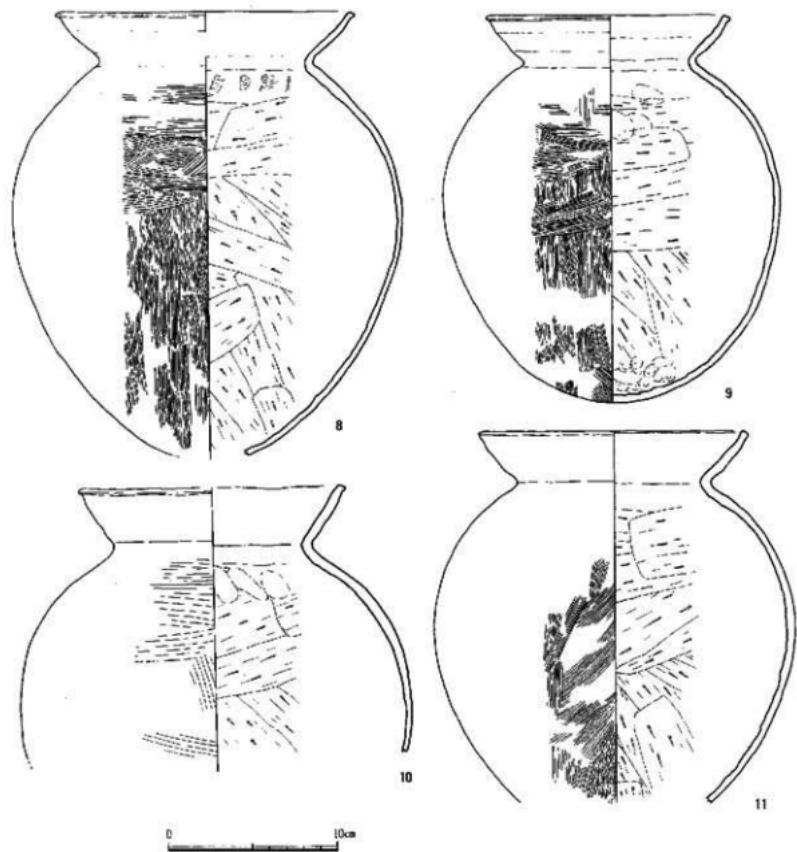


Fig.18 SK080, 081出土遺物実測図(1/3)

し、胸部は外面刷毛目、内面削り調整を施す。8、9の刷毛目は胸下部は縦、上部は横方向に施す。10は全体に刷毛目が粗く横または斜め方向である。11は上部にヨコナデを施す。10が黄白色を呈す他は茶褐色で外面に煤が付着する。

SK081

SK076の西に位置し、円形の明瞭な掘方を持つ。床に1個体の甕がつぶれた状態で出土した。覆土は淡黄茶褐色で2d層に近く床で出土した甕以外は土師器片がわずかに出土したのみである。

7は甕で直線的に広がる口縁部を持つ。外面刷毛目、内面削り調整を施す。外面に煤が付着する。

SX082

くぼみ状の土坑に土器が散らばる。土師器と刻目突帯文土器、弥生前期の土器が出土した。この部

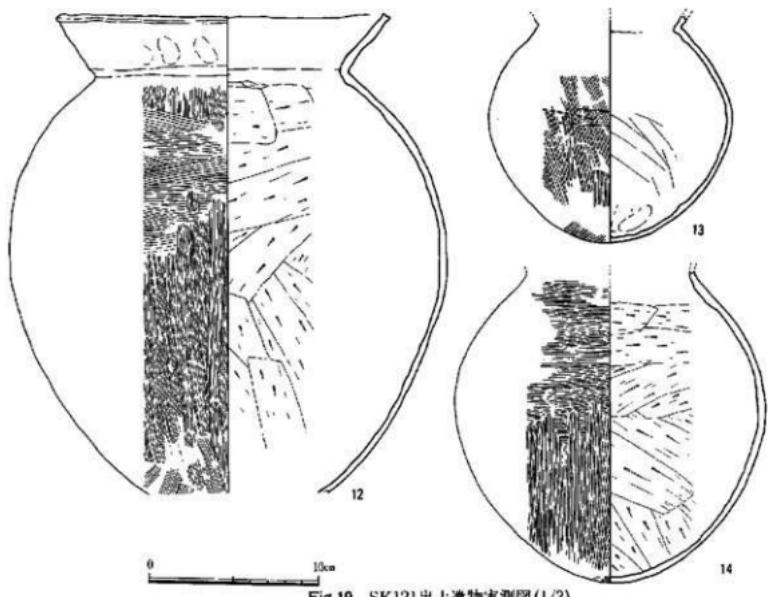


Fig.19 SK121出土遺物実測図 (1/3)

分で14層が約50cmほどくぼんでおり、そこに溜まった土の上部に混入した土器と考えられる。当初SK087と同時期の土器もありして掘り進めたが、最下層より上層器が出土した。遺物の主体は弥生前期の土器である。古墳時代の遺構を検出できずに掘削した可能性もある。

(2) 溝

SD070

調査区の北西隅にわずかに確認できる。幅50cm、深さ10cmを測る。遺物は出土していない。

SD071

II区を北西に横切る幅50cmの溝で深さ20から30cmを測る。SD073を切るが、この切り合い関係は不明瞭である。覆土はやや暗い黄褐色で均一である。遺物は少ないが古墳時代の甕の胸部が出上している。

SD072

北走する溝で深さ20から25cmを測る。覆土はやや暗い黄褐色で均一である。上層器片と刻目突帯文土器片が少量出土している。

SD083, 084, 085

調査区の北東隅に東西方向に走る溝で幅20cm前後で深さは5から10cmである。粗砂を埋上とし、刻目突帯文土器、上層器片が少量出土した。

3) IV区の遺構と遺物

前述の通りIV区を第3面まで重機で下げる過程で検出した。調査区の北西隅でも2d層掘削中に古墳時代の遺物が出土したが遺構は検出できなかった。

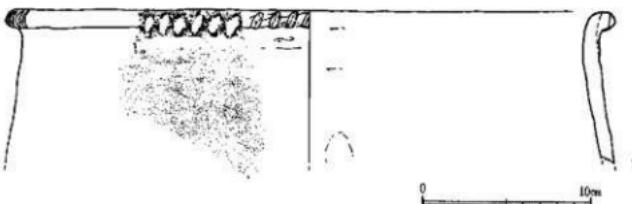


Fig. 20 第3面出土遺物実測図(1/3)

SK121

不整円形の土坑で平面200×165cm、深さ60cmを測る。中位に土器が集中して出土した。12から14は甕である。12、14は外面刷毛目で上部は横方向、下部は縦方向に施す。内面の削りは屈曲部まで及ばない。灰白色を呈す。12の外面には煤が付着する。13は外面は縦方向の刷毛目調整で内面は下部は削り調整が残るが上部は丁寧にならる。胎土が精良で器壁が薄い。淡橙色を呈す。

4. 第3面の調査

I-2区、II区、IV区の4層上面で造構検出を行った。4層はイネのプラントオパールが検出され、また稲株痕跡状の斑点が見られたため、珪等の水田に関わる造構の検出に留意したが認められなかった。I-2区についてはPI. 2(1)に、IV区についてはPI. 3(3)に稲株状の斑点を示した。いずれも径5cm、深さ3から5cmほどのくぼみに黄褐色シルトが溜まる。I-2区では西側に多く分布し、特に規則性はない。4層自体はSD010に切られる。4層は遺物を全くといってよいほど含まず、Fig. 20-1が1点のみ出土した。1は内傾する頸部もしくは胴部に粘土帶を加えることで外反口縁をつくり、大振りの刻目を下に向かって刻む。器面はなでて内面に条痕または粗い刷毛目の痕跡と指頂圧痕が見られる。砂粒を多く含み黄白色を呈す。口縁形態からは甕であるが、傾き、調整に壺、鉢的な要素を持つ特異な土器である。弥生前期の早い時期におさまるものと考えられる。他にI-1区の土層中に2条刻目突帯文土器が出土している。II区は造構遺物を検出できなかつた。

IV区では4層の広がりがはっきりと認められず第3面とした面は3層に対応する可能性もある。

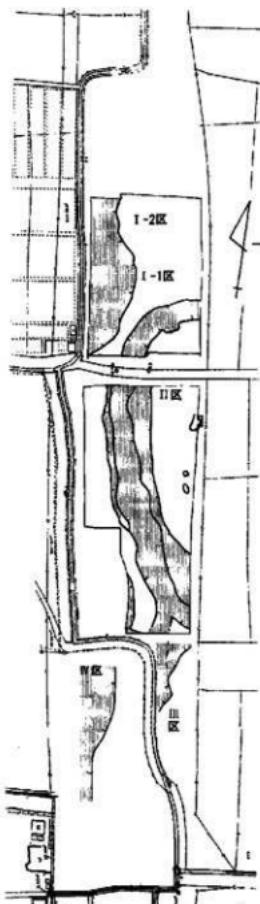


Fig. 21 第4面全体図(1/2000)

5. 第4面の調査

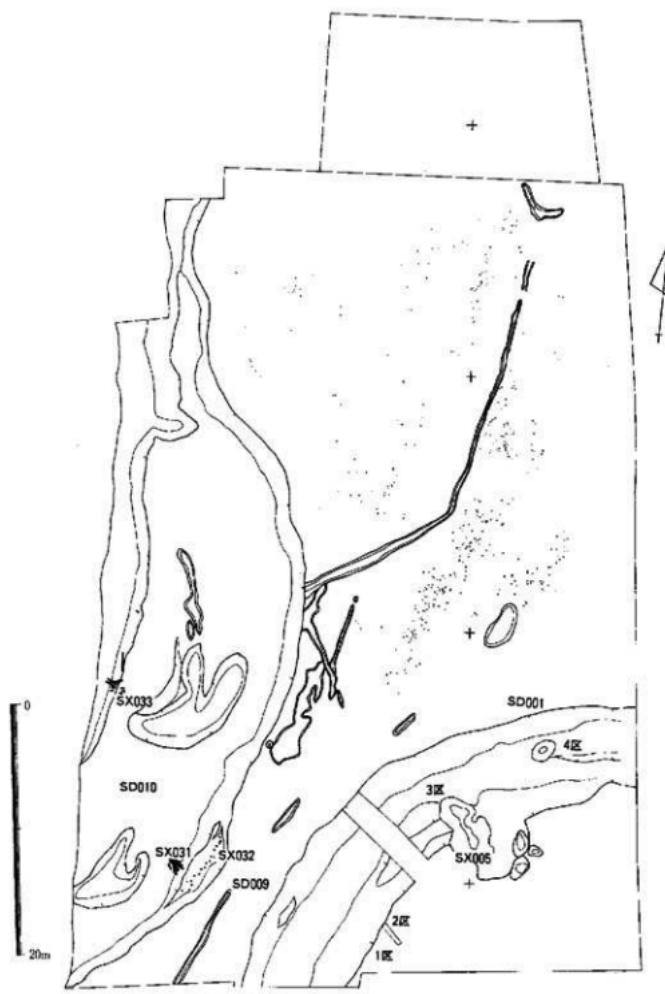


Fig.22 第4面 1区 造構配図(1/400)

1) 概要

4層を除去した面で、左岸を13、15層、右岸を14層とするSD001が確認できる。この面を第4面とし、I-1区、II区で調査を行った。SD001はII区南東隅で2つの流路が合流し、緩やかな弧を描きながら北流し、1区で東へ曲がる。これに伴い杭列、矢板列が設けられる。左岸には14層上面に土坑等の遺構が検出できた。また、調査区西側には第2面から検出されていたSD010が流れる。SD010はI区において杭列等の遺構や弥生前期の遺物を検出したがII区では遺構遺物が見られず、第5面において肩を出したのみである。

遺構は河川の他に土坑等が検出された。

2) I区の遺構

大きくSD001とそれに関連する遺構とSD010とそれに関連する遺構に分かれる。

(1) SD001と関連遺構

I区では便宜的に掘削順に1区から4区を設定した。記述にあたってもこの区を用いる。I区では調査開始時に矢板列が確認できる面まで下げたため右岸を40から50cmほど掘り過ぎている。平面で確認できた川幅は6から8mであるが、実際は右岸に広がり東壁部分で8m、南壁部分で10.5mを測る。土層3部分では11mほどになると考えられる。また、右岸にあった遺構を壊した可能性もある。

SD001は7と8層、9層、10層、11と12層の大きく4層に分かれる。7と8層（以下7層とする）は灰色シルトと暗灰色シルトがブロック状に混ざり合い、その具合で細かな単位に分かれる。SD001が分布する全域に見られる。3区の中央部分には9層の上面に7層を埋土とする足跡が河川



Fig.23 I区SD001実測図(1/200)

Tab2 I 区SD001各層上面レベル(標高) 沢川中央部で計測()内は各土層名

	土層1	土層2	土層3	土層4	土層5	土層6	土層7
7層	4.50(7)	4.6(1)	4.6(1)	—	—	4.6(1)	4.6(5)
9層	4.27(9)	4.4(11)	4.5(2)	—	4.55(2)	4.5(1)	4.3(7)
10層	4.10(10)	4.1(III)	—	4.25(10)	4.30(15)	4.4(3)	—
11層	4.00(11)	3.9(IV)	4.0(1)	4.05(11)	—	—	3.7(8)
川底	3.5	3.45	3.6	3.7	—	—	3.3

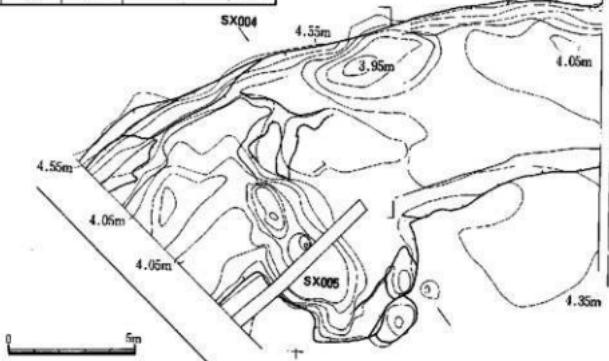


Fig.24 I区SD001上面実測図(1/200)

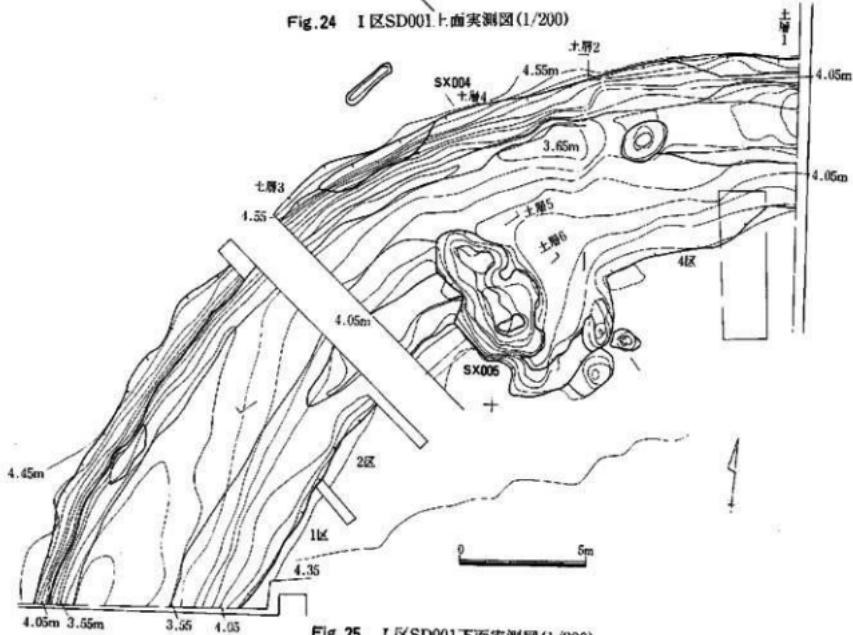
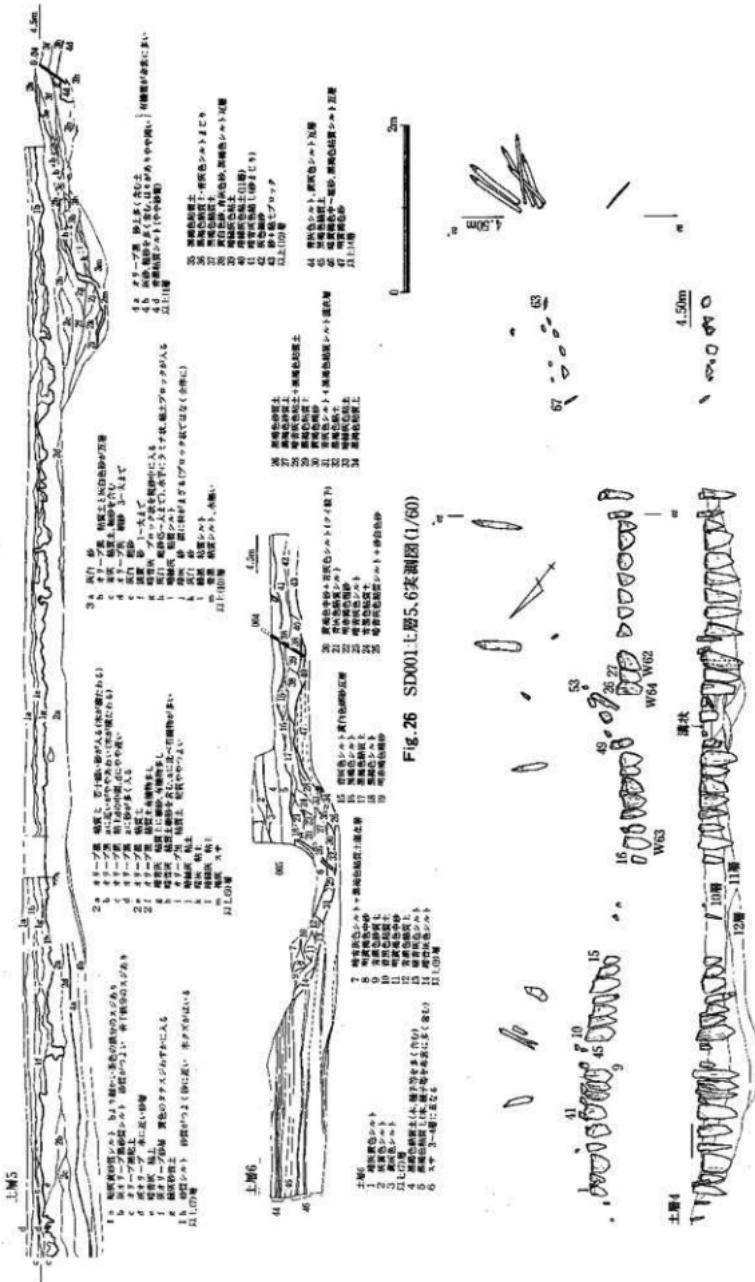


Fig.25 I区SD001下面実測図(1/200)



- 26 -

Fig. 27 矢板列0001実測図(1/60)

の方向に沿って多く見られた。土層3(Fig. 28)、5(Fig. 26)にこの踏み込み等による搅乱が表れている。種子等の有機物は少ない。9層は黒褐色粘質シルトで有機物を多く含む。土層2(Fig. 24)の部分では粗砂層が間にかみ、2つに分ける事が可能である。粗砂層は縞状に灰色シルトが入り、足跡状のくぼみが多くみられる。土層1と004には表れておらず、広がりは狭い。4区で11層上面に10層を埋上とする足跡が検出された。10層は淡黄色粗砂で4区と3区の一部に広がる。暗灰色シルトが薄く縞状に入る。2層における粗砂層と同様に右岸から流れ込む。11、12層(以下11層)は暗褐色シルトで種子、小枝等の有機物を非常に多く含む。掘削中はクルミが目立った。種子分析の結果は後に掲載した。Fig. 23に見られるように流木も多く出土した。河川がカーブした部分に多く溜まった状態と考えられる。杭、板材もあるが、ほとんどは加工がなされていない。樹種の確認はできていない。昆虫化石も出土したが、保存、分析ができず数量、種を提示できない。

9層と11層は10層が広がらない部分については分離が困難な場合があった。(土層3、5)また、10層とした砂層も全てが同一時の堆積とは限らず、特にⅡ区において10層自体も数層に分かれる。ただし、最下層の上に堆積する砂層という点では同様であり、大きな意味での同一層ととらえておきたい。

土層1、2、3、7における各層上面のレベルはSD001中央部分でTab. 2の様になりほぼ水平堆積を示す。ただし土層5の西端部分から11層上面のレベルが下がり土層7(付図1)の部分では70cmほど低くなる。

河川の岸は右岸の標高4.7mを越えるものではない。

SD001は、概要で述べたように左岸側からの粗砂層(14層)の堆積の最終段階である。I区は右岸側に内湾している事もあって流れの中心は左岸側により、右岸側は緩やかな傾斜をなす。(Fig. 24)

矢板列004 (Fig. 29)

幅10から20cmのミカン割りの矢板がSD001の湾曲部を横切る。その角度は、左岸側に対してわずかながら鈍角である。列は直線的ではあるが、3群に分かれる。左岸よりの1から15は下流側にわずかにずれ、67から右岸よりは角度を変える。この群の間は1mほど間隔が開く。左岸よりの群はやや細目の矢板が多い。矢板は下流側に傾けて打ち込むが、9までは上部が下流側に曲がる。打ち込みが4層に至っていない10から15は全体が傾く。9と10の間は35cmほど2本分の間隔が開く。また、41から45のように幅7、8cmの矢板が前面の矢板に重なるように打たれている。左岸には径2cmほどの杭が2本打たれる。16からの群では中央部が55cmほど空き、この部分が溝状のくぼみになる。また、小振りの矢板(49~53)が後方斜めに列をなす。取水口とも考えたが26、27および49~53がこの溝状の堆積に打ち込まれており、矢板列以前の堆積である。周囲を掘削後に確認したためくぼみの範囲は不明であるが、溝状の造構は後方にはつながらない。右岸に並ぶ63から67は小振りで浅く間隔が空く。造構検出時に上部を削った可能性もある。また、41から45、49から53などと矢板の大きさ、間隔、打ち込みの深さが共通しており、連続した矢板列であったとも考えられる。その場合、前面の列が打ち直しの可能性も想定できる。

矢板列の下流側60から70cmには上流側へ傾けて打ち込まれた杭列がある。径7、8cmほどの丸太杭で、ほぼ1m間隔で打たれる。矢板列との関係は不明であるが、両者が4.7m以上のレベルまであれば、互い交差し、横材を渡す構造を考えることもできる。

矢板は上流に向かって打たれており、河川を意識したものであろう。河川を堰止める事で水位を上げ、水田等に水を引く用途がまず考えられる。この場合、左岸は砂地であり、標高が右岸より高く水

田の広がりは考え難い。下流に水を引くとすればSK007が溝状になっているが土層1には続かない。左岸であれば河川の淵に畦を築き、水口を設ければ可能であろう。左岸は右岸より低く、大きな削平、土壤の流出はないと考えられる。また、左岸側に水路を設け、水を引いたとも考えられる。ただし1枚板の列で流れを止めるとなるとかなり緩やかな流れでない限り難しい。

次に矢板列が築かれた時期である。矢板列は7層の上面では検出できず、9層上面まで掘り進んだ段階で検出した。SD001を意識して横切っていることからこの河川が存在もしくは痕跡を止めていたる時期に築かれたと考えられる。土層1の4層は完全にSD001を覆っており、これ以前の段階である。また001の11層に達していない矢板も多いことから古くとも10層の堆積以降となり、7層または9層が形成される段階に築かれたと考えられる。おそらくは、10層の堆積後、7層部分が耐水していいる時期に築かれたと考えられる。いずれにしても刻目突帯文土器が出土しており、この時期と考えられる。004の矢板15の放射性炭素年代測定の結果、 $2,920 \pm 190$ という年代値がでており、やや古い感があるが矛盾するものではない。

杭列005 (Fig. 30)

004の3 mほど上游にやはりSD001の流れに垂直に杭が並ぶ。杭は15本ほどが疎らに残る。この杭列部分は杭を打つ前に40cm以上掘込み、そこに土層5の3 aから3 n層、土層6の5から40層が溜まる。杭はこの堆積の前後に築かれる。土層5の4 d層はSD001の11層に対応する。3 aから3 fが10層に対応するのは間違いないが、3 g層以下は粘質が強く土質が異なり3層堆積以前に埋めた土とも考えられる。この場合、11層が堆積した後、10層が溜まる前段階に杭列が築かれたことになる。また、土層5の3 h層以下が10層の堆積とすると、杭列はSD001が10層で埋まつた後、9層部分が耐水している時期に打たれたことになる。この場合、くぼみ状の掘込みは直接杭列とは関連がないか、前段階に設けられた杭列の所産と考えられる。いずれにしても前段階に掘り込みがあったことになる。この掘込みは杭列005を横断範囲にあり、直接関連するものと考えたい。杭列の前面をスカサハ

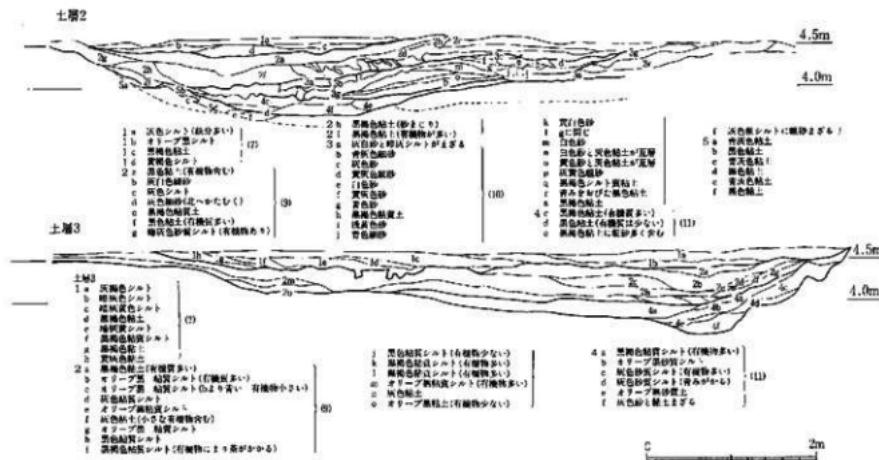


Fig.28 SD001上層2,3実測図(1/60)

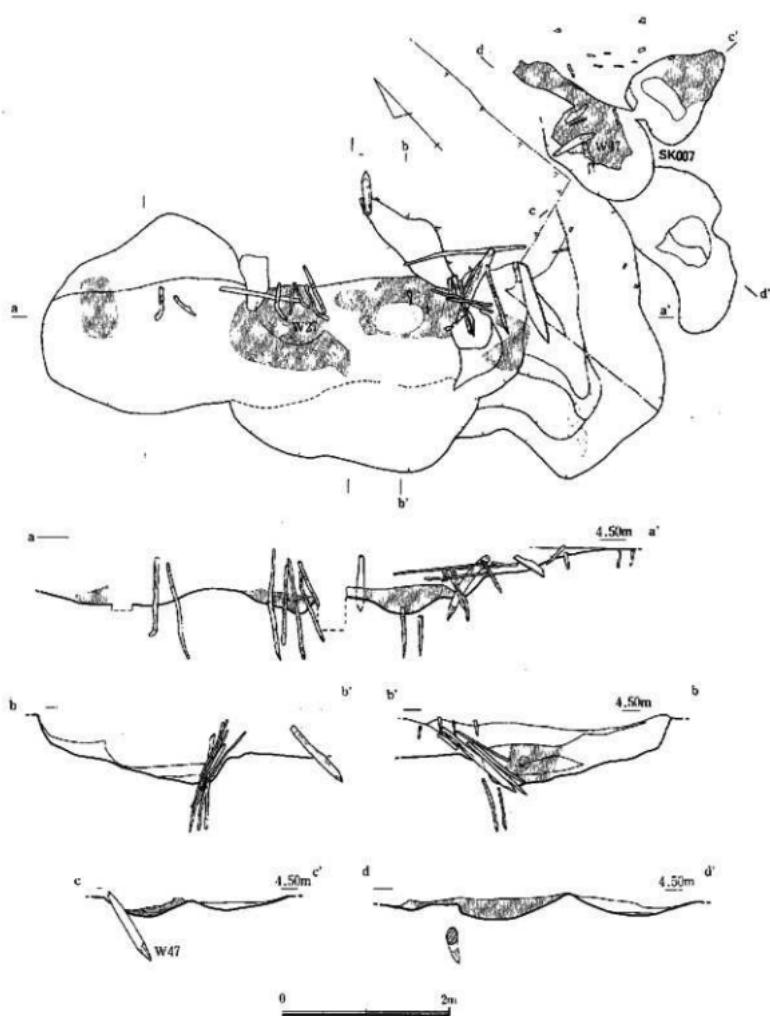


Fig. 29 杭州005、SK007测图(1/60)

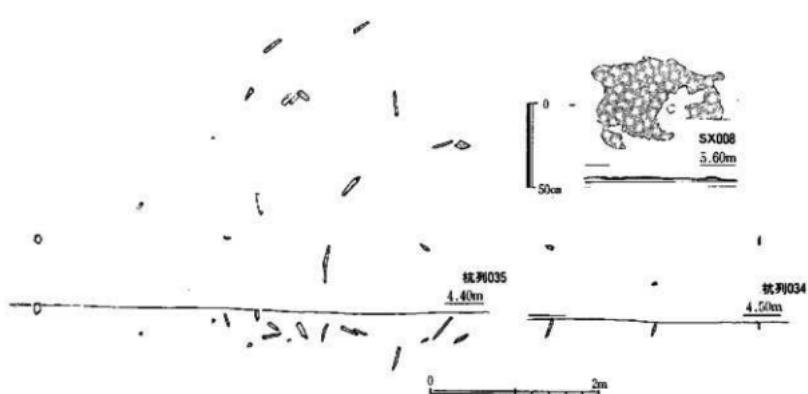


Fig.30 SX034, 035, SX008実測図(1/60,30)

い、溝状のくぼみが杭列に沿って右岸側に伸びる。これには9層および粗砂層が混まる。

杭は径2から3cmほどの細身の木を先端のみ加工して使用する。杭列のSD001左岸側は若干下流側に傾くものの直に近く打ち込まれる。右岸側は45°以上傾き、径8cm大の丸太杭と矢板が1本ずつ混じる。また50cmほど下流側に上流側に傾く径8cmの丸太杭が1本打たれている。検出時には流木が横たわっていた。また、左岸側には杭列を確認することはできなかった(Fig.23)。

この杭列は水を引くための施設であると考えられるが、杭が左岸まで伸びないとすれば、河川を堰き止め水位を上げる事はできず、右岸への導水のための施設と考えられる。この場合、杭列の左岸側からSK007に向かってくぼみがあり、これに水を流すことができるか続かない。

SK007

SD001の左岸で杭列005の下流側に位置する皿状のくぼみである。この付近は全体を掘りすぎているため2、30cmは高かったと考えられる。床にスサが溜まる。径8cmの杭が1本打ち込まれるが関連があるかは不明。004、005からの導水路の可能性がある。

SX035 (杭列)

SD004の左岸の14層中に打ち込まれた杭群である。径2、3cmと細く、列をなすわけでもない。打ち込まれた時期も不明である。SD001に関連する可能性は十分考えられる。

SX034 (杭列)

SD001左岸に3本単独で打たれた杭列である。杭は径2cmほどで先端のみが残存する。

SK008

SD001左岸に薄く広がる炭化物層である。焼土は確認できなかった。

SD009

SD001の左岸に断続的に残る溝の底を検出した。覆土は4層に近く、SD036と同様に上面からの掘込みの可能性が高い。遺物の出土はない。また、この溝北側に径3cmほどの小さなピットを多数検出した。溝や畦に伴う杭の可能性から記録を行なったが、いずれも深さ3cmほどの浅いくぼみになり、杭ではないと思われる。大きく2つの帶状に集中し、まばらではあるが全体に広がる。

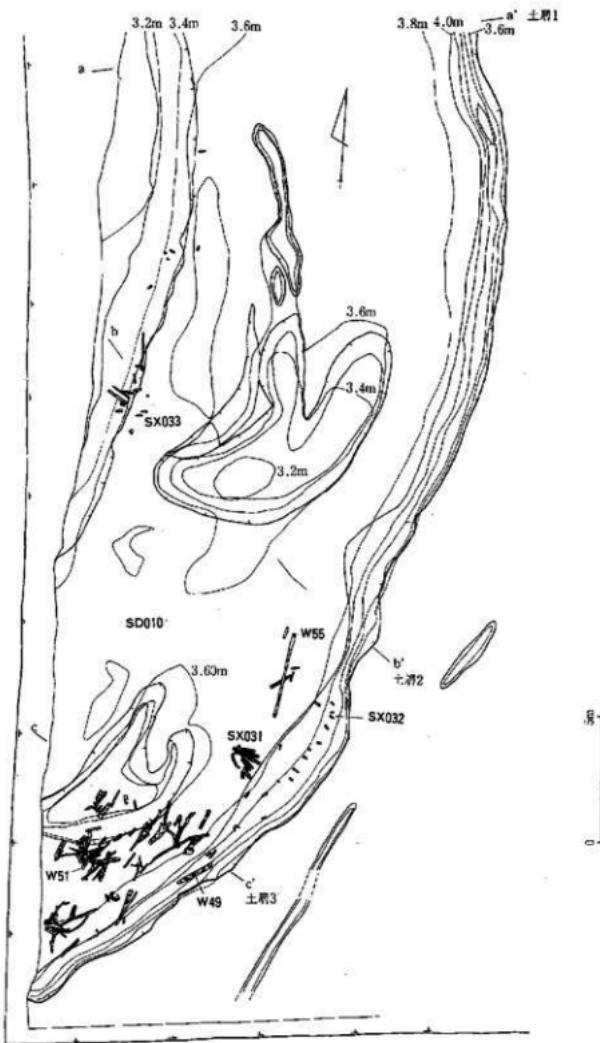


Fig. 31 SD010実測図(1/200)

(2) SD010と関連する遺構

調査区の西側を北流する河川で調査区内には対岸が出ていない。幅17m以上を測る。これまでもふれてきたが、すでに第2節でこの河川のプランは確認されており、切り合いからは古墳時代以降のものである。1次調査のSD00につながると考えられ、SD00が弥生時代末から古墳時代初頭の遺物が出土している事と矛盾しない。しかし、結論から言うといくつもの流れが重なっており、それを分離できずに掘った。掘削は南端部分から行った。ここでは流木が多く出土し、刻目突帯文土器と、弥生前期の土器が破片ではあるがまとめて出土した。川底は青灰色粘質土で岸から80cmほど落ちたレベ

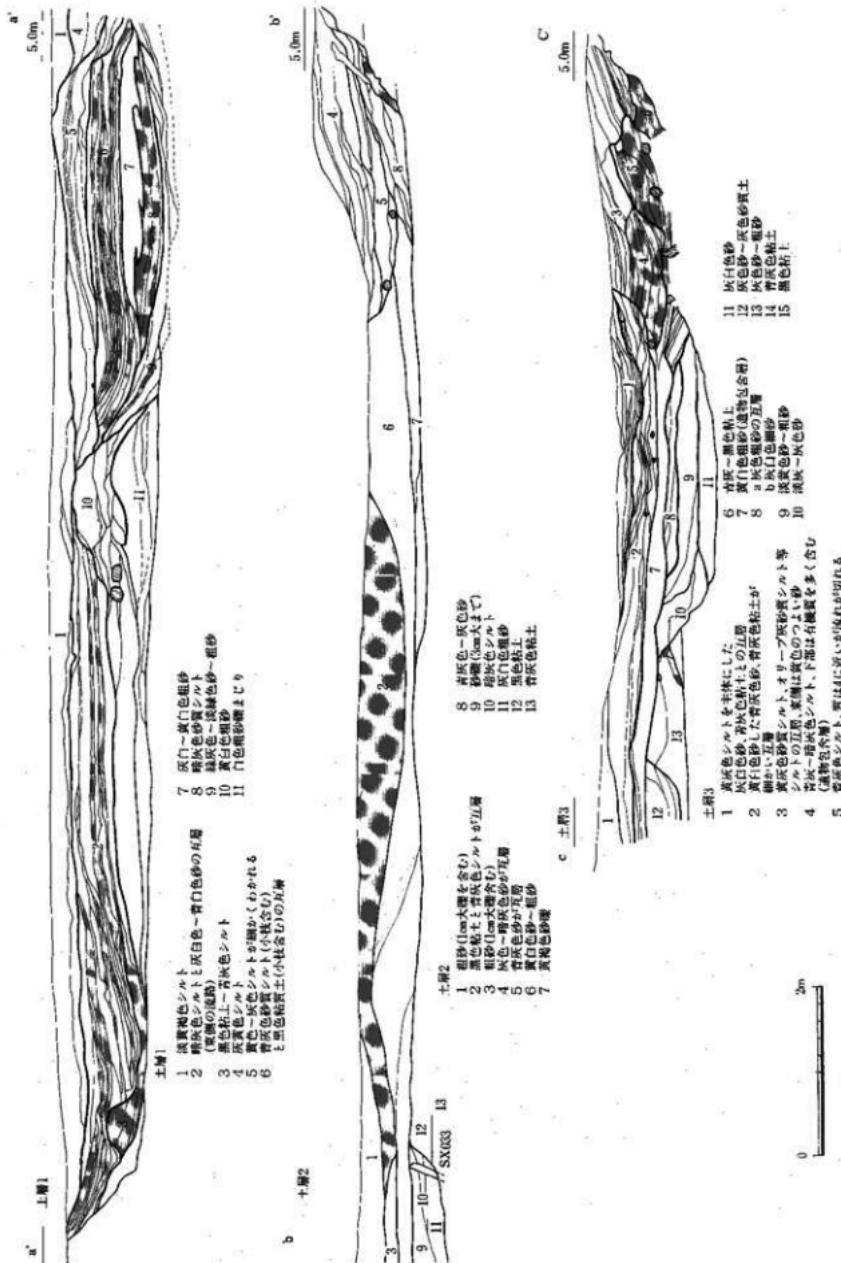
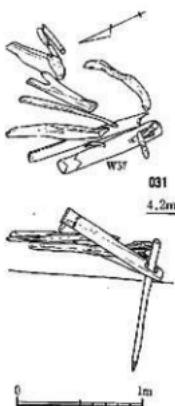


Fig. 32 SD010土壤 (1/60)



ルで平坦面になり、さらに30cmほどの段落ちがある。これより西側は調査区外になり不明である。SD010の中で検出できた造構には、左岸に打ち込まれたSX032、建築材をSX固定したSX031、川底の段落ちに沿って打ち込まれた杭列033がある。造構、遺物が見られたw55付近までは手掘で掘削し他は重機で掘削した。その範囲で出土した上器は弥生前期はじめのもので、杭列等も近い時期と考えている。以下上層 (Fig. 32)、造構の順で眺めていきたい。

土層1では大きく2つの流れがある。いずれも暗褐色シルトと灰色細砂、粗砂が細かな互層をなす。二つの流れの間は粗砂の高まりとなる。東側の流れは15層を攻撃斜面とし深さ

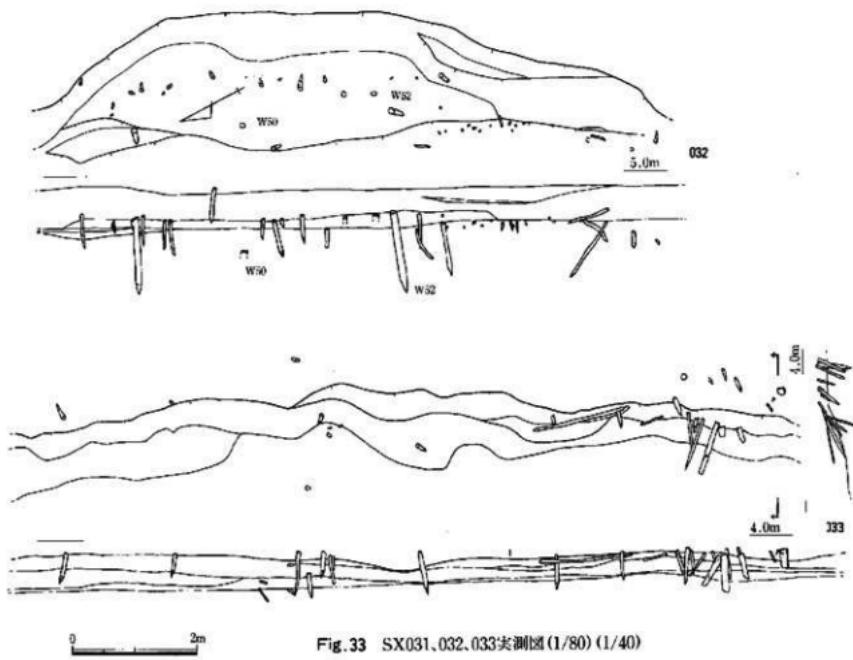


Fig.33 SX031, 032, 033実測図(1/80)(1/40)

90cmほどである。東側は床に達しておらず深くなる。この付近の堆積は粗砂が大部分を占め、流木はわずかに見られる程度である。1層は粗砂層を覆う暗黄褐色シルトである。2、3面でSD010としたのはこの層である。土層2では中央部に黒色粘土と灰色シルトが互層に漬まる流れ、東岸側にはシルト質の灰色、青灰色砂の流れがある。これらも粗砂層にのり、杭列033が打たれる段落ちはこれがかかる。SX033はこの層位の中では最も古い。上層1、2の付近では遺物は出土していない。土層3では流れが複雑に重なりあう。図の中央の流れである1、2層には遺物がない。東壁に沿ってシルトを主体とする3から6層、中央下部の粗砂層7から11層で刻目尖端文土器と弥生前期の土器が出土した。流木は4、5層中に含まれる。この層は杭列033よりやや北まで広がり流木の中には建築材が出土した。シルトには小枝、木の葉等の有機物が多く含まれていた。

SX032（杭列）

東岸の落ち際のテラスに岸に沿った杭列を確認した。杭の径と打ち込みの深さから3群に分けることができる。径10cmを測るほどの杭は3本を3から4mおきに確認した。標高3.1mまで最低130cmを打ち込んでいる。径2cmほどの杭は図の南半に集まる。現存で20cmほどが、岸に向かって斜めに打ち込まれる。この他が径7cmを測る杭でテラスの範囲全体に広がる。ほぼ直に打ち込み、テラスに伴うものと考えられるが、用途は不明である。

SX033（杭列）

川底の段落ちに沿って径6cmほどの杭が並ぶ。南側に矢板と杭が集まる部分があるが他は約2mおきに打たれる。杭は直からやや段落ちに向かって打たれるが、南端部の矢板は段落ち斜面に沿っておいたような状態であった。層的に今回検出したSD010中の遺構の中では古いことになる。

SX031

杭列031のテラスの下の床で確認した杭と建築材である。流木状の木とほぞ穴が開いた建築材が横たわり、建築材のほぞに杭が打ち込まれ、建築材を固定した状態にある。ほぞ部分が河川の底であり床からでも75cm打ち込んでいる。SX032との関連は不明。

3) II区の遺構

SD001と右岸を中心としたその他の遺構に分かれる。

(I) SD001と関連遺構

SD001

調査区のはば中央を流れ、川幅10から13mを測る。1区と同様に7から11の4層に分けて掘削し、各層の上面で遺構検出を行った。また、当初設けた土層観察用ベルト毎に北から1区から4区とした。

Fig. 34は11層上面のコンタを示したが、1区の北半と4区は10層の広がりがなく11層上面を確認できなかった。Fig. 35はSD001の底まで掘削した後のコンタである。

遺物は各層で確認したが11層で最も多く出土した。7層では遺物が左岸にかたよって出土し、レベル的にも高く左岸に生活域を予想させる。また088とした部分は緩やかな斜面に完形に近い土器を含む多くの遺物が出土した。遺物は刻目尖端文土器、柳葉形磨製石鑿、石包丁、石斧、砥石等の石器、諸手鏡、石斧の柄等の農具を含む木器が出土した。

1区では土層1のように10層にあたる砂層がなく、9、11層を平面的に分離できなかった。下部ほど有機物が多い。右岸が15層を肩とする点はI区土層1と同様だが、斜面に15層に近い粘質および青灰色シルト等の無遺物層（II区土層1の10層）がたまる。II区では同様の堆積が他の土層でも観察され、河川の肩を検出する際に9、11層と区別し難かった。1区部分は流木はほとんどなく床面は平坦

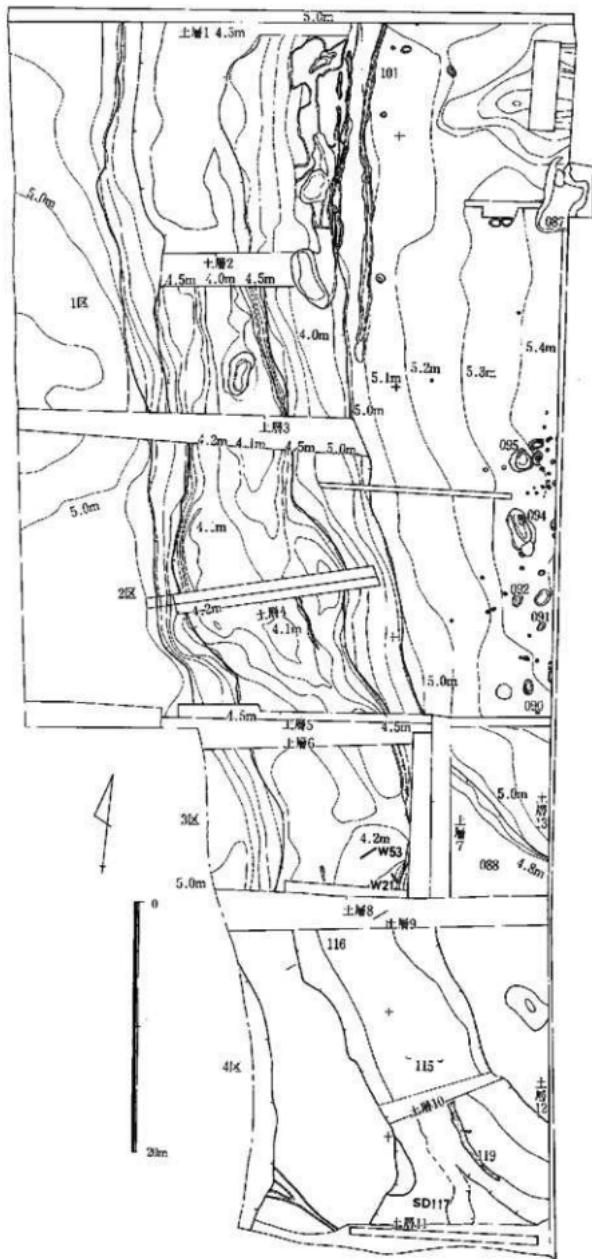


Fig. 34 第4面II区造構配図(1/400)

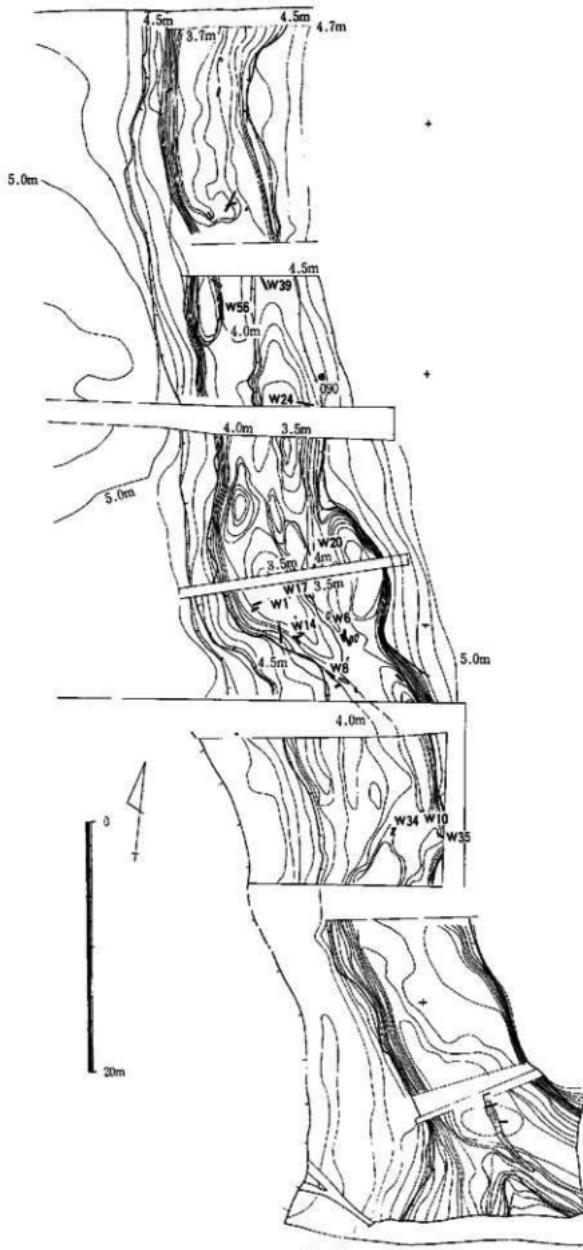


Fig.35 II区SD001下面实测图(1/400)

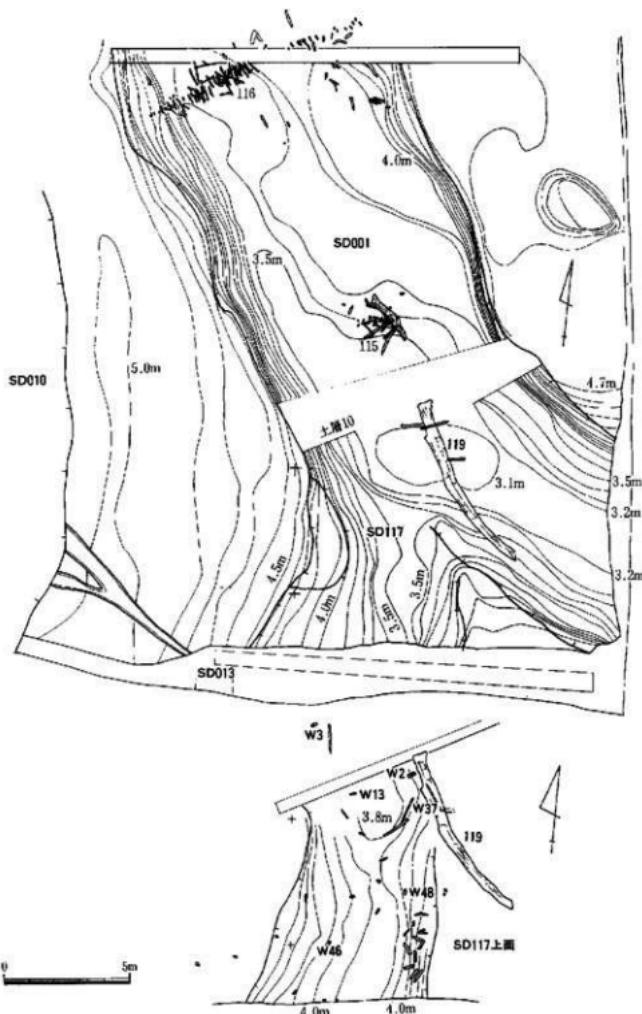


Fig.36 II区SD001-4実測図(1/200)

Tab3 II区SD001各層上面レベル(標高)河川中央部で計測()内は各土層名

	土層1	土層2	土層3	土層4	土層5	土層6	土層8	土層9	土層10	土層11	土層12
7層	4.65(5)	4.6(1)	4.7(8)	-(3)	4.8(19)	4.8(6)	4.9(6a)	4.7(5)			4.7(23)
9層	4.3(7)	4.4(3)	4.3(15)	4.5(6)	4.55(23)	4.55(6c)	4.6(6c)	4.65(6)			4.35(25)
10層	-	-	-	4.1(16)	4.3(25)	4.4(7)	4.5(7)	4.65(7d)			
11層	3.9(9)	4.15(7)	4.0(16)	4.0(31)	4.1(31)	4.2(8)	4.0(8)	4.0(9)	3.75(5)	3.75(5?)	3.6(31)
川底	3.6	3.9	3.6	3.6	3.8	3.9	3.8	3.7	3.3	3.9	3.1

に近い。土層3では足跡状の踏み込みの中に粗砂がたまる。このことは、10層がこの部分にも溜まっていたことを示し、流されたかすき取られたと考えられる。

2区では中央や左岸よりに砂層10層が残る。この付近は北西への流れが北へ流れを変えるため流れの中心が左岸側へによる。10層は1区のように粗砂層1層ではなく、青灰色シルト、灰白色粗砂等が重なり合う。11層上面では多くの足跡を10層が残っている範囲で検出した。上層5ではより広い範囲で10層を確認した。上層6では10層が厚く11層に踏み込む足跡状の痕跡の他にも攪乱がある。床には粗砂を多く含む12層が発達する。また9層にあたる堆積が薄い。2区は流木もII区の中では多く、特にSX089の周辺では11層から木製品、土器等の遺物が集中して出土した。

3区付近は左岸の立ち上がりが判然としない。土層は2区と同様で、足跡も広がる。右岸には浅い分流状の落ちがあり、土層12のSD001部分にかけて、地山である14層のレベルが低く粘質シルトが堆積する。その右岸よりに土器が集中して出土し、土器溜まり088として取り上げた。またこのあたりでは土層7の14、17層、土層12の16層のように青灰色粘質シルトが14層の上に溜まるくぼみが見られる。

4区には杭列116、115が築かれる。また、SD001は土層10から南東と南へ分岐する。南東の流れの方が幅、深さともに大規模で本流と考えられる。南からの流れをSD117とした。この分流部には長さ7.5m、径60cmほどの木(SX119)がSD001の左岸に沿って横たわり、これを固定するように打たれた杭が2本確認できた。土層12では川底の標高が3.1mと土層9から60cm低い。また10層が顕著に見られる。4区では長さ2mほどの杭が数本出土した。

表3に各土層の上面レベルを上層毎に示した。層の対応に不確定な部分もある。11層については1区からほぼ水平堆積を示すが、上層は上流ほど高い。層の対応が不十分な可能性もある。

SX090

2区の左岸落ち際2層に刻目突帯文土器の土器が単体で横倒しにつぶれた状態で出土した。底部のみ欠けている。

SX088（上器溜まり）

3区の右岸の浅い分流状の落ちに土器が集中して出土し、土器溜まり088として取り上げた。完形の土器がつぶれた状態のものや破片が広がり、特に広がりの中央部分に集中する。炭も多く集中部分も見られた。7層に対応する土層7の5、6層が遺物包含層にあたる。088から上層12にかけては、7層に対応する層が薄く途切れながら左岸に広がり、088はその一部にあたる。

SX089

2区の左岸近くの川底直上で石斧の柄の木製品、鋤、素材木片が集まった状態で出土した。2区はこの他にも流木、木製品が集中する。

SX115（杭列）

杭列116の10m上流の河川中央に杭列が打たれ岸までは続かない。この部分には様々な方向に流木

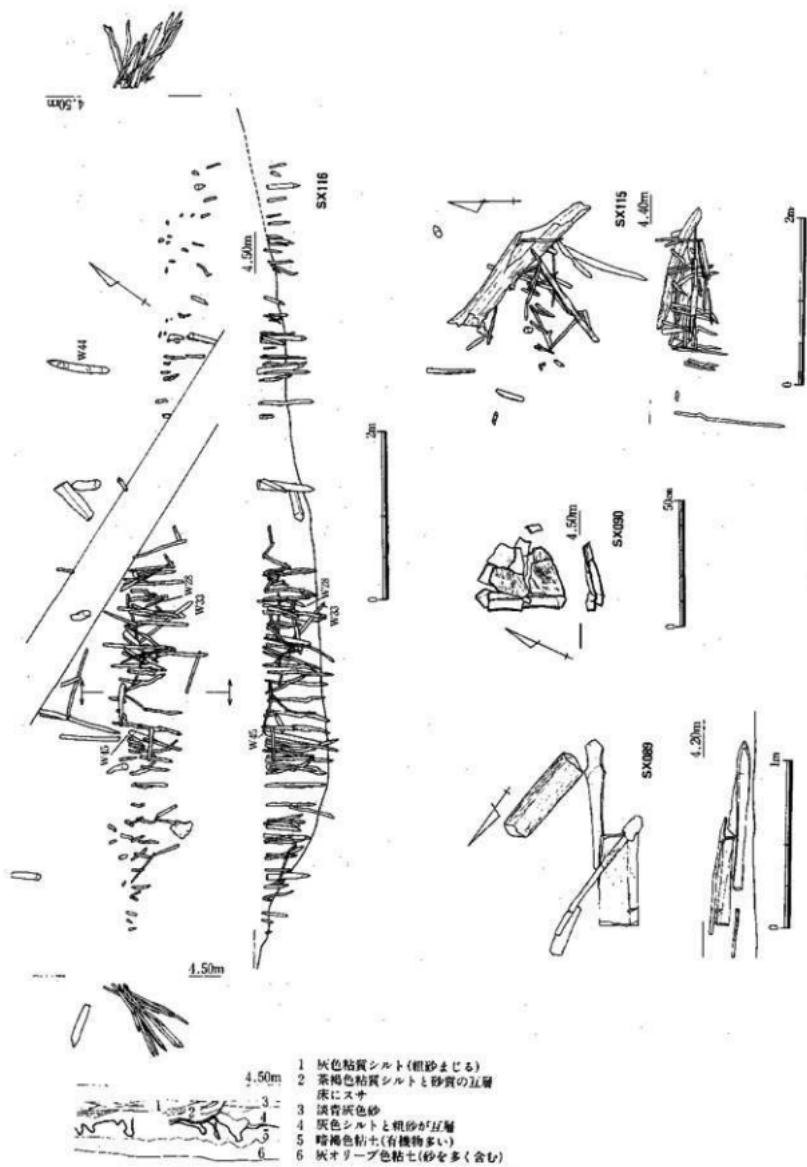


Fig. 37 SX089, 090, 115, 116実測図(1/60, 30, 20)

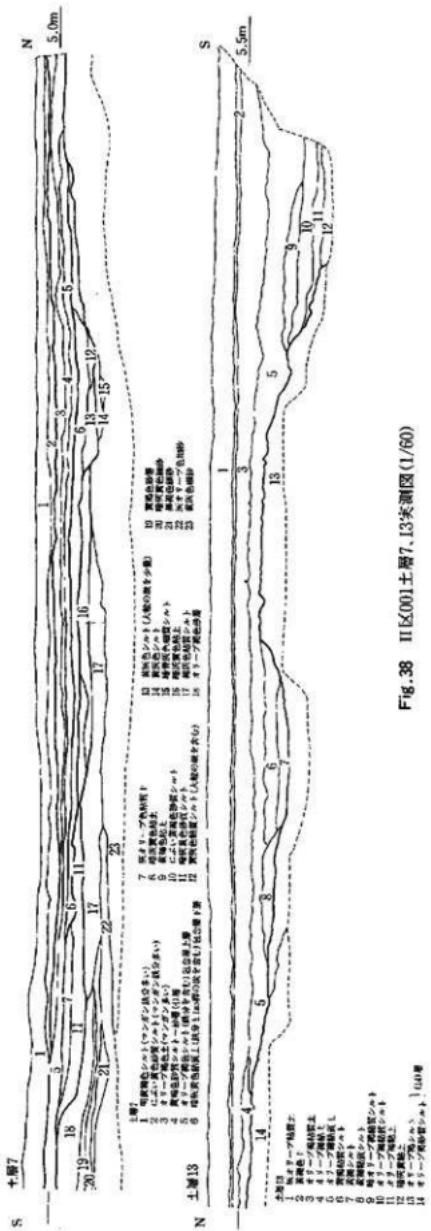


Fig.38 II区001土層7、I3実測図(1/60)

が集まり、横木をかました状態とも考えられる。杭は径4から5cmの丸杭で下流に頭を傾けて 詳細な構築時期は不明である。
11層に打ち込まれ、1本を除いて川底の14層に達していない。

S X116 (杭列)

4区に築かれた杭列でSD001を横断する。幅9.5mにわたって杭を検出した。杭は径4から5cmの細い杭を使う。ほぼ60°の傾きで打ち込むものと30から20°の浅い角度で打ち込むものがある。浅い杭は川が深い中央部のみに見られる。また、中央部は多く杭をもうけ、杭も深くまで打ち込まれている。岸の部分になると打ち込みが浅い。杭の前後にはFig. 37の土層図のように掘込んだ痕跡がある。これは土層3にも6層として現れる。この掘込みはちょうど杭列116の部分にあたり、構築時もしくは改修時のものと考えられる。杭列の前面には掘込みの床部分にスサが敷かれたように広がる。ただし確認できたのは十層観察用ペルトを残していた一部のみである。また、土層9の9層、Fig. 36の5層に杭の跡の痕跡と考えられる土の乱れがある。杭列の50cmから2m下流には径10cmの太めの杭が下流側に向かって1から2mおきに打たれる。構築時期は、土層9の6層の掘込みが116の構築時の掘込みとすると、土層9の7d層が埋まつた後で5層が形成される前になる。

用途は I 区の SX004 に近いと考えられる。水位を上げたとすると流れる先として右岸の調査区南端に幅 8 から 15cm の溝があるが SX116 と関連があるか特定できない。

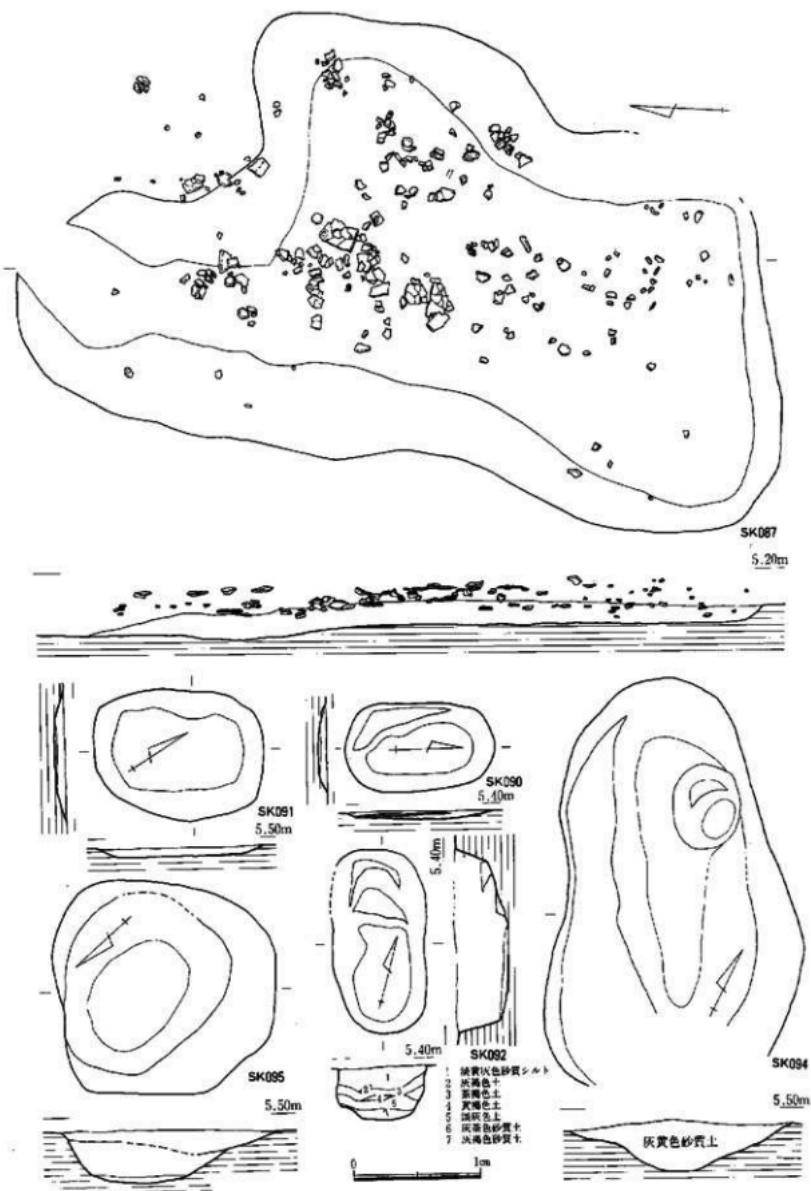


Fig.39 第4面II区上坑実測図(1/40)

SD117

土層11の1層とそれ以下の11層までの下層とに分かれる。上層段階と考えられる杭が直に散在する。遺物は刻目突帯文土器と、諸手鏡が出土した。SD017はⅢ区の西半に見られⅣ区までは広がらない。

(2) SD001左岸の遺構 (Fig. 39)

SX082

第2面の項でもふれたが弥生前期の土器溜まりの可能性がある。087のように完形に近いものではなく小片が多い。

SK087

不整方形の浅い土坑状の土器溜まりで、6.2m×3.4m厚さ40cmの範囲に床面から浮いた状態で多数の土器、黒曜石が出土した。淡黄茶色シルトを覆土とする。床面にピット等は検出できなかった。土器は完形品がつぶれたものもあり、一括性が高いと考えられる。

SK090

楕円形の土坑で平面120×60cm、深さ8cmを測る。灰褐色シルトを覆土とする。

SK091

楕円形の土坑で平面136×104cm、深さ8cmを測る。

SK092

楕円形の土坑で平面150×75cm、深さ44cmを測る。刻目突帯文期の甕と壺が出上したが磨耗している。

SK095

径190cm、深さ42cmの不整円形の土坑である。刻目突帯文の甕、浅鉢が出土した。

SK094

楕円形の土坑で370cm以上×200cmを測る。刻目突帯文期と考えられる甕の破片が出土している。

SD101

SD001に平行して走る幅30cm、深さ5から10cmほどの溝である。7層に近いシルトを覆土とする。刻目突帯文期の遺物が出土している。この溝を含めてSD001の左岸の肩に浅いくぼみがある。はっきり遺構とは言い切れない。遺物は同様の土器、黒曜石が出土している。

4) 出土遺物

第4面出土の遺物についてまとめて記述する。土器については各遺構、層毎に示すが、上製品、石器、木製品のほとんどがSD001からの出土であるため器種毎に報告する。

(1) 土器

SD001 (Fig. 45から52)

7層以下のSD001より刻目突帯文期の土器が板付系の土器を含まざり出土した。傾きも不明な小片等一部をのぞいて、口縁部片はほとんど図示した。本来であれば形、型式を提示した上で記述すべきだが、その余裕もないため従来の慣例的に使われていた呼称を用いる。つまり、黒川式から桃く深い土器を深鉢、刻目突帯文土器以降のものを甕とし、刻目突帯文土器で直口のものを1条甕、屈曲部を持つものを突帯、刻目の有無に関わらず2条甕とする。その他、突帯文系、板付系と型式名称を広い意味で用いた。

1から56は7層からの出土である。I区SD001の3区、II区では3区の東岸に多く出土した。

SX088も7層の一部だが別に報告する。深鉢は25のみ図示したが、他に口縁部に浅い刻目を持ち、黄灰色を呈するもの、刻目突帯文土器に突帯がないようなものが各1点ある。25は深鉢の屈曲部で条痕

の後、ヘラ状の工具でナデ焼きも固く半精製品である。1から24は甕で1条甕が多い。突帯は小ぶりのものが多く口唇部からやや下がるものと口唇部に接し被さるものがある。刻目はヘラ状の工具で右から左へ施す。10、11、12、17は口唇部からやや下がった位置に浅い突帯におそらく指頭による刻目を施す。調整は条痕をそのまま残すものはない。口縁部付近では右から左方向への砂粒の動きが見られるものが多く、削りとした。また内面はナデを施すものがほとんどである。色調は淡茶色系、灰色系、暗褐色系があり、明るい淡茶色系のものが目立つ。3は2条甕で深く細い刻目を左から右方向に施す。暗い茶褐色を呈し屈曲部から下は削り、上はナデ調整で仕上げる。内面は研磨状のヘラナデを施す。4は内外面をナデ調整で外面屈曲部より下に煤が付着する。2から2.5cm幅の粘土帯が観察できる。6は小型で屈曲部に刻目を施さない2条甕で、内外面とも削りが顯著に残り外面屈曲部より上は横ナデを施す。下部は2次焼成により赤変し、内面底は斑点状に器壁表面が剥げる。甕は小片で詳細は不明。内側に傾く頸部に口縁部が小さく曲がる。35から39、41から43は浅鉢で屈曲部から口縁部が長いものと39、41のように短いものがある。器面が粗ているものが多いが、研磨調整を施すと考えられる。44、45は楕円状の鉢で内外面に赤色顔料を施す。同一個体の可能性がある。46は直口の鉢でナデ調整を施す。47から51は甕の底部だが深鉢のものと区別できなかった。50は上げ底で炭化物が多く付着する。

57から103は9層出土である。57から63は深鉢で外面に煤が付く。これはやや傾き過ぎている可能性がある。調整は板状工具による削りで砂粒の動きが見られ、木目状の擦痕が残るものがある。また、口唇部は面取りし、平坦面を作る。深鉢といっても黒川式に見られる粗い貝殻条痕を施す人型のものとは異なる。57はやや内湾し削りの後ナデしており刻目突帯が付いてもおかしくない。64から80は甕である。2条甕は4例で内径気味の1条甕がやはり多い。刻目はヘラ状工具によるものが多いが64、65、72は指頭による。調整は削りとナデで仕上げ、外面に煤が付着するものがほとんどである。64は粗い胎土に内外面に条痕を施し器壁が厚い。深鉢に刻目突帯が付いた感がある。65は粗い条状の調整を施すがヘラ状の工具による削りである。67はわずかに屈曲し口縁が外に開く。突帯は厚く、刻目は浅く細い。外面頸部に煤が多く付着する。81から83は甕である。82は外面に黒色の光沢がある顔料状の付着物が見られる。赤色顔料も塗っている。外面は全面研磨、内面はナデで肩部に2枚貝条痕が残る。83では接合痕が観察でき、2.5cm幅の粘土帯の外輪接合の様子が確認できる。88から97は断面台形の底部で深鉢、甕のものが多いと考えられる。その中で96は外面に赤色顔料が塗られ火壺の可能性がある。98は晚期前半以前の混じり混みと考えられる。磨耗が激しい。99から103は鉢、甕の底部で区別つけがたい。102は内面に刷毛目状の擦痕が見られる。99、101、103は黒色磨研土器である。

104から137は10層の出土である。10層は粗砂層ということもあって遺物の量は少ない。104から106は深鉢としたが器壁は薄い。104は外面全面に煤が付着する。両者とも外見は黒い。106から113は甕で小片のみである。突帯はすべて口唇部よりやや下がった位置にあり刻目は幅広のものと狭く鋭いものがほぼ同数ある。107、109は内面に貝殻条痕を施すが他は削りかナデである。器面はどれも暗い。114から119は甕で、内外面とも研磨を施し赤色顔料を塗る。117は外面は黒色磨研で光沢があり、内面胸部には2枚貝条痕が残る。119は薄く赤色顔料があるようにも見えるが不明。内面に黒色の光沢が残る。120から126、128は浅鉢で黒色で研磨調整を施す。128は方形の浅鉢で器面が粗れ不明瞭だが外面に削り痕が見られる。127は器壁が薄い楕円状の鉢で外面に沈線を施し赤色顔料を貼付する。129は浅鉢の体部状の鉢で研磨調整で内外面に赤色顔料を施す。130から134は大ぶりの台形底。135から137は甕の底部で、135は台形底、136、137は丸底でわずかに赤色顔料が見られる。134にはわずかに木葉痕が残る。

138から329は11層出土の土器でSD001では数が多い。138から177は1条縫である。口縁部付近でやや内湾気味におさまるものと直線的なものがある。142は膨らんだ胴部にわずかに外反する口縁部を持ち特異な形態である。外面削り調整で炭化物が厚く付着する。突縫は口唇部よりやや下がった位置のものが多い。刻目は138、139、140、142、150、165は幅広の指頭刻み状で、他はヘラ状工具により鋭く刻むものが主体をしめる。小ぶりのものも多い。176は突縫を貼付せず口唇部に小さな刻目を施す。ヘラ状の刻目は下から上へ施したもののがほとんどをしめる。調整は削りとナデが主体だが、条痕が残るものも全体の数が多いためか目立つ。外面に煤が付着するもの多く、同時に器面も暗い発色である。138は外面に炭化物が厚く付着し、内面下半にも炭化物が付着する。177は突縫、刻目とともに大ぶりで器壁も厚い。180から200は2状態である。刻目はやはりヘラ状工具によるものが多いが、爪状、棒状工具によるもの、2枚貝によるものがある。187、194は厚く大きな突縫に深く細い刻目を施す。調整は180を除いて条痕を残すものではなく、擦痕を仕上げとしたものが多い。器面の色調は1/3が灰色、淡橙色の明るく淡いものである。180はSX090として先に出土状況を示した土器である。底部を除いて完形に復元できた。口縁部の突縫は小さく、強いナデの造り出しと刻目により突縫状になる。内外面の胴部に深い2枚貝条痕を残すが、屈曲部直下の一部を削りで、底部近くをナデにより条痕をけす。内面は底部近く1/4ほどをナデ消し丁度この部分に炭化物が薄く付着する。屈曲部より上は擦痕が残る。外面は上半部に全面的に厚く炭化物が付着し、下部は破面から1、2cmに煤が薄く付着するのみで器面が現れる。181は先の割れた施文具で刻目を施す。外面は削りの後のナデにより平滑である。182から184は屈曲部に突縫を施さず屈曲も緩やかである。182は2枚貝の腹縁の刺突で刻目を付ける。器面は暗く胎土が粗い。183は指頭状の刻目を施し、ナデにより平滑に仕上げる。やや赤い発色である。201から211は深鉢とした。直口のものと内湾するものがある。調整はナデ、擦痕で終わるものが多く、黒色系の暗いものが多い。201はII縫部の内湾が強く口縫帶状を呈す。削り後にナデで仕上げ半精製品である。色調は淡黄褐色である。212から237は壺である。横広の球形の胴部に口縫部がそぼまるものと広いものがある。ほとんどの器体に赤色顔料が施される。調整は外面を横方向の研磨、内面はナデや削りを施す。頸部と肩部の境は緩やかに屈曲し、218、219、220、229には浅く不明瞭な沈線を施す。217は深い研磨調整を施し内面に指押さえが顯著である。220は明るい赤色を呈し光沢がある。229はやや大型の壺だが調整等は変わらない。238から270は浅鉢である。基本的には内外面に研磨調整を施し黒褐色を呈す。243、256は条痕で仕上げで、他に擦痕で仕上げるものもある。267、270は淡灰褐色を呈し黒色の浅鉢の中にあっては明るい。257と258は波状口縫で平面は方形を呈す。257は屈曲部より下は突起部がわずかに波状になるのを除いて通常の浅鉢と同じく円形である。器壁は厚い。口縫部の突起部と屈曲部には突縫を貼付し、細く小さな刻目を密に施す。口縫部の突起部以外は口縫部を直接刻む。内外面ともに黒色磨研であるが、表面が剥げている。258は屈曲部以下も波状で、器壁は257に比べ薄い。外面は削り調整で屈曲部より上で研磨を施す。黒色を呈すが外面は剥げる。271はミニチュアで黒色でナデ調整を施しや形は異なるものの浅鉢を模したものと考えられる。273から280は椀型の鉢で2点は黒色磨研、他は赤色顔料を塗るか明るい発色である。282は粗製の椀状の鉢で外面に削りを施す。283は2次焼成で器面が赤変する。黒色磨研上器と考えられるが立っており深くなる。284は高杯の脚と考えられるがやや外湾気味である。285から297は断面台形を呈す。286は底に、295は外面に赤色顔料が付着し壺と考えられる。298から301は脚で、301には透かしがあり4方に付くと考えられる。302と303は小ぶりで厚い底部で、303は精良な胎土を用いており鉢と思われる。304から307は上げ底である。310から329は浅鉢、もしくは壺の底部と考えられる。丸底以外では312、313、315、324のように赤色顔料が付くものは壺とした

が、判断が付け難い。ほとんどが浅鉢になると考えられる。

土器彫り SX088 (Fig. 53~59)

遺構の項で述べたように遺物が集中して出土した。完形に近いものも多い。330から345は深鉢である。内湾気味の口縁で外面は削り調整を残す。331には器面に気泡があり貫入状の表面の細かな亀裂がみられる。これ以外は突帯が付けば1条縫と変わらない。346から380は1条縫である。346, 347が削りおよび条痕で粗い器面を残す以外はほぼ削りまたはナデで仕上げを行っている。この2つは同一個体の可能性が高い。刻目はヘラ状の工具を下から上へ小さく刻むものと横方向に刻むものがある。351, 360, 362は爪状の、361は2枚貝、364は棒状の工具による。突帯は口唇部より下がった位置に貼付する。350は低い突帯を口唇部に接して貼付し、先の尖った工具で刺突して刻目を施す。378は器壁がごく薄く、細く浅い刻みを綾杉文状に施す。器壁は薄く径も小さくミニチュア品になると考えられる。382から400は2条縫である。382は屈曲部に刻目、突帯を施さず、観さはないが大きく屈曲する。器形としては通常の縫とは異なる。384も屈曲部に刻目がなく、外面に刷毛目状の調製痕が残る。383は口唇部に直接刻みを施す。401から407は浅鉢もしくは鉢である。403から407は方形の波状口縁の浅鉢である。粗れたものが多いが研磨を施す。408から420、422から424、446から448は壺である。全て外面研磨調製で赤色顔料を施す。420は最大径より上が直線的な肩部になると考えられる。418, 422は内面に刷毛目状の調製痕を残し、418の木口痕から幅4cmほどの工具と推定される。421, 425から445は浅鉢である。黒色磨研のものが多く、425, 429の様に条痕、擦痕を残すものもある。426, 433, 435, 440には赤色顔料を施す。426以外はごくわずかしか残っていない。449から453は橢型の鉢である。454は口唇部にしたが脚の可能性もある。455はミニチュア土器と考えられる。456から469は台形底を呈し467が壺の可能性があるが他は甕がほとんどと考えられる。470, 471は透かし入りの脚部で471は4面透かしと考えられる。他は478, 479がおそらく甕、480から483が浅鉢である。

SD010 (Fig. 60~63)

遺構の項で述べたとおりI区の南端部分で遺物が出土した。主体は刻目突帯文土器であるが甕、壺に板付系の上器が入りSD001より新しい様相を示す。口縁部でも図示できなかったものが多い。

484から498は1条縫である。突帯が全体に大きく高く、口唇部に接して貼付し、刻目を入れる前に口唇部と一緒にナデ、平坦面を作ることが立つ。この種の突帯には幅のある工具で太く深い刻みを施す。調製は外面に2枚貝条痕を残すものがほとんどで、器壁は黒いものが多い。SD001の縫とは明らかな違いがある。器形もあり内傾せず直線的である。499, 500, 502から506は2条縫で、1条縫の様な大ぶりの刻みを持つものはない。突帯は503, 504が大きい。501, 506は口唇部に小ぶりの刻目を直接施す。501も内傾する可能性がある。499の刻目はごく小さくわずかに痕跡が残るのみで、502は無刻みと考えられる。507から513は深鉢である。横方向の条痕の後にナデ、灰褐色を呈す。507は内外に段があり口縁帯状である。514から535は壺である。SD001に口縁部が外反するもの、口縁部を肥厚するものが加わる。ほとんどが外面に赤色顔料を施す。532は頭部外面を縦方向の強い研磨を施す。536, 540は板付系の甕である。細かな刷毛目と内面の指押さえが特徴的である。537から539、541から557は鉢である。537は条痕を残し深鉢の可能性がある。他は研磨や擦痕で平滑な器面である。赤色顔料を塗るものが多いが痕跡がわずかに残るのみのものが多く詳細は不明である。556, 557は流れ込みと考えられる。558から562は高坏で、561にわずかに赤色顔料が見られるが塗られていたかは判断できない。563から574は甕の底部である。575から581は甕、鉢の底部だが、575, 577のように粗製のものがある。582から594は縄文後期から晩期前半の土器で混じり込みである。582は北久根山式の鉢で波状口縁に刻目を施す。583は屈曲部に刺突穴点が並ぶ。585から591は晩期の浅鉢で、588

は黒川式のミニチュアである。

SX082

土器溜まりで下部から古墳時代の遺物が出土したがSX087との間に接合資料があり内容が近く、一連の土器溜まりの可能性がある。

595から610は甕である。602までのように小ぶりの突帯を口唇部よりやや下がった位置に付けるものと607までのように口唇部に被せるように厚く貼付し上面を強くナデるものがある。全体に黄褐色を呈す。608、609は如意形口縁の甕で609には口縁部の刻目はない。610は幅6cmの突起状の突帯を貼付する。外面は条痕で下部は削りを施す。621、622は高坏の脚で段は見られない。

SX087 (Fig. 64 ~66)

623から636は突帯文系の甕で口唇部に接して大きめの突帯を付し上端ナデて平坦面を作る。刻目は浅く斜め方向に施すものが多い。器壁は黄褐色系の淡く明るいものもあるが暗茶色系の暗いものが多い。627は口唇部上面のみ茶色で顔料または化粧土を施す。628は2条の突帯を付けるが屈曲せず、口縁部のみで1条か2条か判断できない。641から648は台形底で黄白色を呈し、底部端部は橙色がかる。649は刷毛目を施す。650から653は如意形口縁の板付系の甕である。650は外面に細かな刷毛目が顯著だが、651、652では丁寧なナデを施し、内面の指押さえを施す。651には焼成後の穿孔がある。655から665は壺である。661、662、663は胎土に赤色鉱物を多く含んでおり同一個体と考えられる。薄い器壁に研磨調製を施し肩部と頸部に平行線の間に山形文を浅い沈線で施す。660は肩が下がり口縁部は広がる。外面から口縁部内面に横方向の研磨を施す。内外面とも明るい橙色を呈す。666と667は高坏である。同一個体か。研磨に近いヘラ状工具によるナデ調製し、外面は灰白色、内面黒色を呈す。668からの鉢は屈曲が弱く深い。

SK092, 095, 102, 105, 106

674から696がそれぞれの遺構から出土した。刻目突帯文土器のみで板付系の上器はない。688、683の様に刻目が口唇部にかぶり新しそうなものもあるが単純期にもあり得る。

(2) 土製品 (Fig. 68)

遺物量は少ない。1から5は土製円盤で円形に打ち欠く。すべて土器片を使用する。4は破面が磨耗する。6は紡車で砂粒を多く含む。7、8は管状土錘だが、いずれも表採で出土地不明である。7は手すくねで器面を平滑に仕上げるが8はムラが目立つ。7は扁平になる。9の土玉の孔には直線的な傷が残り、焼成前の穿孔痕と考えられる。



Fig.40 SD001-7、8層出土土器実測図1(1/3)

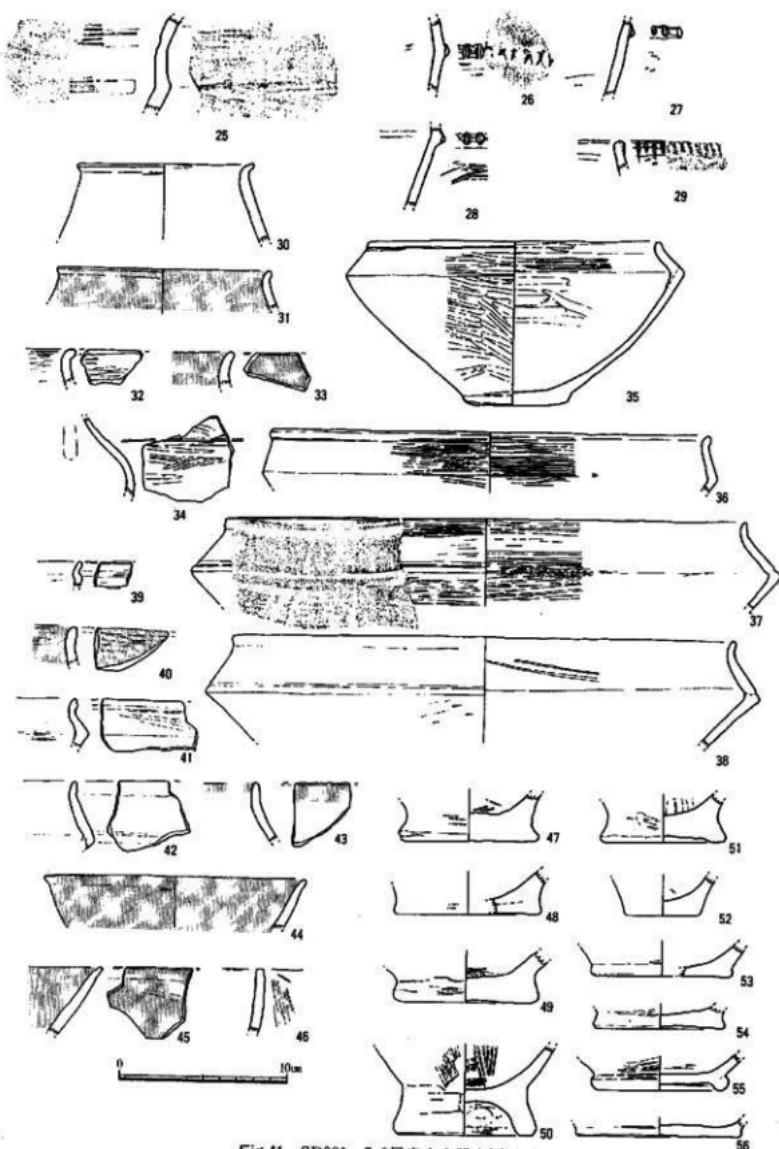


Fig.41 SD001-7,8層出土土器実測図2(1/3)

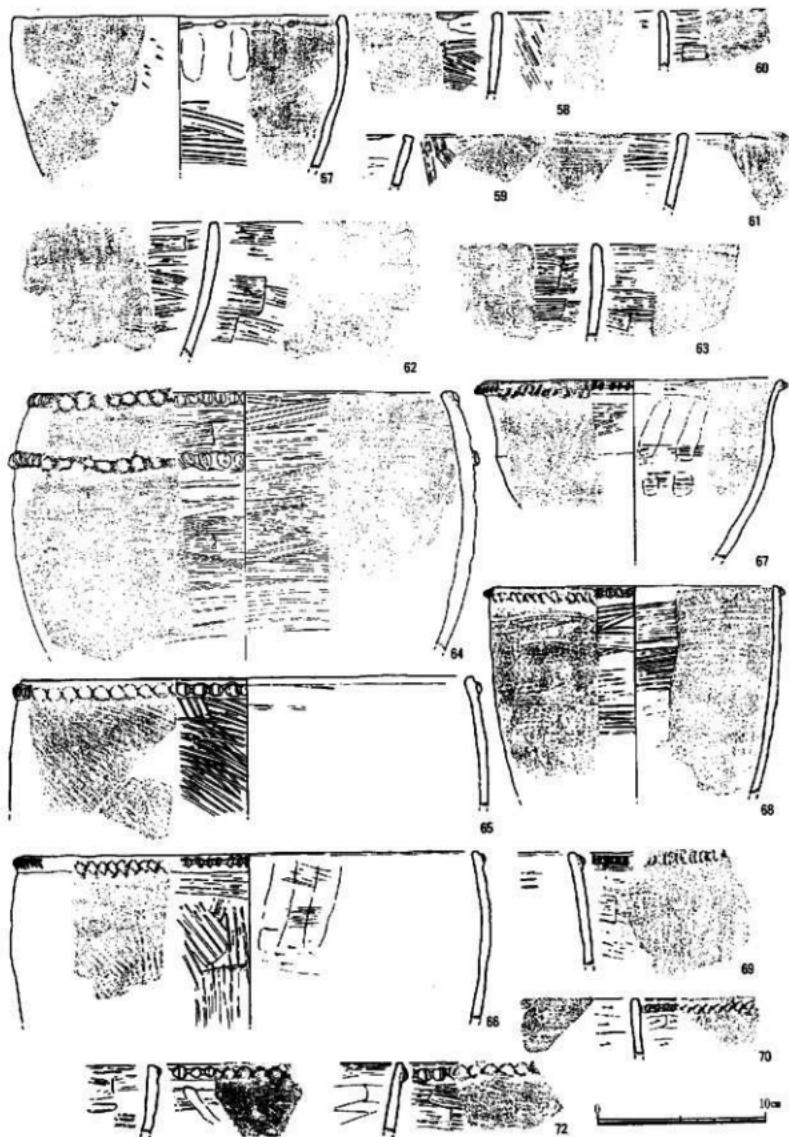


Fig.42 SD001-9層出土土器実測図1(1/3)

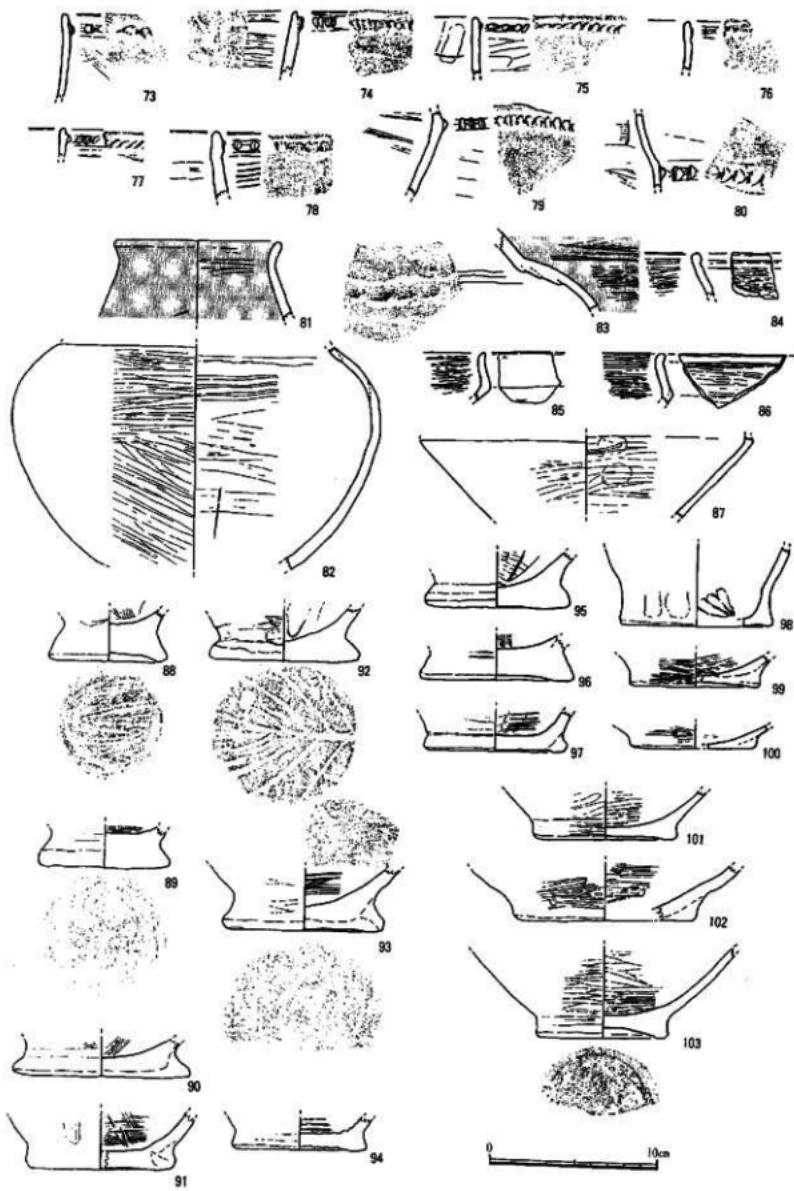


Fig.43 SD001-9層出土土器実測図2(1/3)

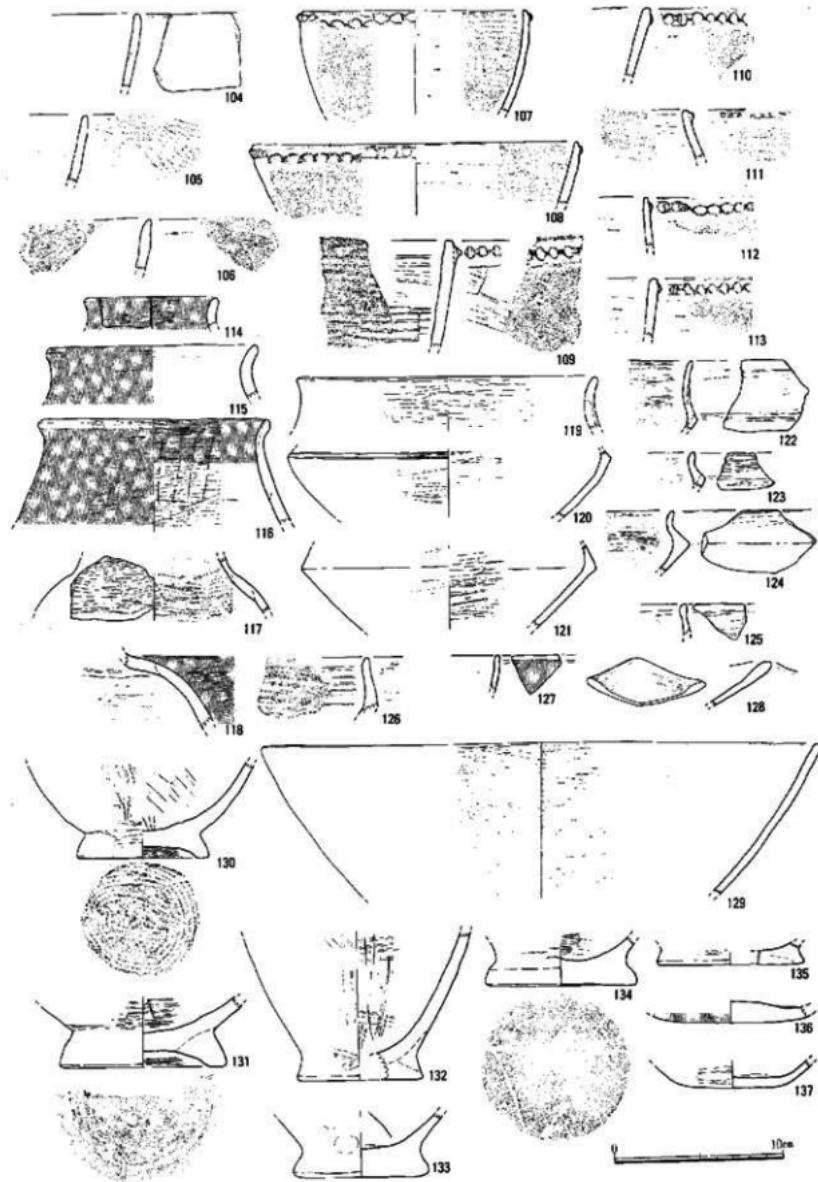


Fig.44 SD001-10層出土土器実測図(1/3)

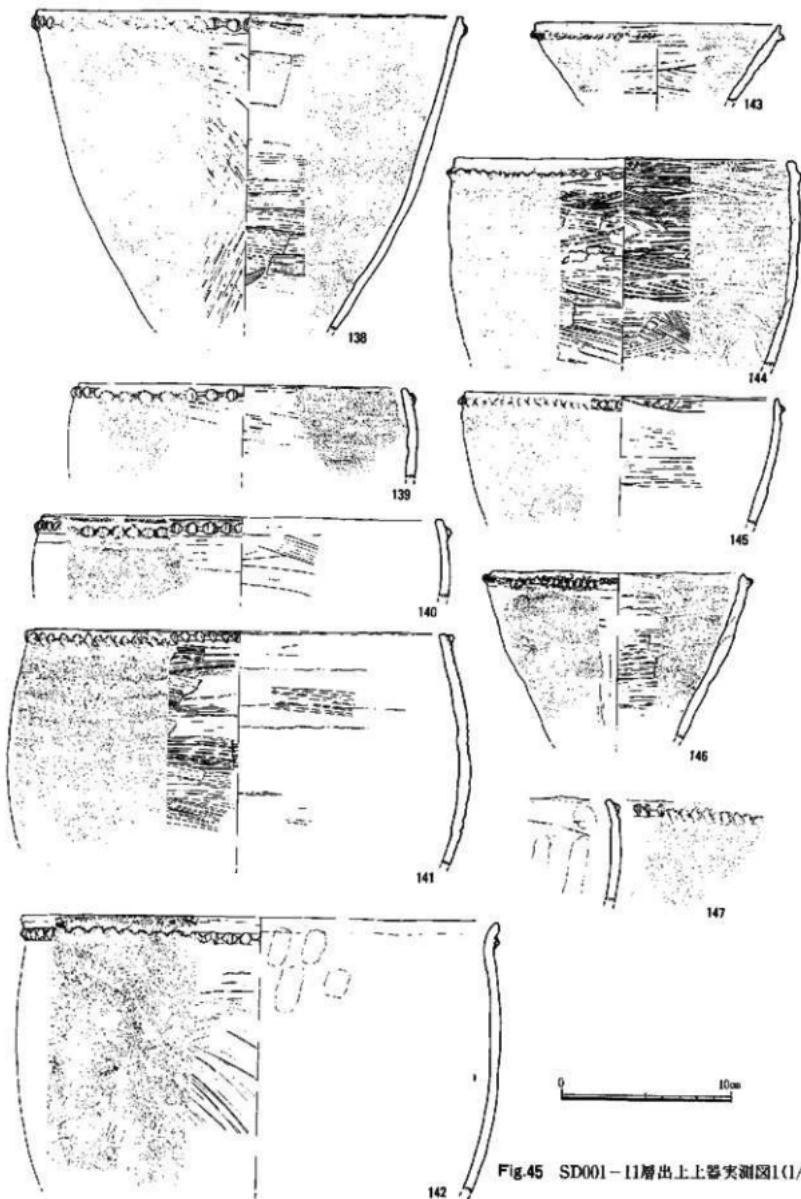


Fig.45 SD001-11層出上器実測図1(1/3)

142

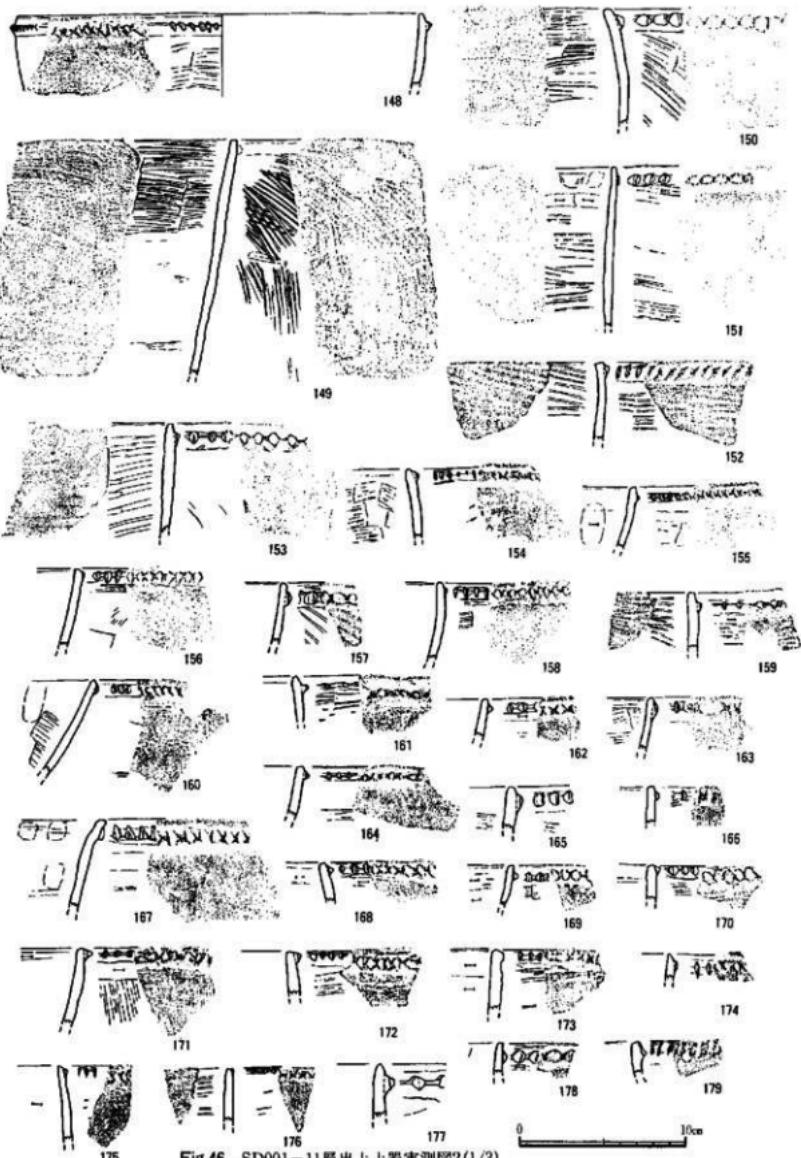
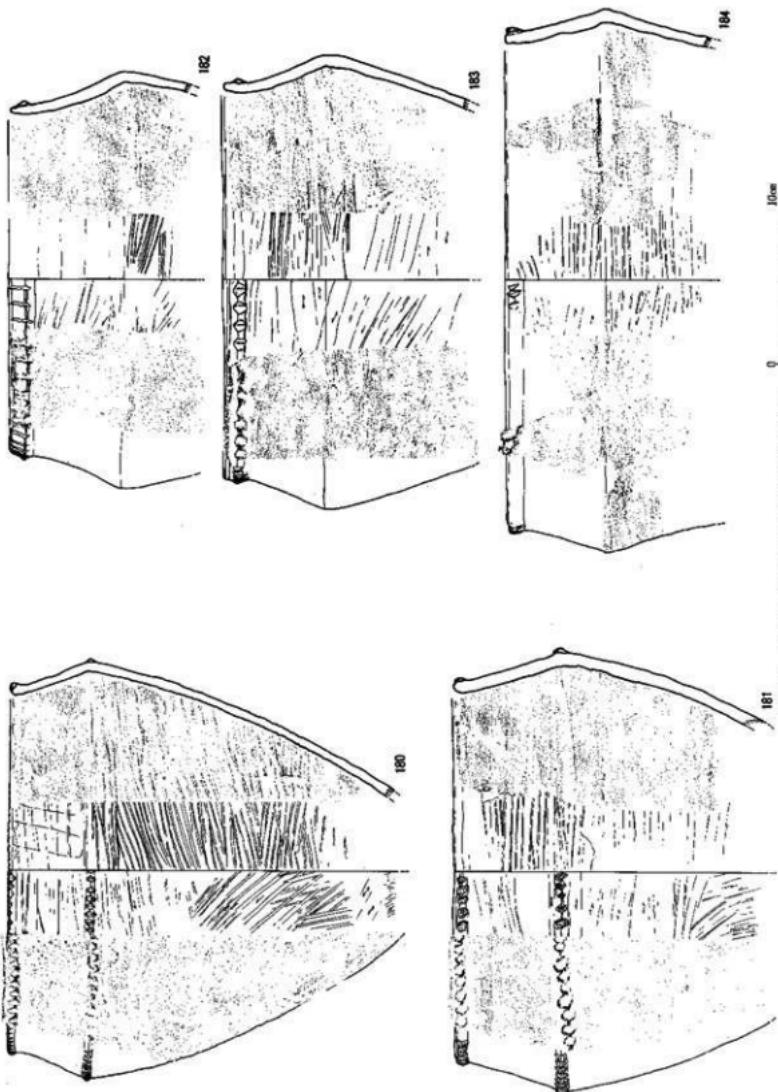


Fig.46 SD001-11層出土上器実測図(1/3)

10mm

Fig.47 SD001-11層出土土器実測図3(1/3)



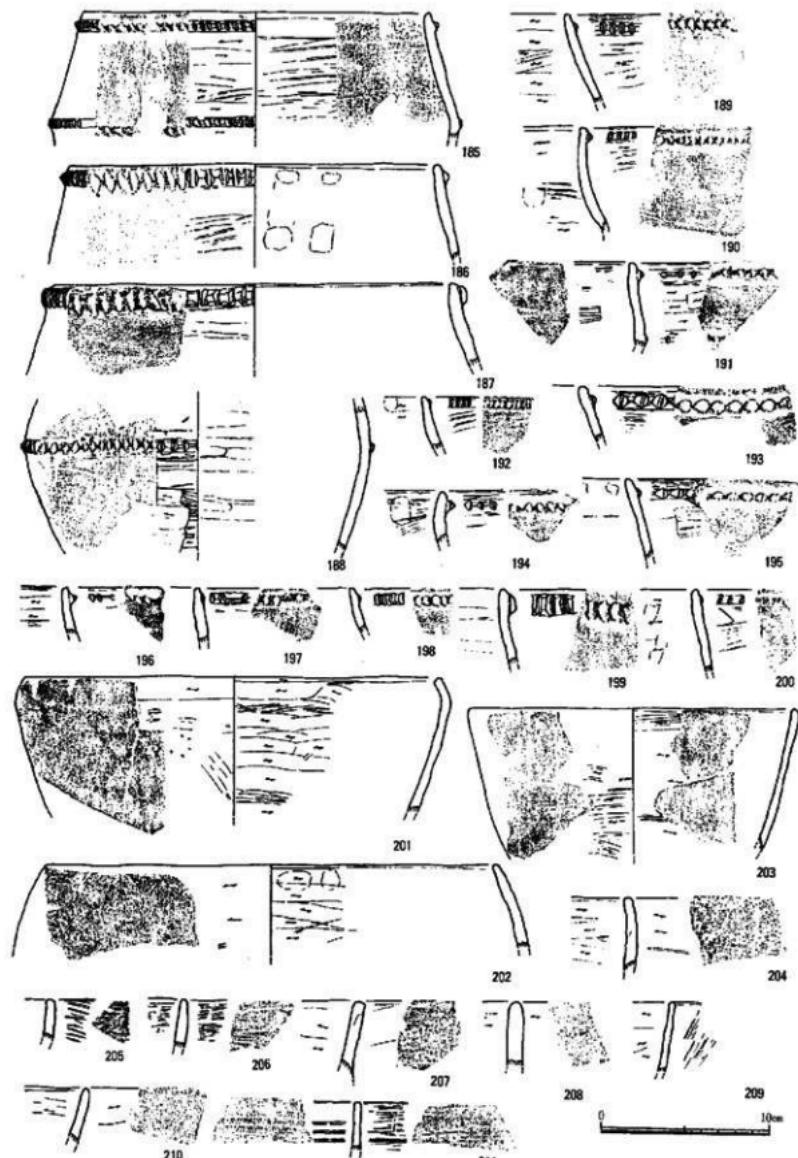


Fig.48 SD001-11层出土石器实物图4(1/3)

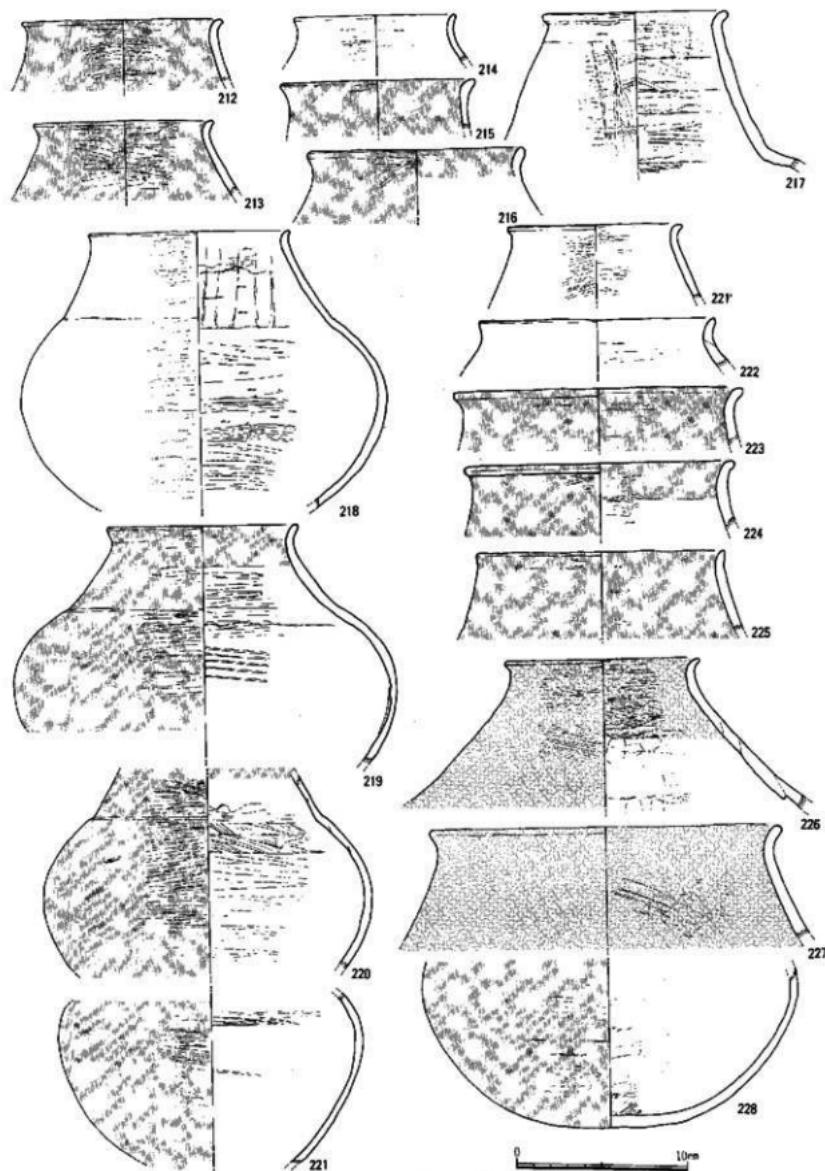


Fig.49 SD001-11層出土土器実測図5(1/3)

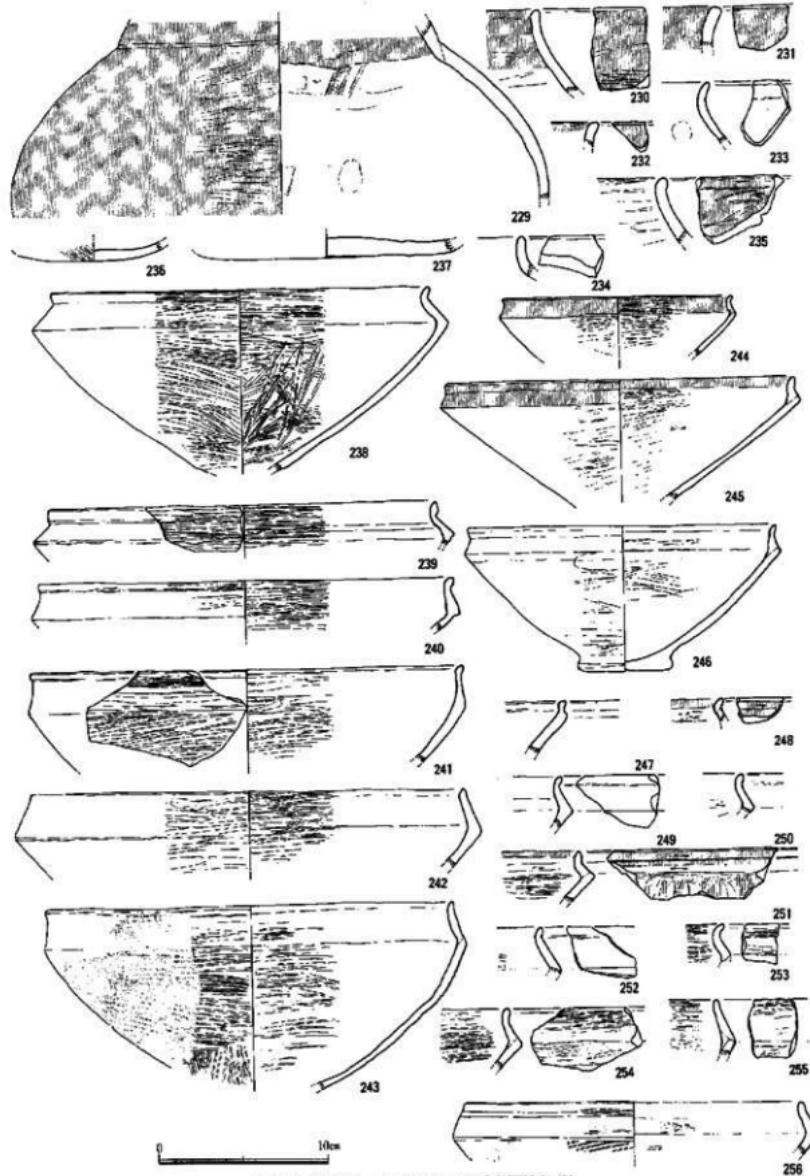


Fig.50 SD001-11層出土土器実測図6(1/3)

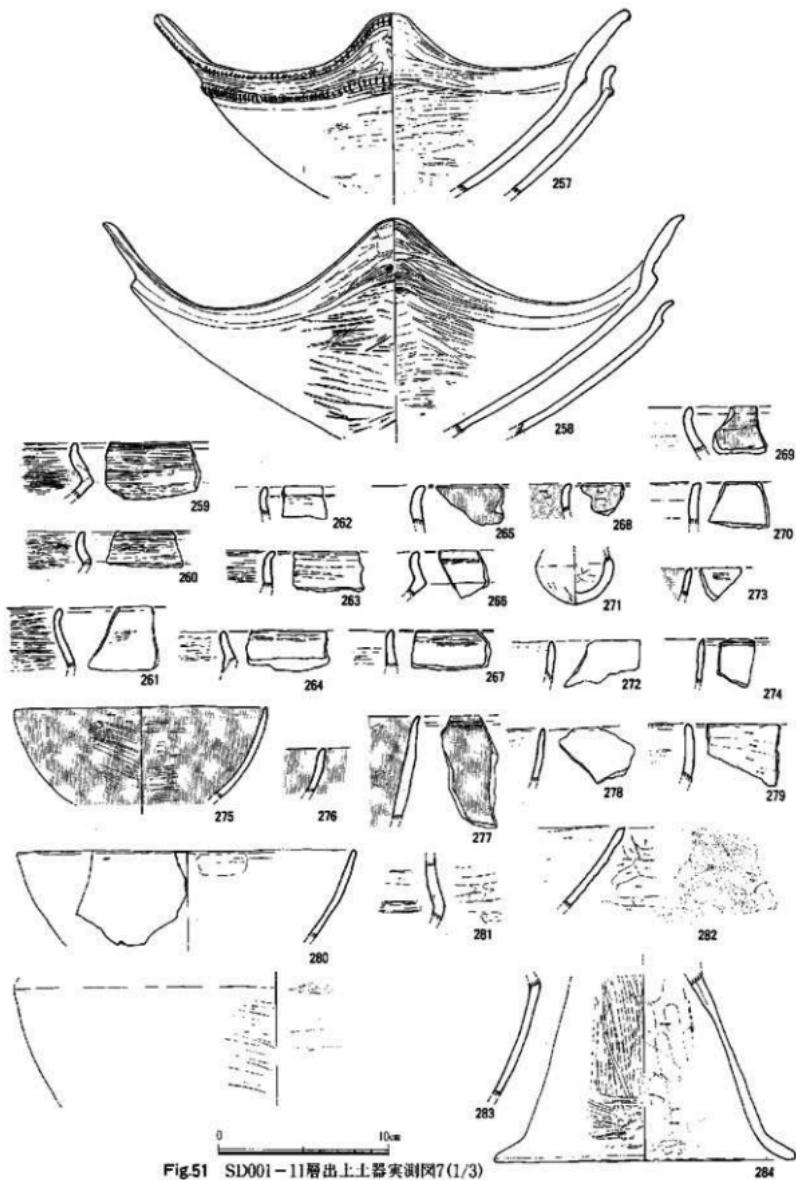


Fig.51 SD001-11層出土器実測図7(1/3)

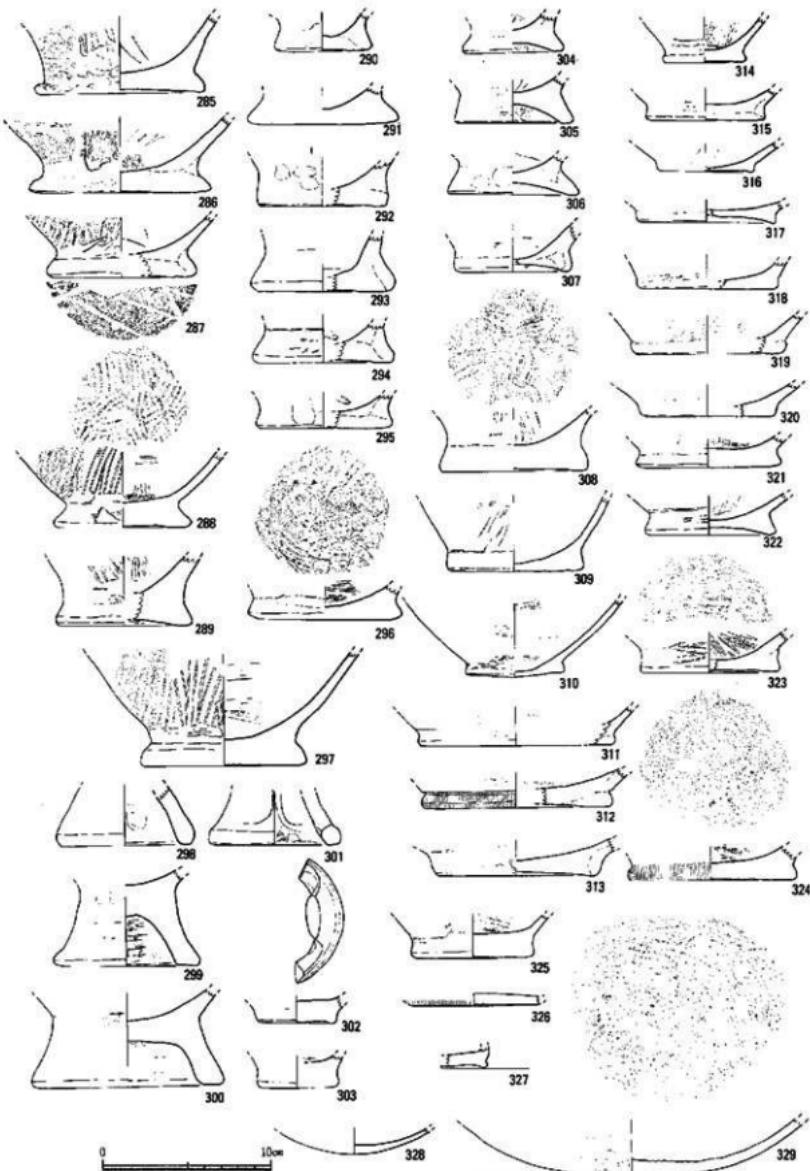


Fig.52 SD001-11層出土土器実測図8(1/3)

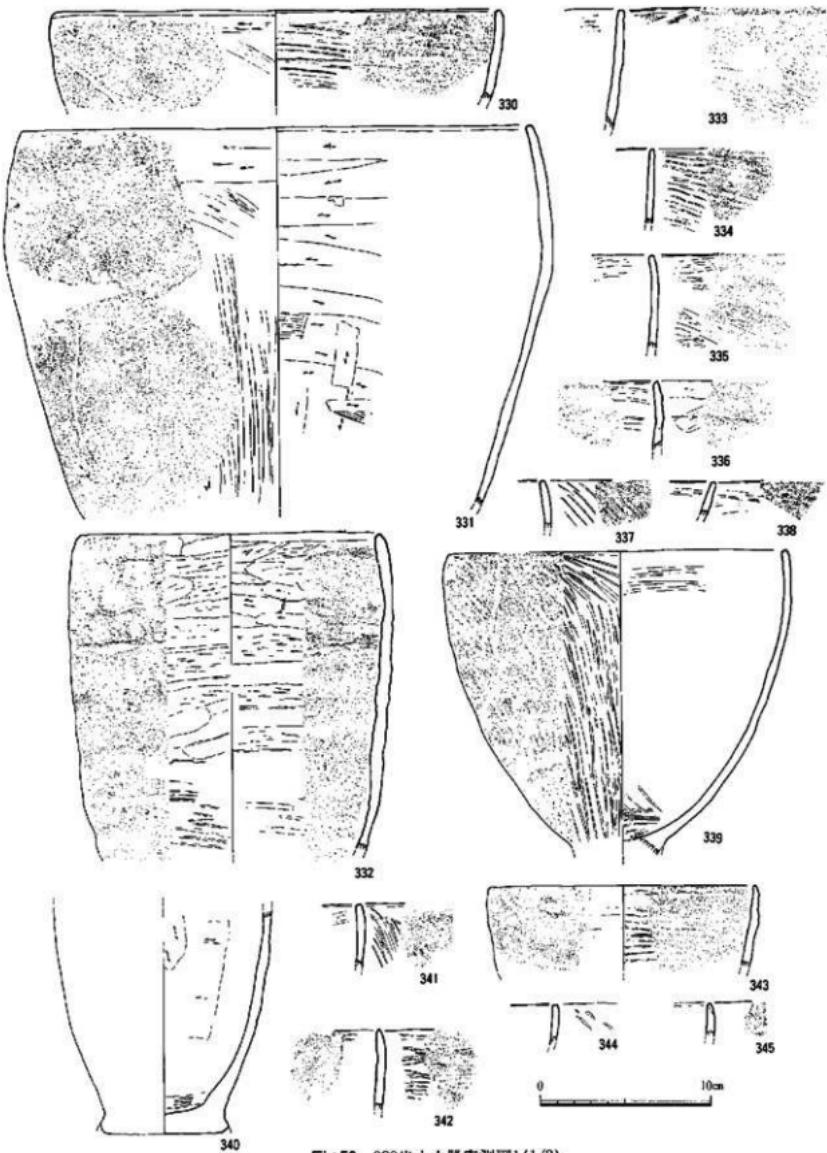


Fig.53 088出土土器実測図(1/3)

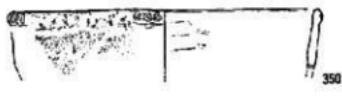
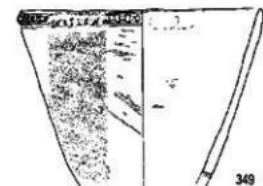
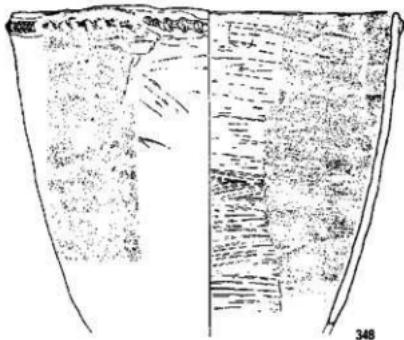
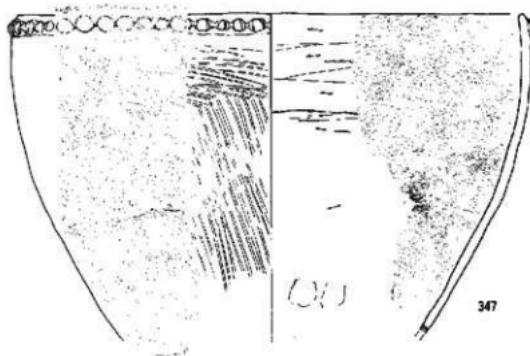
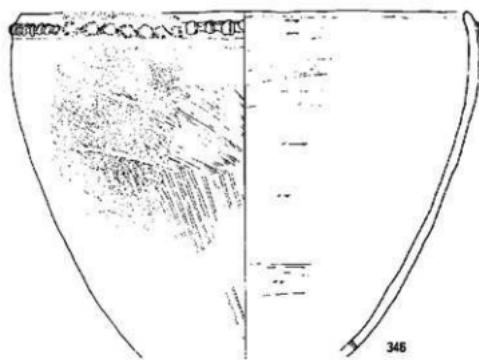


Fig.54 088出土土器実測図2(1/3)

0 10cm

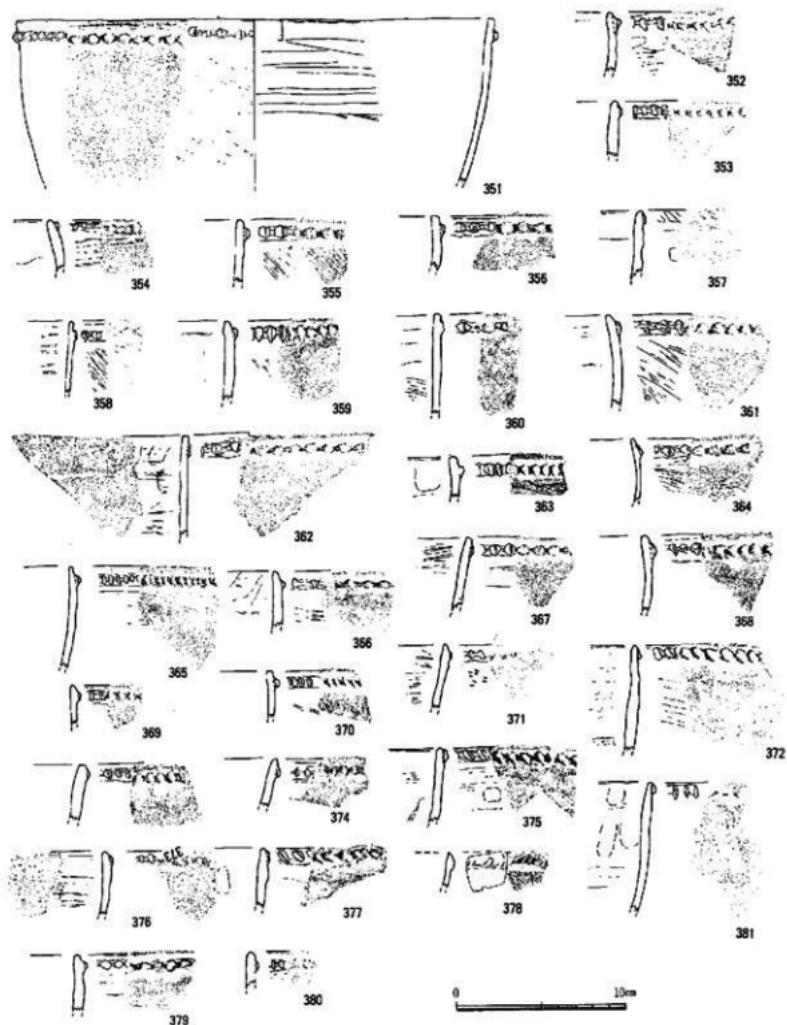


Fig.55 088出土器実測図3(1/3)

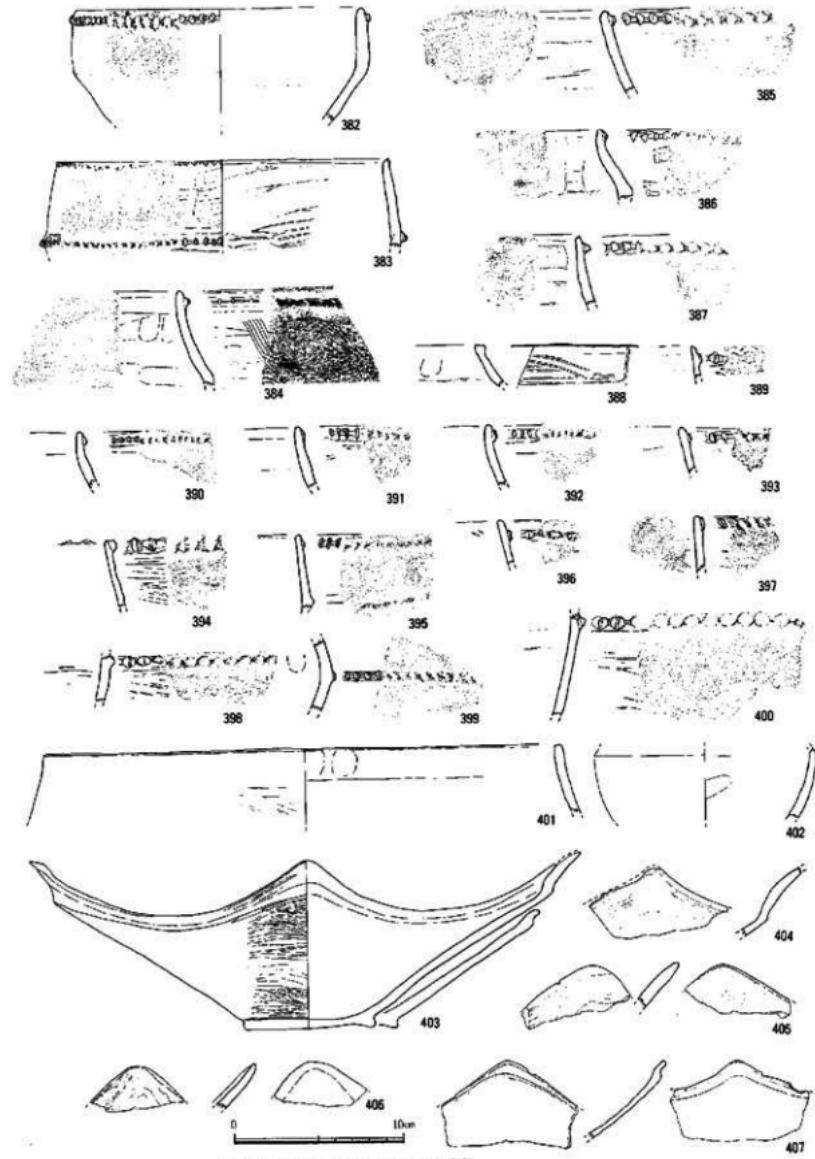


Fig.56 088出土器実測図4(1/3)

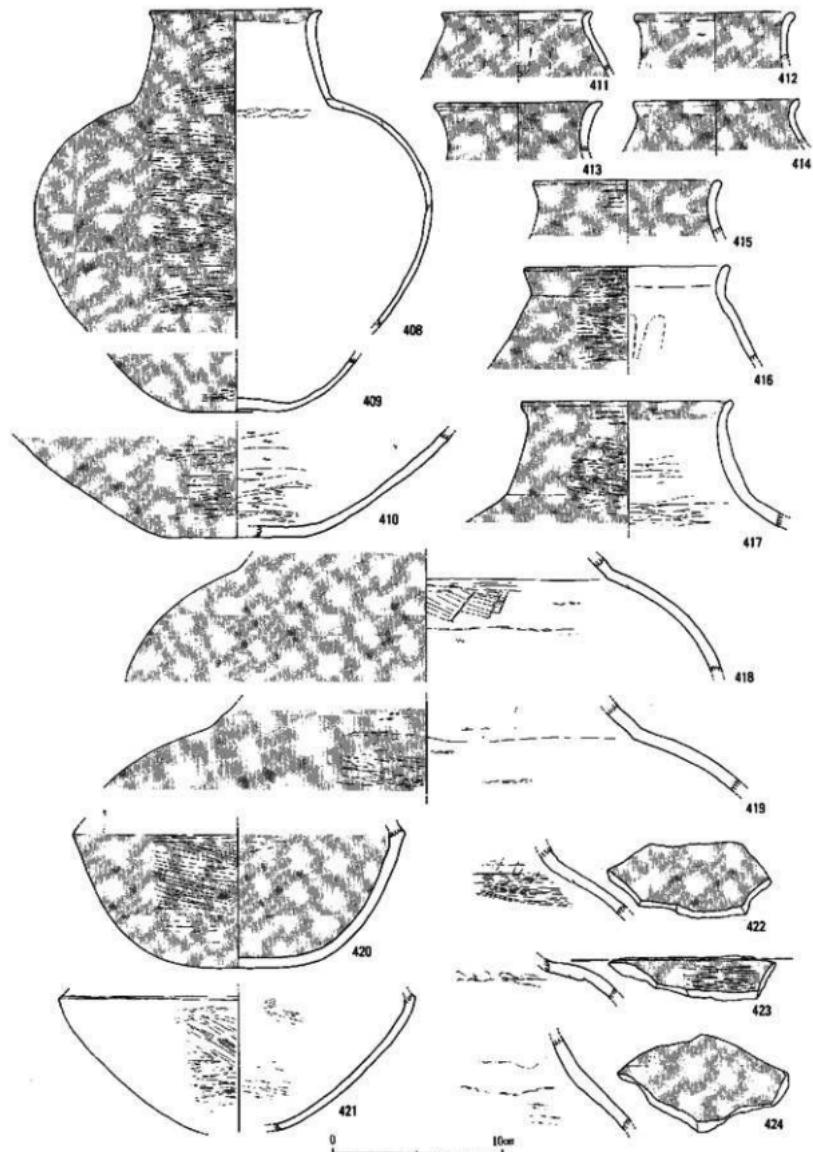


Fig.57 088出土土器実測図5(1/3)

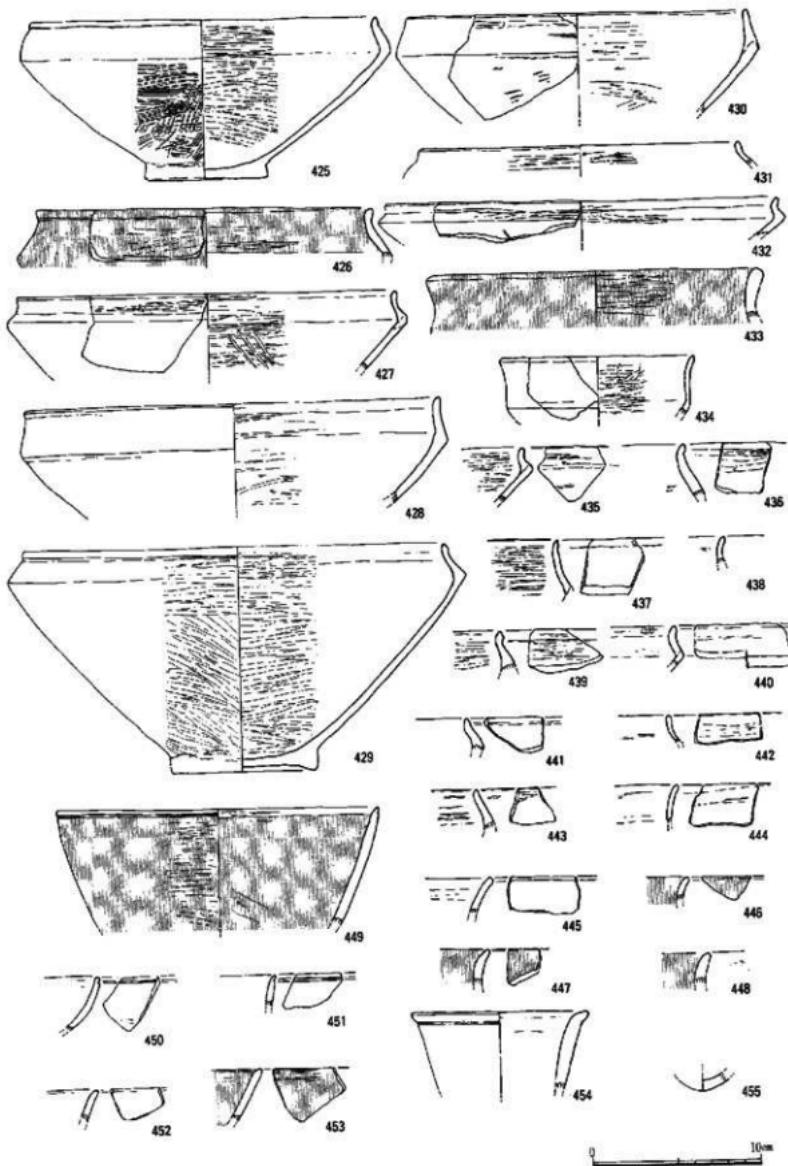


Fig.58 088出土土器実測図6(1/3)

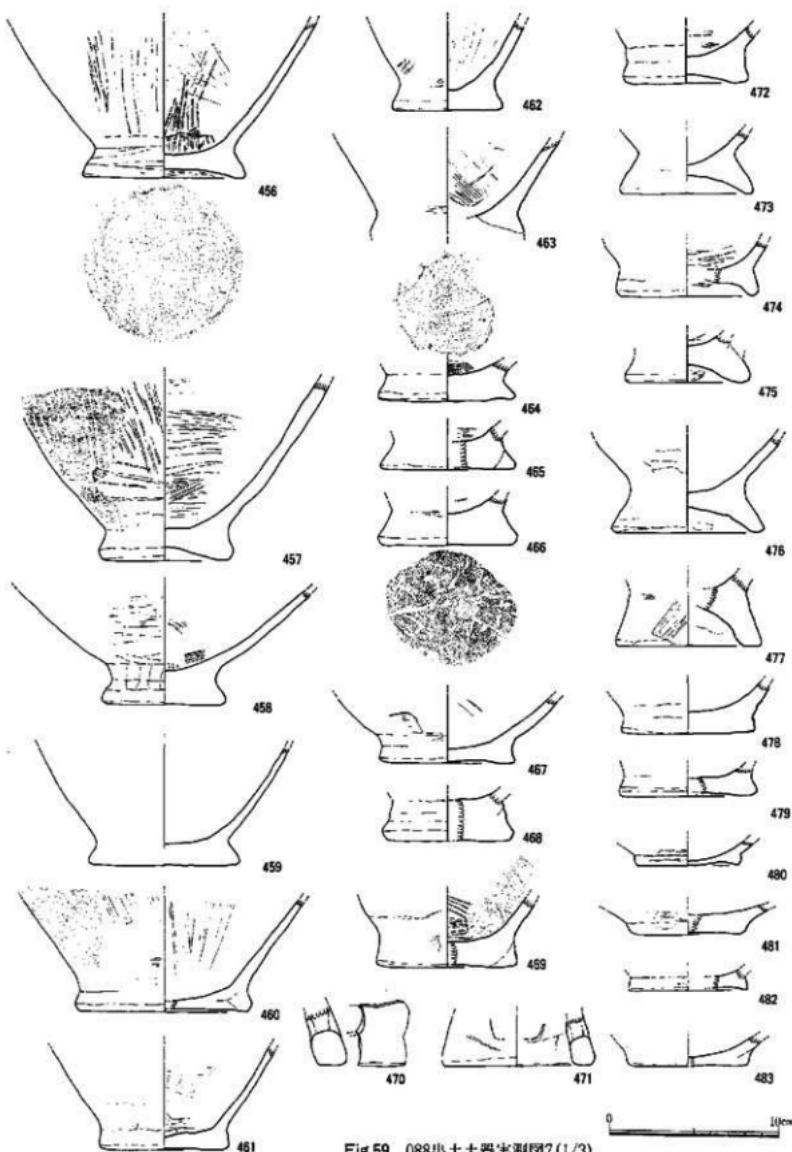


Fig.59 088出土土器実測図7(1/3)

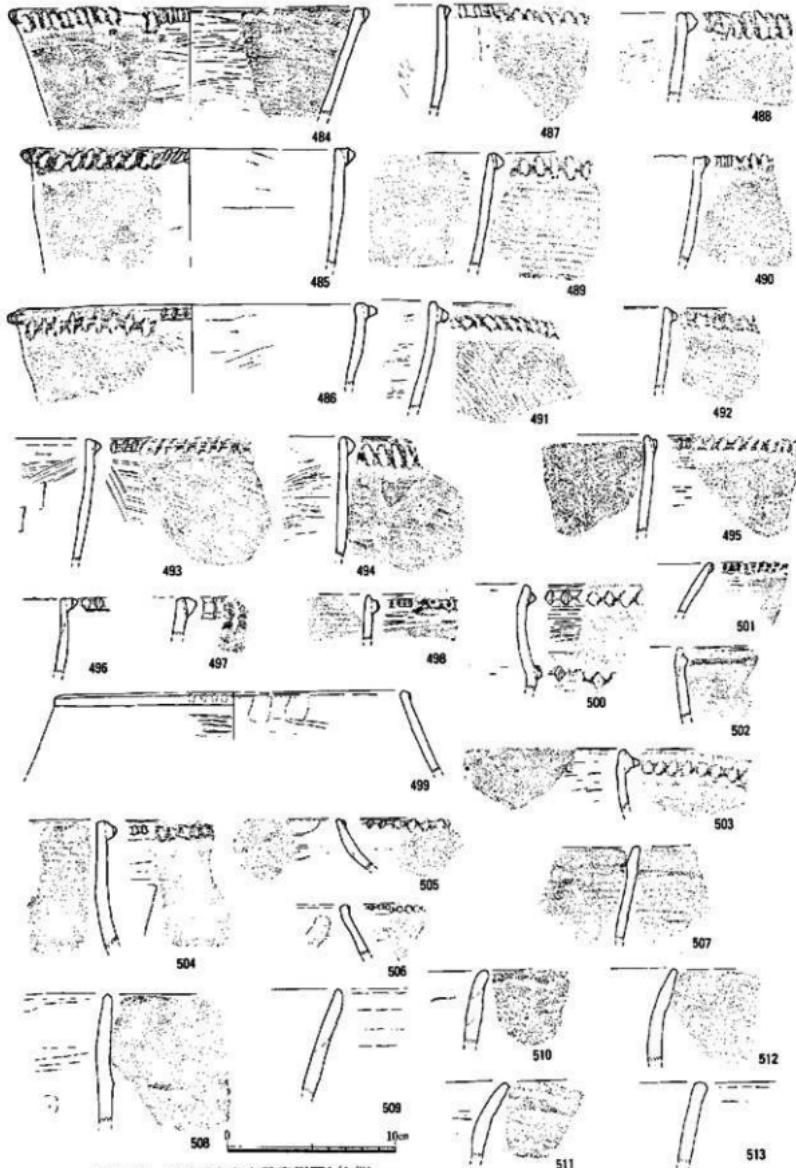


Fig. 60 SD010出土土器实测图1(1/3)

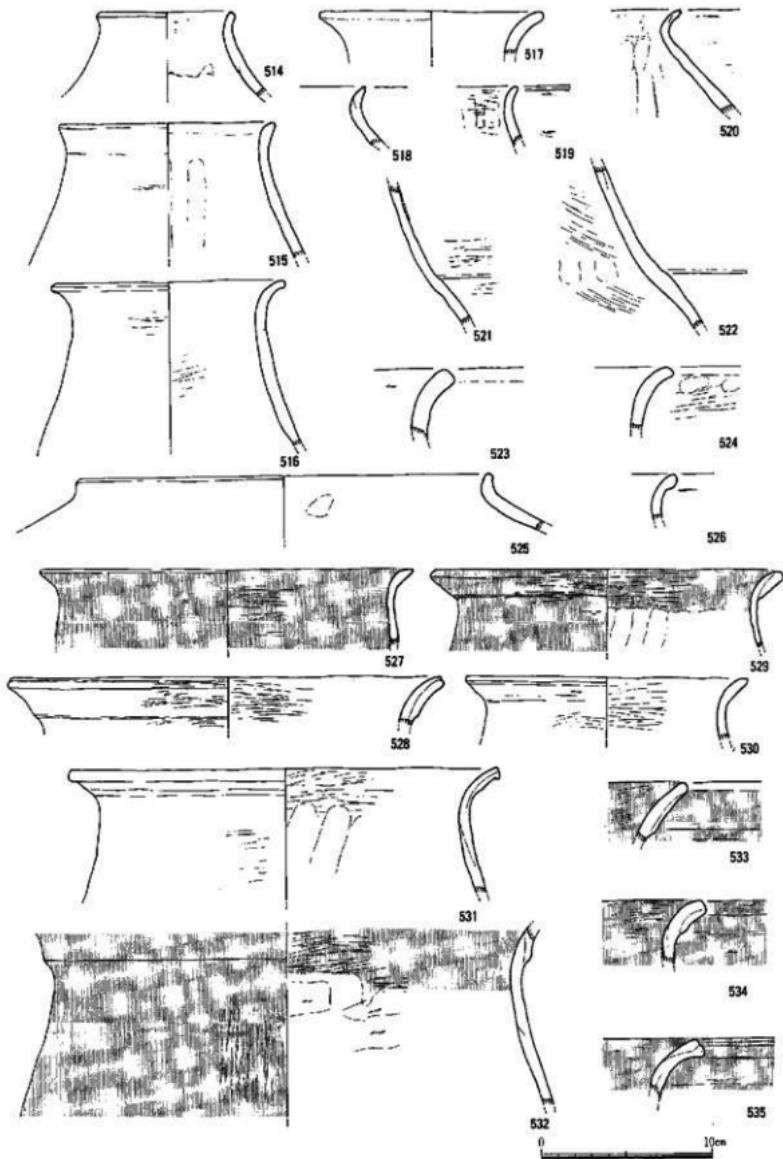


Fig.61 SD010出土土器実測図2(1/3)

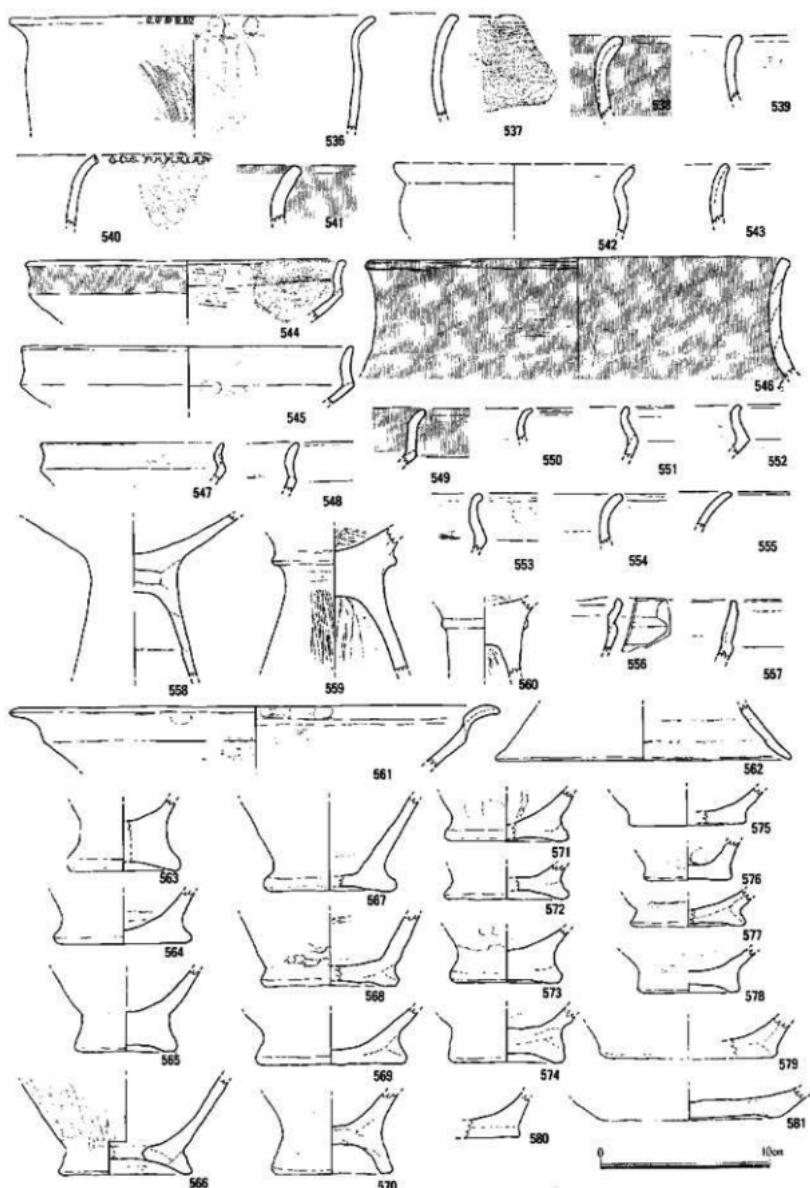


Fig. 62 SD010出土土器実測図3(1/3)

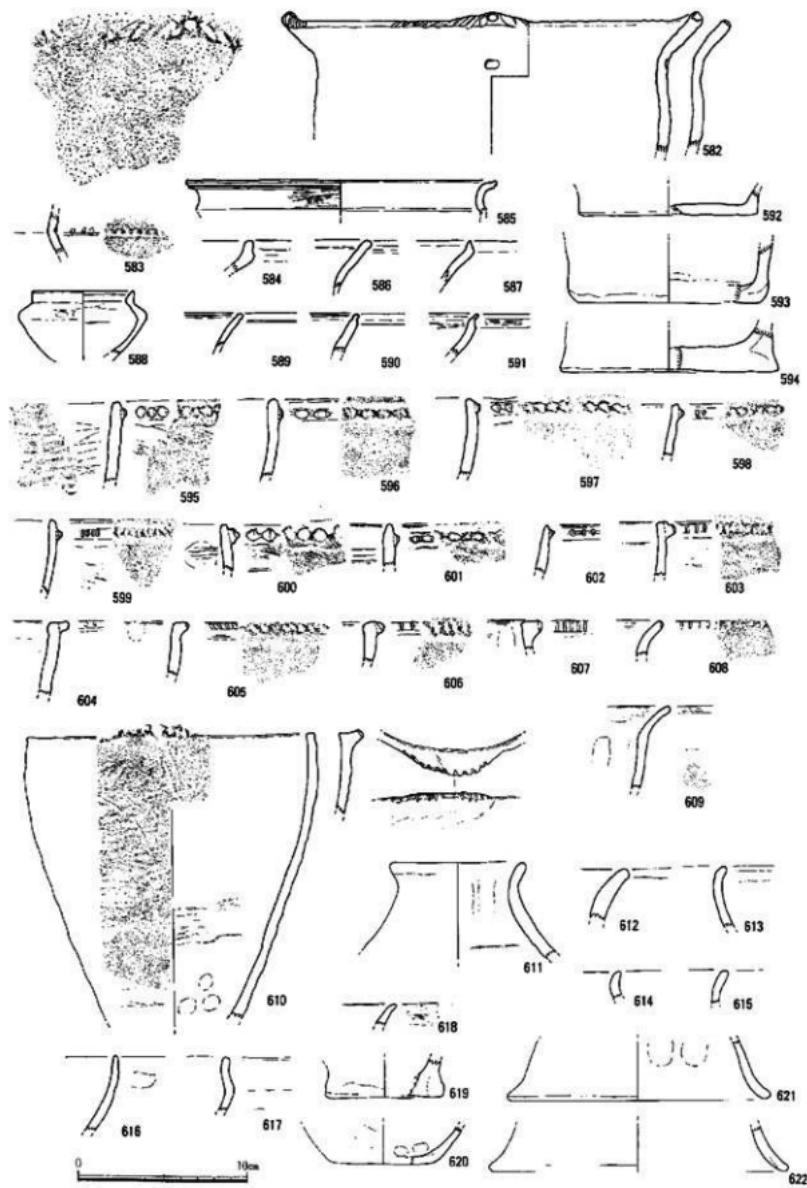


Fig. 63 SD010.SX082出土土器実測図(1/3)

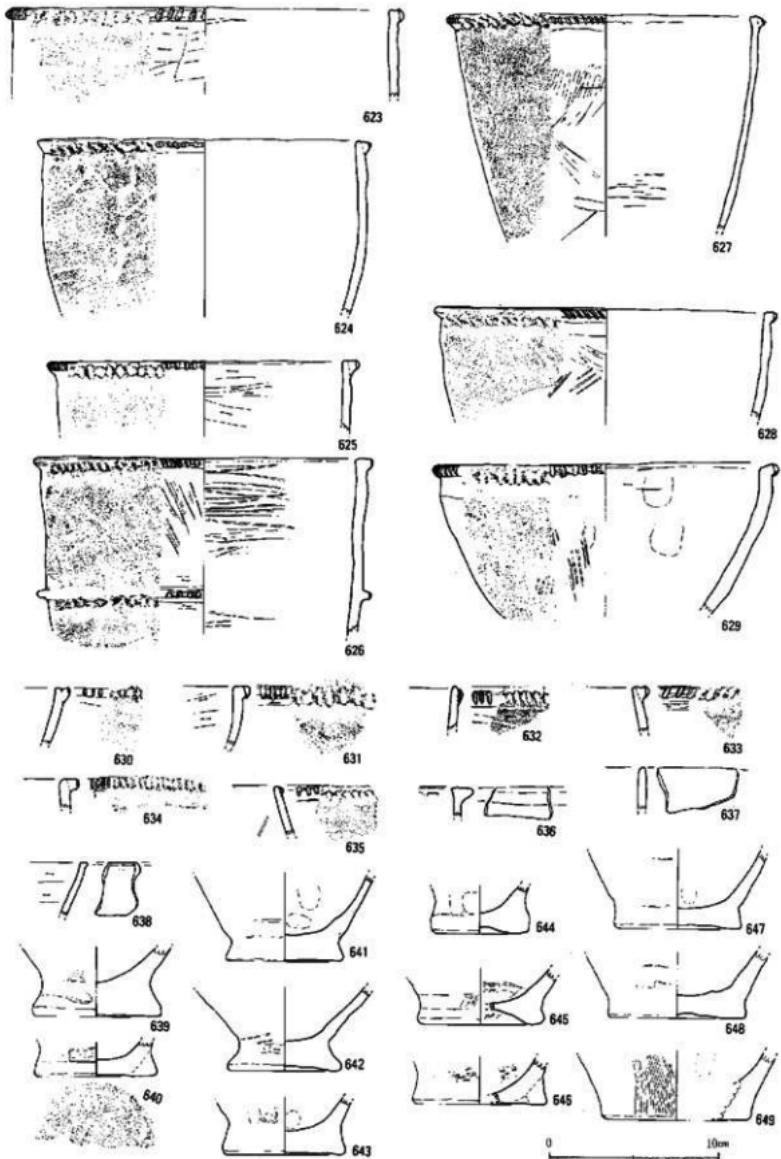


Fig.64 SK087出土上器实测图1(1/3)

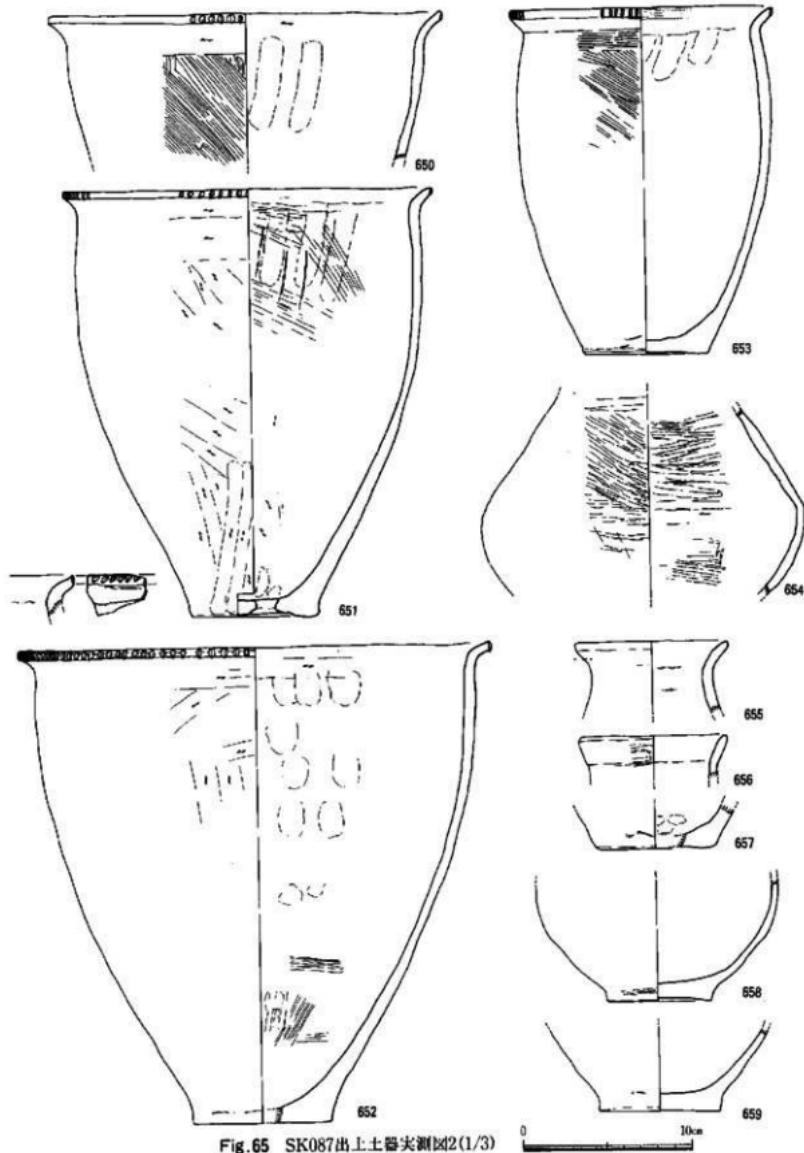


Fig.65 SK087出土器尖端图2(1/3)

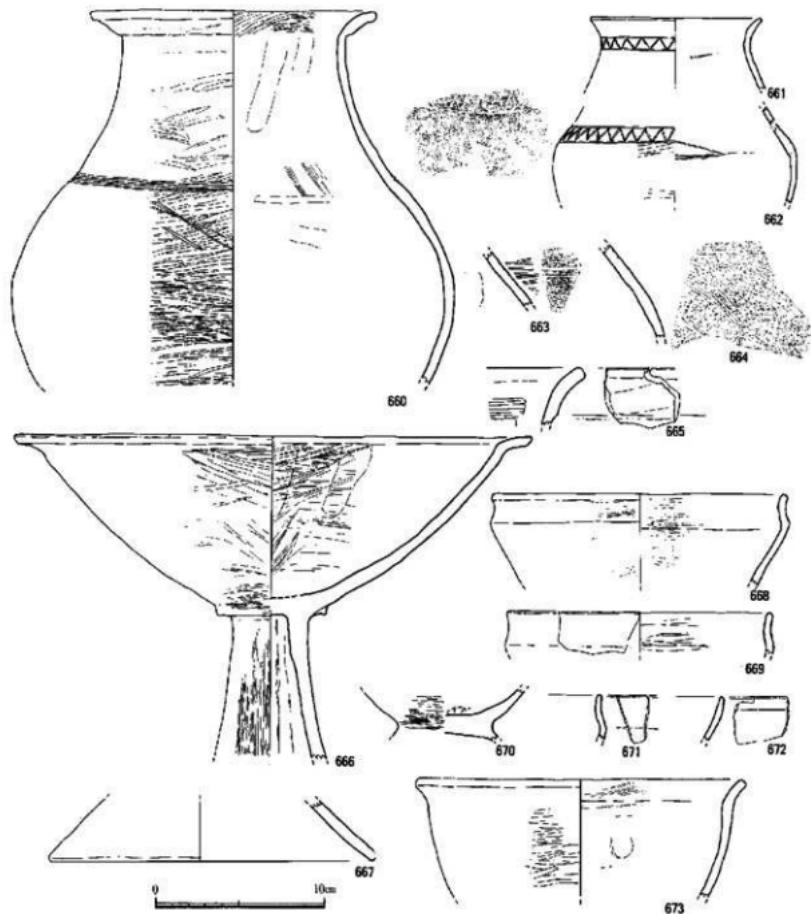


Fig. 66 SK087出上上器実測図3(1/3)

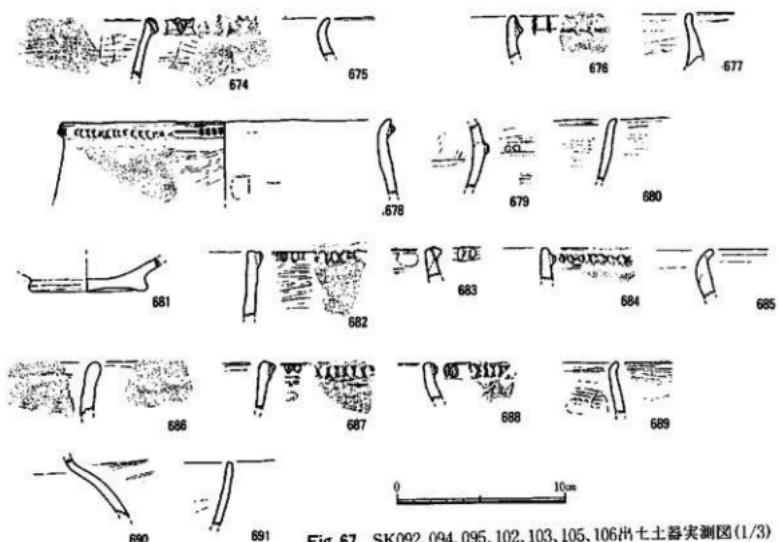


Fig. 67 SK092, 094, 095, 102, 103, 105, 106出土土器実測図(1/3)

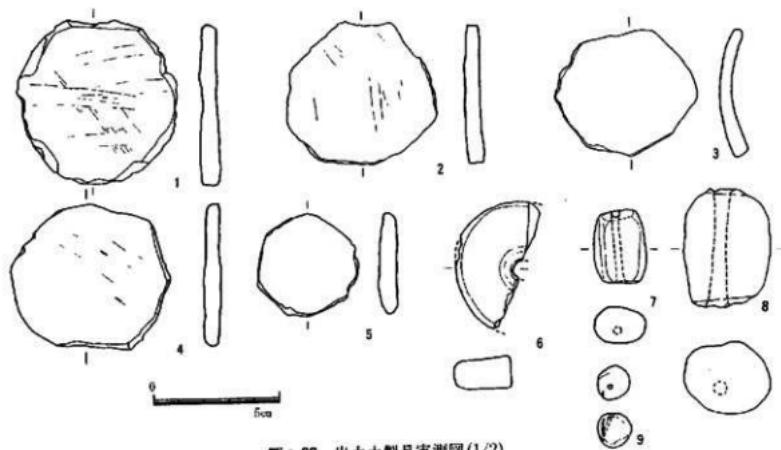


Fig. 68 出土土製品実測図(1/2)

Table 4 第4面出土土器観察表

色調は土色、内面の状況。

胎土の砂粒は砂粒を含む量の割合。

探査	番号	区	遺 儲	種 類	色 調	胎 土	外因調整		内因調整		備 考
							度数	ナデ	度数	ナデ	
Fig. 40	1	64	I	001	1157号 NO8.6	變	茶褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	柔軟 ナデ
	2	537	I	001	R220	變	暗灰褐色	砂粒	柔軟	ナデ	柔軟
	3	166	I	001	7層	變	深褐色 黑色	細砂粒	板ナデ ナデ	柔軟?	保付着
	4	206	I	001	R29.50.60	變	灰褐色	砂粒	柔軟?	ナデ(柔軟)	保付着
	5	268	I	001	1157号 R119	變	紫褐色 黑褐色	砂粒	柔軟?	ナデ(板ナデ?)	内面由有物付着
	6	154	I	001	1157号 R119	變	紫褐色 黑褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	内面由有物付着
	7	135	I	001	7層	變	紫褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	内面由有物付着
	8	137	I	001	1157号	變	紫褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	内面由有物付着
	9	252	I	001	1157号 7層	變	暗灰褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	内面由有物付着
	10	144	I	001	1157号	變	黃白色 淡黃褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	内面由有物付着
	11	148	I	001	1区7層	變	灰褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	内面由有物付着
	12	129	I	001	7層	變	淡褐色 黑褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	内面由有物付着
	13	553	I	001	R209	變	暗褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	内面由有物付着
	14	146	I	001	7層	變	暗褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	内面由有物付着
	15	538	I	001	1区7層	變	黑褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	内面由有物付着
	16	141	I	001	877号	變	灰褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	内面由有物付着
	17	536	I	001	355/R16	變	淡茶褐色 深褐色	砂粒	柔軟?	ナデ(柔軟)	内面由有物付着
	18	149	I	001	2537号	變	淡褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	内面由有物付着
	19	143	I	001	1区7層	變	暗茶褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	内面由有物付着
	20	134	I	001	7層	變	暗茶褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	内面由有物付着
	21	142	I	001	7層	變	灰褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	内面由有物付着
	22	145	I	001	1477号	變	淡褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	内面由有物付着
	23	136	I	001	7層	變	高褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	内面由有物付着
	24	150	I	001	7層	變	高褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	内面由有物付着
Fig. 41	25	153	I	001	2537号	漆林	暗褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ
	26	165	I	001	1区7層	漆林	漆褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ
	27	152	I	001	7層	漆林	漆褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ
	28	151	I	001	1区7層	漆林	漆褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ
	29	125	I	001	1区7層	漆林	漆褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ
	30	129	I	001	1区7層	漆林	漆褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ
	31	127	I	001	1区7層	漆林	漆褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ
	32	37	I	001	865 7号	漆林	漆褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ
	33	126	I	001	2537号	漆林	真白色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ
	34	132	I	001	3557号	漆林	暗褐色 淡白色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ
	35	133	I	001	R240 7号?	漆林	暗褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ
	36	254	I	005	7号	漆林	暗褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ
	37	258	I	001	7層	漆林	暗褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ
	38	119	I	001	1区7層	漆林	暗褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ
	39	122	I	001	1区7層	漆林	暗褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ
	40	131	I	001	1区7層	漆林	暗褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ
	41	120	I	001	7層	漆林	暗褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ
	42	121	I	001	7層	漆林	暗褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ
	43	128	I	001	1区7層	漆林	暗褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ
	44	124	I	001	7層	漆林	暗褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ
	45	125	I	001	7層	漆林	暗褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ
	46	164	I	001	1区7層	漆林	暗褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ
	47	155	I	001	7層	漆林	暗褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ
	48	137	I	001	1区7層	漆林	暗褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ
	49	206	I	001	7層	漆林	暗褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ
	50	323	I	001	R221	漆林	暗褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ
	51	156	I	001	1区7層	漆林	暗褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ
	52	161	I	001	1区7層	漆林	暗褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ
	53	162	I	001	7層	漆林	暗褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ
	54	159	I	001	7層	漆林	暗褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ
	55	159	I	001	R211 7号	漆林	暗褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ
	56	160	I	001	7層	漆林	暗褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ
Fig. 42	57	289	I	001	R40 9号	漆林	暗褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ
	58	285	I	001	9層	漆林	暗褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ
	59	286	I	001	1区R139 9号	漆林	暗褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ
	60	285	I	001	9層	漆林	暗褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ
	61	284	I	001	9層	漆林	暗褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ
	62	286	I	001	漆林	暗褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ	
	63	287	I	001	9層	漆林	暗褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ
	64	267	I	001	9層	漆林	暗褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ
	65	266	I	001	9層	漆林	暗褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ
	66	265	I	001	9層	漆林	暗褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ
	67	271	I	001	9層	漆林	暗褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ
	68	544	I	001	9層	漆林	暗褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ
	69	269	I	001	9層	漆林	暗褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ
	70	275	I	001	R21 9号	漆林	暗褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ
	71	445	I	001	9層	漆林	暗褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ
	72	273	I	001	9層下	漆林	暗褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ
Fig. 43	73	261	I	001	R12 9号	漆林	暗褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ
	74	277	I	001	R226 9号	漆林	暗褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ
	75	272	I	001	3区9号下	漆林	暗褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ
	76	278	I	001	R226 9号	漆林	暗褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ
	77	282	I	001	漆林	暗褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ	
	78	290	I	001	2区9号	漆林	暗褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ
	79	279	I	001	3区9号下	漆林	暗褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ
	80	280	I	001	漆林	暗褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ	
	81	364	I	001	8区9号	漆林	暗褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ
	82	401	I	001	K339 11号	漆林	暗褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ
	83	362	I	001	3区9号下	漆林	暗褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ
	84	365	I	001	3区9号下	漆林	暗褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ
	85	298	I	001	3区9号下	漆林	暗褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ
	86	255	I	001	9号	漆林	暗褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ
	87	307	I	001	9号	漆林	暗褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ
	88	298	I	001	1区9号	漆林	暗褐色	砂粒	柔軟?	ナデ	漆ナデ

地図	番号	年月日	区	道 情	便	色	調	地	土	外因調整	内因調整	備考
89	297	5/01 R215	底深	灰褐色	淡褐色	砂粒	横割れ	ナダ	貝没条件	底部にケズリ		
90	293	5/01 R231 9時	底深	灰褐色	灰褐色	砂粒	ナダ	板ナダ	底部に種子丘陵多数			
91	300	5/01 11時R127 9時	底深	灰褐色	灰褐色	砂粒	ナダ	板ナダ	木口底	内部に炭化物	木炭底	
92	295	5/01 R223 9時下	底深	灰褐色	哈素褐色	砂粒	ケズリ	裸底	ナダ	底部ナダ		
93	294	5/01 3時R208	底深	明褐色	灰褐色	砂粒	裸底	ナダ	ナダ	底部ナダ	底部ケズリ	
94	301	5/01 R220 9時	底深	茶褐色	黄色	砂粒	ナダ	板ナダ	底部ナダ	底部ケズリ		
95	292	5/01 3時R248	底深	灰褐色	砂粒	ナダ	ナダ	板ナダ	底部ナダ	底部ケズリ	白色肥料	
96	291	5/01 9時R216	底深	灰褐色	灰褐色	砂粒	ナダ	板ナダ	底部ナダ	内部炭化物	底部にナダ	
97	290	5/01 11時R237 8時下	底深	灰褐色	灰褐色	砂粒	ナダ	板ナダ	底部にケズリ			
98	305	5/01 R29 9時	底深	灰褐色	灰褐色	砂粒	相	黄オサエ	ナダ	底部にナダ	底部に硝酸	
99	301	5/01 R26 9時	底深	灰褐色	灰褐色	砂粒	相	黄オサエ	ナダ	底部にナダ		
100	303	5/01 2時R248	底深	灰褐色	灰褐色	砂粒	相	黄オサエ	ナダ	底部にナダ		
101	290	5/01 R42 9時下	底深	灰褐色	灰褐色	砂粒	相	黄オサエ	ナダ	底部にナダ		
102	302	5/01 9時上	底深	灰褐色	灰褐色	砂粒	相	黄オサエ	ナダ	底部にナダ		
103	299	5/01 1.25時R26	底深	灰褐色	茶褐色	砂粒	板ナダ	毛毛状	ナダ	ハナナダ	底部にナダ	
						粗粒	相	黄オサエ	ナダ	底部にケズリ		
Fig.44	104	324	5/01 32410時	底深	黑色	深褐色	砂粒	相	研磨	ナダ	底部	底部に炭化物
	105	332	5/01 R310時	底深	黑色	深褐色	砂粒	相	研磨	板ナダ	面取り	
	106	323	5/01 3区10時	底深	黑色	深褐色	砂粒	相	研磨	ナダ	ナダ	内外部炭化物付着
	107	326	5/01 10時	底深	茶褐色	砂粒	相	研磨	ナダ	二枚貝条痕	削り	
	108	327	5/01 R283	底深	黑色	黑色	砂粒	相	研磨	ナダ	二枚貝条痕	削り
	109	325	5/01 10時	底深	黑色	黑色	砂粒	相	研磨	ナダ	底部	削り
	110	330	5/01 3区10時	底深	黑色	黑色	砂粒	相	研磨	ナダ	底部	削り
	111	274	5/01 R383.10時	底深	黑色	灰褐色	砂粒	相	研磨	ナダ	底部	削り
	112	329	5/01 3時	底深	灰色	灰褐色	砂粒	相	研磨	ナダ	ナダ	削り
	113	328	5/01 10時	底深	灰色	灰褐色	砂粒	相	研磨	ナダ	ナダ	削り
	114	265	5/01 3時R248.10時	底深	灰色	灰褐色	砂粒	相	研磨	ナダ	研磨	
	115	266	5/01 3時R248.10時	底深	灰色	灰褐色	砂粒	相	研磨	ナダ	研磨	
	116	333	5/01 3時R248.10時	底深	灰色	灰褐色	砂粒	相	研磨	ナダ	研磨	
	117	316	5/01 R222.10時	底深	黑色	灰褐色	砂粒	相	研磨	ナダ	底部	削り
	118	320	5/01 3区10時	底深	黑色	灰褐色	砂粒	相	研磨	ナダ	底部	削り
	119	322	5/01 3区10時	底深	黑色	灰褐色	砂粒	相	研磨	ナダ	底部	削り
	120	309	5/01 R383.10時	底深	黑色	灰褐色	砂粒	相	研磨	ナダ	底部	削り
	121	308	5/01 10時	底深	黑色	灰褐色	砂粒	相	研磨	ナダ	底部	削り
	122	310	5/01 R220	底深	黑色	灰褐色	砂粒	相	研磨	ナダ	底部	削り
	123	312	5/01 3区10時	底深	黑色	灰褐色	砂粒	相	研磨	ナダ	底部	削り
	124	311	5/01 R383.10時	底深	黑色	灰褐色	砂粒	相	研磨	ナダ	底部	削り
	125	313	5/01 3区10時	底深	黑色	灰褐色	砂粒	相	研磨	ナダ	底部	削り
	126	315	5/01 2区2.10時	底深	黑色	灰褐色	砂粒	相	研磨	ナダ	底部	削り
	127	318	5/01 3区10時	底深	黑色	灰褐色	砂粒	相	研磨	ナダ	底部	削り
	128	317	5/01 R223.10時	底深	黑色	灰褐色	砂粒	相	研磨	ナダ	底部	削り
	129	319	5/01 3区10時	底深	黑色	灰褐色	砂粒	相	研磨	ナダ	底部	削り
	130	334	5/01 R224.10時	底深	黑色	灰褐色	砂粒	相	研磨	ナダ	底部	削り
	131	337	5/01 3区10時	底深	黑色	灰褐色	砂粒	相	研磨	ナダ	底部	削り
	132	336	5/01 R221.10時	底深	黑色	灰褐色	砂粒	相	研磨	ナダ	底部	削り
	133	338	5/01 10時	底深	黑色	灰褐色	砂粒	相	研磨	ナダ	底部	削り
	134	335	5/01 10時	底深	黑色	灰褐色	砂粒	相	研磨	ナダ	底部	削り
	135	331	5/01 3区10時	底深	黑色	灰褐色	砂粒	相	研磨	ナダ	底部	削り
	136	321	5/01 10時	底深	黑色	灰褐色	砂粒	相	研磨	ナダ	底部	削り
	137	320	5/01 3区10時	底深	黑色	灰褐色	砂粒	相	研磨	ナダ	底部	削り
Fig.45	128	627	5/01 R280 11時	底深	暗褐色	砂粒	相	研磨	相	研磨	相	底部付着
	129	440	5/01 3区10時	底深	暗褐色	砂粒	相	研磨	相	研磨	相	底部付着
	140	605	5/01 3区10時	底深	暗褐色	砂粒	相	研磨	相	研磨	相	底部付着
	141	429	5/01 R25044 11時	底深	茶褐色	茶褐色	砂粒	相	研磨	板ナダ	板ナダ	底部付着
	142	428	5/01 11時	底深	茶褐色	茶褐色	砂粒	相	研磨	板ナダ	板ナダ	底部付着
	143	444	5/01 11時	底深	茶褐色	茶褐色	砂粒	相	研磨	板ナダ	板ナダ	底部付着
	144	432	5/01 11時下	底深	茶褐色	茶褐色	砂粒	相	研磨	板ナダ	板ナダ	底部付着
	145	431	5/01 R243 11時	底深	茶褐色	茶褐色	砂粒	相	研磨	板ナダ	板ナダ	底物全面付着
	146	332	5/01 2区	底深	茶褐色	茶褐色	砂粒	相	研磨	板ナダ	板ナダ	底物全面付着
	147	355	5/01 2区11時	底深	茶褐色	茶褐色	砂粒	相	研磨	板ナダ	板ナダ	底物全面付着
Fig.46	148	437	5/01 11時	底深	暗褐色	砂粒多	相	研磨	相	研磨	相	底部付着
	149	543	5/01 R206.207	底深	暗褐色	砂粒多	相	研磨	相	研磨	相	底部付着
	150	354	5/01 3区10.11時	底深	暗褐色	砂粒多	相	研磨	相	研磨	相	底部付着
	151	350	5/01 2区10.11時	底深	暗褐色	砂粒多	相	研磨	相	研磨	相	底部付着
	152	697	5/01 11時	底深	暗褐色	砂粒多	相	研磨	相	研磨	相	底部付着
	153	428	5/01 3区10.11時	底深	暗褐色	砂粒多	相	研磨	相	研磨	相	底部付着
	154	272	5/01 11時	底深	暗褐色	砂粒多	相	研磨	相	研磨	相	底部付着
	155	443	5/01 11時	底深	暗褐色	砂粒多	相	研磨	相	研磨	相	底部付着
	156	363	5/01 2区10.11時	底深	暗褐色	砂粒多	相	研磨	相	研磨	相	底部付着
	157	697	5/01 11時	底深	暗褐色	砂粒多	相	研磨	相	研磨	相	底部付着
	158	442	5/01 11時	底深	暗褐色	砂粒多	相	研磨	相	研磨	相	底部付着
	159	446	5/01 3区11時	底深	暗褐色	砂粒多	相	研磨	相	研磨	相	底部付着
	160	464	5/01 2区11時	底深	暗褐色	砂粒多	相	研磨	相	研磨	相	底部付着
	161	454	5/01 2区11時	底深	暗褐色	砂粒多	相	研磨	相	研磨	相	底部付着
	162	459	5/01 11時	底深	暗褐色	砂粒多	相	研磨	相	研磨	相	底部付着
	163	359	5/01 2区10.11時	底深	暗褐色	砂粒多	相	研磨	相	研磨	相	底部付着
	164	458	5/01 1区11時	底深	暗褐色	砂粒多	相	研磨	相	研磨	相	底部付着
	165	349	5/01 2区10.11時	底深	暗褐色	砂粒多	相	研磨	相	研磨	相	底部付着
	166	473	5/01 11時	底深	暗褐色	砂粒多	相	研磨	相	研磨	相	底部付着
	167	463	5/01 1区11時	底深	暗褐色	砂粒多	相	研磨	相	研磨	相	底部付着
	168	351	5/01 2区10.11時	底深	暗褐色	砂粒多	相	研磨	相	研磨	相	底部付着
	169	450	5/01 11時	底深	暗褐色	砂粒多	相	研磨	相	研磨	相	底部付着
	170	449	5/01 3区11時	底深	暗褐色	砂粒多	相	研磨	相	研磨	相	底部付着
	171	439	5/01 R14 11時	底深	暗褐色	砂粒多	相	研磨	相	研磨	相	底部付着
	172	447	5/01 11時	底深	暗褐色	砂粒多	相	研磨	相	研磨	相	底部付着
	173	323	5/01 2区10.11時	底深	暗褐色	砂粒多	相	研磨	相	研磨	相	底部付着
	174	469	5/01 11時	底深	暗褐色	砂粒多	相	研磨	相	研磨	相	底部付着
	175	468	5/01 2区11時	底深	暗褐色	砂粒多	相	研磨	相	研磨	相	底部付着
	176	451	5/01 2区11時	底深	暗褐色	砂粒多	相	研磨	相	研磨	相	底部付着

地図	番号	路名	区	道 横	横 横	色 調	地 土	外面調査	内面調査	備 考
	177 453	II	001	1区11号		灰褐色	細粒砂	横ナデ ナデ?	ナデ? ナデ	
	178 471	II	001	11号		淡灰褐色	砂粒少	ナデ?	ナデ	
	179 479	II	001	4区K202 11号		灰褐色	細粒砂	ナデ	ナデ	保付石
Fig.47	180 516	II	001	849 9号		淡灰褐色	砂粒少	微度 湿度	全度 ナデ	
	181 426	II	001	11号下		茶褐色	細粒多	茶褐色 精ナデ	全度 ナデ	保付石
	182 357	II	001	3区K202 11号		暗茶褐色	砂粒少	弱	弱ナデ ナダ?	保付石
	183 531	II	001	2-3区K202		黄褐色	砂粒多	強ナデ ナダ?	弱ナデ ナダ	わざかに保付石
	184 453	II	001	3区11号下		暗茶褐色	砂粒少	強ナデ ナダ?	弱ナデ ナダ	保付石
Fig.48	185 58	I	001	11号		淡灰褐色	砂粒	ナデ?	保付石	外面保多量に付着
	186 510	I	001	11号		淡灰褐色	砂粒多	弱	ナデ?	
	187 484	I	001	11号		灰褐色	砂粒多	弱	ナデ?	
	188 362	I	001	4区K202 11号		灰褐色	砂粒少	弱	ナデ?	
	189 441	I	001	2-3区11号		灰褐色	砂粒	強ナデ ナダ?	弱ナデ ナダ?	保付石
	190 349	I	001	2-3区10,11号		灰褐色	砂粒少	強ナデ ナダ?	弱ナデ ナダ?	
	191 462	I	001	11号上		灰褐色	砂粒少	強ナデ ナダ?	弱ナデ ナダ?	保付石
	192 448	I	001	11号		灰褐色	砂粒少	強ナデ ナダ?	弱ナデ ナダ?	
	193 406	I	001	11号		灰褐色	砂粒少	強ナデ ナダ?	弱ナデ ナダ?	保付石
	194 347	I	001	2-3区10,11号		灰褐色	砂粒少	強ナデ ナダ?	弱ナデ ナダ?	保付石
	195 456	I	001	2-3区11号		灰褐色	砂粒少	強ナデ ナダ?	弱ナデ ナダ?	保付石
	196 147	I	001	11号下		暗茶褐色	砂粒少	弱	ナデ?	保付石
	197 460	I	001	11号		茶褐色	砂粒少	ナデ?	ナデ?	保付石
	198 455	I	001	11号		茶褐色	砂粒少	ナデ?	ナデ?	保付石
	199 461	I	001	11号		茶褐色	砂粒少	ナデ?	ナデ?	保付石
	200 356	I	001	11号		茶褐色	砂粒少	ナデ?	ナデ?	保付石
	201 474	I	001	11号		茶褐色	砂粒多	わざかに条幅	条幅	保付石
	202 477	I	001	3区K202 11号		茶褐色	砂粒多	強ナデ ナダ?	トコナ	保付石 204と同一物体
	203 386	I	001	3区K202 11号		茶褐色	砂粒多	強ナデ ナダ?	板ナデ ナダ?	保付石
	204 478	I	001	3区K202 11号		茶褐色	砂粒多	強ナデ ナダ?	板ナデ ナダ?	保付石
	205 375	I	001	3区K202 11号		茶褐色	砂粒多	強ナデ ナダ?	板ナデ ナダ?	保付石
	206 328	I	001	K202		茶褐色	砂粒多	強ナデ ナダ?	板ナデ ナダ?	保付石
	207 475	I	001	2-3区11号		茶褐色	砂粒多	強ナデ ナダ?	板ナデ ナダ?	保付石
	208 540	I	001	2-3区K151		茶褐色	砂粒多	強ナデ ナダ?	板ナデ ナダ?	保付石
	209 480	I	001	2-3区11号		茶褐色	砂粒多	強ナデ ナダ?	板ナデ ナダ?	保付石
	210 380	I	001	2-3区10,11号		茶褐色	砂粒多	強ナデ ナダ?	板ナデ ナダ?	保付石
	211 384	I	001	2-3区11号		茶褐色	砂粒多	強ナデ ナダ?	板ナデ ナダ?	保付石
Fig.49	212 399	I	001	11号		茶褐色	砂粒	弱	弱	赤色系料
	213 397	I	001	4区11号		茶褐色	砂粒	弱	弱	赤色系料
	214 402	I	001	3区11号		茶褐色	砂粒少	弱	弱	赤色系料
	215 519	I	001	1区11号,11号		茶褐色	砂粒少	弱	弱	赤色系料
	216 344	I	001	2-3区10,11号		茶褐色	砂粒少	弱	弱	赤色系料
	217 394	I	001	2-3区11号		茶褐色	砂粒少	弱	弱	赤色系料
	218 521	I	001	3区K202 11号		茶褐色	砂粒少	弱	弱	赤色系料
	219 389	I	001	4区K202 11号		茶褐色	砂粒少	弱	弱	赤色系料
	220 412	I	001	3区11号下		茶褐色	砂粒少	弱	弱	赤色系料
	221 480	I	001	4区K202 11号		茶褐色	砂粒少	弱	弱	赤色系料
	222 585	I	001	4区K202 11号		茶褐色	砂粒少	弱	弱	赤色系料
	223 366	I	001	11号		茶褐色	砂粒少	弱	弱	化粧土
	224 328	I	001	11号		茶褐色	砂粒少	弱	弱	赤色系料
	225 345	I	001	2-3区11号		茶褐色	砂粒少	弱	弱	赤色系料
	225 414	I	001	2-3区11号		茶褐色	砂粒少	弱	弱	赤色系料
	226 400	I	001	2-3区11号		茶褐色	砂粒少	弱	弱	赤色系料
	227 266	I	001	2-3区9,11号		茶褐色	砂粒少	弱	弱	赤色系料
	228 411	I	001	11号		茶褐色	砂粒多	弱	弱	赤色系料
Fig.50	229 530	I	001	8215		茶褐色	砂粒	弱	弱	赤色系料
	230 404	I	001	車下		淡灰褐色	砂粒	研磨	研磨	赤色系料
	232 410	I	001	4区11号		茶褐色	砂粒	弱	弱	赤色系料
	233 410	I	001	11号		茶褐色	砂粒少	弱ナデ ナダ?	ナデ?	赤色系料
	234 417	I	001	1区11号		茶褐色	砂粒少	弱	弱	赤色系料
	235 406	I	001	1区11号		淡灰褐色	砂粒少	弱	弱	赤色系料
	236 403	I	001	11号下		淡灰褐色	砂粒少	弱	弱	赤色系料
	237 525	I	001	4区R222		淡灰褐色	砂粒少	弱	弱	光沢がある 木本樹
	237 421	I	001	3227 11号上		灰色	淡灰褐色	砂粒多	弱	枝葉
	238 388	I	001	11号		淡灰褐色	砂粒少	弱	弱	枝葉
	239 370	I	001	3区11号		淡灰褐色	砂粒少	弱	弱	枝葉
	240 340	I	001	1区10,11号		淡灰褐色	砂粒少	弱	弱	枝葉
	241 377	I	001	2-3区11号下		淡灰褐色	砂粒少	弱	弱	枝葉
	242 329	I	001	3区11号		淡灰褐色	砂粒少	弱	弱	枝葉
	243 424	I	001	4区12区25号		淡灰褐色	砂粒少	弱	弱	枝葉
	244 367	I	001	3区11号下		淡灰褐色	砂粒少	弱	弱	枝葉
	245 366	I	001	4区R220		淡灰褐色	砂粒少	弱	弱	枝葉
	246 517	I	001	R220		淡灰褐色	砂粒少	弱	弱	枝葉
	247 423	I	001	3区11号下		淡灰褐色	砂粒少	弱	弱	枝葉
	248 368	I	001	10,11号		黑色	砂粒多	弱	弱	枝葉
	249 375	I	001	1区11号		黑色	砂粒少	弱	弱	枝葉
	250 342	I	001	11号		黑色	砂粒少	弱	弱	枝葉
	251 533	I	001	2205		淡灰褐色	砂粒少	弱	弱	枝葉
	252 418	I	001	10,11号		淡灰褐色	砂粒少	弱	弱	枝葉
	253 373	I	001	11号		淡灰褐色	砂粒少	弱	弱	枝葉
	254 371	I	001	2-3区10,11号		淡灰褐色	砂粒少	弱	弱	枝葉
	255 379	I	001	3区11号下		淡灰褐色	砂粒少	弱	弱	枝葉
	256 375	I	001	3区11号		淡灰褐色	砂粒少	弱	弱	枝葉
Fig.51	257 390	I	001	2297 11号下		淡灰褐色	砂粒少	弱	弱	方形
	258 391	I	001	2298 11号下		淡灰褐色	砂粒少	弱	弱	保付石なし: 方形
	259 374	I	001	2298 11号下		淡灰褐色	砂粒少	弱	弱	保付石なし: 方形
	260 372	I	001	2298 11号下		淡灰褐色	砂粒少	弱	弱	保付石なし: 方形
	261 343	I	001	2区10,11号		淡灰褐色	砂粒少	弱	弱	保付石なし: 方形
	262 381	I	001	2区10,11号		淡灰褐色	砂粒少	弱	弱	保付石なし: 方形
	263 382	I	001	2区 11号		淡灰褐色	砂粒少	弱	弱	保付石なし: 方形

序号	番号	年月	地 点	被 覆	色 调	地 土	外因調整	内因調整	備 考	
264	541	III	001 R246 11層	透井	暗褐色	砂板	研磨	粗	赤色顔料	
265	406	III	001 2E11層	透井	淡黃灰色	砂板	研磨 相?	粗 滑ナダ		
266	380	III	001 1E11層	透井	灰紫褐色	砂板	粗 滑相?	粗 滑ナダ		
267	383	III	001 11層	透井	淡褐色	砂板	研磨	ナダ 刷り		
268	497	III	001 11層	井?	褐色	砂板	研磨 ナダ	ナダ 刷り	赤色顔料	
269	405	III	001 1E11層	井?	褐色	砂板	研磨 ナダ	ナダ 刷り	赤色顔料	
270	382	III	001 11層	透井	深褐色	砂板	研磨	研磨	赤色顔料	
271	383	III	001 1E11層下	透井	暗褐色	砂板	研磨?	ナダ?	ニチュア	
272	385	III	001 1E11層	井?	褐色	砂板	研磨?	ナダ?	赤色顔料	
273	416	III	001 11層	井?	褐色	砂板	研磨?	ナダ?	赤色顔料	
274	415	III	001 2E11層	井?	褐色	砂板	研磨?	ナダ?	赤色顔料	
275	622	III	001 1E11層下	井?	褐色	砂板	研磨?	研磨	赤色顔料	
276	481	III	001 11層	井?	褐色	砂板	研磨?	ナダ?	赤色顔料	
277	419	III	001 1E11層	井?	褐色	砂板	研磨	ナダ	赤色顔料	
278	314	III	001 11層	井?	褐色	砂板	研磨	ナダ	赤色顔料	
279	387	III	001 1E11層	井?	淡褐色	砂板	研磨?	ナダ?	赤色顔料	
280	479	III	001 2E11層	井?	暗褐色	砂板	研磨?	ナダ?	赤色顔料	
281	361	III	001 2E10,11層	井?	褐色	砂板	研磨?	ナダ?	井付着 深鉛か 内面に錆多時に付着	
282	358	III	001 R203 11層	井?	褐灰色	砂板	究ナダ	ナダ?	赤色顔料	
283	545	III	001 R204 11層	井?	褐灰色	砂板	研磨?	ナダ?	赤色顔料	
284	518	III	001 R205 11層	井?	褐灰色	砂板	研磨?	ナダ?	赤色顔料	
Fig.52	285	484	III	001 R211層 841	透井	灰褐色	砂板	雨	板ナダ	炭化物付着
	286	485	III	001 R212 11層上	透井	灰褐色	砂板	研磨?	ナダ?	赤色顔料
	287	494	III	001 11層	透井	淡灰褐色	砂板	美灰	ナダ?	木地灰
	288	483	III	001 2E5,11層	透井	暗褐色	砂板	美灰	ナダ?	炭化物付着
	289	525	T	001 R246	透井	暗褐色	砂板	研磨?	ナダ?	
	290	500	III	001 1E11層	透井	暗褐色	砂板	研磨?	ナダ?	
	291	496	III	001 1E11層	透井	暗褐色	砂板	研磨?	ナダ?	
	292	501	III	001 1E11層	透井	暗褐色	砂板	研磨?	ナダ?	
	293	509	I	001 R213,27	透井	暗褐色	砂板	雨	板ナダ	
	294	491	III	001 R214 11層	透井	暗褐色	砂板	雨	ナダ?	
	295	492	III	001 1E11層	透井	暗褐色	砂板	雨	ナダ?	
	296	499	III	001 R239 11層	透井	暗褐色	砂板	研磨?	ナダ?	赤色顔料
	297	482	III	001 R246 11層	透井	暗褐色	砂板	研磨?	ナダ?	
	298	503	III	001 2E5,10,11層	透井	暗褐色	砂板	各体 剥力	剥力	2次地成 内面に有機物
	299	513	III	001 R217 11層	透井	暗褐色	砂板	雨	雨	透井付着
	300	495	III	001 1E11層	透井	暗褐色	砂板	ナダ?	ナダ?	
	301	304	I	001 R212,27(38)	透井	暗褐色	砂板	研磨?	ナダ?	
	302	501	III	001 2E5,11層	透井	暗褐色	砂板	研磨?	ナダ?	4面透かし?
	303	498	III	001 R271 11層	透井	暗褐色	砂板	雨	雨	
	304	499	III	001 2E5,11層	透井	暗褐色	砂板	雨	雨	
	305	523	I	001 R214	透井	暗褐色	砂板	研磨?	板ナダ?	
	306	363	III	001 2E5,10,11層	透井	暗褐色	砂板	研磨?	ナダ?	底部にケズリ
	307	505	III	001 R211,11層	透井	暗褐色	砂板	雨	ナダ?	
	308	486	III	001 R248 11層上	透井	淡褐色	砂板	研磨?	ナダ?	内面に氯化物
	309	487	III	001 R223 11層	透井	暗褐色	砂板	研磨?	ナダ?	
	310	425	III	001 2E5,11層下	透井	暗褐色	砂板	研磨?	ナダ?	
	311	503	III	001 11層	透井	暗褐色	砂板	研磨?	ナダ?	
	312	514	III	001 1E5	透井	暗褐色	砂板	研磨?	ナダ?	赤色顔料 大塗か
	313	340	I	001 R213,27	透井	暗褐色	砂板	研磨?	透井	底面にナダ?
	314	497	I	001 4E5	透井	暗褐色	砂板	研磨?	ナダ?	赤色顔料
	315	511	I	001 1E11層	透井	暗褐色	砂板	研磨?	ナダ?	2次地成
	316	506	I	001 11層	透井	暗褐色	砂板	研磨?	ナダ?	
	317	505	I	001 2E5,11層	透井	暗褐色	砂板	研磨?	ナダ?	
	318	502	I	001 1E11層	透井	暗褐色	砂板	研磨?	ナダ?	
	319	512	I	001 1E11層	透井	暗褐色	砂板	研磨?	ナダ?	
	320	504	I	001 2E5,11層	透井	暗褐色	砂板	研磨?	ナダ?	
	321	508	I	001 2E5,11層	透井	暗褐色	砂板	研磨?	ナダ?	
	322	509	I	001 2E5,11層	透井	暗褐色	砂板	研磨?	ナダ?	
	323	510	I	001 R238,35 11層	透井	暗褐色	砂板	研磨?	ナダ?	
	324	488	I	001 R216 11層	透井	暗褐色	砂板	研磨?	ナダ?	2次地成
	325	515	I	001 2E5,11層下	透井	暗褐色	砂板	研磨?	ナダ?	赤色顔料
	327	507	I	001 11層	透井	暗褐色	砂板	研磨?	ナダ?	透井付着
	328	568	I	001 1E5	透井	暗褐色	砂板	研磨?	ナダ?	赤色顔料
	329	413	I	001 R241 11層	透井	暗褐色	砂板	研磨?	ナダ?	
Fig.53	330	490	I	001 R210,4	透井	暗褐色	砂板	研磨?	ナダ?	
	331	95	I	008 R285,39	透井	暗褐色	砂板	研磨?	ナダ?	2次地成
	332	96	I	008 R234,292	透井	暗褐色	砂板	研磨?	ナダ?	
	333	20	I	008 R250	透井	暗褐色	砂板	研磨?	ナダ?	
	334	91	I	008	透井	暗褐色	砂板	研磨?	ナダ?	透井付着
	335	89	I	008 R207	透井	暗褐色	砂板	研磨?	ナダ?	
	336	90	I	008 R230	透井	暗褐色	砂板	研磨?	ナダ?	
	337	22	I	008 R199,209	透井	暗褐色	砂板	研磨?	ナダ?	
	338	24	I	008	透井	暗褐色	砂板	研磨?	ナダ?	透井方向のナダ?
	339	167	I	008 R258,556,490	透井	灰至褐色	砂板	研磨?	ナダ?	2次地成 透井付着
	340	168	I	008 R248,(451)	透井	灰至褐色	砂板	研磨?	ナダ?	
	341	92	I	008 R142	透井	茶褐色	砂板	研磨?	ナダ?	わずかに透井付着
	342	97	I	008	透井	茶褐色	砂板	研磨?	ナダ?	
	343	88	I	008 R286	透井	茶褐色	砂板	研磨?	ナダ?	透井付着
	344	18	I	008	透井	茶褐色	砂板	研磨?	ナダ?	
	345	21	I	008 R83	透井	茶褐色	砂板	研磨?	ナダ?	透井方向のナダ?
Fig.54	346	90	I	008 R45,405,442	透井	茶褐色	砂板	研磨?	ナダ?	板ナダ?
	347	94	I	008 R235,32,69	透井	茶褐色	砂板	研磨?	ナダ?	板ナダ?
	348	95	I	008 R47,67	透井	茶褐色	砂板	研磨?	ナダ?	板ナダ?
	349	30	I	008 R155,82	透井	茶褐色	砂板	研磨?	ナダ?	板ナダ?
Fig.55	350	85	I	008 R1,E2,4	透井	茶褐色	砂板	研磨?	ナダ?	板ナダ?
	351	31	I	008 R232	透井	茶褐色	砂板	研磨?	ナダ?	板ナダ?

番号	名前	色	種類	色	調	土	外因調整	内因調整	備考
Fig.55	2884	■	透	明	透	透	透	透	
352	66	■	0883018	茶褐色	暗灰色	ケズリ	ナダ		
353	63	■	0883574	灰茶褐色	砂粒	相	相		
354	84	■	088	茶褐色	細砂粉多	系	ナダ		
355	183	■	0883240	褐色	砂粒多	ヘラクチズリ	ナダ		
356	89	■	0883569	灰褐色	砂粒多	相	ナダ		
357	70	■	088	茶褐色	砂粒多	相	ナダ		
358	62	■	088上R65	黑色	砂粒多	相	ナダ		
359	179	■	0883559	黑色	砂粒多	ケズリ	2致止発病 ナダ		
360	91	■	0883552	黑色	砂粒	ケズリ	発ナダ		
361	66	■	0883562	黑色	砂粒	相ナダ	ナダ		
362	68	■	088LR183	褐色	砂粒多	相ナダ	ナダ		
363	56	■	0883233	褐色	砂粒多	相ナダ	ナダ		
364	58	■	0883174	茶褐色	砂粒多	相ナダ	ナダ		
365	53	■	0883595	茶褐色	砂粒多	相	ナダ		
366	67	■	088	暗褐色	砂粒多	相	ナダ		
367	182	■	0883630	茶褐色	砂粒	相	ナダ		
368	54	■	0883112	茶褐色	砂粒	相	ナダ		
369	74	■	088	淡茶褐色	砂粒多	ヘラクナダ	ナダ		
370	55	■	0883557	淡茶褐色	砂粒多	相ナダ	ナダ		
371	65	■	088上181	茶褐色	砂粒	相	ナダ		
372	75	■	088	暗茶褐色	砂粒	相ナダ ケズリ風	ナダ		
373	184	■	0883567	茶褐色	砂粒	ケズリ状	相ナダ ケズリ風		
374	87	■	088	茶褐色	砂粒	相	ナダ		
375	32	■	088222-354,20	茶褐色	砂粒	相	ナダ		
376	57	■	088	茶褐色	砂粒	相	ナダ		
377	188	■	088	茶褐色	砂粒	相	ナダ		
378	195	■	088	茶褐色	砂粒	相	ナダ		
379	180	■	088	茶褐色	砂粒	相	ナダ		
380	59	■	088上P26	茶褐色	砂粒	相	ナダ		
381	59	■	088LR109	茶褐色	砂粒	相	ナダ		
382	99	■	0883230,671,45	茶褐色	粗粒	相ナダ	相		
383	86	■	0883240,219	茶褐色	砂粒	相ナダ	相		
384	78	■	088	茶褐色	粗砂粒	相	相		
385	76	■	0883457	茶褐色	粗砂粒	相	相		
386	81	■	088LR256	茶褐色	砂粒多	相ナダ	相		
387	79	■	0883257	茶褐色	砂粒多	相ナダ	相		
388	3	■	0883500	白色	粗砂粒	相	相		
389	72	■	088	淡茶褐色	砂粒	相	相		
390	80	■	0883630	茶褐色	砂粒	相	相		
391	83	■	088	暗褐色	砂粒	相	相		
392	181	■	088	茶褐色	砂粒	相	相		
393	186	■	0883484	茶褐色	砂粒	相	相		
394	77	■	088上206	茶褐色	砂粒	相	相		
395	82	■	088上R5	茶褐色	砂粒	相	相		
396	185	■	088	茶褐色	砂粒	相	相		
397	73	■	088	茶褐色	砂粒	相	相		
398	197	■	088	茶褐色	砂粒	相	相		
399	158	■	088	茶褐色	砂粒	相	相		
400	191	■	088	茶褐色	砂粒	相	相		
401	48	■	088424,333,FR20	茶褐色	砂粒	相	相		
402	592	■	088上R103	茶褐色	砂粒	相	相		
403	10	■	0883561,562,556	茶褐色	砂粒	相	相		
404	11	■	0883615	茶褐色	砂粒	相	相		
405	14	■	0883526	茶褐色	砂粒	相	相		
406	12	■	E556	茶褐色	砂粒	相	相		
407	13	■	0883521	茶褐色	砂粒	相	相		
Fig.57	408	27	■	088上R73	茶褐色	砂粒	相	相	
409	29	■	0883620,693,091	茶褐色	粗粒	相	ナダ		
410	520	■	0883234,160,240	茶褐色	砂粒多	相ナダ ケズリ	相ナダ 摘度		
411	32	■	088上R27	茶褐色	砂粒	相	相		
412	33	■	088R542	茶褐色	砂粒	相	相		
413	47	■	088上R142,210	茶褐色	砂粒多	相	相		
414	34	■	088R47	茶褐色	砂粒	相	相		
415	35	■	0883521	茶褐色	砂粒	相	相		
416	28	■	088上R129,141	茶褐色	砂粒	相	相		
417	41	■	088上R204	茶褐色	砂粒多	相	相		
418	15	■	088R178	茶褐色	砂粒少	相	相		
419	46	■	0883605,316	茶褐色	砂粒少	相	ナダ		
420	40	■	088T-R526,520	茶褐色	砂粒少	相	相		
421	550	■	088B417,427	茶褐色	砂粒少	相	相		
422	45	■	088R074	茶褐色	砂粒少	相	相		
423	44	■	088上R154	茶褐色	砂粒少	相	相		
424	42	■	088上R58	茶褐色	砂粒少	相	相		
Fig.58	425	9	■	0883663,001,488	茶褐色	粗砂粒	相	相	
426	30	■	088上R115,50	茶褐色	粗砂粒多	相	相		
427	17	■	088R31	茶褐色	粗砂粒多	相	相		
428	15	■	088R10,309	茶褐色	粗砂粒多	相	相		
429	1	■	088上R474,113	茶褐色	粗砂粒	相	相		
430	16	■	088上R18	茶褐色	粗砂粒	相	相		
431	18	■	088R369	茶褐色	粗砂粒	相	相		
432	19	■	088上R19	茶褐色	粗砂粒	相	相		
433	31	■	088上R150,153	茶褐色	粗砂粒	相	相		
434	4	■	088	茶褐色	粗砂粒	相	相		
435	5	■	088上R29	茶褐色	粗砂粒	相	相		
436	171	■	088	茶褐色	粗砂粒	相	相		
437	7	■	088上R175	茶褐色	粗砂粒	相	相		
438	176	■	088	茶褐色	粗砂粒	相	相		
439	172	■	088	茶褐色	粗砂粒	相	相		

項目	番号	呼称	種類	色調	地土	外因調整	内因調整	質		
Fig.58	440	5	B	0888477	浅鉢	米褐色	砂粒	津波	ヨコナダ	わずかに赤色顔料
	441	174	B	088	浅鉢	茶褐色	細砂粒	粗	ナダ	赤色顔料
	442	6	B	088	浅鉢	淡褐色	暗灰色	ナダ 深波	ナダ	赤色顔料
	443	26	B	0880143	浅鉢	米褐色	灰褐色	横波	ナダ 研磨	赤色顔料
	444	8	B	088	浅鉢	黑色	深褐色	津波	ナダ	赤色顔料
	445	173	B	088	浅鉢	灰色	細砂粒少	研磨?	ナダ	赤色顔料
	446	177	B	088	空	白色	砂粒	研磨	ナダ	赤色顔料
	447	178	B	088	空	白色	砂粒少	研磨	ナダ	赤色顔料
	448	36	B	088上R122	浅鉢	米褐色	細砂粒	研磨	ナダ	赤色顔料
	449	38	B	0880534	鉢	米褐色	砂粒	研磨か 深波	ナダ	赤色顔料
	450	21	B	088上R127	鉢	米褐色	細砂粒	津波	ナダ	赤色顔料
	451	175	B	088	鉢	米褐色	細砂粒	粗	ナダ	赤色顔料
	452	25	B	088	鉢	米褐色	砂粒	研磨	ナダ	赤色顔料
	453	39	B	0888491	鉢	淡黄色	砂粒	研磨	ナダ	赤色顔料
	454	190	B	088	鉢	白色	砂粒	粗	ナダ	赤色顔料
	455	194	B	088上R169	鉢	淡黄色	砂粒	相	ナダ	ミニチュア?
Fig.59	456	168	B	0888581_486	底鉢	米褐色	砂粒多	ケヌ リ研磨	ホコナダ	雨の
	457	170	B	088上R413	底鉢	米褐色	細砂粒	粗良	ナダ	ヘラナダ
	458	195	B	088	底鉢	米褐色	砂粒多	削り ナダ?	ナダ	わずかに赤波
	459	100	B	088上R230	底鉢	米褐色	砂粒粗い	津波 相	研付着	底鉢
	460	105	B	088上R229	底鉢	米褐色	砂粒大	条波 津波 刈り	ナダ	底鉢
	461	101	E	0888170_R470	底鉢	米褐色	砂粒大	粗	ナダ	底鉢
	462	107	E	0888355	底鉢	米褐色	砂粒大	粗	ナダ	2次調整
	463	114	E	088_L260	底鉢	米褐色	砂粒	粗	ナダ	底鉢に隣子板
	464	102	E	088201	底鉢	米褐色	砂粒	粗	ナダ	へらな?
	465	109	E	088	底鉢	米褐色	砂粒	粗	ナダ	刈り
	466	106	E	088	底鉢	米褐色	砂粒多	粗 削り	ナダ?	2次刈成
	467	100	E	088上R70	底鉢	米褐色	砂粒	粗	ナダ	底鉢 相
	468	198	E	088	底鉢	米褐色	砂粒	粗	ナダ	底鉢 相
	469	118	E	088623	底鉢	米褐色	砂粒	粗	ナダ	底鉢 相
	470	201	E	088	底鉢	米褐色	砂粒	粗	ナダ	底鉢 相
	471	113	E	088640	底鉢	米褐色	砂粒	粗	ナダ	底鉢 相
	472	104	E	088893_R282	底鉢	米褐色	砂粒	粗	ナダ	底鉢 相
	473	527	E	0888527	底鉢	米褐色	砂粒	粗	ナダ	底鉢 相
	474	111	E	0886443	底鉢	米褐色	砂粒	粗	ナダ	底鉢 相
	475	109	E	088上R202	底鉢	米褐色	砂粒少	粗	ナダ?	底鉢
	476	104	E	088上R183	底鉢	米褐色	砂粒	粗	ナダ	底鉢
	477	110	E	088	底鉢	米褐色	砂粒粗い	粗	ナダ	底鉢
	478	103	E	0888201_488	底鉢	米褐色	砂粒粗い	粗	ナダ	底鉢付着 不安定
	479	112	E	088上R194	底鉢	米褐色	砂粒粗い	粗	ナダ	底鉢付着 不安定
	480	116	E	088上	洗鉢底鉢	米褐色	砂粒粗い	粗	ナダ	底鉢付着 不安定
	481	115	E	088868	洗鉢底鉢	米褐色	砂粒粗い	粗	ナダ	底鉢付着 不安定
	482	117	E	0888117	洗鉢底鉢	米褐色	砂粒粗い	粗	ナダ	底鉢付着 不安定
	483	200	E	088	洗鉢底鉢	米褐色	砂粒	粗	ナダ	底鉢付着 不安定
Fig.60	484	593	E	010 7層	壁	米褐色	砂粒	削り ナダ	削り	保付着
	485	692	E	010 7層	壁	米褐色	砂粒	朱波	相	相
	487	707	E	010 7層	壁	米褐色	砂粒粗い	削り 削り?	相	保付着
	488	585	E	010 7層	壁	米褐色	砂粒	削り 削り?	相	保付着
	489	696	E	010 7層	壁	米褐色	砂粒	削り 削り?	相	保付着
	490	585	E	010 7層	壁	米褐色	砂粒	削り 削り?	相	保付着
	491	595	E	010 033	壁	米褐色	砂粒	削り 削り?	相	保付着
	492	701	E	010 033	壁	米褐色	砂粒	削り 削り?	相	保付着
	493	702	E	010 033	壁	米褐色	砂粒	削り 削り?	相	保付着
	494	700	E	010 033	壁	米褐色	砂粒	削り 削り?	相	保付着
	495	691	E	010 033	壁	米褐色	砂粒	削り 削り?	相	保付着
	496	690	E	010 7層	壁	米褐色	砂粒	削り 削り?	相	保付着
	497	691	E	010 7層	壁	米褐色	砂粒	削り 削り?	相	2枚貼込み
	498	705	E	010 7層	壁	米褐色	砂粒	削り 削り?	相	米波
	499	714	E	010 7層	壁	米褐色	砂粒	削り 削り?	相	保付着 塗化物
	500	698	E	010 10.11層	壁	米褐色	砂粒	削り 削り?	相	保付着 塗化物
	501	703	E	010 10.11層	壁	米褐色	砂粒少	削り 削り?	相	保付着
	502	713	E	010 7層	壁	米褐色	砂粒多	削り 削り?	相	ナダ? 剥離
	503	706	E	010 7層	壁	米褐色	砂粒	ナダ?	ナダ?	保付着
	504	718	E	010 7層	壁	米褐色	砂粒	ナダ?	ナダ?	保付着
	505	704	E	010 7層	壁	米褐色	砂粒	ナダ?	ナダ?	保付着
	506	718	E	010 7層	壁	米褐色	砂粒少	削り 削り?	相	朱波
	507	716	E	010 033	壁	米褐色	砂粒少	削り 削り?	相	朱波
	508	715	E	010 033	壁	米褐色	砂粒少	削り 削り?	相	朱波
	509	711	E	010 033	壁	米褐色	砂粒少	削り 削り?	相	朱波
	510	712	E	010 4層	壁	米褐色	砂粒少	削り 削り?	相	朱波
	511	710	E	010 4層	壁	米褐色	砂粒少	削り 削り?	相	朱波
	512	709	E	010 4層	壁	米褐色	砂粒少	削り 削り?	相	朱波
	513	741	E	010 4層	壁	米褐色	砂粒少	削り 削り?	相	朱波
Fig.61	514	742	E	010	壁	米褐色	砂粒	粗	ナダ?	柱子注灰
	515	803	E	010 033	壁	米褐色	砂粒	角質石	研磨	柱子注灰
	516	775	E	010 4層	壁	米褐色	砂粒	粗	ナダ?	柱子注灰 わずかに飛散
	517	727	E	010 7層	壁	米褐色	砂粒	研磨	ナダ?	柱子注灰
	518	726	E	010 7層	壁	米褐色	砂粒	研磨	相	柱子注灰
	519	722	E	010 7層	壁	米褐色	砂粒	研磨	相	柱子注灰
	520	724	E	010 7層	壁	米褐色	砂粒	研磨	相	柱子注灰
	521	748	E	010 11層	壁	米褐色	砂粒	研磨	相	柱子注灰
	522	744	E	010	壁	米褐色	砂粒	研磨	相	柱子注灰
	523	725	E	010	壁	米褐色	砂粒	研磨	相	柱子注灰
	524	725	E	010 7層	壁	米褐色	砂粒	研磨	相	柱子注灰
	525	725	E	010 4層	壁	米褐色	砂粒	研磨	相	柱子注灰
	526	732	E	010 4層	壁	米褐色	砂粒	研磨	相	柱子注灰
	527	736	E	010 033	壁	米褐色	砂粒	相	柱子注灰	柱子注灰

番号	番号	年	区	造	株	色	土	外観調整	内観調整	備考
528	721		I	010	7層	大型造	淡灰褐色	砂粒	粗	研磨 ナデ
529	720		I	010	7層	造	灰褐色	砂粒	研磨	赤色顔料
530	733		I	010	4層	造	灰褐色	砂粒	研磨	
531	774		I	010		底	灰褐色	細粒較少量	研磨	調ナダ
532	776		I	010	7層	造	淡灰褐色	粗良	研磨	赤色顔料?
533	729		I	010	11層	造	灰褐色	砂粒	研磨	赤色顔料?
534	728		I	010	11層	造	淡灰褐色	砂粒	研磨	赤色顔料
535	725		I	010	11層	造	淡灰褐色	砂粒	研磨	赤色顔料
536	717		I	010	10,11層	造	淡灰褐色	淡灰褐色	砂粒	研磨 ナデ
537	740		I	010	7層	种?	灰褐色	砂粒	研磨 ナデ	研磨
538	751		I	010	11層	种?or造	灰褐色	砂粒	研磨 ナデ	赤色顔料
539	728		I	010	10層	造	灰褐色	粗良	研磨	
540	719		I	010		底	灰褐色	砂粒	研磨	研磨 ナダ
541	737		I	010	003	种?	灰褐色	砂粒	研磨	研磨 ナダ
542	769		I	010	7層	种?	灰褐色	砂粒	研磨	赤色顔料?
543	729		I	010	11層	种?	灰褐色	砂粒	研磨	赤色顔料?
544	754		I	010	7層	浅浮	暗褐色	砂粒	研磨	赤色顔料?
545	756		I	010	003	浅浮	暗褐色	砂粒	研磨	赤色顔料
546	743		I	010		种?	灰褐色	粗良	研磨	赤色顔料
547	753		I	010		种?	灰褐色	粗良	研磨	赤色顔料
548	749		I	010	7層	浅浮	暗褐色	粗良	研磨	赤色顔料?
549	748		I	010	7層	浅浮	暗褐色	粗良	研磨	赤色顔料?
550	758		I	010	11層	浅浮	暗褐色	粗良	研磨	赤色顔料?
551	751		I	010	2層	浅浮	暗褐色	砂粒	研磨	赤色顔料?
552	751		I	010	7層	浅浮	暗褐色	砂粒	研磨	赤色顔料?
553	750		I	010	003	浅浮	暗褐色	砂粒	研磨	赤色顔料?
554	740		I	010	4層	浅浮	暗褐色	砂粒	研磨	赤色顔料?
555	757		I	010	003	浅浮	暗褐色	砂粒	研磨	赤色顔料?
556	770		I	010	11層	浅浮	暗褐色	砂粒	研磨	赤色顔料?
557	770		I	010	11層	浅浮	暗褐色	砂粒	研磨	赤色顔料?
558	728		I	010		种?	灰褐色	粗良	研磨	赤色顔料?
559	771		I	010	7層	种?	灰褐色	砂粒	研磨 ナダ	赤色顔料?
560	773		I	010	7層	种?	灰褐色	砂粒	研磨 ナダ	赤色顔料?
561	745		I	010	003下	高环	灰褐色	砂粒	研磨	赤色顔料?
562	747		I	010	003	高环	灰褐色	粗良	研磨	赤色顔料?
563	786		I	010	7層	底座	灰褐色	砂粒	研磨	赤色顔料?
564	777		I	010	003	底座	灰褐色	砂粒	研磨	赤色顔料?
565	778		I	010	7層	底座	灰褐色	砂粒	研磨	赤色顔料?
566	785		I	010	7層	底座	灰褐色	砂粒	研磨	赤色顔料?
567	779		I	010	003	底座	灰褐色	砂粒	研磨	赤色顔料?
568	782		I	010	11層	底座	灰褐色	砂粒	研磨	赤色顔料?
569	781		I	010	7層	底座	灰褐色	砂粒	研磨 ナダ	赤色顔料?
570	783		I	010	4層	底座	灰褐色	砂粒	研磨 ナダ	赤色顔料?
571	788		I	010	7層	底座	灰褐色	砂粒	研磨 ナダ	赤色顔料?
572	789		I	010	003	底座	灰褐色	砂粒	研磨 ナダ	赤色顔料?
573	787		I	010	7層	底座	灰褐色	砂粒	研磨 ナダ	赤色顔料?
574	784		I	010	11層	底座	灰褐色	砂粒	研磨 ナダ	赤色顔料?
575	785		I	010	7層	底座	灰褐色	砂粒	研磨 ナダ	赤色顔料?
576	791		I	010	5層	喷漆部	深灰色	砂粒	研磨	赤色顔料?
577	801		I	010	003	喷漆部	深灰色	砂粒	研磨	赤色顔料?
578	790		I	010	7層	喷漆部	深灰色	砂粒	研磨	赤色顔料?
579	793		I	010	7層	喷漆部	深灰色	砂粒	研磨	赤色顔料?
580	795		I	010		喷漆部	深灰色	砂粒	研磨	赤色顔料?
581	792		I	010	7層	喷漆部	深灰色	砂粒	研磨	赤色顔料?
582	796		I	010	11層	深浮	灰褐色	砂粒	粗	研磨 ナダ
583	768		I	010	003	种?	灰褐色	砂粒	粗	赤色顔料?
584	766		I	010	4層	深浮	灰褐色	砂粒	粗	赤色顔料?
585	761		I	010	003	深浮	灰褐色	粗良	研磨	
586	764		I	010		深浮	灰褐色	砂粒	粗	
587	766		I	010	4層	底	灰褐色	砂粒	粗	
588	759		I	010	7層	底	灰褐色	砂粒	粗	
589	765		I	010		底	灰褐色	砂粒	粗	
590	767		I	010	4層	底	灰褐色	砂粒	粗	
591	762		I	010	7層	底	灰褐色	砂粒	粗	
592	764		I	010	003	底	灰褐色	砂粒	粗	
593	766		I	010	7層	底	灰褐色	砂粒	粗	
594	768		I	010	7層	底	灰褐色	砂粒	粗	
595	691		I	082	2171	型?	灰色	刷毛	粗	ヘラナダ
596	597		I	082	R116	型?	灰色	刷毛	粗	ヘラナダ
597	594		I	082		型?	灰色	刷毛	粗	ヘラナダ
598	603		I	082		型?	灰色	刷毛	粗	ヘラナダ
599	596		I	082		型?	灰色	刷毛	粗	ヘラナダ
600	331		I	082	10層	型?	灰色	刷毛	粗	ヘラナダ
601	395		I	082		型?	灰色	刷毛	粗	ヘラナダ
602	616		I	082		型?	灰色	刷毛	粗	ヘラナダ
603	628		I	082	3層	型?	灰色	刷毛	粗	ヘラナダ
604	615		I	082	3層	型?	灰色	刷毛	粗	ヘラナダ
605	607		I	082	2層	型?	灰色	刷毛	粗	ヘラナダ
606	617		I	082		型?	灰色	刷毛	粗	ヘラナダ
607	609		I	082	3層	型?	灰色	刷毛	粗	ヘラナダ
608	610		I	082		型?	灰色	刷毛	粗	ヘラナダ
609	611		I	082		型?	灰色	刷毛	粗	ヘラナダ
610	686		I	082	R174	型?	白色	刷毛	粗	ヘラナダ
611	619		I	082	3層	型?	白色	刷毛	粗	ヘラナダ
612	601		I	082		型?	白色	刷毛	粗	ヘラナダ
613	598		I	082	2層	型?	白色	刷毛	粗	ヘラナダ
614	602		I	082		型?	白色	刷毛	粗	ヘラナダ
615	614		I	082		型?	白色	刷毛	粗	ヘラナダ

図号	番号	年月	区	通 務	職 業	色 調	施 土	外因調整	内因調整	備 号	
Fig.63	616	612	■	682	3M	紺	暗褐色	砂粒	ナ?/?無	ナデ	
	617	613	■	682		紺	暗褐色	砂粒少	ナ?/?無	丁寧な植ナデ	
	618	600	■	682		紺	暗褐色	砂質	研磨	根ナデ	
	619	618	■	682		紺	黑色、茶褐色	砂粒	ナデ	赤色顔料	
	620	598	■	682		紺	黑色、茶褐色	砂粒	ナデ		
	621	599	■	682		紺	黑色、茶褐色	砂粒	ナデ		
	622	605	■	682	3M	紺	黑色、茶褐色	砂粒多	ナデ		
Fig.64	623	232	■	687	R32,33	紺	黄褐色	淡黄褐色	砂粒多含む	根	根付番
	624	215	■	687	2M,R78	紺	暗褐色	砂粒	ヘ?/?無		
	625	230	■	687	K32	紺	暗黃褐色	砂粒	研ナデ	根ナデ	
	626	216	■	687	R77,76	紺	暗黃褐色	砂粒	研ナデ ?無	ナデ	
	627	231	■	687	R71	紺	暗黃褐色	砂粒多	研ナデ	ナ?/?無	
	628	239	■	687	K28	紺	暗黃褐色	砂粒多含む	研ナデ	ナデ	
	629	233	■	687	K74,83	紺	暗黃褐色	砂粒	研ナデ	ナ?/?無	
	630	247	■	687	K74	紺	暗黃褐色	砂粒	根	根	
	631	251	■	687	R75	紺	暗黃褐色	砂粒	研ナデ	ナデ	
	632	246	■	687		紺	暗黃褐色	砂粒	ナデ	ナデ	
	633	245	■	687		紺	暗黃褐色	砂粒	研ナデ	ナデ	
	634	243	■	687	R27	紺	暗黃褐色	砂粒	研ナデ	ナ?/?無	
	635	244	■	687	R135	紺	暗黃褐色	砂粒	根	口唇部取り	
	636	249	■	687		紺	暗黃褐色	砂粒	研ナデ	無縫目	
	637	248	■	687	R25	紺	暗黃褐色	砂粒	根		
	638	209	■	687	R4	紺	暗黃褐色	砂粒	研ナデ		
	639	211	■	687	R50	紺	暗黃褐色	砂粒	研ナデ		
	640	255	■	687	R55	紺	暗黃褐色	砂粒	研ナデ		
	641	219	■	687	R57	紺	暗黃褐色	砂粒	研ナデ		
	642	218	■	687	K91	紺	暗黃褐色	砂粒多	研ナデ		
	643	222	■	687	R72	紺	暗黃褐色	砂粒	研ナデ		
	644	222	■	687	R55	紺	暗黃褐色	砂粒	研ナデ		
	645	221	■	687	R106	紺	暗黃褐色	砂粒	研ナデ		
	646	224	■	687	R54	紺	暗黃褐色	砂粒	研ナデ		
	647	220	■	687	R77	紺	暗黃褐色	砂粒	ナ?/?無		
	648	220	■	687	R63	紺	暗黃褐色	砂粒	研ナデ		
	649	228	■	687	R57	紺	暗黃褐色	砂粒	研ナデ		
Fig.65	650	240	■	687	R73	紺	暗黃褐色	砂粒	研ナデ ?無	根ナデ	
	651	231	■	687	R81,142,95,7	紺	暗黃褐色	砂粒多	ナデ	ナデ	
	652	229	■	687	K79,68	紺	暗褐色	砂粒多	ナデ	根放	
	653	230	■	687	R85,86,87	紺	暗黃褐色	砂粒多	ナデ		
	654	234	■	687	R73,160,60,88	紺	暗褐色	砂粒	研磨	研磨 細ナデ	
	655	207	■	687	R66	紺	暗褐色	砂粒	研磨	ナ?/?無	
	656	208	■	687		紺	暗褐色	砂粒多	研ナデ	ナ?/?無	
	657	227	■	687	R13	紺	暗褐色	砂粒少	研ナデ	ナ?/?無	
	658	226	■	687	R66	紺	暗褐色	砂粒少	研ナデ	ナ?/?無	
	659	206	■	687	R63	紺	暗褐色	砂粒少含む	研ナデ	ナ?/?無	
Fig.66	660	260	■	687	R53,162,79	紺	暗褐色	砂粒	研ナデ	根ナデ	
	661	236	■	687	082	紺	暗褐色	砂粒	研ナデ	3条文化部・山形文	
	662	237	■	687	R56,48	紺	暗褐色	砂粒	研ナデ	3条文化部・山形文	
	663	210	■	687	R64	紺	暗褐色	砂粒	研ナデ	0622回・側放	
	664	205	■	687	R61	紺	暗褐色	砂粒	研磨	11部に2条の沈継	
	665	235	■	687	R41	紺	暗褐色	砂粒	研ナデ	3条文化部・4条沈継	
	666	203	■	687	R44,65,80	紺	暗褐色	砂粒	研ナデ	根毛茎	
	667	204	■	687	R55	紺	暗褐色	砂粒多	研ナデ	研磨	
	668	685	■	687	R3	紺	暗褐色	砂粒少	粗糸	赤色顔料	
	669	213	■	687		紺	暗褐色	砂粒少	研磨		
	670	212	■	687	R9	紺	暗褐色	砂粒少	研磨		
	671	214	■	687		紺	暗褐色	砂粒少	粗糸		
	672	211	■	687	R118	紺	暗褐色	砂粒少	研ナデ		
	673	241	■	687	R77	紺	暗褐色	砂粒少	ヘ?/?ナデ	面取のあり	
Fig.67	674	581	■	687	052	紺	暗褐色	砂粒	研ナデ	根付番	
	675	580	■	687	054	紺	暗褐色	砂粒	ナデ		
	676	564	■	687	052	紺	暗褐色	砂粒	研ナデ		
	677	574	■	687	054	紺	暗褐色	砂粒	研磨		
	678	562	■	687	055	紺	暗褐色	砂粒	研磨		
	679	583	■	687	055	紺	暗褐色	砂粒	研磨	ナ?/?無	
	680	584	■	687	056	紺	暗褐色	砂粒	研磨	ナ?/?無	
	681	588	■	687	102	紺	暗褐色	砂粒多	研磨	ナ?/?無	
	682	597	■	687	103	紺	暗褐色	砂粒	研磨	ナ?/?無	
	683	555	■	687	103	紺	暗褐色	砂粒	研磨	ナ?/?無	
	684	556	■	687	103	紺	暗褐色	砂粒	研磨	ナ?/?無	
	685	564	■	687	103	紺	暗褐色	砂粒少	研磨	ナ?/?無	
	686	561	■	687	105	紺	暗褐色	砂粒少	研磨	ナ?/?無	
	687	562	■	687	105	紺	暗褐色	砂粒少	研磨	ナ?/?無	
	688	563	■	687	105	紺	暗褐色	砂粒少	研磨	ナ?/?無	
	689	560	■	687	105	紺	暗褐色	砂粒少	研磨	ナ?/?無	
	690	566	■	687	106	紺	暗褐色	砂粒少	研磨	ナ?/?無	
	691	587	■	687	106	紺	暗褐色	砂粒少	研磨	ナ?/?無	

Tab.5 出土土製品観察表

番号	番号	区	出土地点	資材	法量(cm)	重量(g)	備考
Fig.88	1	1	001 2号B91	土版円盤	盤	66×63×7	38.37
	2	4	010	土版円盤	盤	57×59×6	27.5
	3	2	001 3区 4層	土版円盤	盤	50×57×5	19.51
	4	5	001 4層	土版円盤	盤	57×53×6	28.3
	5	3	001	土版円盤	盤	42×40×7	14.92
	6	8	001 7号	易碎品	52×(27)×	19.89	砂れ多い
	7	9	001	土製品	30×21×15	8.39	砂れ少ない
	8	7	078	骨灰土器	48×36×30	48.68	砂れ少ない
	9	6	001	土玉	14×13×13	2.17	径:~2mmの碎片。

(3) 石製品 (Fig. 69~72)

今回の調査ではSD001を中心にパンケース5箱ほどの石器が出土した。荒掘中に見過ごしたものも多いと思われる。製品についてはほとんど図示したが、使用痕がある薄片等は図示できなかった。量的には黒曜石の薄片類が最も多く出土している。黒曜石は原石が5から7cm大の角礫で、腰岳産と考えられる。出土量の計数や薄片等については時間等の都合で割愛せざるを得なかった。

1から4は磨製石鏃でいずれもSD001-II区からの出土である。細身の柳葉形のものと3のように幅広のものがある。丁寧な磨きにより鋭い質感をだす。5は岩を薄く磨き径3mmの孔を設ける。装飾具と考えられる。6から12は外湾刃の石包丁である。12を除いて磨耗する。6、7は2孔と考えられ、8は1孔を穿つ。9から11は未製品と思われる。12は擦り切りで孔をあける。15は頁岩製の石斧である。14は丁寧な敲打を施し体部の一部に研磨をかける。15は基部側に敲打痕を残すが刃部は研磨し両刃をつくる。16は頁岩製で緩やかに湾曲したカーブの外側の側面を研磨し、直線的な面をつくる。敲打痕を全面に残し器面は剥離がすむ。石鎌の未製品と考えられる。SX088とSD001の11層の破片が接合した。17は敲石で全ての側面を使用している。18から20は磁石である。18は砂岩製で1面のみを使用している。2kmほど北の絆浜付近に見られる砂岩に類似し、使用面以外は歓穴状の牛痕が広がる。19は2面を使用し一部火を受ける。20は断面6角形を呈し、各面を使用する。21は花崗岩の円錐を利用した叩き石で側面に敲打痕が残る。

23から38は打製石鏃で黒曜石、安山岩、古銅輝緑凝灰岩製のものがある。39は石錐。40は細石刃で磨耗が顕著で流れ混みと考えられる。41は石匙、42は碧玉製の管玉である。

Tab.6 出土石器観察表

種別	番号	地図	区	番号	器種	石材	法 量	重 量	備 考		
									長	幅	
Fig.66	1	I	001		磨製石鏃	砂岩	610×16×9	0.8	基部先端わずかに欠損		
	2	3	001		磨製石鏃	砂岩	610×12×6	6.8	基部欠損		
	3	2	001		磨製石鏃	砂岩	610×14.5×6	6.4	基部欠損		
	4	30	II	001	2#R23	磨製石鏃	砂岩	360×13×6	3.5		
	5	8	1	010	11層	石鏃	44×9×9	4.6			
	6	6	006		4#包丁	頁岩質	530×33×6	37.7			
	7	7	006R619		4#包丁	頁岩質	562×53×6	39.8			
	8	4	001		石包丁	頁岩質	106×50×6	53.1	孔径3.5mm		
	9	41	II	001	3#R22	石包丁未製	頁岩質	550×34×3	12.3	一部研磨	
	10	39	II	001	石包丁未製	頁岩質	660×58×15	22.5			
	11	40	II	001	石包丁未製	頁岩質	630×68×2	17.8			
	12	29	II	001	R523	石包丁	560×52×6	22.8			
	13	14	I	001	018	石包丁	76×30×6	10.4	黒色付着物		
Fig.70	14	32			磨製石斧	礫砂	130×90×10	243.1	丁寧な敲打	一頭深き	
	15	5	I	010	11層	磨製石斧	101×44×22	138.1			
	16	23	II	088+001 4	石鍬	頁岩	134×63×27	338.5			
	17	34	II	001	2#R7R	敲石	80×45×25	170.3			
Fig.71	18	42	II	001	3#X	砂岩	560×30×70	425.0	上部使用	斜面	
	19	37	II	001	2#R47	砂岩	122×60×5	851.2	2#R使用		
	20	38	II	001	2#R47	砂岩	122×60×5	960.6	6#R: 斧頭		
	21	15	I	001	木斧	花崗岩	100×65×52	506.1	0#R:		
	22	36	II	001	005 4#頭	砂岩	709×55×39	336.2	3面を使用	敲打痕	
Fig.72	23	12	II	001	1#頭	石鏃	210×21×5.7	1.4			
	24	13	II	001	2#頭	安山岩	21×14.5×3	0.6			
	25	16	I	001	2#R11	石鏃	27×30×2	1.1	主頭部破損		
	26	21	II	001	1#頭	石鏃	19×18×2	0.4			
	27	22	I	001	1#頭	石鏃	19×13×2	0.4			
	28	24	II	001	R26	石鏃	20×22×3	1.3			
	29	27	II	001	R20	石鏃	22×17×5	1.2			
	30	28		068		石鏃	18×13×2.5	0.5			
	31	20	I	001	1#頭 1#斧	石鏃	22×18×5×4	1			
	32	17		068		石鏃	19×14×2.5	0.7			
	33	25		001	R133	石鏃	31×27×7	5.9			
	34	10	II	070	石鏃	17×17×4.5	0.87				
	35	19	T		石鏃	黑曜石	25×18×3	0.96			
	36	18			石鏃	黑曜石	29×12×3	0.4			
	37	9	I	013	石鏃	安山岩	30×10×7	2.05			
	38	11	II	表抜	石鏃	黑曜石	30×17×5	1.27			
	39	26			石鏃	黑曜石	45×14×7	0.64			
	40	33	II	001	石匙	黑曜石	28×8×5×2	0.42	ローリング質		
	41	31	II	082	石匙	安山岩	56×39×5	12.95			
	42	15		001	碧玉	碧玉	6.5×3×1.5	0.07			

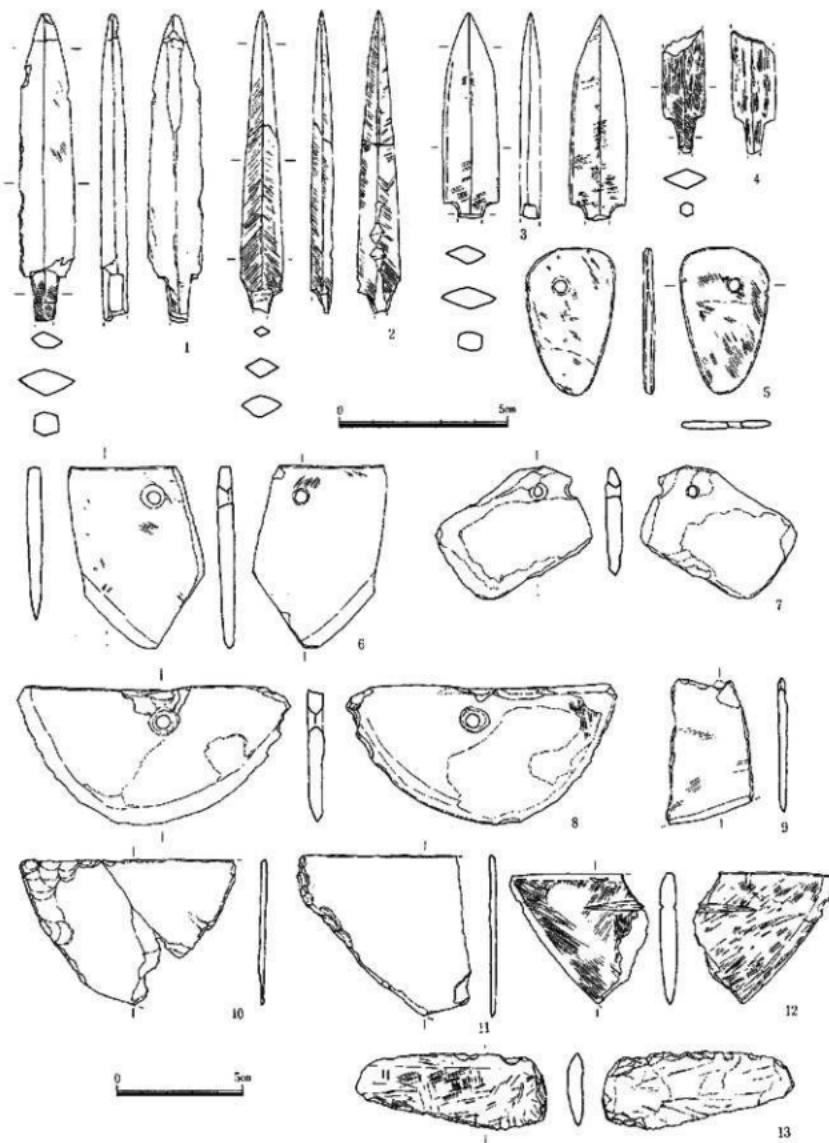


Fig. 69 出土石器実測図1(2/3 1/2)

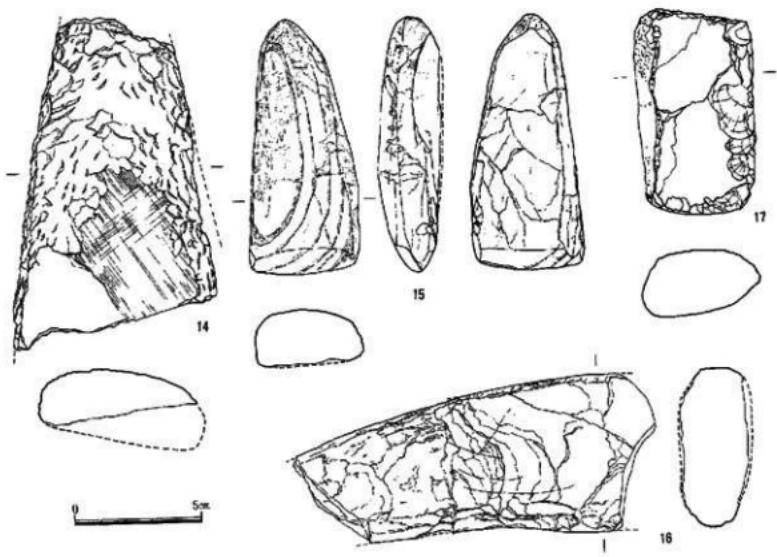


Fig. 70 出土石器実測図2(1/2)

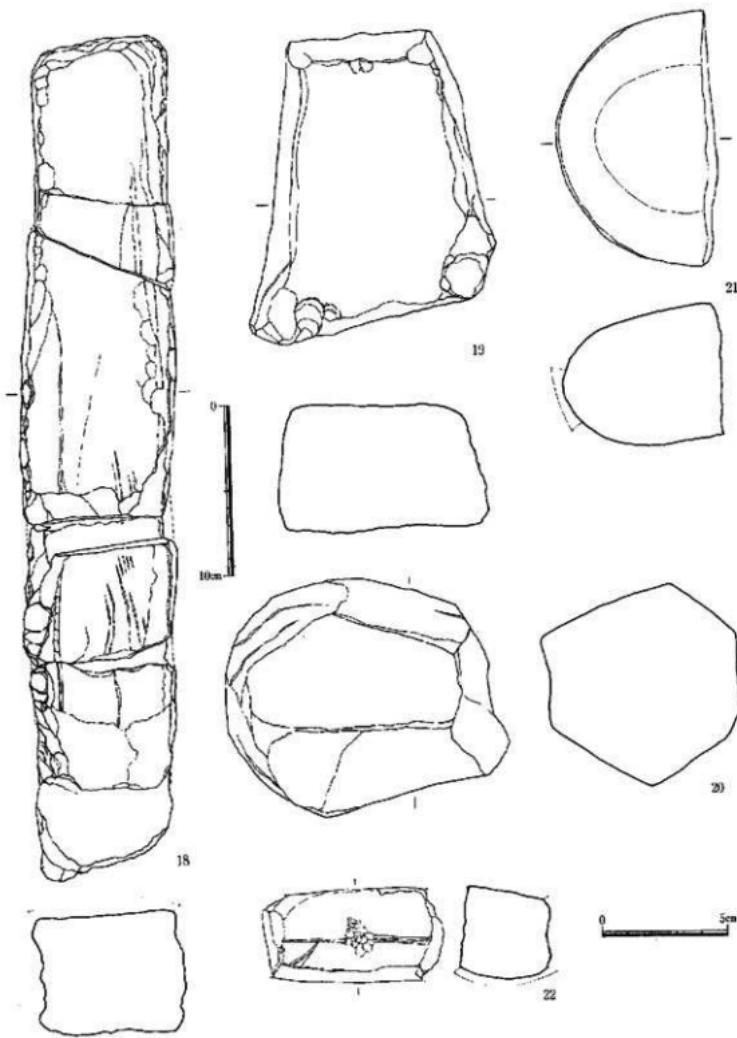


Fig. 71 出土石器実測図3(1/2 1/3)

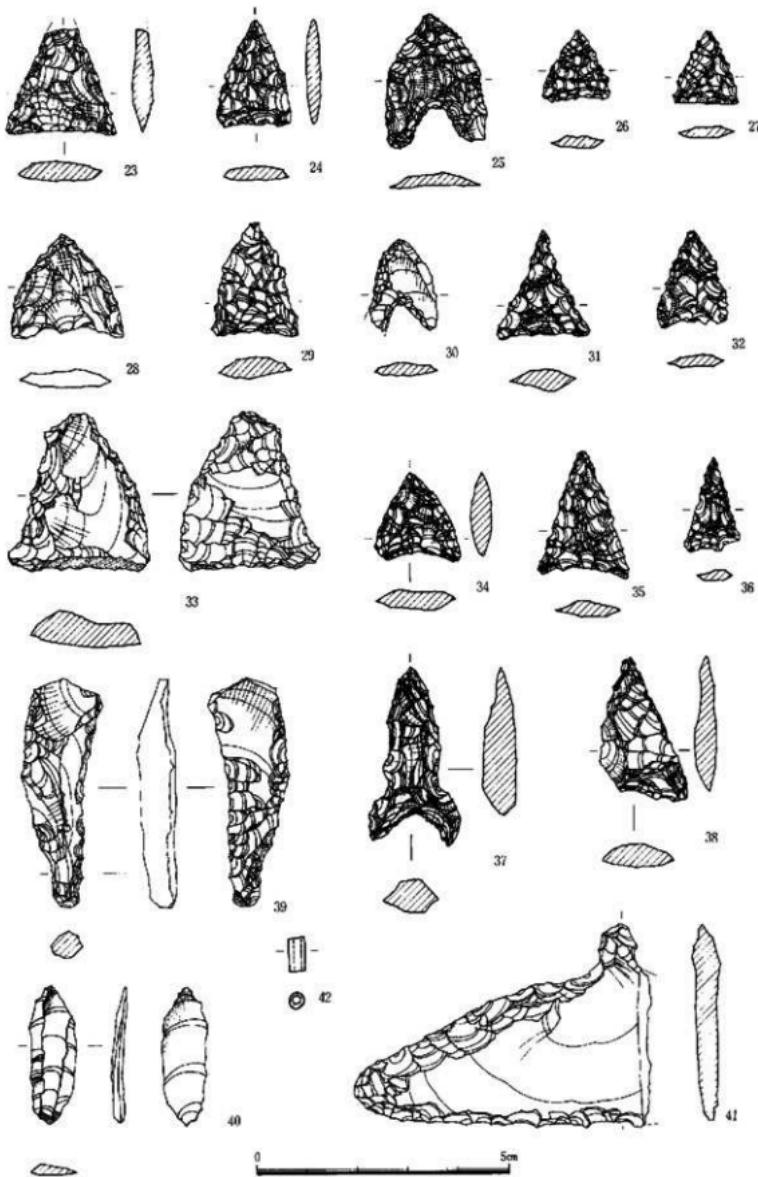


Fig. 72 出土石器実測図4(1/1)

(4) 木製品 (Fig. 73~78, Tab. 7)

本調査においては、I・II区の自然流路から、突堤文土器期から弥生時代前期前半期にかけての大製品が流木等に混在した形で出土した。丸杭・矢板杭については一部のみを図化し、他の木製品については可能な限り図化した。以下、図化した64点について、みていくことにする。なお、木製品は本文中においては、W 1~W64の通し番号を付しているが、ここでは、Wを取り、二桁で述べていく（例 W 1→01, W11→11）。

農具は、起耕具として諸手鋤（Fig. 73）・鋤（Fig. 74）が、整地具として机（Fig. 73）があり、机・鋤などの未製品と素材がある。まず、起耕具および起耕具未製品からみていくことにする。02はカシの征目取り材を用いた諸手鋤で、円形台の着柄孔隆起部をもっている。幅9cmが遺存しているが、幅15cm、長さ37cm前後のやや幅広で内湾する型といえよう。01も同型の諸手鋤と考えられるが、平鋸の可能性もある。07はカシの板目取り材を用いた一木造り長柄鋤である。柄端部は面取り加工を加え、身部は抄いを意識して丁寧に仕上げられている。刃部端が欠失しているが、肩幅8.2cmで長さ15.2cmの劍先形をなす身部をもつと考えられる。前期後半以降によくみられる一木造り・組合せ式鋤の身部と比較すると幅狭であるが、板目取り材を用材としたためと考えられる。08は07と同様の一木造り長柄鋤の未製品で、クヌギの板目取り材を用いている。15cm前後の割材を、長さ25cm前後を身部用として残し、残りの両側および裁断面に削り加工を加え柄の原形を造り出している。なお、柄端部は面取り加工が加えられ、仕上がりの状態にある。

03・05はカシの征目取り材を用いた机（Fig. 73）で、03は梢円形、05は方形をなし、二点ともやや内湾し、ほぼ中央部に4cm前後の着柄孔を造り出している。着柄孔はほぼ直角であるが、03は左にややずれる状況で着柄されたと考えられる。04は03の柄の残片である。03は周縁すべてが刃部となってしまっており、05は欠失しているところが直線的な刃部をなすと考えられ、打鍛的な使用も可能であり、鋤としても使用された可能性がある。06は長さ54cm前後のカシのみかん割り材を素材とし、素材を横に用い、ほぼ中央部の15cm前後に素材を生かした形で隆起部として残している。さらに、隆起部中央の背から幅4cmで、深さ1cm弱の着柄孔設定が行われている。形状から机の木製品といえよう。12は長さ53.6cm、幅22.2cm、厚さ8.6cmのカシのみかん割り材で、両木口は削り加工を加えて面を揃え、裁断面も粗い削り加工を加え面を揃えている。諸手鋤か机の素材といえよう。22は長さ91.7cm、幅17cmを測るカシの割材で、両木口は粗い削り加工を加えている。しかし、表皮は残っている。農具の素材とすると、07のような一木造り長柄鋤を意図した08の前工程のものか。

09は芯持材を素材とし、両木口に削り加工を加え、片方木口には柄が造り出されていたと考えられるが欠失している。体部には表皮を残しており、抜端部は粗い削り加工のままであることから鉋未製品とした（Fig. 74）。10はカシの征目取り材を素材としている。長さ24cm、幅8.1cm、厚さ6.1cmの長方形をなし、片方木口の中央が欠失しており、柄があったとして、櫛の未製品か一木造り長柄鋤の未製品と考えた。しかし、他端の一部も欠失していることから連式工作物の可能性もあり、本調査出土製品のなかでは15のような製品の製作は可能であり、出土例の増加を待ちたい。

13はカシの征目取り材を素材として、片方を2cm強の肉厚とし、片方を0.7cmまで薄くし、手がかりの造り出しを行っている。片方の肉厚の部分には他を組合せ縛った痕跡はなく、未製品と考えられる。長さが27.6cmであり、肉厚部に組合わせ用の凹型の掘り込みを入れる前工程として櫛柄の未製品とした（Fig. 76）。鎌は石鎌を着装すると考えられるが、木鎌を着装する可能性もある。また、板状の小型の鉄斧がこれにつけば横斧の柄となる。23は径2.65cm前後の直線的な丸太材を素材とし、表皮は残っているものの枝は丁寧に落とし、片方端部は面取り加工を加えている。また、他端は削り加

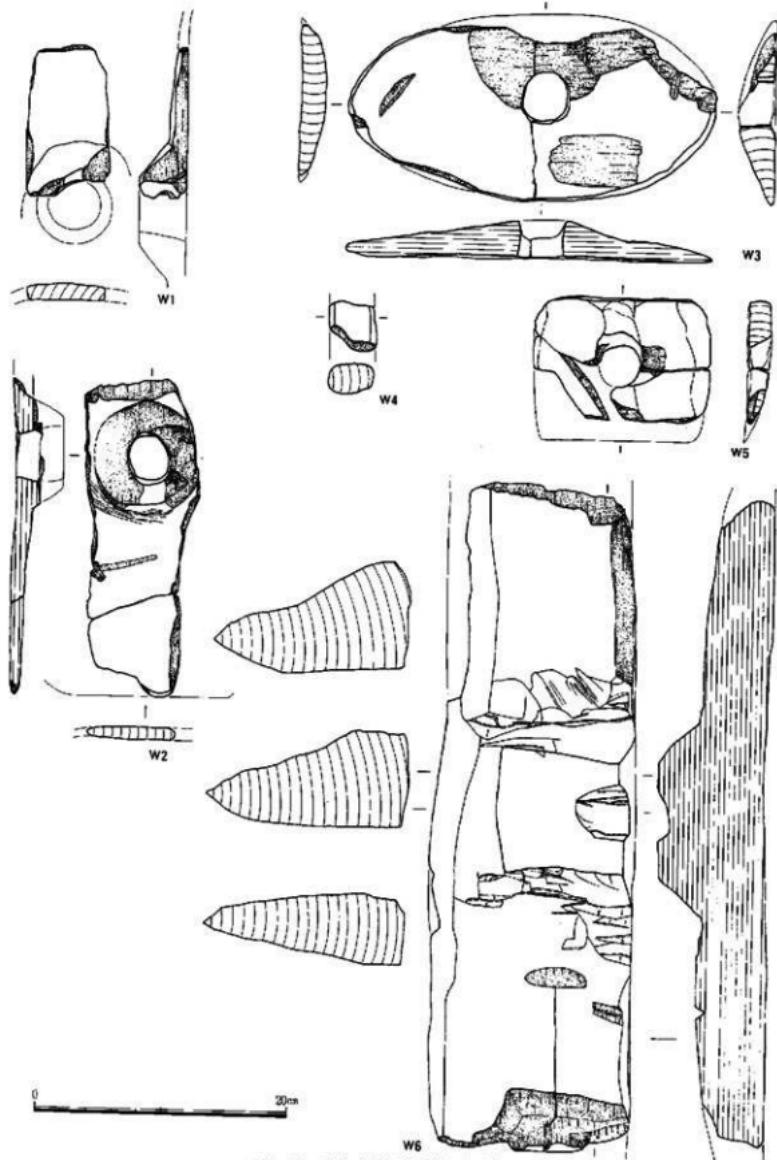


Fig. 73 出土木製品実測図1(1/4)

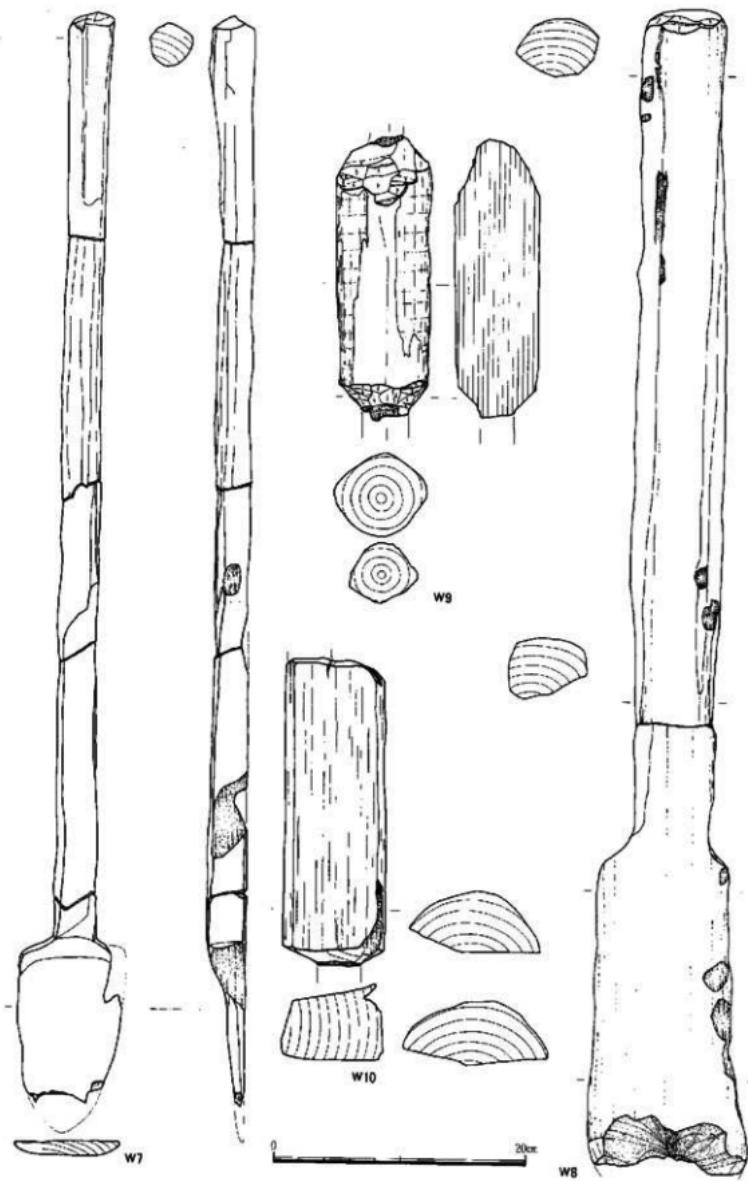


Fig.74 出土木製品実測図2(1/4)

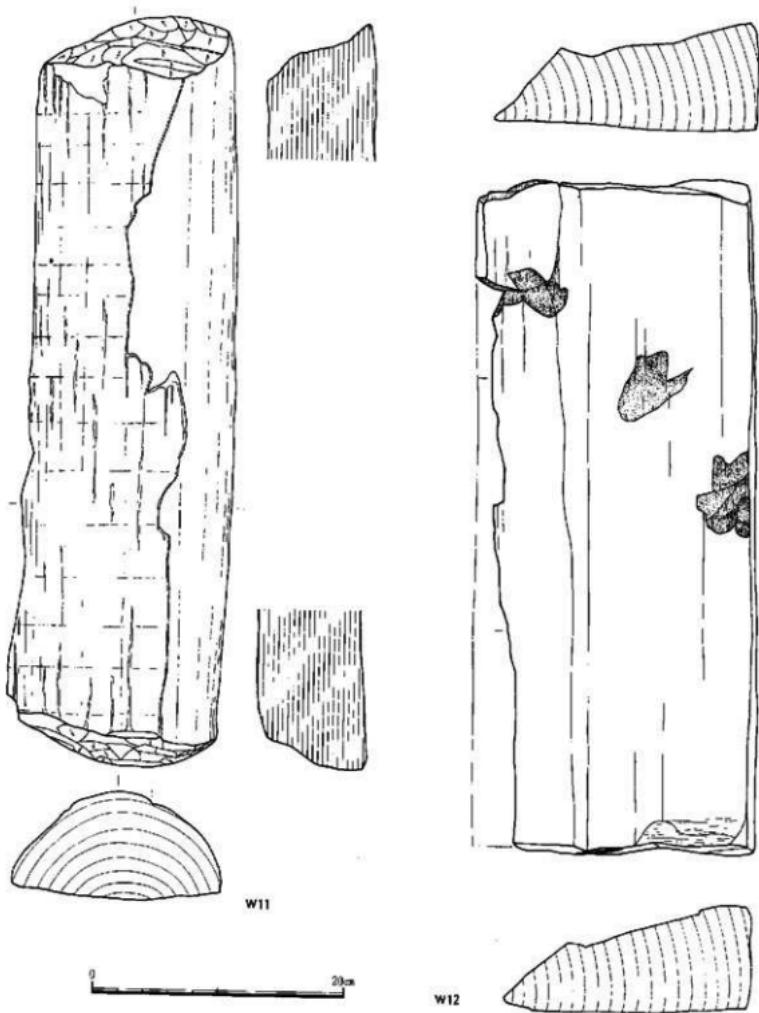


Fig. 75 出土木製品実測図3(1/4)

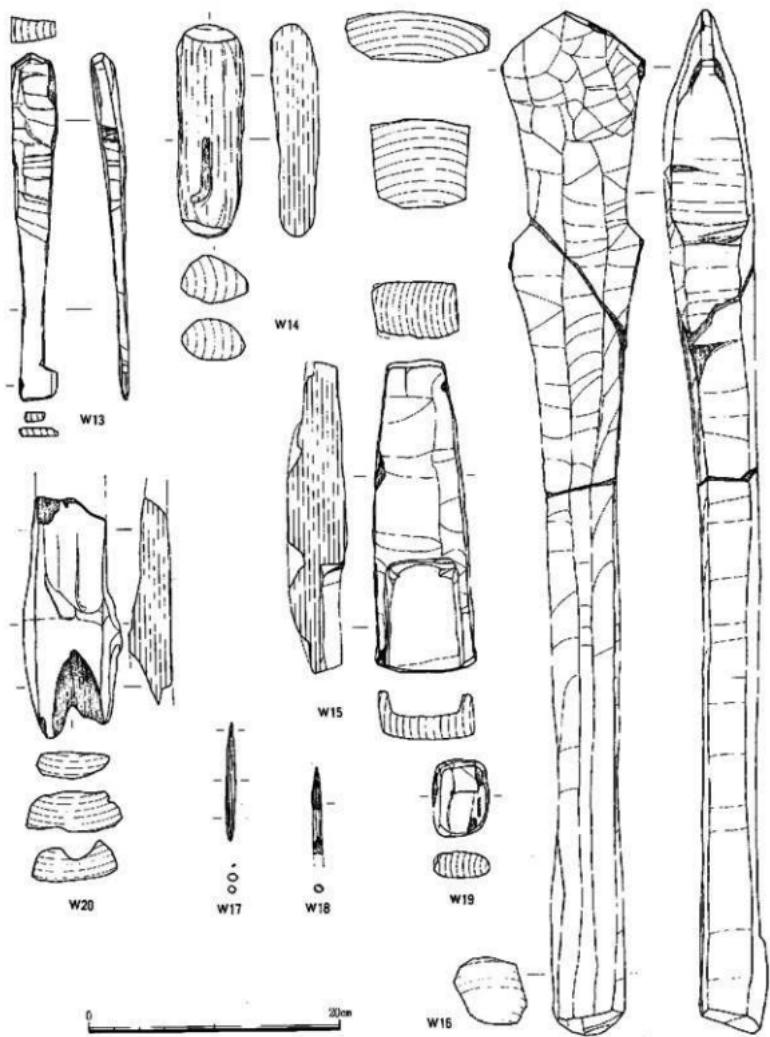


Fig. 76 出土木製品実測図4(1/4)

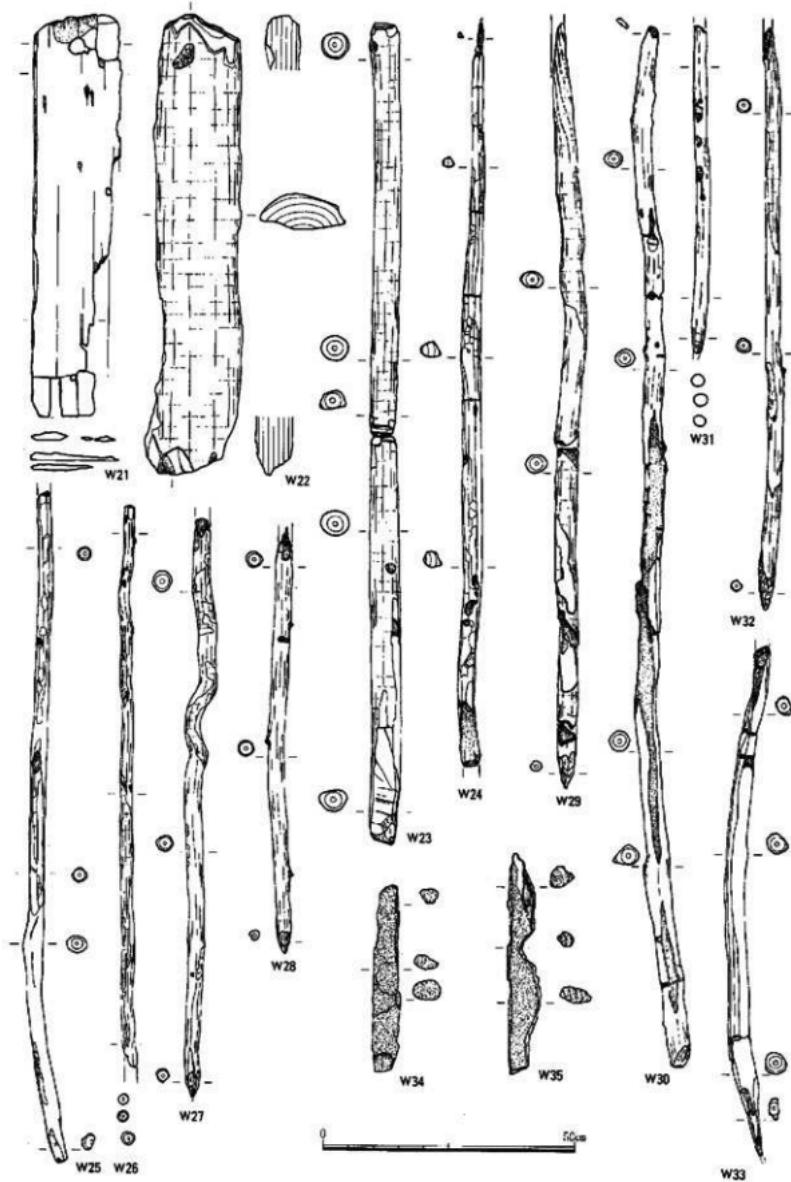


Fig.77 出土木製品実測図5(1/10)

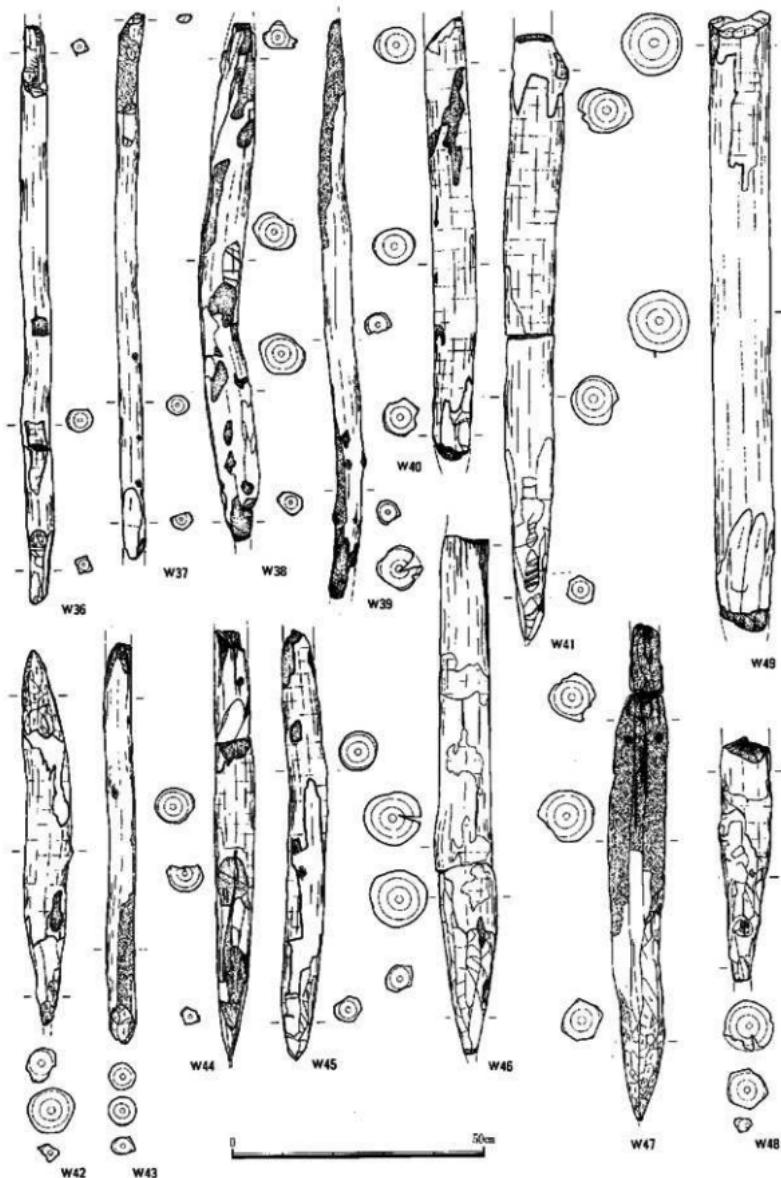


Fig. 78 出土木器実測図6(1/10)

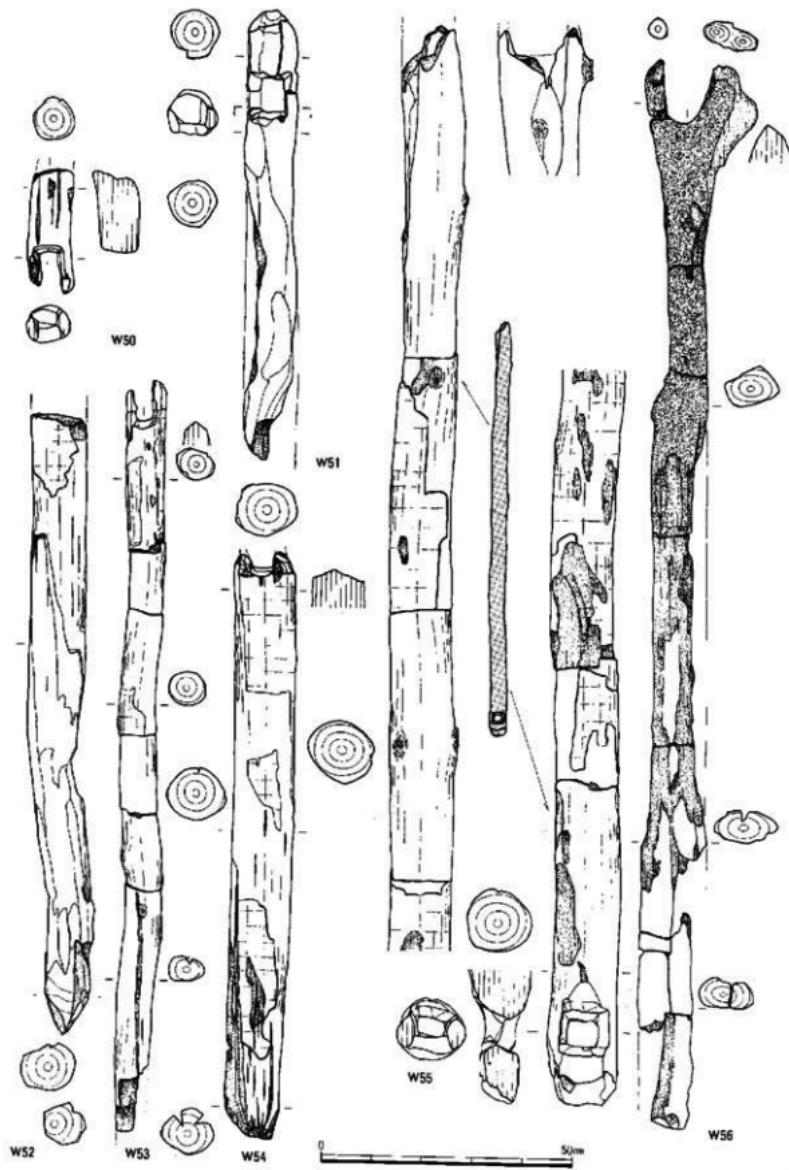


Fig. 79 出土木製品実測図7(1/10)

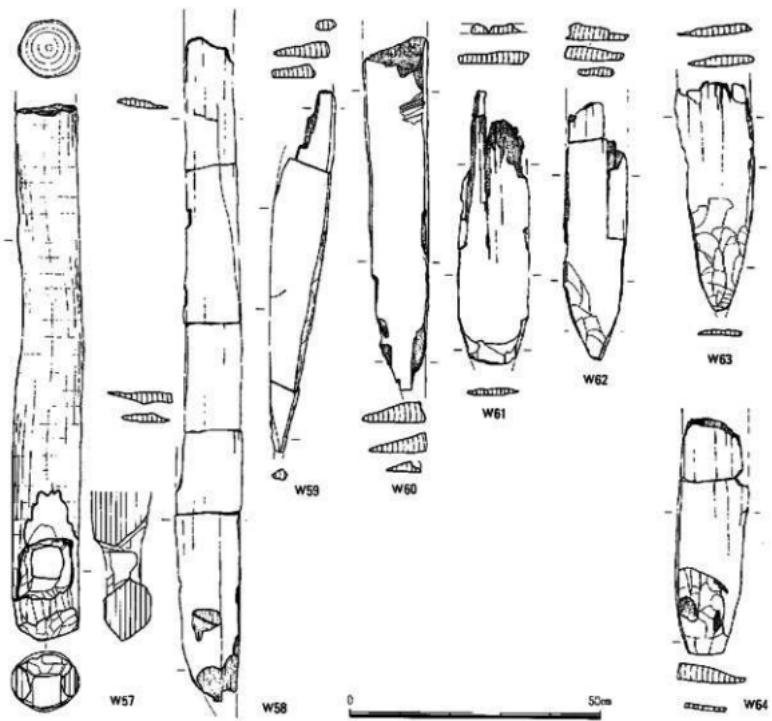


Fig. 80 出土木器実測図8(1/10)

工および面取り加工が加えられ、半分の長さで切断が試みられている。鍛類か軋の柄の未製品と考えられる。

工具は、手斧柄と伐採斧柄（Fig. 76）の未製品がある。15はカシの板日取り材を素材として、浦鉢型に整形し、平坦面に木口から幅6cm、長さ9cm、深さ1.5cm強に掘り込みを造り、木口端部両側には繩縛がかりを造り出している。なお、両側面には繩縛痕が明瞭に残っていることから、膝柄組合せ式手斧柄の台部とした。扁平片刃石斧を着装したとするのが自然であるが、組合せ痕跡でみるとかぎり、頭が丸みをもつものが着装されていたと考えられ、薄手の蛤刃石斧着装か、16はカシの板日取り材を用い、頭端部は幅12cmの三角形に整理し、両側を内湾ぎみに頭端から17cmのところまで抉り、頭端幅に戻し、7cmと肉厚の石斧組合せ部を造り出しているが、組合せ着装孔は穿っていない。柄部も縱方向の削り加工のまま、断面は八角形を呈している。太型蛤刃石斧柄未製品である。前期に木地域で一般的にみられる太型蛤刃石斧柄の形状をもっているが、用材の木取りが異なるほか、石斧組合せ着装部的最大厚が10cm前後あるのが普通だが、7cmと薄めである。雀居遺跡で出土しているような薄手の太型蛤刃石斧を着装すると想定される（Fig. 76）。

狩猟具としては、木鎌（Fig. 76）と弓（Fig. 77）がある。17・18は割材を素材として、縱方向の

丁寧な削り加工を加え、横断面円形に近くなるように整形し、矢柄組合せ部も造り出している。24は柵目取り材を素材とし、削り加工によって横断面三角形から台形になるように整形し、片方端部に弓彌状の造り出しがあることから弓とした。

容器と限定できるものは出土しなかったが、調理具といえる搗り具（Fig. 76）の出土は特記できる。14は柵目取り材を石杵状に整形し、握部と考えられるところは磨き（手ずれによる磨耗か）が加えられ、両端は堅円の搗部状をなし、凸レンズ状をなして光沢をもっている。擂粉木的な用途をもつと考えられるが、擂粉木・杵と区別するために搗具とした。これは前期後半から後期前半にかけて出土例が多い小型臼とセットになるものといえよう。11は長さ60cm弱、厚さ8.4cmの割材で、両木口は面取り加工を加えているが、截断面は未加工の状態である。カシ用材としていないことからと、木取りから容器の素材とした。

次に建築材（Fig. 76～80）とした22点についてみていくことにする。19は長さ6.1cm、幅4.4cm、厚さ2cmの長方体に整形しているが、角がとれ隅丸の状態になっている。枘孔と枘を組み合わせる際の木栓と考えられ、本書では留具とした。34・35は柵目取りを素材とした角材？と考えられるが、火を受け大部分が炭化しておりわからない。35の一部分に炭化しない面があり、L字状をなし、本来凸状をなしていたと考えられることから枠材だった可能性が高い。36は枝を丁寧に落とし、表皮も除去し、両端に断面方形で長さ15cmの枘を造り出している。建物等の横木材と考えられる。37は枝を丁寧に落とし、表皮を除去し、片方端部は一方向の削りによって落とし、他端には削り加工を一面に加え浅く抉っている。長さが短いが垂木か。

50・53・54は芯持ち丸太材を素材とし、端部に3.5cm・4.5cm・4cm幅の枘受けの凹型の造り出しがみられることから柱材とした。56は芯持ちの丸太材を素材とし、枝分かれの又部をU字形に整形し受け部を造り出し、基部は粗い面取り加工を加えている。束柱か。

55はカシの芯持ち丸太材を素材とし、端部は面取り加工を加え、端部から20cmを8cm前後の厚さに整形し、6.5cm×5cmの長方形枘受け孔を穿っている。他端は欠失し傷んでいるが、同様の枘受け孔と考えられることから、梁間3.2cmの梁材と考えられる。51・57も55と同様の形状をなしており、梁材か桁材と考えられる。

以上、出土木製品について、農具、工具、調理具、建築材の一部についてみてきた。ここで出土木製品について、これまで突帯文土器単純期の木製品が出土している菜畑・雀居両遺跡などと比較しておく。農具の用材は、本遺跡はカシを用いているが、前記両遺跡はクヌギを用いている。本遺跡出土の軒は、隆起着柄孔をもたない鍬との区別がつきにくい。しかし、雀居遺跡等では諸手鍬も平鍬もあるがいずれも円形台の着柄隆起部をもっており、隆起部のない鍬ではなく、着柄隆起部のない鍬が北部九州で出現するのは前期後半以降である。本遺跡では、抄い部を意識した剣先形の一木造り長柄鍬が出土し、木取りが板目であった。これまで、北九州市長行遺跡、香川県林・坊城遺跡などで鍬状・櫂状木製品とされたり、掘り棒とされてきたものがあるが、本遺跡で鍬が出土したことによって、これらも鍬といってよいだろう。また、鍬も農耕技術渡来時に鍬類と同時に存在した可能性が高くなつたといえよう。鎌柄・膝柄組合せ式手斧柄・建築材などは本地域や同時期の出土例がなく、出土例の増加を待ちたい。

Tab.7 出土木製品一覧表

番号	種別	固板	複合	鋼材	用材	寸法(cm)			特記事項	出土場所	出土年	出土地番号
						木造り	鉄	最大幅	最大高			
W1	Fig.73	PL.14	カシ	柱	木半周	ナメテ	12.0-a	6.7-c	3.9	柱の端子部の後縫合部、半周の可動部あり	SD-001	20051
W2					丸木	25.1-a	9.0-c	2.2-c		柱の端子部で接続、穴は丸穴	SD-001	20055
W3					丸木	13.8-a	39.1	3.0		内側の端子部の可動部あり	SD-001	20058
W4					丸木	2.6-a	3.8	2.4		W3に接続する柱	SD-001	20060
W5					丸木製品	9.8-a	14.2	1.6		方形柱の可動部あり	SD-001	20062
W6					長方形	16.2	53.2-a	9.5		直角柱の可動部あり	SD-001	20063
W7					柱	96.8-a	9.3	1.8		楕円柱の一端を直角柱に接続、斜め長さ73 cm、傾き角3.5°	SD-001	20064
W8					柱	92.7-a	12.4	5.1		一小さな直角柱の端子部で、W7のよどみ部を接続している	SD-001	20065
W9					柱	22.8-a	187.5-c	5.8		柱の端子部で接続、直角柱の端子部で接続してあると考へらる	SD-001	20066
W10					柱	24.4-a	8.1	6.1		柱の端子部で接続してあると考へらるが矢先、一端通	SD-001	20067
W11	Fig.75	PL.16	カシ	柱	加工材	39.8	16.7	8.4		柱の端子部で接続してあると考へらるが、斜め面には	SD-001	20068
W12					加工材	33.6	21.9-a	8.6		みかんの枝材で、斜め面を製作か	SD-001	20069
W13					加工材	27.6	3.4	2.05		楕円柱の端子部で接続してあると考へらる	SD-001	20070
W14					柱	16.9	16.2-c	3.7		楕円柱の端子部をもつて考慮され、小形柱などセット	SD-001	20071
W15					柱	24.9	7.7	4.7		楕円柱の端子部の半周部	SD-001	20072
W16					柱	81.2	11.3	6.9		太形柱の端子部を斜めで、直角柱の端子部を直角	SD-001	20073
W17					柱	9.4	15.0-c	0.5		丁字型の取り扱い柱で接続	SD-001	20074
W18					柱	16.9-a	12.0-c	0.6		丁字型の取り扱い柱で接続	SD-001	20075
W19					柱	6.1	4.4	2.0		丸柱の上端部を斜めで接続してあると考へられる	SD-010	30008
W20					柱	16.1-a	7.7	3.4		板状に削り取って接続している	SD-010	30009
W21	Fig.76	PL.16	カシ	柱	柱	17.2	17.0	7.4		楕円柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30010
W22					柱	29.1	17.0	7.4		楕円柱の端子部の半周部	SD-010	30011
W23					柱	164.0-a	19.2-c	2.6		太形柱の端子部を斜めで、直角柱の端子部を直角	SD-010	30012
W24					柱	148.5-c	6.0	3.4		丁字型の取り扱い柱で接続	SD-010	30013
W25					柱	134.1-a	15.5-c	3.5		丸柱の上端部を斜めで接続してあると考へられる	SD-010	30014
W26					柱	112.2-a	6.5-c	2.5		柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30015
W27					柱	118.7-a	14.2-c	4.6		柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30016
W28					柱	85.4-a	13.4-c	3.2		柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30017
W29					柱	152.6-a	13.3-c	3.6		柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30018
W30					柱	211.8	5.3-c	4.1		柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30019
W31	Fig.77	PL.16	カシ	柱	柱	55.1-a	12.8-c	2.5		柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30020
W32					柱	135.6-a	3.0-c	1.1		柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30021
W33					柱	104.8-a	14.2-c	4.0		柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30022
W34					柱	—	—	—		柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30023
W35					柱	—	—	—		柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30024
W36					柱	—	—	—		柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30025
W37					柱	—	—	—		柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30026
W38					柱	—	—	—		柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30027
W39					柱	—	—	—		柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30028
W40					柱	—	—	—		柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30029
W41	Fig.78	PL.16	カシ	柱	柱	37.2-a	6.5-a	1.0-c		木を剥げ、削りしている。W30と同一箇所か	SD-010	30030
W42					柱	44.1-a	6.3-a	3.2-c		木を剥げ、削りしているが、一端の内側部があるなし	SD-010	30031
W43					柱	116.2-a	3.0-c	1.1		木を剥げ、削りしているが、一端の内側部があるなし	SD-010	30032
W44					柱	108.8-a	14.5-c	0.0		木を剥げ、削り、直角柱の端子部で接続によって、接	SD-010	30033
W45					柱	105.3-a	9.7-c	1.1		木を剥げ、削りして、直角柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30034
W46					柱	115.3-a	9.5-c	0.8		木を剥げ、削りしているが、直角柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30035
W47					柱	98.0-a	9.8-c	7.4		木を剥げ、削りしているが、直角柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30036
W48					柱	120.8-a	9.5-c	11.0		木を剥げ、削りしているが、直角柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30037
W49					柱	74.8-a	9.8-c	3.2		柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30038
W50					柱	79.5-a	9.5-c	5.5		柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30039
W51	Fig.79	PL.16	カシ	柱	柱	95.4-a	9.9-c	9.2		柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30040
W52					柱	103.4-a	11.1-c	11.3		柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30041
W53					柱	95.6-a	11.1-c	10.2		柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30042
W54					柱	116.8-a	12.0-c	16.0		柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30043
W55					柱	123.6-a	12.2-c	12.0		柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30044
W56					柱	24.9-a	13.6-c	8.3		柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30045
W57					柱	99.4-a	10.9-c	9.2		柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30046
W58					柱	133.6-a	10.9-c	9.5		柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30047
W59					柱	165.2-a	9.7-c	6.2		柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30048
W60					柱	116.8-a	12.2-c	16.4		柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30049
W61	Fig.80	PL.16	カシ	柱	柱	130.8-a	12.2-c	12.5		柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30050
W62					柱	212.9-a	20.6	11		柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30051
W63					柱	107.2-a	12.2-c	11.5		柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30052
W64					柱	—	—	—		柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30053
W65					柱	—	—	—		柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30054
W66					柱	—	—	—		柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30055
W67					柱	—	—	—		柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30056
W68					柱	—	—	—		柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30057
W69					柱	—	—	—		柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30058
W70					柱	—	—	—		柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30059
W71	Fig.80	PL.16	カシ	柱	柱	71.7-a	10.9	3.0		柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30060
W72					柱	70.6-a	12.8-c	4.2		柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30061
W73					柱	54.4-a	14.2	2.6		柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30062
W74					柱	51.3-a	12.2-c	3.4		柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30063
W75					柱	48.8-a	15.9	2.1		柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30064
W76					柱	47.2-a	13.7	3.3		柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30065
W77					柱	—	—	—		柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30066
W78					柱	—	—	—		柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30067
W79					柱	—	—	—		柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30068
W80					柱	—	—	—		柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30069
W81	Fig.80	PL.16	カシ	柱	柱	—	—	—		柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30070
W82					柱	—	—	—		柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30071
W83					柱	—	—	—		柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30072
W84					柱	—	—	—		柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30073
W85					柱	—	—	—		柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30074
W86					柱	—	—	—		柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30075
W87					柱	—	—	—		柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30076
W88					柱	—	—	—		柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30077
W89					柱	—	—	—		柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30078
W90					柱	—	—	—		柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30079
W91	Fig.80	PL.16	カシ	柱	柱	—	—	—		柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30080
W92					柱	—	—	—		柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30081
W93					柱	—	—	—		柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30082
W94					柱	—	—	—		柱の端子部で接続してあると考へられる	SD-010	30083
W95					柱	—	—</td					

6. 第5面の調査

1) 概要

II、III、IV区で15層上面で遺構検出を行った。II区ではSD001の左岸で株痕状の痕跡、右岸では14層の下から15層に対応すると考えられる河川の肩を検出した。III区ではくぼみ状の溝を、IV区ではIII区と同様のくぼみを検出し、15層中より縄文晚期前半期の遺物が出土した。I区は一部トレンチ等で15層上面を出し株痕状の痕跡を確認したが畦等を確認することができず全体に広げることはしなかった。

2) II区の遺構と遺物

15層は一部SD001の肩で確認していたため、その部分から重機で下げた。検出した遺構は溝1条である。明瞭な掘り方を持ち、III、IV区の溝とは異なる。覆土は12層に近く上面の掘り残しの可能性もある。遺物は出土していない。この他、径3、4cmほどの斑点状のピットのひろがりを一面に確認した。深さは2、3cmほどで覆土は12層にちかい灰黄褐色砂質シルトである。稲株痕の可能性もあると考え記録したが水田を復元、証明できるような結果は得られなかった。SD001の4区の左岸においても同様の痕跡を確認した。12層でヨシのプラントオパールが確認されており、株痕とすればヨシ等の可能性も考えて良いだろう。遺物は遺構検出時に土器片が見られたため15層を下げたが出土しなかった。

またSD010の広がりを確認するため西に8m弱ほど広げ、北西隅と南半で洞の一部を確認した。覆土は粘質シルト、シルトが大部分を占めI区で見られたような有機物を多く含む層や粗砂層にはあたらず、遺物も確認できなかった。I区の流れと同一かは不明である。同一であれば蛇行している。

SD001の右岸では、当初15層の存在を調査区内では予想していなかったが、14層にトレンチを入れたところ調査区東壁中央付近に15層に対応すると考えられる暗褐色粘土層を確認した。この部分で14層の幅は

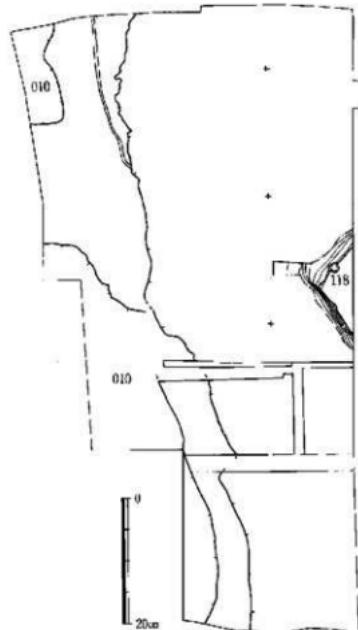


Fig. 81 II区第5面実測図(1/800)

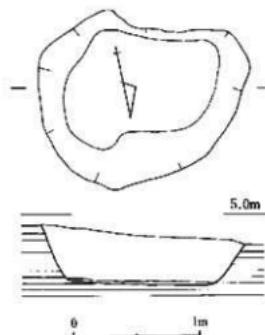


Fig. 82 SK118実測図(1/40)

最も狭くなり27mを測る。ちなみにⅡ区北東隅で深掘したところ3m以上砂層が続いている。この砂層すべてが14層になるのは確認していない。暗褐色土層の上面では土坑とピットを確認した。上面の掘り残しの可能性もある。

SK118(Fig. 82) 長軸170cm、短軸120cm、深さ45cmを測る土坑で、覆土は灰色かった黄褐色シルトである。第4面のSK095に重なる。穴帶文期のものと考えられる黒色磨研の胴部破片が出土した。

3) Ⅲ区の遺構

Ⅲ区は第5面のみの調査である。調査区の東側が高く緩やかに西に落ちる。調査区北壁の十層で13から17層がこの落ちに対応し、Ⅱ区SD001の4区のSD119につながると考えられる。また北東隅に溝状の落ちがあり、Ⅱ区の上層(付図)の南端に続くSD001の本流がⅢ区をかすめた断面である。

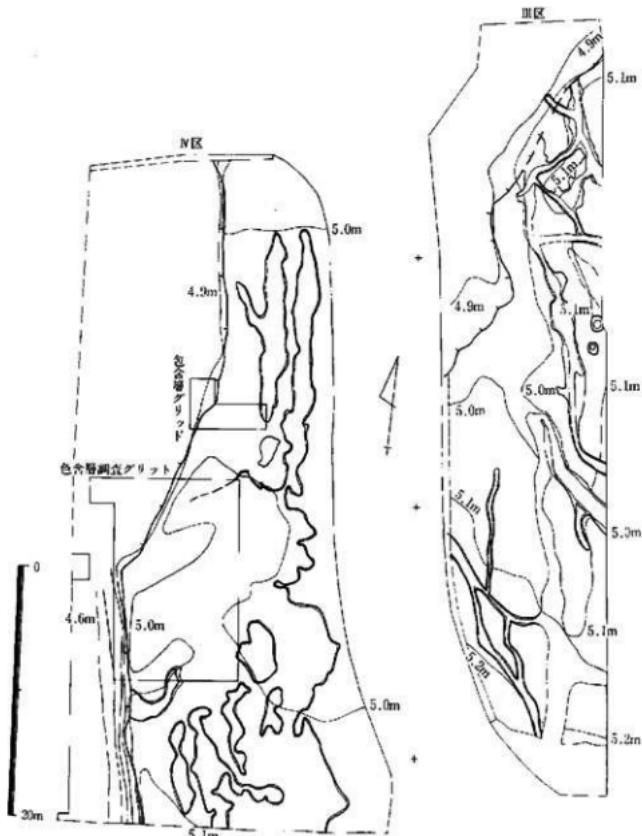


Fig. 83 第5面山、IV区全体図(1/400)



Fig. 84 III区東～西土壤圖(1/60)



Fig. 85 IV区北～南土壤圖(1/60)



Fig. 86 IV区包含層土層実測図(1/60)

Ⅲ区では4層直下で15層になる。この間に粗砂層が被った部分があり水田の畦の検出が期待された。15層上面で畦状の高まりを検出する事はできなかったが、分岐して走る浅い溝状のくぼみを確認した。その分岐する平面プランは小区画水田様である。くぼみには粗砂が溜まり、底には5から10cm大のくぼみが多数あり凹凸が著しい。遺物は出土していない。この遺構を水田区画とは考え難い。

4) IV区の遺構と遺物

調査区の西側にはSD010が走る。北壁の土層では、第2面とした3層はSD010を覆い、第5面とした28層の2層上からSD010の落ちが確認できる。埋土は上部は黄褐色シルト、下部は粗砂である。北壁で28層とした暗茶褐色粘土の上面で溝状のくぼみと高まりを検出し、また28層中より縄文晚期の土器が出土し、この包含層の調査を行った。

(1) くぼみ状遺構

第5面の調査を最初に行ったのは4区からである。黄褐色シルトを除去した暗茶褐色粘土の上面でFig. 83のように深さ3cmほどのくぼみと高まりを検出した。北半部は2条の溝状のくぼみが粗砂を覆うとして南北に併走する。このくぼみは調査区中央部ではつながり、一体がくぼんだ状態になるが、Ⅲ区で見られたような凹凸はない。この広いくぼみには、所々に30cmから2m大で高さ2~3cm大の高まりが見られ、2トレンチ付近では帯状に並ぶ。この高まりの幅は15から60cmほどで一定しない。調査区の南半は粗砂が薄く一面に堆積し、粗砂の中に島状に残る高まりを検出した。水出跡の可能性を検討すべきであるが、調査時は人為的なものとしてとらえていない。鉄分の沈着は見られたが、高まり、くぼみの形状は一定せず、水田跡にはならないと考える。

(2) 包含層

調査区の西側の28層に包含層を検出したため、2mグリットを組み、遺物を残しながら掘削を行った。遺物はFig. 86の3層(北壁の28層)および、SD010の落ち際の1a、1b層から出土した。このことはSD010が縄文晚期以前にさかのぼることを示す。遺物は南北15m、東西10mの間に広がり、およそ2カ所に集中部がある。遺物の出土位置等の分析を行っておらず、今回は遺物に付いてのみ報告する。

出土遺物

1から20は深鉢である。内湾気味に直行するものと屈曲して口縁部を作るものがある。全体に大粒の砂粒を多く含み、茶褐色を呈す。1、2、6から9は口縁部を内湾させた口縁部を持つ。6、7は口縁部に2枚貝条痕、体部に擦痕と調製を変える。8はわずかに曲がりかろうじて口縁部にアクセントを付ける。10は厚い器壁に砂粒を非常に多く含み淡灰色を呈す。外面には沈線で文様を付ける。18は



Fig. 87 15層出土土器実測図(1/3)

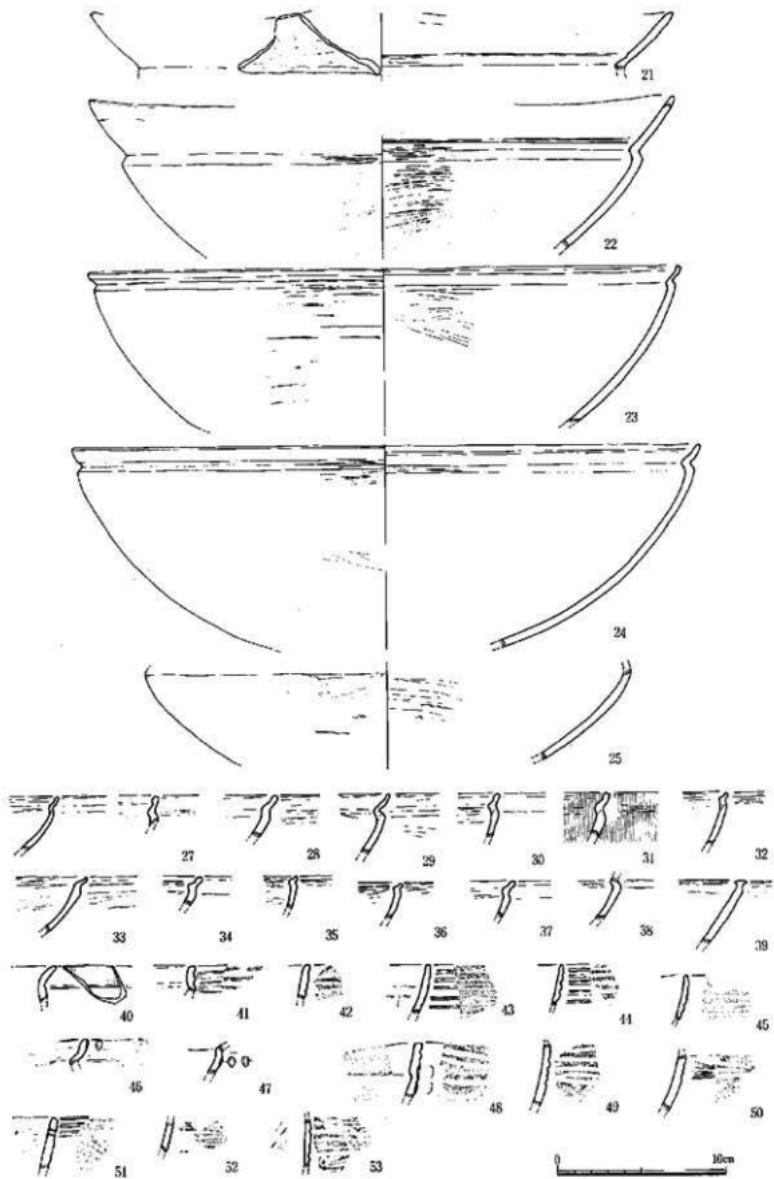


Fig. 88 15层出土土器实测图2(1/3)

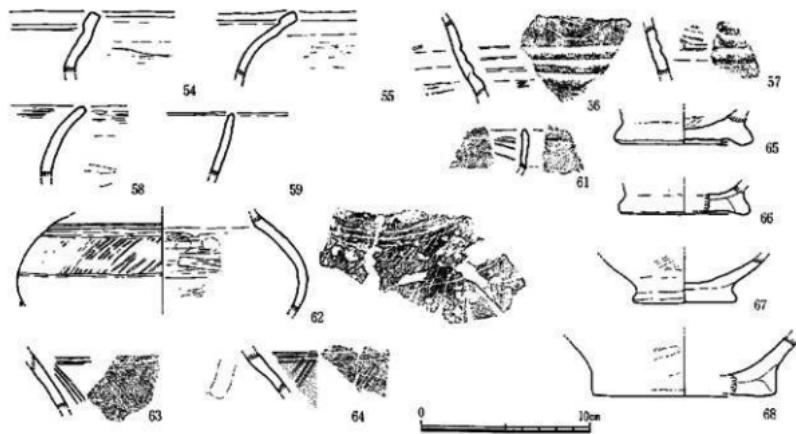


Fig. 89 15層出土土器実測図3(1/3)

同一個体と考えられ、横方向の沈線を施す。20は口縁部が外反し器壁が薄い。小型の鉢になると考えられる。21から53は浅鉢である。器面には研磨を施すが、削り調製が残るものが多い。また、器面粗れの為でもあるが暗灰色から灰茶色を呈し、黒色のものは少ない。21、22は長い口縁部が波状になる。削り痕を残す。23から38は口縁部が短く屈曲する。41から52は口縁部に沈線を施す楕形の鉢である。沈線に赤色顔料を残すものがあるが極微量である。53は条痕を残したまま沈線を施す。54から57は器形は精製の器種であるが研磨を施さず削り痕が残る。58、59もナデ調整の半精製品で58は屈曲する鉢形、59は中型の碗形になると考えられる。62から64は壺である。62は扁平球形を呈し壺形になると考えられる。肩部に3条、胴部に1条の沈線の後、斜方向の不規則な平行沈線を浅く施す。内面は粗い横ナデ、外面は粗ているため不明だが、器面は平滑で研磨調製と考えられる。胎土は砂粒が見られず精良で焼きは瓦質土器を思わせる。63、64は3条の平行沈線と山形文を施し外面に赤色顔料を施す。同一個体で混入品と考えられる。また黒曜石が多数出土し、使用痕がある剝片はあるが、定形化した石器は出土していない。

番号	番号	色名	造	色調	地	外観調査	内観調査	備考
Fig.87	1 658	N	E15R141	粗製深赤	暗茶褐色	砂粒	ケズリ	ナデ
	2 658	N	E16R20	粗製深赤	灰褐色	砂粒	ケズリ	ケズリ
	3 659	N	E19,R55,54	粗製深赤	茶褐色	砂粒	ケズリ ナデ	ヘラクスVII ス
	4 658	N	E16R28,47他	粗製深赤	黄褐色	砂粒	ケズリ	ケズリ
	5 657	N	E15R33 E15R121	粗製深赤	灰色	砂粒	ケズリ ナデ	一枚長条底
	6 666	N	D14R110,14R3	粗製深赤	灰褐色	砂粒	二枚貝条紋	ナデ
	7 665	N	E15R18,29	粗製深赤	茶色	砂粒	二枚貝条紋	ナデ
	8 662	N	D18R15,69	粗製深赤	茶色	砂粒	二枚貝条紋	ナデ 各面
	9 667	N	F15R14	粗製深赤	灰褐色	砂粒	二枚貝条紋	ナデ
	10 679	N	D19R8,85	粗製深赤	灰褐色	砂粒	二枚貝条紋	ナデ
	11 674	N	E15,K145	粗製深赤	灰褐色	砂粒	二枚貝条紋	ナデ
	12 675	N	E15R120	粗製深赤	茶褐色	砂粒	二枚貝条紋	ナデ
	13 669	N	E20R1,39	粗製深赤	灰褐色	砂粒	ケズリ ナデ	山形模様 18と同一?
	14 664	N	E16R120	粗製深赤	灰褐色	砂粒	ケズリ ナデ	ナデ
	15 668	N	E15R98	粗製深赤	灰褐色	砂粒	ケズリ ナデ	ナデ
	16 670	N	E19R21	粗製深赤	灰褐色	砂粒	ナデ	ナデ
	17 661	N	E19R12	粗製深赤	非褐色	砂粒	ナデ	ナデ
	18 680	N	E17R9,13	粗製深赤	灰褐色	砂粒	ナデ	ナデ
	19 662	N	D14R29	粗製深赤	灰褐色	砂粒	ケズリ	ナデ
	20 663	N	G14R6	粗製深赤	非褐色	砂粒	ナデ	ナデ
Fig.88	21 650	N	E15R12	浅赤	灰褐色	粗良	細粒	粗 研磨
	22 621	N	D20R38,19他	浅赤	暗褐色	粗良	研磨	粗状
	23 620	N	E19R9,69 他	浅赤	暗灰褐色	砂粒	ケズリ 研磨	研磨
	24 627	N	E16R24,E16R9,9他	浅赤	暗褐色	粗良	砂粒 研磨	研磨 粗
	25 649	N	E15R91	浅赤	灰褐色	粗良	砂粒 研磨	研磨
	26 625	N	E15R23	浅赤	灰褐色	粗良	粗粒	粗
	27 622	N	D15R23	浅赤	灰褐色	粗良	細粒	研磨
	28 627	N	G16R1	浅赤	灰褐色	粗良	細粒	粗
	29 624	N	E16R27	浅赤	暗茶褐色	粗良	砂粒 多	研磨
	30 626	N	D16R6	浅赤	灰褐色	粗良	細粒	研磨
	31 623	N	E15R107	浅赤	灰褐色	粗良	砂粒	研磨
	32 626	N	D19R157	浅赤	灰褐色	粗良	砂粒	研磨
	33 628	N	E19R82	浅赤	暗褐色	粗良	砂粒	研磨
	34 624	N	D19R106	浅赤	暗褐色	粗良	細粒	粗
	35 622	N	D19R100	浅赤	灰褐色	粗良	粗	研磨
	36 621	N	D19	浅赤	灰褐色	粗良	粗	研磨
	37 621	N	D19R120	浅赤	灰褐色	粗良	粗	粗
	38 654	N	D19R29	浅赤	灰褐色	粗良	粗	研磨
	39 630	N	E15R96	浅赤	灰褐色	粗良	砂粒	研磨
	40 630	N	E15R6	浅赤	灰褐色	粗良	砂粒	研磨
	41 646	N	G19R2	浅赤	灰褐色	粗良	砂粒	赤色顔料
	42 641	N	F15R7	浅赤	灰褐色	粗良	砂粒	赤色顔料
	43 645	N	E15R204	浅赤	灰褐色	粗良	砂粒	ナデ
	44 647	N	E19R38	浅赤	灰褐色	粗良	砂粒	ナデ
	45 643	N	E19R56	浅赤	灰褐色	粗良	砂粒	粗
	46 636	N	E15R125	浅赤	灰褐色	粗良	砂粒	ナデ
	47 635	N	D18R26E17R2他	浅赤	灰褐色	粗良	砂粒	ナデ
	48 644	N	F18R19	浅赤	灰褐色	粗良	砂粒	ナデ
	49 636	N	D19R19	浅赤	灰褐色	粗良	砂粒	ナデ
	50 639	N	D19R29	浅赤	灰褐色	粗良	砂粒	ナデ
	51 640	N	E15R45	浅赤	灰褐色	粗良	砂粒	ナデ
	52 642	N	E15R46	浅赤	灰褐色	粗良	砂粒	ナデ
	53 648	N	E15R12	浅赤	灰褐色	粗良	砂粒	ナデ
Fig.89	54 672	N	D14R42,2	粗製深赤	灰褐色	粗良	砂粒	ナデ
	55 671	N	D20R26	粗製深赤	灰褐色	粗良	砂粒	ナデ ケズリ
	56 688	N	E15R142	粗製深赤	灰褐色	砂粒	ナデ	ナデ
	57 639	N	E15R107	粗製深赤	灰褐色	砂粒	粗良	ナデ
	58 652	N	F11 R 1	粗製深赤	灰褐色	砂粒	ケズリ ナデ	ナデ
	59 629	N	D19R70	粗製深赤	灰褐色	粗良	砂粒	ナデ
	61 123	N	休	暗褐色	粗良	砂粒	ナデ	研磨 条似
	62 688	N	A17R1,87	暗褐色	暗褐色	粗良	研磨?	粗
	63 810	N	豎	灰褐色	粗良	砂粒	粗 研磨?	ナデ
	64 684	N	F11 R 3	豎	淡茶褐色 淡褐色	砂粒	条似	ナデ
	65 676	N	D21	豎	淡茶褐色	砂粒	ナデ ケズリ	ナデ ケズリ
	66 678	N	D19R3,62	豎	淡茶褐色	砂粒	薄灰	ナデ
	67 677	N	F16R60,17	豎	灰褐色 淡灰褐色	砂粒	研磨 純ナデ	ナデ
	68 675	N	G20R1	豎	灰褐色	砂粒	ケズリ ナデ	ナデ

7. 自然科学分析

1) 種子分析

福岡市、橋本一丁田遺跡における種実同定

株式会社古環境研究所

1. 試料について

試料（堆積物）は、I 地点の縄文晩期の河川堆積層および水田層である4層、6層、7層、8層、9層、10層、11層、12層、13層から採取された土壌試料9点（以上、水洗選別試料）と、同じく9～11層出土の大型種実1点、7・8層、9層、11層上半、11層下半より出土の種実4点（以上、採取試料）である。9～11層出土の大型種実は、調査時に取り上げられたもので、他の4試料は堆積物を採取後選別された種実である。

2. 方法

試料（堆積物）は0.25mmの篩を用いて水洗選別を行った。双眼実体顕微鏡下で観察を行い、同定は形態的特徴および現生標本との対比を行い、結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

3. 結果

(1) 水洗選別試料

樹木4、草本24の計28が同定された。学名、和名および粒数を表1に示し、主要な分類群を写真に示す。

下位より、13層はメナモミが検出されたのみである。12層はカヤツリグサ属、スゲ属、カラムシ属、ナデシコ科、タデ属が主に検出された。11層、10層、9層ではヒルムシロ属が特徴的に多く、9層ではシャジクモ属が極めて多い。8層、7層、6層ではスゲ属が出現し、7層ではオモダカ属ないしオモダカ科が出現する。4層では種実は検出されなかった。樹木は少なく、9層、10層、11層、12層からクワ属やカジノキ属が少數検出されるのみである。

(2) 採取試料

樹木21、樹木と草本を含むもの1、草本22の計44が同定された。学名、和名および粒数を表1に示し、主要な分類群を写真に示す。

9～11層大型種子はオニグルミ、コナラ属、エゴノキが同定された。7・8層からはスゲ属などがわずかに含まれていたのみである。9層、11層上半、11層下半はヒルムシロ属が極めて多く、マツモ属も多い。草本ではミクリ属、スゲ属、カナムグラ、キカラスウリが含まれている。木本ではブドウ属が多い。9層と11層からはヒメビシが含まれている。11層上半と下半では木本ではカジノキがやや多く、カラスザンショウ、アカメガシワ、チシャノキ、草本では、ツリフネソウが含まれる。他に食べられる種実としてヤマモモ、ムクノキ、クワ、ガマズミ属の木本が含まれる。栽培植物のウリ類が9層、11層下半から、ヒョウタン類が11層上半から同定された。

4. 種実同定から推定される植生、環境

(1) I 地点の縄文晩期河川と周囲の植生と環境

水洗選別と採取されていた試料を併せて、植生と環境の変遷について下位層まとめる。

1) 15層の時期

種実が少なく堆積速度が速いか、メナモミの生育する乾燥地の環境であった可能性がある。

2) 13層の時期

カヤツリグサ属、スゲ属の水湿地性草本と、カラムシ属やナデシコ科の乾燥地に草本が分布し、周辺が乾燥地と水湿地の中間的な環境が示唆される。

3) 12層、11層、10層、9層の時期

浮葉植物のヒルムシロ属が特徴的に多くヒメビシも出現する。沈水植物のシャジクモ属、マツモ属もやや多い。のことからみて、2m前後以上の深さで滞水していたと推定される。河辺にはミクリ属やスゲ属の抽水植物が生育し、周囲にはカナムグラ、カラムシ属、ナデシコ科、キカラスウリ、スズメウリが生育し、これらの草本の分布する日当たりのよいやや乾燥した人為的環境が分布していたと推定される。

4) 8層、7層、6層、4層の時期

8層、7層、6層、4層では種実が少ないか検出されず、堆積速度がやや速く下位より乾燥化が行われたと考えられる。スゲ属を主にオモダカ属ないしオモダカ科が生育し、水湿地の環境が示唆され、滞水域から水湿地になったと推定される。

(2) 森林植生

木本の種実は9～13層で検出された。周囲はカジノキ、クワ属、カラザンショウ、チシャノキ、アカメガシワの林縁や人為環境に生育する樹木がやや疎に分布していたと推定される。コナラ属の検出からカシ（コナラ属アカガシ亜属）の照葉樹林の分布も示唆される。河辺を好むエゴノキやオニグルミが河川沿いに分布していたと推定される。ブドウ属やオニグルミなどは食用となるため、投棄された可能性が高い。

(3) 栽培植物と食用植物

9～13層では栽培植物と食用植物が多く含まれていた。9層、11層からウリ類、11層からヒョウタン類が検出され、明らかな栽培植物である。食用となる木本の種実としてブドウ属、ヤマモモ、オニグルミ、ムクノキ、ガマズミ属があり、これらは利用され、投棄されたものと考えられる。

参考文献

- 笠原安夫（1982）菜畑縄文晩期（山ノ寺）層から出土の炭化ゴボウ、アズキ、エゴノキと未炭化メロン種子の同定。唐津市文化財調査報告第5集 菜畑遺跡、唐津市教育委員会、p.447-451。
- 笠原安夫（1985）日本雑草図説、養賢堂、494p.
- 粉川昭平（1981）北部九州の縄文遺跡の植物遺体、月刊考古学ジャーナルNo.192、ニューサイエンス社、p.6-7。
- 藤下典之（1992）出土種子からみた古代日本のメロンの仲間、その種類、渡来、伝播、利用について、考古学ジャーナルNo.354、ニュー・サイエンス社、p.7-13。
- 松谷曉子（1983）エゴマ・シソ、縄文文化の研究第2巻、雄山閣出版株式会社、p.50-62。

表1 横木—丁田遺跡における種実調定結果

表2 横木—丁田遺跡における種実同定結果(2)

学名	別名	分類	分類群												地名
			多立	4層	6層	7層	8層	9層	10層	11層	12層	13層	14層	15層	
Arbor	Broussonetia papyrifera Vent.	樹木	鉢状(根状茎)水糞量	500cc	400cc	700cc	300cc	400cc	220cc	530cc	470cc				
Morus	Zanthoxylum alatumoides	樹木	カジバ科	種子	種子	種子	種子	種子							
Sieb. et Zucc.	Ehretia ovalifolia Hassk.	樹木	カラシナシ科	種子	種子	種子	種子	種子							
Vitis?	Vitis?	樹木	ブドウ科	種子	種子	種子	種子	種子							
herb	Sauvageon	草本	ミクニ属	果実	種子	種子	種子	種子	種子						
Pitcairnia	Pitcairnia A	草本	ヒルムシロ属A	果実	種子	種子	種子	種子	種子						
Pitcairnia	Pitcairnia B	草本	ヒルムシロ属B	果実	種子	種子	種子	種子	種子						
Sagittaria	Sagittaria	草本	オモダカ属	果実	種子	種子	種子	種子	種子						
Alismataceae	Echinichthys	草本	オモダカ科	種子	種子	種子	種子	種子							
Gramineae	Cyperus	草本	イネ科	種子	種子	種子	種子	種子							
Cyperus	Carex A	草本	ホタルイ属	果実	種子	種子	種子	種子	種子						
Carex B	Carex A	草本	カヤツリグサ属	果実	種子	種子	種子	種子	種子						
Astelia kirkii Hassk.	Astelia kirkii Hassk.	草本	スゲ属	果実	種子	種子	種子	種子	種子						
Compositae	Himalius scandens Merr.	草本	ツユクサ属	種子	種子	種子	種子	種子							
Boraginaceae	Polygonum A	草本	カラシナシ属	種子	種子	種子	種子	種子							
Polygonum B	Polygonum B	草本	タデ属	果実	種子	種子	種子	種子	種子						
Rumex	Caryophyllaceae	草本	タデ属	果実	種子	種子	種子	種子	種子						
Ostria	Amelanchier brevipedunculata	草本	ノブナラ	種子	種子	種子	種子	種子							
Hydrocytus	Tellis	草本	ナシ科	果実	種子	種子	種子	種子	種子						
Urticaceae	Cochlearia	草本	セリ科	果実	種子	種子	種子	種子	種子						
Solanaceae	Solanum	草本	アブラナ科	果実	種子	種子	種子	種子	種子						
Melothria japonica Maxim.	Syngonium pubescens Makino	草本	ナス科	スズヅクナ	果実	種子	種子	種子	種子	種子	種子	種子	種子	種子	種子
Compositae	Chrysanthemum	草本	キク科	メモキ属	果実	種子	種子	種子	種子	種子	種子	種子	種子	種子	種子
Total	Total	合計	不詳	0	1	23	2	142	21	86	36	6	5	1	1
		合計	Unknown	0	1	23	2	142	21	86	36	6	5	1	1
		合計	Total	46	3	159	1184	3865							

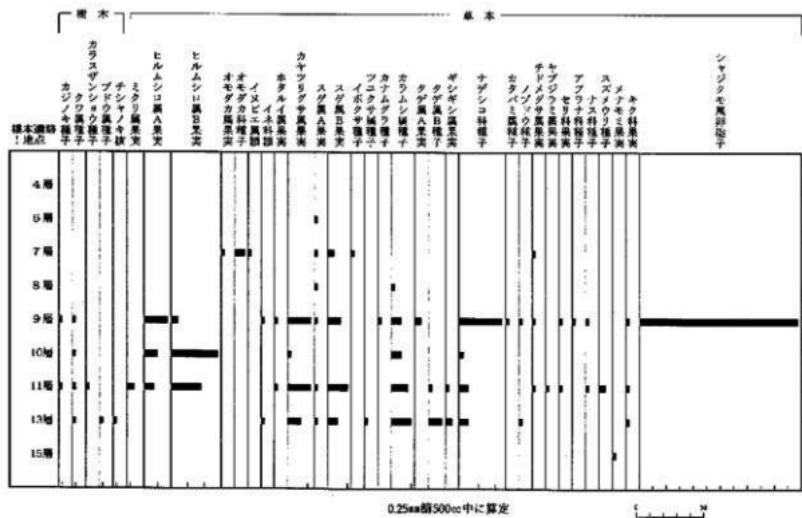


図1 橋本一丁田遺跡I地点における確実検出図

2) 放射性炭素年代測定結果

福岡市内遺跡出土の試料について年代測定を行った。その結果を次表に示す。なお、年代値は1950年よりの年数(B.P.)である。

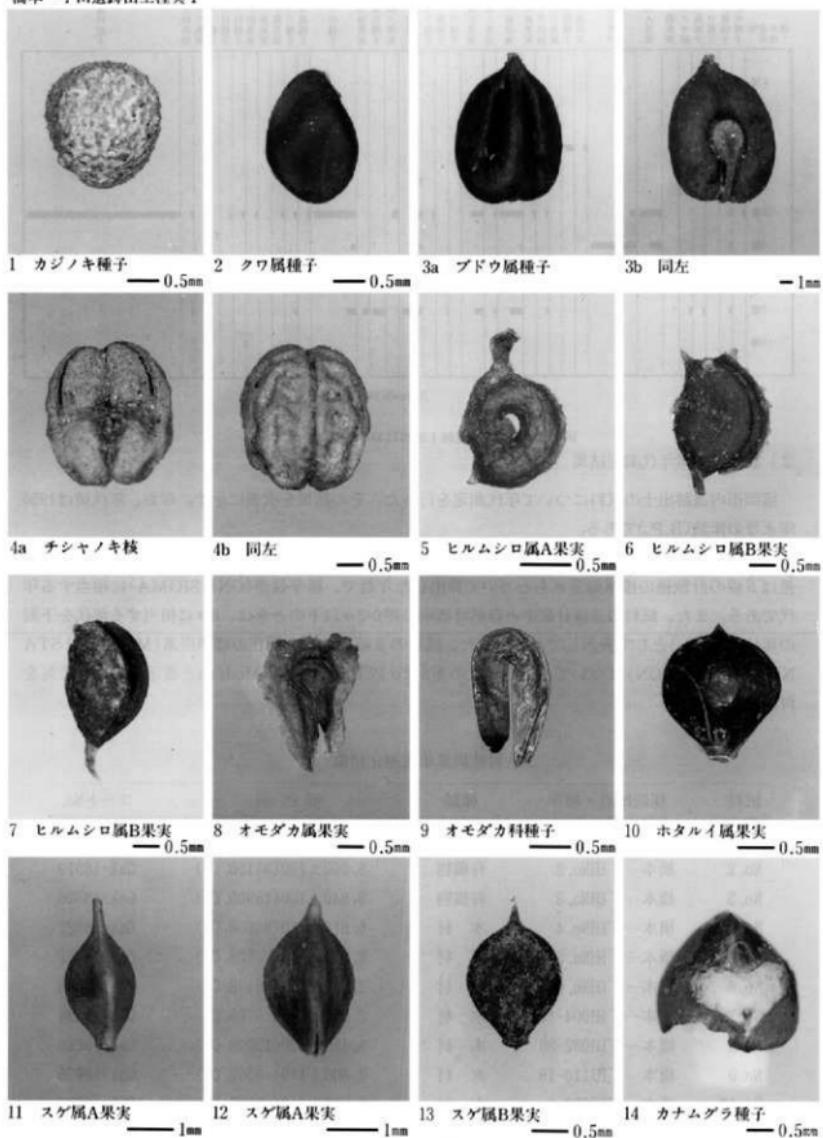
年代値の算出には¹⁴Cの半減期としてLIBBYの半減期5570年を使用している。また、付記した誤差は β 線の計数値の標準偏差 σ もとづいて算出した年数で、標準偏差(ONE SIGMA)に相当する年代である。また、試料の β 線計数率と自然計数率の差が 2σ 以下のときは、 3σ に相当する年代を下限の年代値(B.P.)として表示してある。また、試料の β 線計数率と現在の標準炭素(MODERN STANDARD CARBON)についての計数率との差が 2σ 以下のときは、Modernと表示し、δ¹⁴C%を付記してある。

放射性炭素年代測定結果

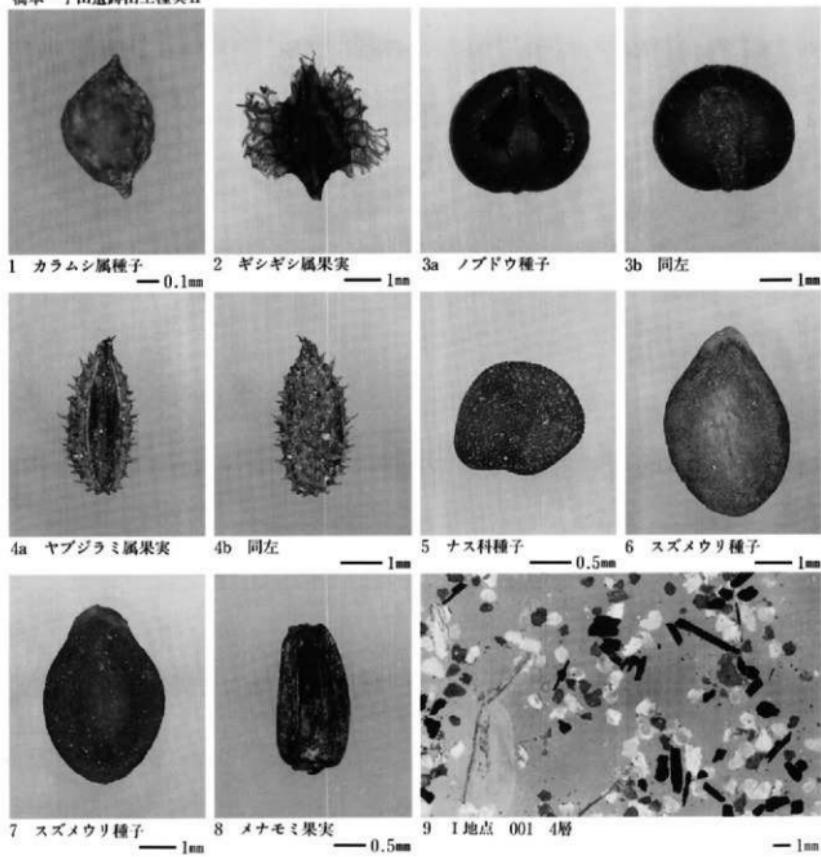
試料	採取地点・層準	種類	年代値	コードNo.
No. 1	橋本一丁田No. 1	有機物	3,840±130(1890B.C.)	Gak-18618
No. 2	橋本一丁田No. 2	有機物	5,060±120(3110B.C.)	Gak-18619
No. 3	橋本一丁田No. 3	有機物	3,840±100(1890B.C.)	Gak-18620
No. 4	橋本一丁田No. 4	木 材	5,610±110(3660B.C.)	Gak-18621
No. 5	橋本一丁田No. 5	木 材	2,020±90(70B.C.)	Gak-18622
No. 6	橋本一丁田No. 6	木 材	2,590±90(640B.C.)	Gak-18623
No. 7	橋本一丁田004-15	木 材	2,920±190(970B.C.)	Gak-18624
No. 8	橋本一丁田032-35	木 材	3,150±120(1200B.C.)	Gak-18625
No. 9	橋本一丁田116-19	木 材	2,800±110(850B.C.)	Gak-18626
No. 10	橋本一丁田033-9	木 材	2,930±110(980B.C.)	Gak-18627

(学習院大学理学部年代測定室)

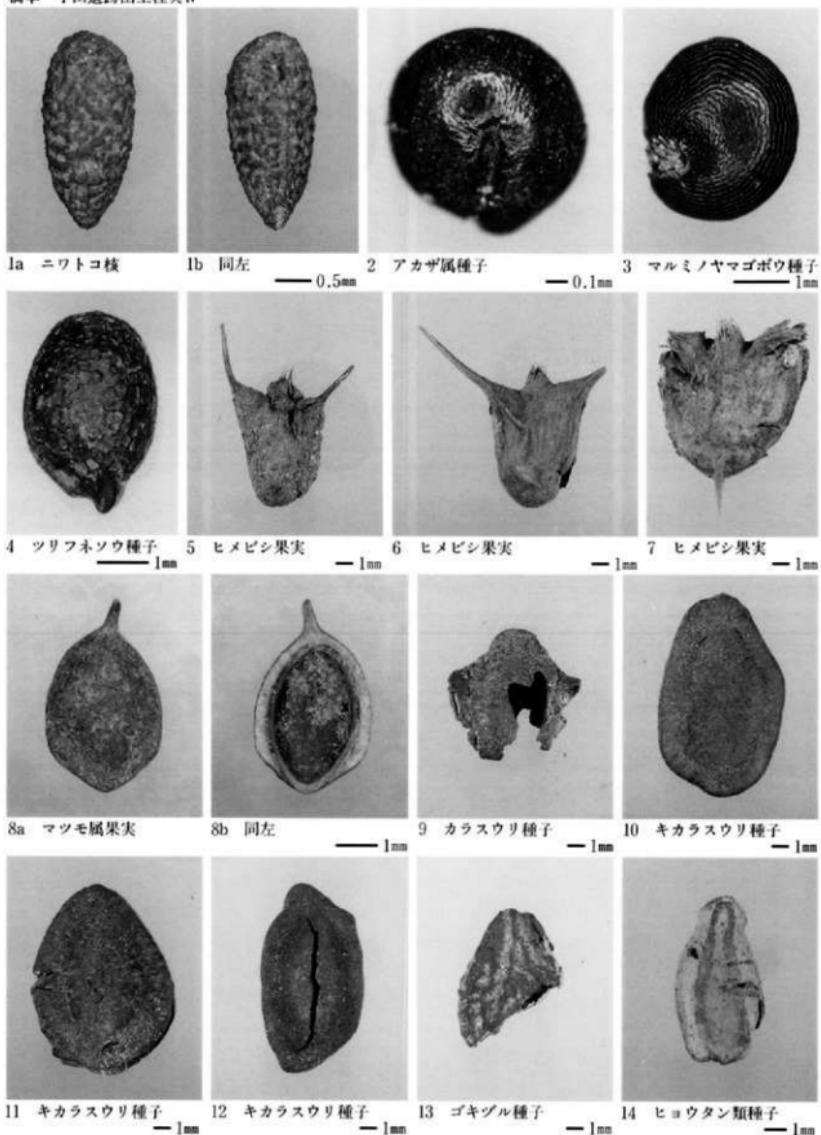
標本一 丁田遺跡出土種実 I



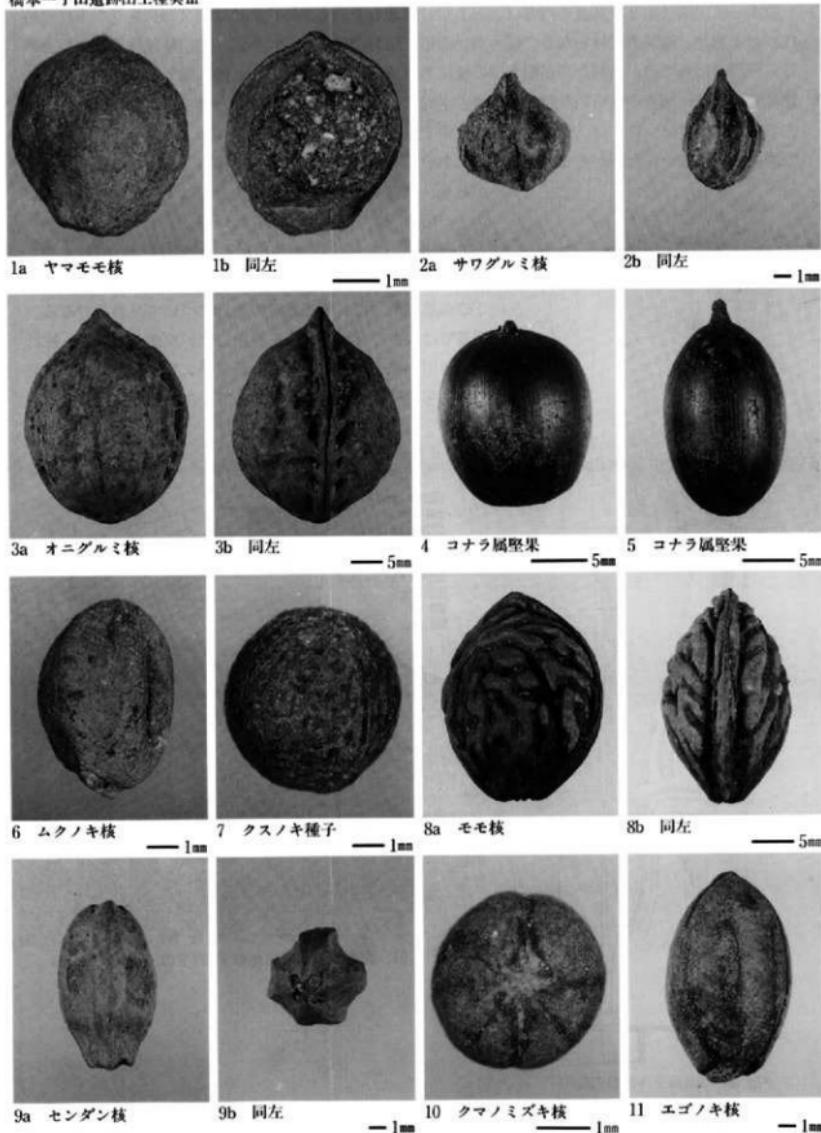
橋本一丁田遺跡出土種実II



標本一丁田遺跡出土種実Ⅳ



橋本一丁田遺跡出土種実III



8. 終わりに

橋本一丁田遺跡第2次調査の内容は、以上記した通りである。時代的には縄文時代晚期から江戸時代におよぶが、遺跡の主体となるのは、刻目突帯文期および弥生時代初頭、古墳時代前半、中世である。今回の調査では、当初から初期水田の検出の期待がもたれていたが、砂に覆われた条件の良い状態がないこと、調査の技術的な問題から考古学的には明確な結果を示すことはできなかった。また、古墳時代、中世については、遺構の存在に途中で気づいたため、調査できなかった部分や、時間不足で調査しきれなかった所がある。整理作業においても遺物、記録類を充分検討しないまま羅列した感

があり、反省すべき点が多い。ここでは十分に深化できないが、一応の成果をまとめておきたい。

立地について注¹¹⁾ 調査地点付近の地形についてはすでに航空写真の判読からの説明がなされている。(下山、磯1993) この成果に沿って、調査地点の地形について見直してみる。調査では大きく2つの河川を検出した。東側の河川は、蛇行する河川が埋まる最終段階に刻目突帯文期の灘みとなり、おそらく弥生時代には完全に埋まっていたものと考えられる。

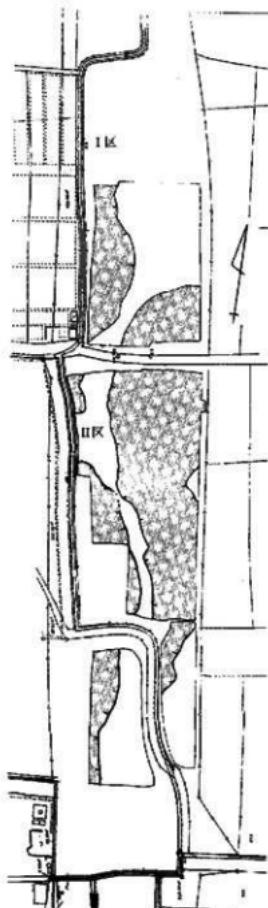


Fig. 90 第5面全体図(1/2000)

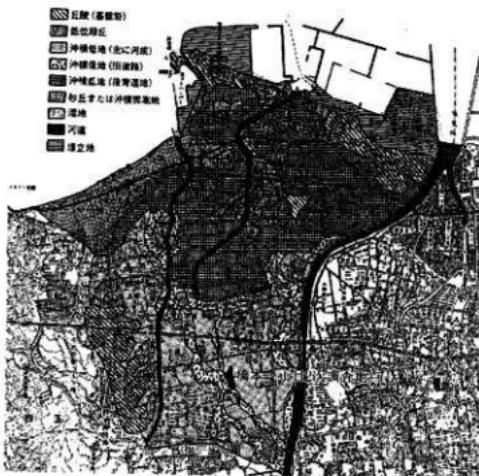


Fig. 91 調査地域周辺の地形学図(下山、磯1993に加筆)

これに対し SD010は、第5面IV区の遺物包含層がその落ちに入ることから、遅くとも縄文時代晩期には存在し、II区では弥生時代初頭の段階で流れがある。さらに下流の1次調査地点では古墳時代の遺物が出土している。これらの流れが全て同じものとは限らないが、完全に埋まつた状態にはなっていない。Fig. 3で見たように明治期にも同様の箇所に河川が流れている。これをFig. 9Iに当てはめると、室見川から北西に走る流れがSD001に、また北に向かう流れがSD010に対応するようにも思われる。また、南北方向のものは、近年まで湿地状態であった箇所と一致する。いずれにしても常に付近を河川が蛇行しながら流れていたことは確かである。

次に、地質についてであるが、先の拾六町平田遺跡において、弥生時代の造構面の下30cmの泥炭層が縄文後期、その下の青灰色粘土が縄文前期から中期に形成された堆積とされている。(下山、磯1993)今回、掲載した土層図等では一部しかふれていないが、深掘り時に造構面の下に青灰色粘土、有機質土壤を確認し、採集した資料から111頁のように放射性炭素年代測定値No.1からNo.4の結果を得ている。^{注12)}ここで詳しく検討することはできないが、同様の地質的条件を橋本一丁田付近でも考えることができよう。また、SD001がI区において東側に流れた痕跡は航空写真には現れていない。こうした古い埋没河川が他に、この一帯を流れているものと考えられる。先の縄文後期には形成されている地質の広がりを考えれば、この付近から後背湿地に至るまでの広い範囲で同様の時期の造構遺跡が検出される可能性があると考えられる。

刻目突帯文期から弥生時代初頭

造構としては河川SD001、010とSX004、005、032、033等の河川に付随する施設、SD001右岸の土器溜まりや土坑、左岸の溝等があげられる。

時期的には説明の際に一部ふれてきたが、大きく3時期に分ける事ができる。I期はSD001の時期で刻目突帯文土器の単純期である。造構としてはSD001とこれに付随するSX004、005、115、116等があげられる。II期はSD010の時期で板付系の甕、壺と刻目突帯文上器が出土する。SD010の一部でSX032などの杭列、W55等の木製品がこれに伴うと考える。SX033等はSD010で遺物が多く出土した土層より下位に位置しており、古くなる可能性もある。III期はSK078に代表される時期で刻目突帯文土器と板付系の土器が一緒にできるもののII期とは様相を異なる。以下簡単に各期の土器の特徴について述べる。

I期は深鉢、1、2条刻目突帯文甕、壺、浅鉢、鉢からなる。特徴がでやすい刻目突帯は、突帯を口唇部よりやや下がった位置に貼付するものが多く、刻目は下から上へラ形状工具、指頭状具で施す。器面調製は削り、ナデ調整で、条痕を残すものは少ない。II期は器種構成に板付系の甕、壺が加わり、橢形の鉢が姿を消す。甕の突帯は大ぶりのものを口唇部に被せる様に張り付け、刻目は太く深く下から上方向のものが少なく、横方向もしくは上から下へ施すものが、刻目施文具には幅のある棒状工具が見られ、器面調製は条痕を残すものが多く、色調は暗いものが多い。III期は板付系の甕が増加するものの比率的には刻目突帯文の甕が多い。突帯文甕は口唇部に水平に断面台形状の突帯を施し、口唇部を横ナデして平坦面を作る。刻目はII期と比べて小ぶりだが間隔を狭く密に施し板付系の甕に近い。器面の発色は黄褐色系の明るいものがあり、板付系の影響を受けている。板付系の甕は刷毛目、ナデ調整を施し、内面に指押さえの痕跡が残る。胴部が若干張り、652などはかなり口径が大きい。壺は660のようになで肩で板付1式とするには新しいものがある。以上のIからIII期の時期差として記述したが、型式学検討を十分に加えたものではない。あくまで出土したままの状態を並べただけである。

Tab. 9に15層出土のものを含めた器種構成を示した。破片、完形を問わず口縁部を数えた数値である。SD001内では個体数が少なくばらつきがあるが、上層ほど1条甕が増え、2条甕、浅鉢が減る

傾向が窺える。他の遺構とは、特にSK087の個体数が少ない事にもよるが大きな変化はない。今後型式学的検討と共に周辺の出土遺物と比較検討する必要がある。

遺構についてはSD001に築かれた水利施設の用途に疑問が残る。河川から水を引き、周囲に水田を築いたと考えるのが最も素直ではあるが、先に検討したように左岸側に水を引いた痕跡が窺われない。1つ気になるのは、SD001の左岸に北東に向かう溝SD005の存在とそれに平行するように分布する斑点である。斑点については浅く杭痕跡とは考えにくいことはふれたが、SD001に平行する方向が他の時期の遺構にこの方向のものがないだけに関連がある可能性がある。1次調査では弥生時代とされる水田跡が確認されておりこれとの関連も検討する必要がある。また、SD001自体が水田跡である可能性を指摘されている。^(注3)河川内には多くの足跡が残り、何らかの生業が行われていたことは確かである。

古墳時代の遺構

古墳時代の遺構は1次、2次調査でも確認され、いずれの調査でも北西方向の溝を検出している。周辺でも牟多田遺跡、拾六町平田遺跡でも同時期の遺物が確認されており、遺構は薄いものの広い範囲に広がるものと考えられる。

中世の遺構

中世の遺構としては、現在に残る条里に沿って走るSD013が注目される。SD013は磁北から西に5°振れており、田村遺跡や入部遺跡で検出されている条里の溝と一致する。SD013は15、6世紀の遺物を含んでいることからこの時期にはほぼ埋まっていたことが窺える。また、13、4世紀の遺物を出すSD011、012を切っており、これよりも新しい時期に掘削されたと考えられる。構築年代については周辺の類例の増加を待って固めていく必要があるだろう。ここではSD011、012は北西方向に走っており、条里に沿った水田区画以前に、氾濫する河川に合わせた区画である可能性を考えておきたい。

触れるべき問題はまだ多いが、今後の検討課題としたい。

注

- (1) 航空写真は今回掲載できなかった。1次調査の報告で昭和23年頃と62年の写真が掲載されているので参照されたい。
- (2) 福岡市教育委員会 1990 『橋本一丁田遺跡』
- (3) 北九州大学の野井英明氏に花粉分析資料を採集していただいた際に採集した資料である。
- (4) 皇學館大学の外山秀一氏にプラントオバールの定性分析をしていただいた際に御教示を受けた。

(文献)

下山正一、磯望 1993 拾六町平田遺跡周辺の地質と地形 『拾六町平田遺跡2』福岡市教育委員会

Tab9 遺構別器種構成(%)

	板付窓	深跡	突起窓	突窓	浅跡	鉢	壺	高杯
SD001 7層	3 6.5	20 43.5	1条 5	9 19.6	3 6.5	3 13.0	6	
SD001 9層	9 3	11 5	4 2	3 10		1	3	
SD001 10層	26.9 12.5	42.3 29.8	15.1 8.3	11.6 11.7	1.2 1.2	12.5		
SD001 11層	11 8.1	39 28.9	23 17.0	30 22.2	11 8.1	21		
SD001 11層	16 15	36 33.8	16 15	27 25.2	2 1.9	10 9.3		
SD001 12層	10 11.8	111 32.9	50 14.8	79 23.4	17 5	71 12.1		
SD001 13層	59.5			28.4		12.1		
SD010	2 1.2	13 7.8	78 46.6	22 13.2	17 10.2	9 5.4	25 15.0	1
				68.8		15.6	15.0	0.6
S K	5 16.1	11 35.7	3 9.7	3 9.7	3 9.7	5 9.7	1 16.1	1 3.1
SH7		61.4			19.4		16.1	3.1
15層		21			32			
		39.6			60.4			



(1) II区第4面全景



(2) I区第4面全景



(2) I-1区SD01(南かん)



(4) II区第4面全景(北かん)



(1) I-1区第4面、I-2区第3面、II区第1面(北かん)



(3) I-1区SD01(南端(南かん))



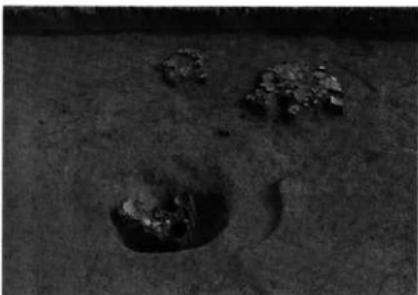
(1) I-3区全景



(4) II区第2面全景(北から)



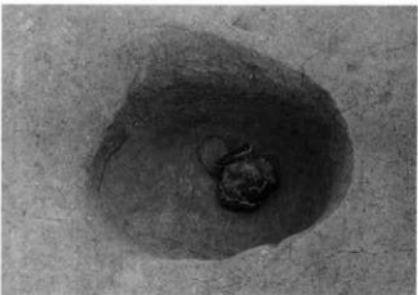
(2) I-3区溝(北から)



(5) SK076(西から)



(3) IV区第2面全景(北から)



(6) SK81(北から)



(1) SX004(北から)



(4) SX032(南から)



(2) SX005(西から)



(5) SX031(北から)



(3) 1区上層6, 杖列005(南から)



(6) SX033(西から)



(1) I区土層2(西から)



(4) II区SD001-2区11層上面



(2) I区南壁土層(北西から)



(5) II区SD001-2区11層上面(南から)



(3) II区土層8(北から)



(6) SX089(南東から)



(1) SX116検出状況(南から)



(4) SX115(南から)



(2) SX116(南西から)



(5) II区SD001-4区(北から)



(3) SX116前面土層(南西から)



(6) II区土層9(南から)



(1) SK078(西から)



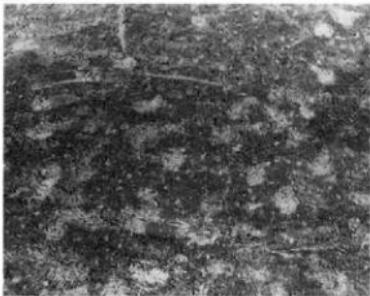
(4) III区全景(北から)



(2) SX088(北西から)



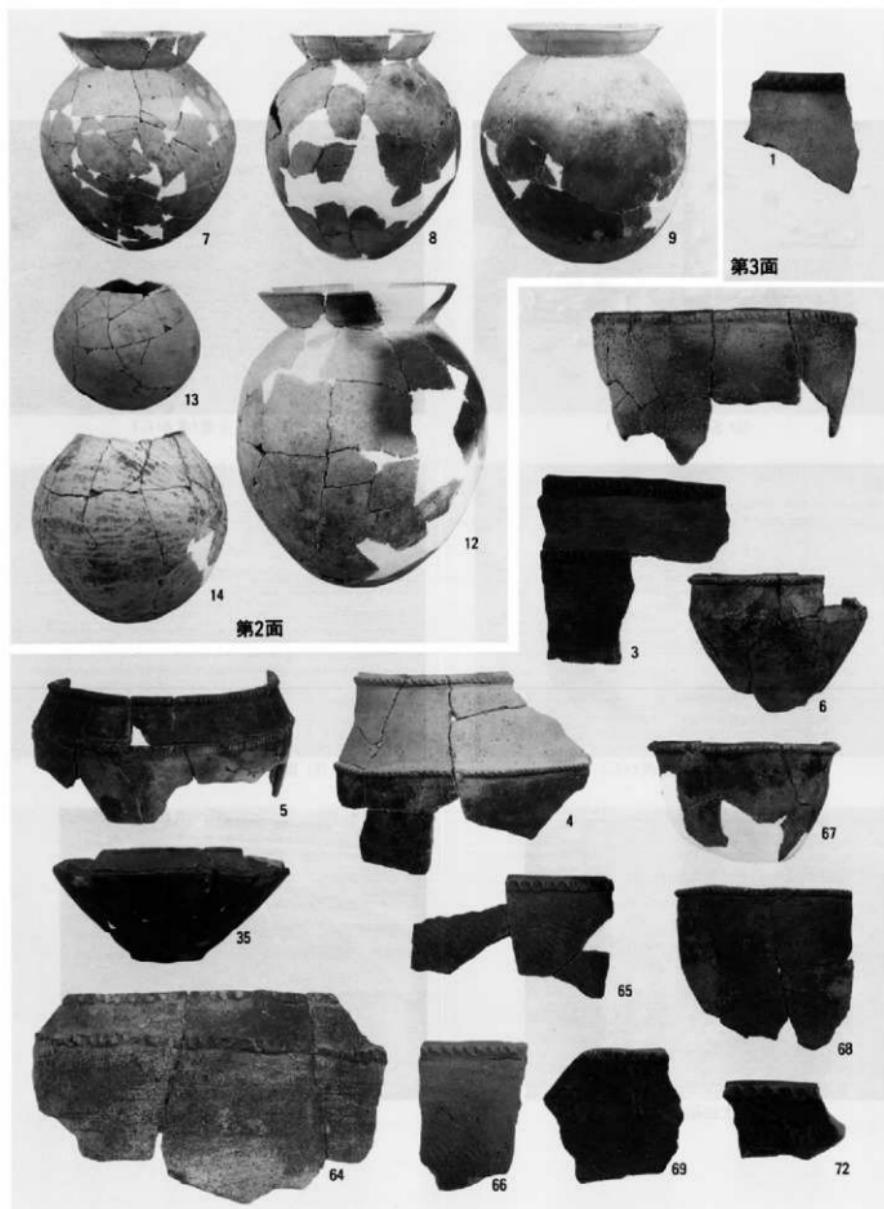
(5) III区溝状くぼみ(北西から)



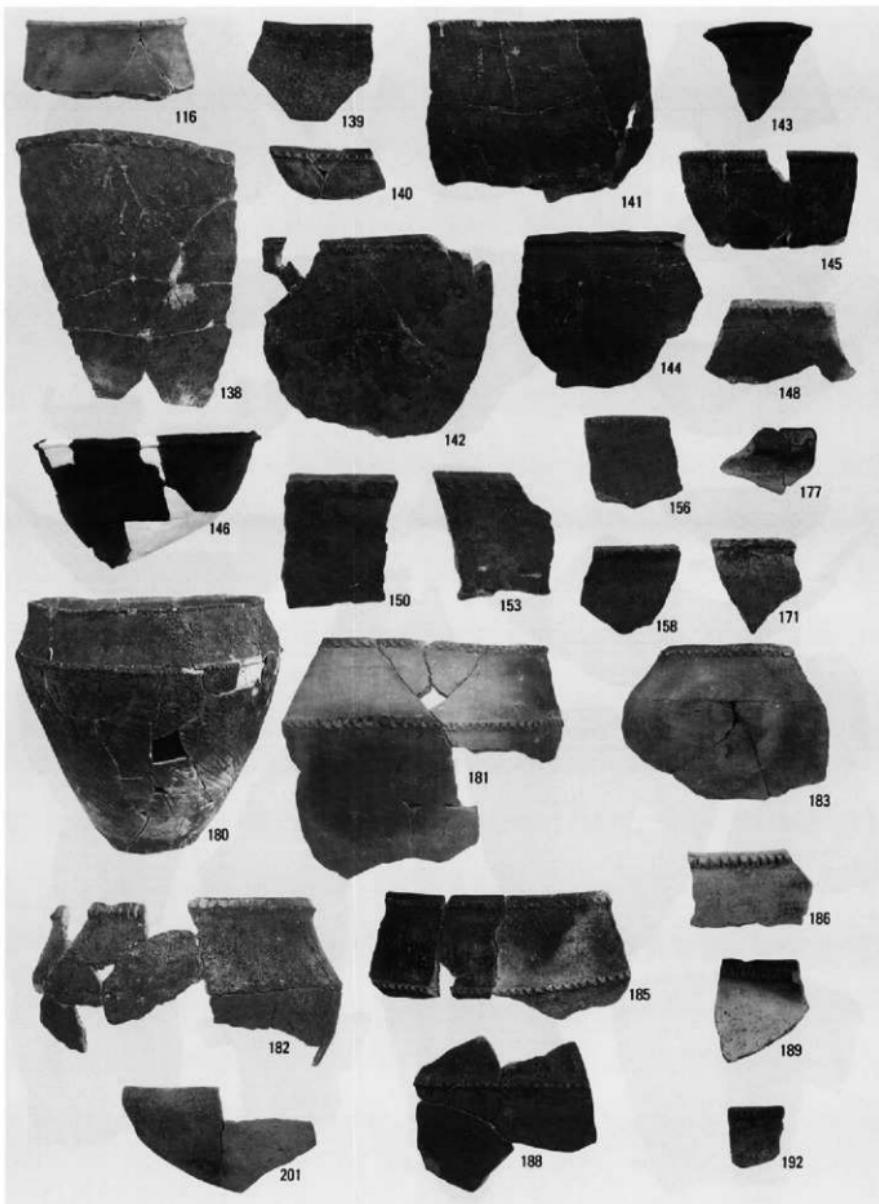
(3) 15層上面植株状斑点



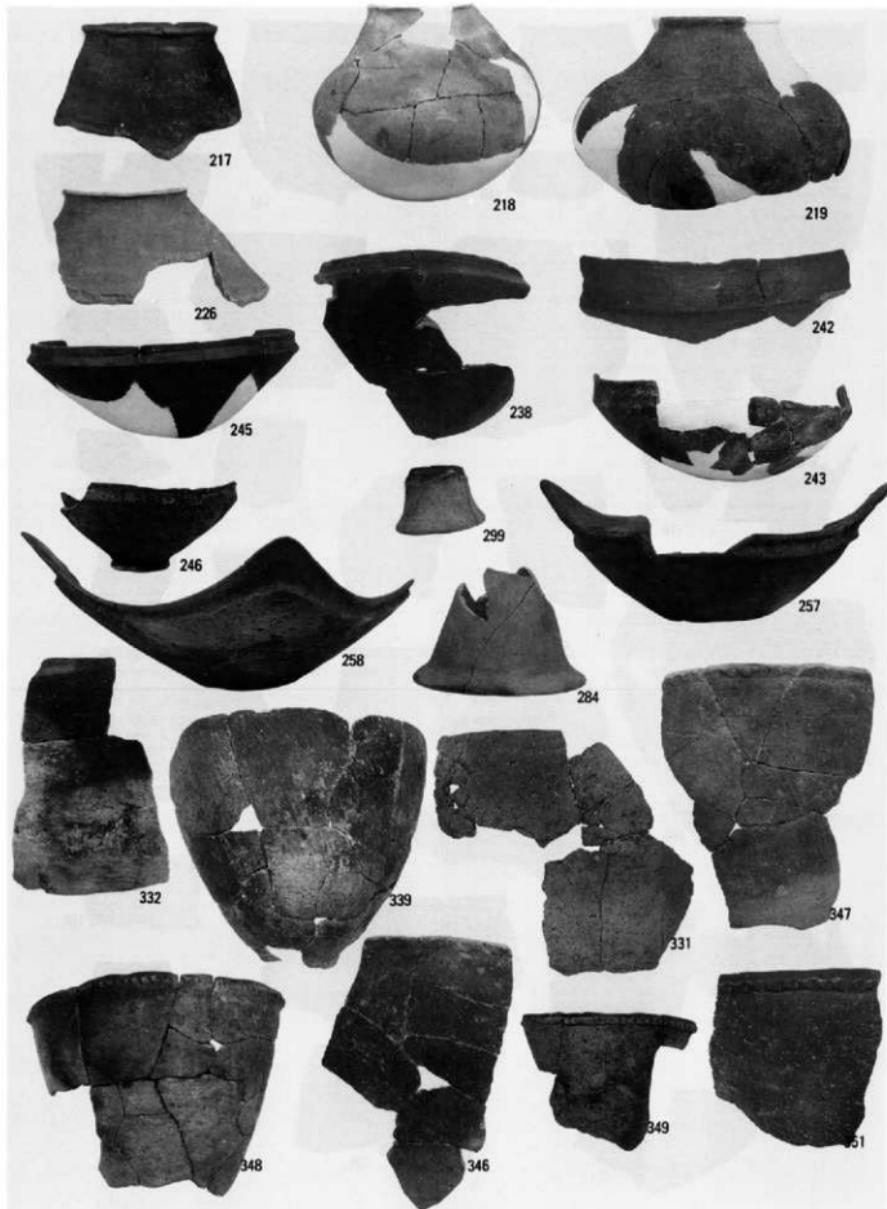
(6) IV区包含層グリット



出土土器 (1)



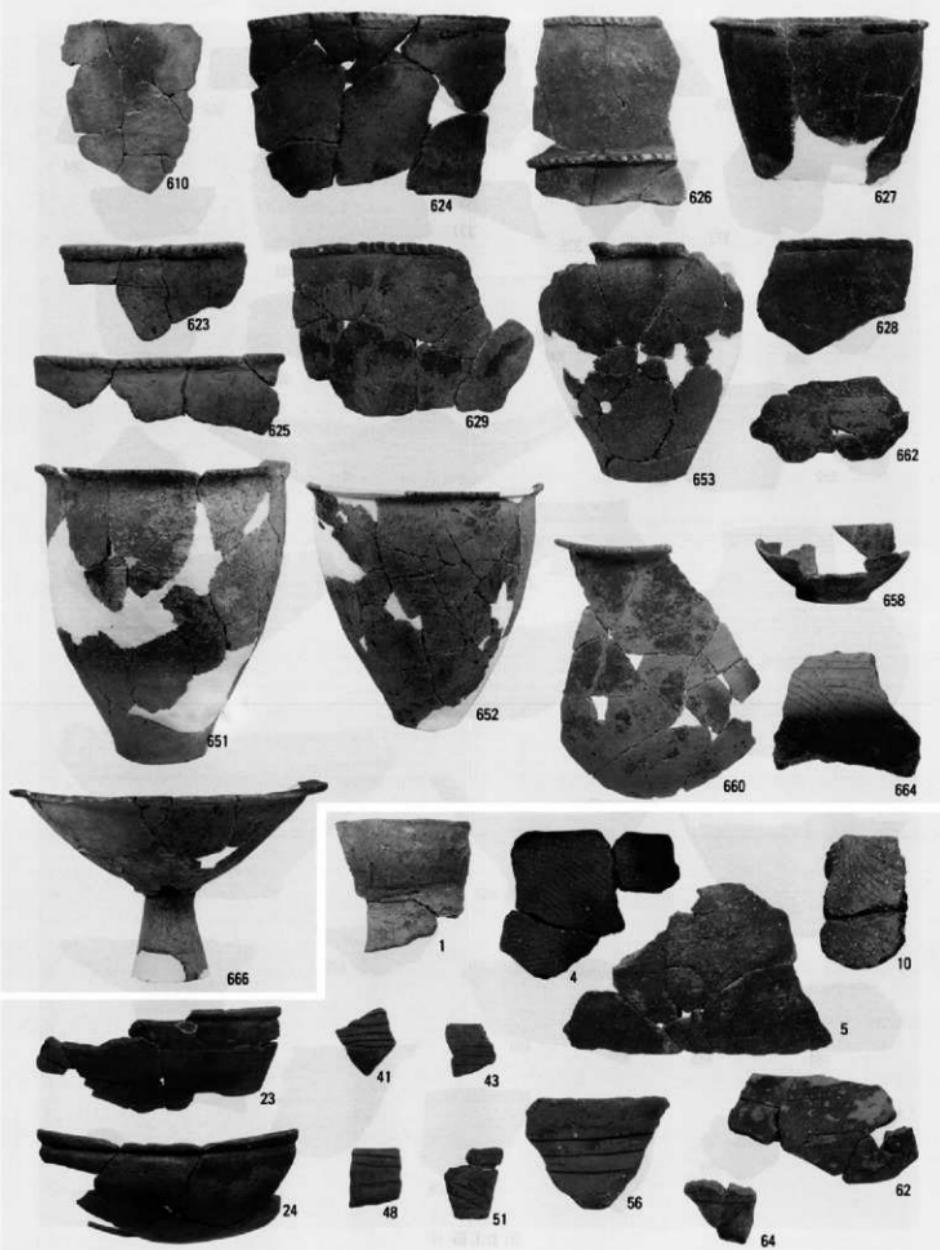
出土土器 (2)

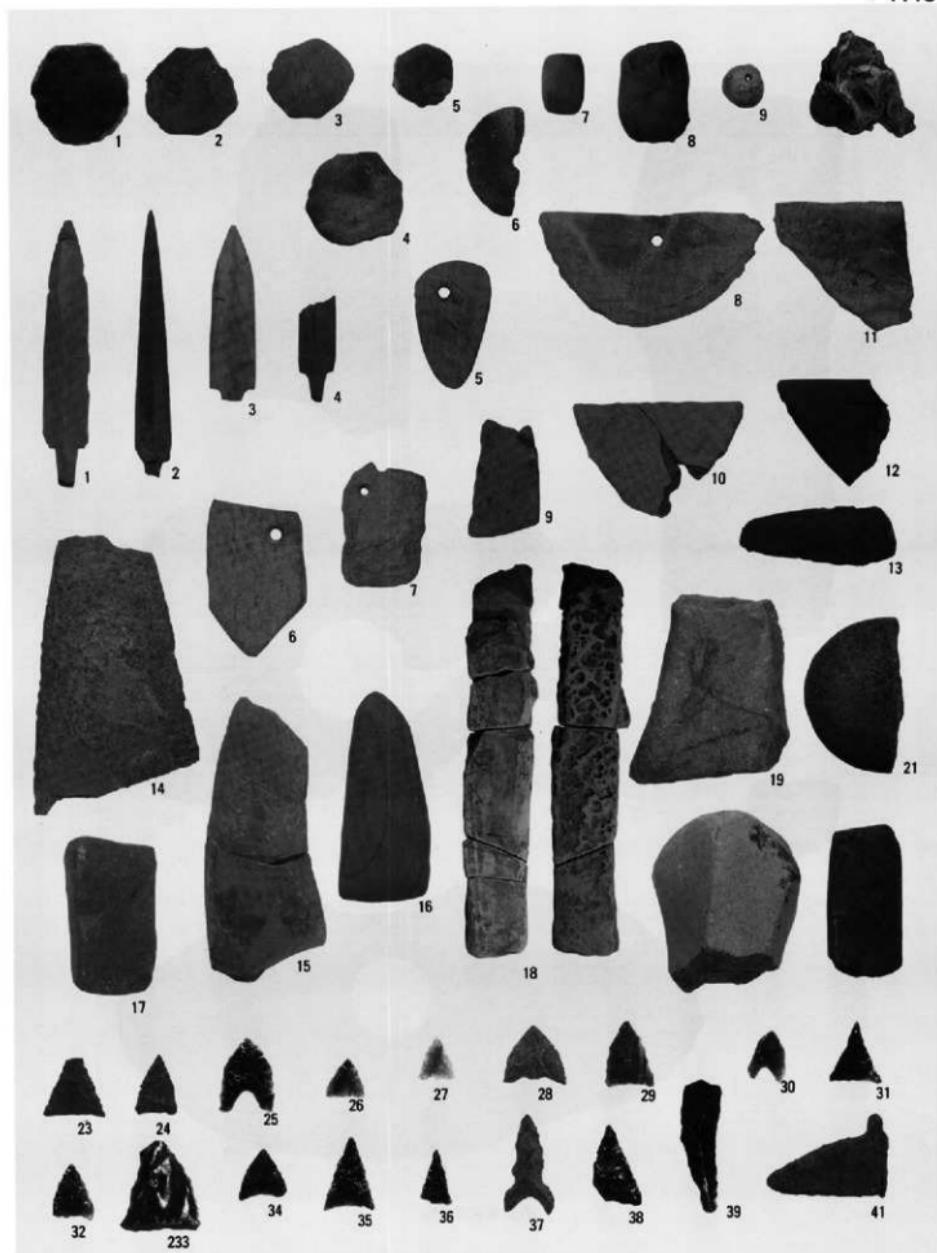


出土土器 (3)

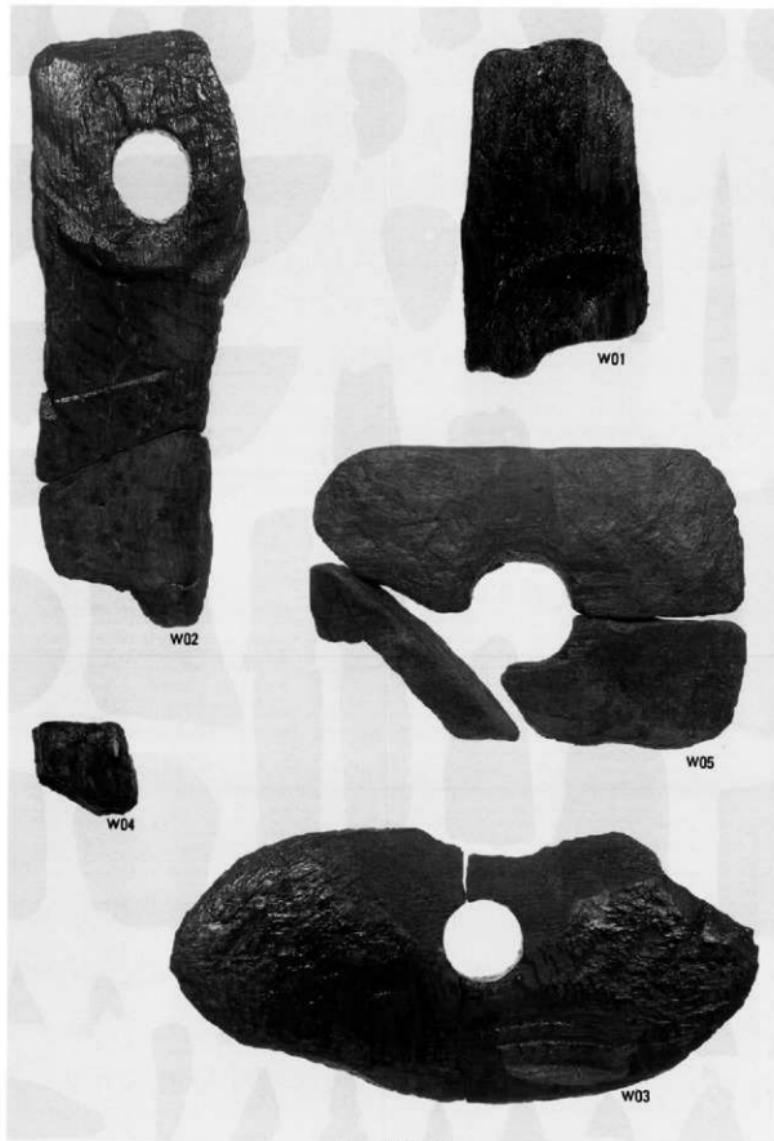


出土土器 (4)

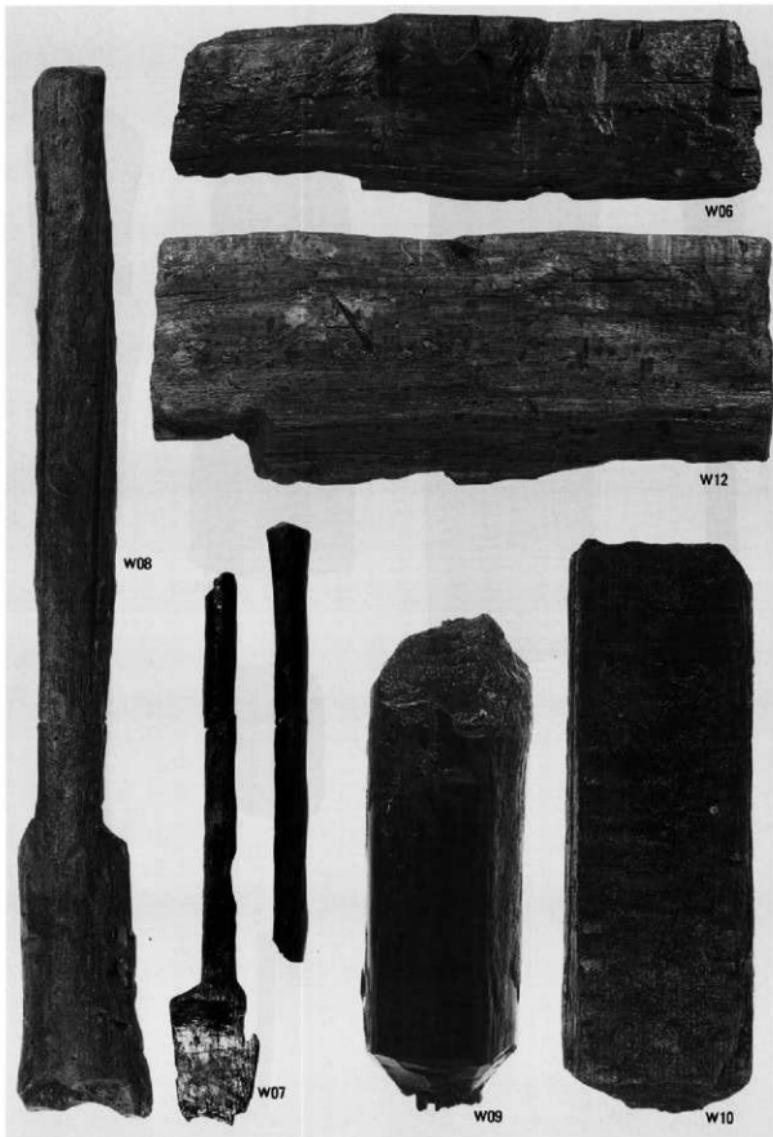




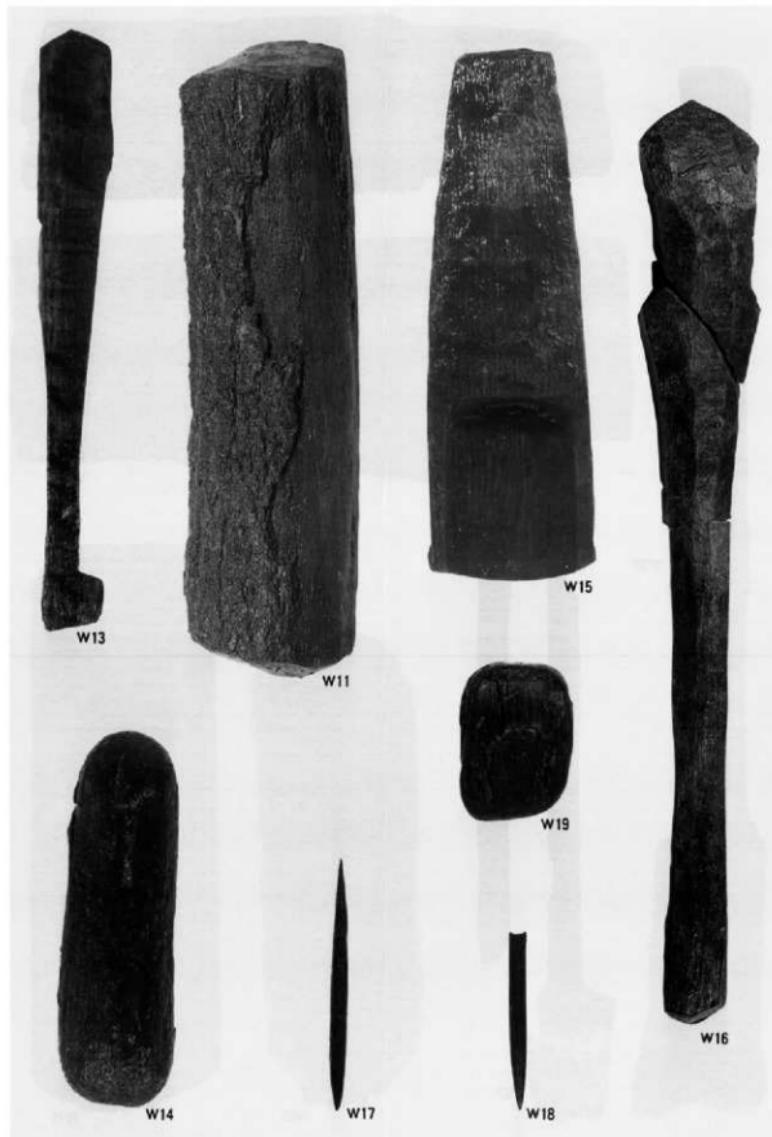
出土土製品、石器



出土木製品 (1)



出土木製品 (2)



出土木製品 (3)

IV 橋本遺跡第1次調査の記録

1. 調査の経過

本地点の調査が、福岡外環状道路第4工区内における最終の埋蔵文化財調査となった。発掘調査は、道路建設工事工程との調整を進めた結果、1995年5月22に着手し、路盤工事と平行した作業となり、577m²を調査して、6月15に完了した。

2. 立地と環境

調査地は、室見川と十郎川との間に位置する、河成の沖積低地であり、室見川分流の旧流路と判断される低地に取り囲まれた状況が、空中写真の判読により観察されている(Fig. 93: 下山 1993)。分流部とされる部分は戦時中まで低湿地のままで、耕作が行われていなかったことが知られている。標高は、約5mの位置にある。

3. 発掘調査の成果

試掘調査は、昭和58年度実施済であったので、その成果により道路用地東辺に沿い、南北方向に長く設定することとなった。

元の水田の耕作土、床土部の下は、南辺部では砂礫層となっており、これが一帯の基盤層である。弥生時代から平安時代までの遺物が小量出土した。いずれも磨滅が著しい。調査区中程より北は、砂礫層を刻み込むようにして砂層～シルトよりなる堆積の単位(河1)、さらに北へ寄って砂(河2)、砂～礫から成る堆積(河3)、の単位が不整合に順次堆積したことが分かる(Fig. 96)。

調査した河川堆積のうち、シルト部には有機物を多く含み、遺物が少量であるが出土した。杭も出土している。



Fig. 92 橋本1次調査地点の立地(1/8000)
沖積低地(主に河床)
沖積低地(旧流路)

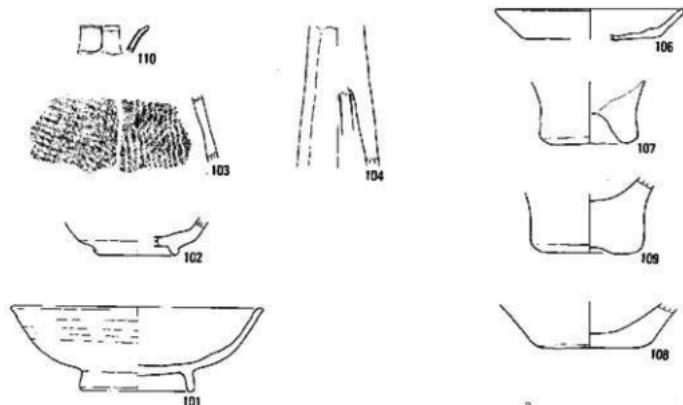


Fig. 93 出土遺物実測図(1/3)

10cm

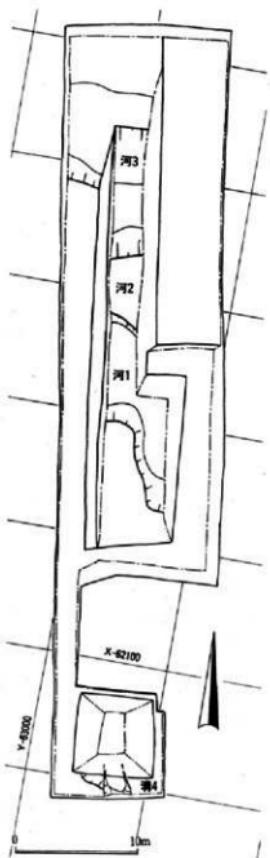


Fig. 94 桜木遺跡第1次調査、調査区、全体図 (1/300)

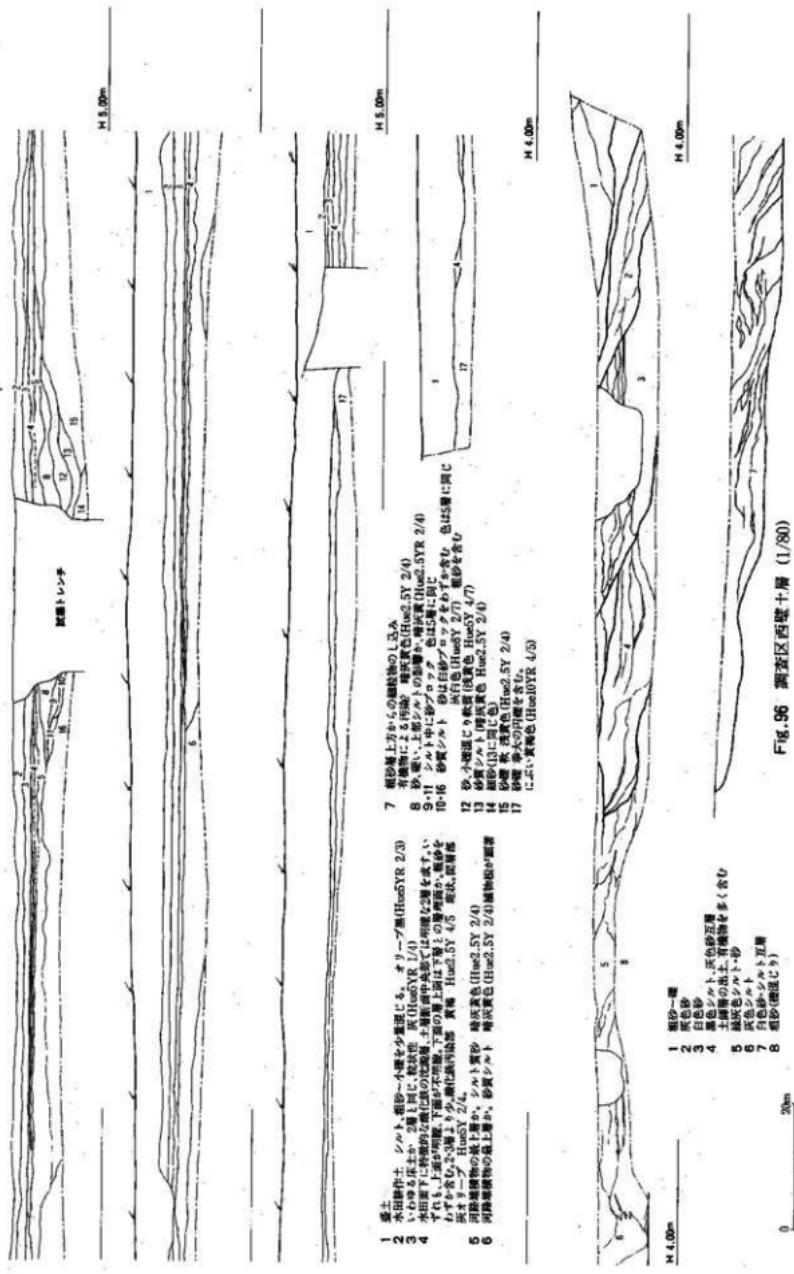


4. 出土遺物

Fig. 94に出土遺物を示す。101～104, 110は、河からの出土である。110は、口禿げの白磁碗口縁部細片。101は、土師器高台碗。102は須恵器高台壺。103は内外面に叩き目調整の痕跡を残す還元炎焼成の土器である。104は土師器高壺の資料である。

106～109は、砂疊層の出土である。106は箆切り底の土師器皿。108は弥生時代後期壺。107・108は弥生土器壺の底部である。弥生土器はいずれも磨耗が著しい。

下山正一 1993 「拾六町平田遺跡周辺の地質と地形」
『拾六町平田遺跡2』福岡市埋蔵文化財調査報告書第
349号





調査区全景(北から)



西壁土層(北から)

福岡外環状道跡関係
埋蔵文化財調査報告

— 5 —

福岡市西区橋本一丁目遺跡
第2次調査・橋本遺跡第1次調査

1998年（平成10年）3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8番1号

印刷 大成印刷株式会社
福岡市博多区東郡河三丁目6番82号

福岡外環状道路関係
埋蔵文化財調査報告

— 5 —

福岡市西区橋本一丁田遺跡第2次調査・橋本遺跡第1次調査

(付図3枚在中)